(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第140集

書上本山遺跡
波志江六反田遺跡
波志江天神山遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

『書上本山遺跡　波志江六反田遺跡　波志江天神山遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
28	左　24	著名	顕著
137	左　18・22	ℓ	L
	左　18・22・26・34	絡状体	絡条体
	左　27	r	R
	右　2	ℓ	L
138	左　2・4・10・13・16・18	r	R
	右　1・6	r	R
	右　3・9	ℓ	L

資料 No. 98-4455
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成10年5月13日
01-330
20
(7)

書上本山遺跡
波志江六反田遺跡
波志江天神山遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・共用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和59年度から昭和60年度にかけて発掘調査をしました伊勢崎市三和町の書上本山遺跡・伊勢崎市波志江町の波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡の合わせて３遺跡の発掘調査の成果が報告されています。３遺跡は、いずれも小規模な調査ですが、旧石器時代の良好な遺物などが出土しています。この時代を研究する上で貴重な資料となりましょう。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導、ご協力を賜わりました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成４年10月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小寺弘之

報告書抄録

フリガナ	カキアゲホンザンイセキ、ハシエロクタンダイセキ、ハシエテンジンヤマイセキ
書名	書上本山遺跡、波志江六反田遺跡、波志江天神山遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第140集
編著者名	山口逸弘
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
発行年	西暦1992年10月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
カキアゲホンザン 書上本山	イセサキシサンワチョウ 伊勢崎市三和町	102041		36°20′ 40″	139°13′ 30″	19840401－ 19840930	12,268	道路建設
ハシエロクタンダ 波志江六反田	イセサキシハシエマチ 伊勢崎市波志江町 字六反田	102041		36°21′ 23″	139°12′ 00″	19850701－ 19850930	2,800	道路建設
ハシエテンジンヤマ 波志江天神山	イセサキシハシエマチ 伊勢崎市波志江町 字天神山・祝堂	102041		36°21′ 25″	139°11′ 55″	19851001－ 19851130	4,800	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
書上本山	住居	古墳時代	竪穴住居 3軒	旧石器時代遺物　約350点	古墳時代後期
			井戸 5基	縄文時代早期～中期　土器・石器類	長胴甕・甑の
		平安時代	竪穴住居 1軒	古墳時代　土器類	胎土分析
			掘立建物 2棟	瓦塔片	（4個体）
			溝 7条	石製骨蔵器	
		中世	集石遺構 2基		
			土坑 38基		
波志江六反田	住居	平安時代	竪穴住居 3軒	旧石器時代遺物　7点	
		近世	掘立建物 1棟	縄文時代　撚糸文系土器　39点	
			土坑 32基	土師器杯・甕類	
			井戸 3基		
			溝 6条		
	生産	平安時代	As－B埋没 水田		
波志江天神山	住居	縄文時代	陥穴 5基	縄文時代前期　土器・石器類	
			土坑 1基		
		近世以降	掘立建物 1棟		
			土坑 32基		
			井戸 1基		
	生産	近代	サク状遺構		

例　言

1．本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前調査した、事業名称「ＪＫ17書上本山遺跡（試掘調査でのＪＫ17書上遺跡Ⅲ～Ⅵ区に相当）」「ＪＫ26波志江六反田遺跡」「ＪＫ27波志江天神山遺跡」の発掘調査報告書である。

2．遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する方法を採用している。

3．遺跡所在地　書上本山遺跡：群馬県伊勢崎市三和町
　　波志江六反田遺跡：群馬県伊勢崎市波志江町字六反田
　　波志江天神山遺跡：群馬県伊勢崎市波志江町字天神山・祝堂

4．事業主体　建設省関東地方建設局高崎工事事務所

5．調査主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

6．調査期間　書上本山遺跡：昭和59年４月１日～昭和59年９月30日
　　波志江六反田遺跡：昭和60年７月１日～昭和60年９月30日
　　波志江天神山遺跡：昭和60年10月１日～昭和60年11月30日

7．調査組織　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
　　「書上本山遺跡」
　　事務担当　白石保三郎・梅沢重昭・大沢秋良・松本浩一・秋池　武・定方隆史・国定　均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏
　　調査担当　坂井　隆・小島敦子・新倉明彦・山口逸弘
　　「波志江六反田遺跡」・「波志江天神山遺跡」
　　事務担当　白石保三郎・井上唯雄・大沢秋良・上原啓巳・桜場一寿・定方隆史・国定　均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
　　調査担当　桜場一寿・坂井　隆・山口逸弘

8．整理主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

9．整理期間　平成３年４月１日～平成４年３月31日

10．整理組織　事務担当　邊見長雄・松本浩一・佐藤　勉・神保侑史・能登　健・岩丸大作・国定　均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津　茂・松下　登・並木綾子・野島のぶ江・今井もと子・角田みづほ・松井美智代・塩浦ひろみ
　　整理担当　山口逸弘・青木静江・神谷みや子・鈴木紀子・関　正江・南雲富子・松岡陽子
　　遺物写真　佐藤元彦
　　保存処理　関　邦一・渡邊静治・小材浩一

11．Ⅲ章第３節の一部及びⅥ章１は岩崎泰一が執筆し、その他の編集執筆は山口逸弘が行っている。

12．石材の鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会所属)に依頼した。

13．「書上本山遺跡」出土の土器の胎土分析は株式会社第四紀地質研究所に依頼した。

14．本書使用の遺構図面の一部のトレースは株式会社測研に委託した。

15．本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際して伊勢崎市教育委員会、及び地元関係者の多大なる御支援を戴いた。ここに感謝の意を表す次第である。

16．調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保存してある。

凡　例

1．挿図中に使用した方位は、真北である。

2．遺構実測図は下記の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。

住居……1/60	掘立柱建物跡……1/60
住居のカマド……1/30	溝跡……1/60
土坑……1/40	井戸跡……1/40
陥穴……1/60	水田跡……1/200

3．遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示した。それぞれ図中に付記したスケールを参照されたい。

旧石器　書上本山遺跡　4/5・1/2・1/4

波志江六反田遺跡　4/5

縄文時代の石器　1/1・1/2・1/3・1/6

縄文時代の土器　1/2・1/3・1/4

住居出土の遺物　1/1・1/2・1/3・1/4

4．本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行　25,000分の1地形図　「大胡」・「伊勢崎」（平成元年8月・11月）

伊勢崎市役所発行　2,500分の1「現況図 ②・⑧」（昭和60年8月）を1/2にして使用

赤堀町役場発行　2,500分の1「No.33」（昭和60年）を1/2にして使用

5．遺物写真図版は実測図を掲載した順に時代毎に整理し、実測図と対照できるように図版の右下に挿図番号を示した。

6．石器実測図中の矢印は使用痕及び加工痕が確認できる範囲をあらわしている。

7．土器の色調の断定は、農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」昭和45年　を使用した。

8．石器の計測に際し、長さ・幅は小数点第2位を四捨五入し㎝単位で、重量は電磁式はかり（ＥＹ－2200Ａ）を使用し、小数点第2位まで g 単位で表示した。

9．石器一覧表の「器種」の欄の略号は次のことを示す。

ナイフ：ナイフ形石器	加剥：加工痕を持つ剥片	三角錐：三角錐形石器
台形：台形石器	使剥：使用痕を持つ剥片	スタンプ：スタンプ形石器
縦長剥：縦長剥片	打斧：打製石斧	
スクレ：スクレイパー	磨斧：磨製石斧	

10．石器一覧表の「石材」の欄の略号は次のことを示す。

黒安：黒色安山岩	変安：変質安山岩	溶凝：溶結凝灰岩
黒頁：黒色頁岩	ホルン：ホルンフェルス	凝頁：凝灰岩質頁岩
珪頁：珪質頁岩	石閃：石英閃緑岩	安凝：安山岩質凝灰岩
灰安：灰色安山岩	粗安：粗粒安山岩	
細安：細粒安山岩	輝凝：輝緑凝灰岩	

目　次

序
例言　凡例
Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
第1節　調査に至る経過 …… 1
第2節　発掘調査の経過と方法 …… 1
Ⅱ章　遺跡を取り巻く環境 …… 3
第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境(周辺遺跡) …… 3
Ⅲ章　書上本山遺跡 …… 15
第1節　遺跡の概要 …… 16
第2節　土　層 …… 19
第3節　旧石器時代 …… 20
第4節　縄文時代 …… 46
第5節　古墳時代～中・近世 …… 62
第6節　胎土分析 …… 119
Ⅳ章　波志江六反田遺跡 …… 129
第1節　遺跡の概要 …… 130
第2節　基本土層 …… 132
第3節　旧石器時代 …… 133
第4節　縄文時代 …… 136
第5節　住居跡 …… 139
第6節　掘立柱建物跡遺構 …… 145
第7節　土　坑 …… 146
第8節　井　戸 …… 149
第9節　水田跡(As－B下) …… 155
第10節　溝 …… 155
第11節　グリッド出土遺物 …… 158
Ⅴ章　波志江天神山遺跡 …… 161
第1節　遺跡の概要 …… 162
第2節　調査方法 …… 164
第3節　基本土層 …… 164
第4節　検出された遺構と遺物 …… 165
Ⅵ章　考　　察 …… 193

Ⅱ・Ⅲ章　書上本山遺跡　挿図目次

第1図　周辺の遺跡……4
第2図　遺跡の位置……15
第3図　周辺の地形……17
第4図　調査区全体図……18
第5図　基本土層……19
第6図　旧石器時代の調査区全体図……20
第7図　石器の分布(1号ブロック)……21
第8図　石材別石器の分布(1号ブロック)……22
第9図　石材別石器の分布(1号ブロック)……23
第10図　器種別分布図(2号ブロック)……24
第11図　石材別分布図(2号ブロック)……25
第12図　接合資料(1・2)の分布……26
第13図　接合資料(2・4・5他)の分布……27
第14図　出土石器(1)……29
第15図　出土石器(2)……30
第16図　出土石器(3)……31
第17図　出土石器(4)……32
第18図　接合資料－1(1)……34
第19図　接合資料－1(2)……35
第20図　接合資料－1(3)……36
第21図　接合資料－1(4)……37
第22図　接合資料－1(5)……38
第23図　接合資料－3(1)……40
第24図　接合資料－3(2)……41
第25図　接合資料－2……42
第26図　接合資料－10・12他……44
第27図　接合資料－5・17他……45
第28図　グリッド出土土器……48
第29図　グリッド出土土器……49
第30図　グリッド出土土器……50
第31図　グリッド出土土器……51
第32図　グリッド出土石器……53
第33図　グリッド出土石器……54
第34図　グリッド出土石器……55
第35図　グリッド出土石器……57
第36図　グリッド出土石器……58
第37図　グリッド出土石器……59
第38図　グリッド出土石器……60
第39図　グリッド出土石器……61
第40図　遺構配置図……63
第41図　遺構配置図……64
第42図　遺構配置図……65
第43図　遺構配置図……66
第44図　遺構配置図……67
第45図　1号住居跡……69
第46図　1号住居跡遺物分布……70
第47図　1号住居跡カマド……71
第48図　1号住居跡出土遺物……72
第49図　1号住居跡出土遺物……73
第50図　1号住居跡出土遺物……74
第51図　2号住居跡……75
第52図　2号住居跡カマド……76
第53図　2号住居跡出土遺物……77
第54図　2号住居跡出土遺物……78
第55図　3号住居跡……79
第56図　3号住居跡……80
第57図　3号住居跡出土遺物……81
第58図　4号住居跡……82
第59図　1号掘立柱建物跡……83
第60図　2号掘立柱建物跡……84
第61図　土　坑……86
第62図　土　坑……87
第63図　土　坑……89
第64図　土　坑……90
第65図　土　坑……91
第66図　井　戸……93
第67図　井　戸……94
第68図　井戸出土遺物……95
第69図　溝……96
第70図　溝及び出土遺物……97
第71図　9号溝……98
第72図　9号溝と出土遺物……99
第73図　集　石……101
第74図　集石遺構出土遺物……102
第75図　集石遺構出土遺物－1展開図……103
第76図　集石遺構出土遺物……104
第77図　グリッド出土遺物……105
第78図　石器の器種と石材構成……115
第79図　石器の器種と石材構成……116
第80図　石器の器種と石材構成……117
第81図　石器の器種構成……118
第82図　胎土分析資料……119
第83図　石英(Qt)－斜長石(Pl)相関図……122
第84図　Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム
位置分類図……122
第85図　Mo-Ch,Mi-Hb菱形ダイアグラム

位置分類図……122
第86図　X線回折チャート……126
第87図　電子顕微鏡写真……127

Ⅱ・Ⅲ章　書上本山遺跡　表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……7
第2表　2号住居跡出土臼玉・小玉観察表……78
第3表　旧石器時代の単独石器一覧表……106
第4表　旧石器時代の接合資料一覧表……106
第5表　縄文土器観察一覧表……107
第6表　縄文時代の単独石器一覧表……108
第7表　古墳時代以降の遺物観察表……109
第8表　胎土性状表……123

Ⅳ・Ⅴ章　六反田・天神山遺跡　挿図目次

第1図　遺跡の位置(波志江六反田遺跡)……129
第2図　周辺の地形(波志江六反田遺跡)……131
第3図　旧石器出土位置と基本土層図……132
第4図　旧石器時代の出土石器……133
第5図　旧石器遺物分布……134
第6図　遺構全体図……135
第7図　撚糸文土器集中分布……136
第8図　縄文時代の石器分布……137
第9図　グリッド出土土器……138
第10図　1号住居跡及び出土遺物……139
第11図　2号住居跡……141
第12図　2号住居跡及び出土遺物……142
第13図　3号住居跡……143
第14図　3号住居跡及び出土遺物……144
第15図　1号掘立柱建物跡……145
第16図　土　坑(1)……147
第17図　土　坑(2)……148
第18図　土　坑(3)……150
第19図　土　坑(4)……151
第20図　土　坑(5)……152
第21図　井戸及び出土遺物……153
第22図　A_s－B下水田……154
第23図　溝……156
第24図　溝出土遺物……157
第25図　グリッド出土遺物……158
第26図　遺跡の位置(波志江天神山遺跡)……161
第27図　周辺の地形(波志江天神山遺跡)……163
第28図　旧石器調査範囲と基本土層……164
第29図　遺跡全体図……166
第30図　縄文時代の土坑(1)……167
第31図　縄文時代の土坑(2)……168
第32図　縄文時代の土坑(3)……169
第33図　縄文時代の土坑(4)……171
第34図　近世～近代の土坑(1)……173
第35図　近世～近代の土坑(2)……174
第36図　近現代の土坑及び井戸……175
第37図　溝……177
第38図　溝及びサク状遺構、出土遺物……178
第39図　縄文土器分布図……179
第40図　縄文時代の石器分布図……180
第41図　グリッド出土土器……181
第42図　グリッド出土土器……182
第43図　グリッド出土土器……183
第44図　グリッド出土土器……184
第45図　グリッド出土石器……185
第46図　グリッド出土石器……186
第47図　グリッド出土石器，接合資料－3・6……188
第48図　接合資料－1・2他……189
第49図　器種と石材構成……190
第50図　石器と石材構成……191

Ⅳ・Ⅴ章　六反田・天神山遺跡　表目次

第1表　旧石器時代の単独石器一覧表(六反田)……158
第2表　古墳時代以降遺物観察表(六反田)……159
第3表　縄文土器観察一覧表(天神山)……192
第4表　縄文時代の単独石器一覧表
(六反田・天神山)……192
第5表　縄文時代の接合資料一覧表(天神山)……192

図 版 目 次

書上本山遺跡

基本土層
遺跡の遠景
PL1－1．1号ブロック石器出土状態(1)
2．1号ブロック石器出土状態(2)
3．1号ブロック石器出土状態(3)
4．1号ブロック石器出土状態(4)
5．1号ブロック石器出土状態(5)
PL2－1．2号ブロック石器出土状態(1)
2．2号ブロック石器出土状態(2)
PL3－1．2号ブロック石器出土状態(3)
2．2号ブロック石器出土状態(4)
3．2号ブロック石器出土状態(5)
4．2号ブロック石器出土状態(6)
5．2号ブロック石器出土状態(7)
PL4－1．V区遠景
2．旧石器調査風景
PL5－1．1号住居跡全景
2．1号住居跡遺物出土状態
3．1号住居跡カマド
4．1号住居跡カマド・貯蔵穴
5．1号住居跡柱穴
PL6－1．2号住居跡全景
2．2号住居跡掘り方
3．2号住居跡カマド
4．2号住居跡カマドセクション
5．2号住居跡カマド掘り方
PL7－1．3号住居跡全景
2．3号住居跡遺物出土状態
3．3号住居跡遺物出土状態
4．3号住居跡カマド
5．3号住居跡カマドセクション
PL8－1．4号住居跡全景
2．4号住居跡
3．4号住居跡掘り方
4．4号住居跡カマドセクション
PL9－1．1号土坑
2．2号土坑
3．3号土坑
4．4号土坑
5．5号土坑
6．6号土坑
7．7号土坑
8．8号土坑
PL10－1．9号土坑
2．10号土坑
3．11号土坑
4．15号土坑
5．16号土坑
6．17号土坑
7．18号土坑
8．19号土坑
PL11－1．20号土坑
2．21号土坑
3．22号土坑
4．23号土坑
5．12号土坑
6．2号井戸
7．2・3号井戸
8．4号井戸
PL12－1．6号井戸
2．6号井戸遺物出土状態
PL13－1．4号溝全景
2．4号溝
3．5号溝全景
4．8号溝
5．9号溝
PL14－1．9号溝全景
2．9号溝
3．9号溝
4．9号溝
5．9号溝礫流入状態
PL15－1．1号集石
2．1号集石
PL16－1．1号集石
2．1号集石
3．2号集石
4．2号集石
5．調査風景
PL17－1．1・2号掘立柱建物跡
2．グリッド出土土器
PL18－1．グリッド出土土器
2．グリッド出土土器
PL19－1．グリッド出土土器
2．グリッド出土土器
PL20－1．グリッド出土土器

2．グリッド出土土器
PL21－1．グリッド出土土器
2．グリッド出土土器
3．グリッド出土土器
PL22.　出土石器(旧石器時代)
PL23.　出土石器(旧石器時代)
PL24.　出土石器(旧石器時代)
PL25.　出土石器(旧石器時代)
PL26.　出土石器(縄文時代)
PL27.　出土石器(縄文時代)
PL28.　出土石器(縄文時代)
PL29.　出土石器(縄文時代)
PL30.　出土石器(縄文時代)
PL31.　1号住居跡出土遺物
PL32.　1号住居跡出土遺物
PL33.　2号住居跡出土遺物
PL34.　2号住居跡出土遺物
3号住居跡出土遺物
出土土器
PL35.　集石遺構出土遺物
PL36.　出土遺物

波志江六反田遺跡

ローム層の堆積状態
波志江六反田・波志江天神山遺跡遠景
PL37－1．旧石器試掘調査
2．石器出土状態
3．石器出土状態
4．石器出土状態
5　石器出土状態
PL38－1．波志江六反田遺跡遠景
2．波志江六反田遺跡遠景
PL39－1．遺跡全景
2．遺跡全景
PL40－1．1号住居跡全景
2．1号住居跡掘り方カマド
3．2号住居跡
4．2号住居跡掘り方全景
5．2号住居跡遺物出土状態
6．2号住居跡掘り方カマド
7．3号住居跡全景
8．3号住居跡カマド
PL41－1．1・2・3号土坑
2．8号土坑
3．12号土坑
4．13号土坑
5．14号土坑
6．15号土坑
7．17号土坑
PL42－1．19号土坑
2．20号土坑
3．16号土坑
4．18号土坑
5．26号土坑
6．21号土坑
7．22号土坑
PL43－1．23号土坑
2．24号土坑
3．5・6・7・29号土坑
4．30号土坑
5．31号土坑
6．28号土坑
7．27号土坑
PL44－1．25号土坑
2．32号土坑
3．1号井戸
4．2号井戸
5．3号井戸
6．4号井戸
PL45－1．水田跡及び旧河川跡
2．As－B下水田跡土層
3．As－B下水田跡土層
PL46－1．As－B下水田跡
2．As－B下水田跡
3．As－B下水田跡
4．As－B下水田跡
5．As－B下水田跡
PL47－1．1号溝
2．2号溝
3．3号溝
4．4・5号溝
5．掘立柱建物跡
PL48－1．旧石器試掘調査
2．As－B下水田調査風景

波志江天神山遺跡

ローム層の堆積状態
波志江天神山遺跡遠景
PL49－1．8号土坑
2．10号土坑

ＰＬ50－１．21号土坑
２．９号土坑
３．20号土坑
４．６号土坑
５．発掘風景
ＰＬ51－１．１号土坑
２．５号土坑
３．２号土坑
４．３号土坑
５．４号土坑
６．17号土坑
７．13号土坑
ＰＬ52－１．12号土坑
２．13号土坑
３．14号土坑
４．15号土坑
５．16号土坑
６．18号土坑
７．19号土坑
８．22号土坑
ＰＬ53－１．９号溝
２．９号溝
３．１号井戸
４．サク状遺構
５．天神山遺跡全景
ＰＬ54－１．１号溝屈曲部
２．２・６・９号溝
３．１・２号溝
４．３・４号溝
５．６号溝
６．７号溝
７．８号溝
ＰＬ55－１．出土土器　六反田遺跡
２．出土土器
ＰＬ56－１．出土土器
２．出土土器
ＰＬ57.　出土土器
ＰＬ58－１．出土土器
２．出土土器
ＰＬ59.　出土石器
ＰＬ60.　出土石器(石核・接合資料)
ＰＬ61.　出土石器
ＰＬ62.　出土遺物　六反田遺跡

Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　調査に至る経過

国道17号の交通渋滞を解消し、かつ群馬県と埼玉県を結ぶ重要幹線道路である上武道路は、深谷市東方を基点として、尾島町で群馬県に入り、国道17号の渋滞の一因である高崎・前橋市街地を大きく迂回して、前橋市田口町で再び国道17号に取り付けられる。この間全長41.4kmの大規模バイパスとして、関係市町村など各方面からの期待を担っている。

群馬県教育委員会は、昭和46年の都市計画決定に前後して、路線内の埋蔵文化財調査が必要な箇所を入念な分布調査とその確認により、472箇所を数えていた。この分布調査による遺跡周知を基礎として、前述の都市計画による路線内の調査を着手したのが昭和49年である。当初は1班体制で進められていた調査だが、工事進捗に伴い、特に国道50号までの早期共用開始のため、昭和59年度から3班、60年度からは4班体制でその進捗に対応した。

群馬県教育委員会は昭和52年に埋蔵文化財の調査部門として(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を設立し、上武道路の発掘調査、整理事業も同年以降、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が行っている。

本書で報告する書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡は、昭和58～60年に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査された遺跡であり3遺跡とも伊勢崎市に所在するものである。

(1)　書上本山遺跡

本遺跡は伊勢崎市三和町に所在し、調査着手当時は書上遺跡（ＪＫ17）と呼称されていた。書上遺跡は昭和58年に1～3月に試掘調査が行われ、4～9月にⅠ～Ⅱ区が本調査された。次年度にいたり4～9月に再度本調査が着手され、Ⅲ～Ⅵ区がその対象となった。この段階で昭和58年度調査分（Ⅰ・Ⅱ区）と昭和59年度調査分（Ⅲ～Ⅵ区）の遺跡名称が分離される結果となり、前者を書上上原之城、後者を本報告で扱う書上本山と呼称した。すなわち、上武道路設計中心杭No.725～741間が本遺跡の範囲である。

(2)　波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも伊勢崎市波志江町に所在し、県道深津伊勢崎線を挟んで隣接する遺跡である。

波志江六反田遺跡（ＪＫ26）は、昭和59年に試掘調査が実施され、この時に奈良時代の住居跡（2住）が検出されている。調査範囲を改良後の西桂川から県道深津伊勢崎線の間（No.870～No.875）とし昭和60年7月～9月の間本調査が実施された。

波志江天神山遺跡（ＪＫ27）は、波志江六反田遺跡と同様に試掘が昭和59年、本調査が60年10月～11月に実施された。県道深津伊勢崎線から波志江沼までの間（No.876～No.884）を調査範囲としたが、波志江沼窃りに構造物があり、構造物部分は除外せざるを得なかった。

第2節　発掘調査の経過と方法

(1)　書上本山遺跡

書上遺跡として調査が着手された本遺跡だが、遺跡を横断する道路をもって6区分して、東からⅠ区を初めとしてⅥ区までを設定した。前述のように、本遺跡の調査範囲はⅢ～Ⅵ区である。ただし、グリッドは前年度調査の書上上原之城遺跡のグリッド設定方法に準拠したため、上武道路設計中心杭2本を結んだ線を基本線として、10×7ｍという変則的な規格となっている。このグリッドは国家座標軸を意識しておらず、また長方形という形状のため、合理的ではなく、調査によって得られたデータを均一に集約できない問題点を持っていた。このような反省点を踏まえ、本遺跡の調査後に着手された上武道路関連の遺跡はすべて国家座標に則した正方形のグリッドに統一された経緯がある。

本遺跡の調査は、試掘により数軒の住居跡が確認されているため、調査区全面発掘を基本とし、遺構確認面をソフトローム上面に置き、東から順次調査の手を広げた。遺構密度はさほど高くなく、当初予想された縄文時代の遺構が無かったため、順調な調

査経過を見せた。5月下旬には古墳時代～中世の遺構の殆どが終了していた。

その後、縄文時代の遺物包含層であるソフトローム層上層の掘り下げを行い、特にⅤ区において縄文前期土器片・石器の出土を見た。しかし、縄文時代の遺構がなかったためソフトローム層上層の遺物の記録化終了後、旧石器時代の遺物検出作業が着手されたのである。

旧石器時代の調査は、4×4ｍの試掘坑を基本として、下層に至る場合には2×4ｍの規模で行った。試掘坑は調査区域内のロームの遺存が良好な箇所を選ぶことになり、Ⅳ～Ⅵ区がその対象になった。

この結果、Ⅴ区東側で暗色帯中より剝片の出土があった。この出土状況を重視し、Ⅴ区を中心に重機による掘削を硬質ローム下面まで行い、再度2×2ｍの試掘坑を「飛市松状」に設定し、石器出土範囲の限定を図った。この調査でⅤ区中央から西側にかけて、Ⅵ区の一部分で石器の集中が認められた。

これらの、旧石器時代の石器集中箇所の調査は非常に綿密かつ慎重に行なわれ、出土位置の記録化・写真などは、層下数センチ単位で施した。

この旧石器時代の調査は9月中旬で終了し、下半期に予定されていた五目牛南組遺跡への移動準備、本遺跡の出土遺物・図面・写真の基礎整理を9月末日まで行った。

（2）　波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも県道を挟み隣接し、同一の台地上に占地するため、調査工程上は同一線上にのる評価を与えて発掘にあたった。グリッドは既に上武道路関連で統一されたものを使用し、番号も波志江六反田・波志江天神山遺跡を通して命名した。

発掘調査は、波志江六反田遺跡の東端である西桂川寄りから着手した。この部分は、東に隣接する波志江中峰岸遺跡と同等の低地であり、表土を削除した後、浅間Ｂ軽石（As－Ｂ）を確認することができた。このＢ軽石を人力で除去したところ水田跡が検出できたが、おそらく中峰岸遺跡で確認できた水田跡と同様のものと考える。その後の発掘調査は、ソフトローム上面を遺構確認面とし、調査区西半分の住居跡や近世～近代の溝・土坑群・井戸などを主体として進めた。これらの遺構は重複状況が顕著なものが多いため、その記録化に努めた。調査区の西端の県道沿いに至ると、現代のゴミ穴としての土坑群が密集していたが、これらは調査しなかった。

旧石器の試掘は2×4ｍの規模で設定し、ローム残存部分である台地部全体の約10％程度の割合で行った。その結果、調査区中央の台地傾斜端部の板鼻褐色軽石混土層より数点の黒曜石製の石器が出土し、この部分の拡張調査を実施した。この他には石器の出土を見ず、調査は9月に終了した。

波志江天神山遺跡の調査は、波志江六反田遺跡の調査と併行する部分がある。波志江天神山遺跡表土剝ぎ作業と波志江六反田遺跡埋め戻し作業を併行させることによって効率化を図った。

波志江天神山遺跡の県道沿いも波志江六反田遺跡と同様に、現代のゴミ穴が密集しており、積極的な調査は行わず、範囲を確認するにとどめた。調査は県道沿いから波志江沼に向かって、近世～近代の溝・土坑群を検出する作業が先行した。

調査区中央部から波志江沼縁辺に至ると、近世遺構は少なくなり、縄文時代の遺物が散布するようになった。遺物は、縄文時代前期の土器を中心にして集中する箇所もあり、遺構の検出に努めたが、住居跡などの遺構は見られず、確認した土坑もその覆土からは遺物を主体的には出土せず、土坑の帰属時期を縄文時代前期に確定するには至らなかった。ただし、この土坑群には陥穴が数基存在し、これらの遺存状態が極めて良好なため調査の主力をこの陥穴の検出に注ぐことになった。

縄文時代の陥穴の調査が終了した後、旧石器時代の試掘調査を波志江六反田遺跡と同様な方法で行ったが、今回は遺物の出土を見なかった。

旧石器時代の試掘調査終了後、波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡の両遺跡の基本整理と次遺跡の二之宮宮東遺跡への移動準備を併行し、11月末日で調査を終了した。

Ⅱ章　遺跡を取り巻く環境

書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡は伊勢崎市に所在する。伊勢崎市は、群馬県のほぼ中央から東よりに位置する人口約10万人ほどの中規模の都市で、かつては桐生市と並び織物産業の栄えた町として群馬県の産業革命の先陣を常に保っていた。現在は繭生産の基盤の桑園に工業団地や住宅が立ち並び、従来の織物産業を中心とした生産形態から脱皮しつつある状態である。その生産形態の変容に画期を与える事象として、上武道路全面開通が期待を集めているといえよう。

第1節　地理的環境

（1）　書上本山遺跡

書上本山遺跡は伊勢崎市の北東部に位置し、大間々扇状地古期面である桐原面を基盤層とする。周辺には溜池や湧水地が点在し、その中のひとつである佐波郡東村西国定六道の天ケ池湧水地を谷頭とする小開析谷右岸、及び大井戸湧水地に端を発する開析谷左岸の洪積台地上に本遺跡は占地する。これらの開析谷は樹枝状に平野を侵食し、洪水などの度に肥沃な土壌を生成することになり、その結果現在は水田や畑に利用されている。おそらく、弥生時代以降その時代の人々の植物性食物の生産域として位置付けられてきたと考えられる。

一方、それらの開析谷に挟まれる格好となる洪積台地には数多くの集落跡や墳墓が濃密に分布する。この洪積台地は、赤城山山麓地域に見られる低地との比高差が著しい急斜面を持つ独立した山麓台地ではなく、緩やかな斜面で台地形状を緩取っている。このような比高差が少ない台地に営まれる集落はその集落間の情報伝達速度やコミュニケーションの動態が赤城山麓の台地上に営まれる集落のそれとは違い、各集落間の密接な斉一化が図られるものである。当地域の各時期の集落様相が、一連の調査で明らかになるにつれ、各台地の集落の性格と共通性が認識されるものと期待されている。

（2）　波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも、伊勢崎市北端部に位置し、赤堀町と前橋市に市境を接する箇所である。2遺跡は県道深津伊勢崎線を挟んで隣接し、同一台地上に占地する。この台地は、東側を西桂川、西側を波志江沼に挟まれた南側に舌状にのびる洪積台地である。西桂川の東は沖積低地が、波志江沼の西は洪積台地と神沢川による沖積低地が展開する比較的地形区分としては多様性に富む地域である。土地利用状況は書上本山遺跡周辺と同様で、低地は水田や畑、台地は集落などに使用されているが、この地域には第四期泥流による独立丘状の高まりが散見され、更に神沢川流域などでも砂壌土性微高地が確認されており、考古学上も注目されている地域でもある。

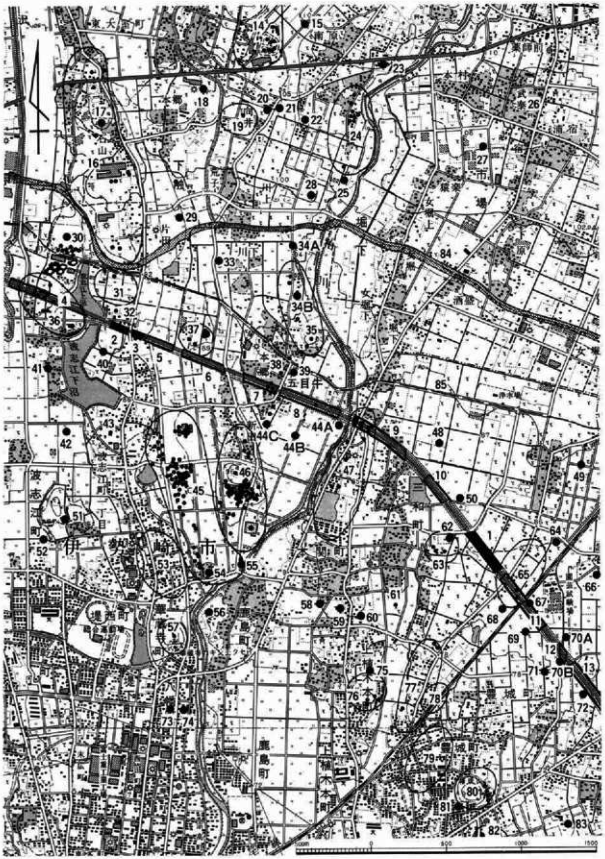
両遺跡には、これら特殊地形は確認されなかったが、波志江六反田遺跡東端部で旧西桂川流路が検出され、石山遺跡・石山片田古墳群・下触牛伏遺跡が属する洪積台地の一端を明らかにした評価が充てられるものである。

第2節　歴史的環境（周辺遺跡）

前述のように、赤城山南域に展開する平野を形成した、小中河川の氾濫源である沖積低地や各種形態の台地には数多くの遺跡が包蔵されている。本節では、それらの遺跡を概観する意味で各時代毎の当地域の遺跡の紹介をし、周辺地域の歴史的様相としたい。

（1）　旧石器時代

著名な遺跡としては権現山遺跡(81)が挙げられる。書上本山遺跡の西南約1.5㎞に位置する独立丘に立地し、八崎火山灰層上より「洋梨形握り槌」などが出土している。また、波志江六反田・波志江天神山遺跡の北方1.4㎞の泥流丘上に尖頭器を多出した石山遺跡(17)が知られる。また、分布図では及ばなかったが、周辺には赤堀町磯遺跡や笠懸町岩宿遺跡など日本旧石器時代研究史の初頭期を彩った学史


東天満町
本郷
山下
下鶴
川原
中川原
長原
清堂
五目牛
波志江
伊勢崎市
遺跡
鹿島町
城町
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34A
34B
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44A
44B
44C
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70A
70B
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
500
1000
1500

第１図　周辺の遺跡

に忘れることのできない遺跡が多い。

学史的には権現山遺跡を初めとする、石山遺跡・岩宿遺跡など一連の旧石器遺跡は重要な資料を提供し、群馬県における該期研究の上昇が期待された地域ではあるが、しばらくの間、調査研究の空白期間ともいうべき停滞期が続く。この因を敢えて言及する必要は無いが、ここ数年の行政発掘増加に伴う旧石器調査例の通常化を照らし合わせると、その極端な対称性に隔世の感を覚える。赤城山南麓を横断する形をとる上武道路建設に伴う調査例を概観しても、今井道上・道下遺跡・二之宮谷地遺跡・二之宮千足遺跡・飯土井二本松遺跡・飯土井中央遺跡・波志江六反田遺跡(2)・堀下八幡遺跡(6)・上植木光仙房遺跡(9)・書上本山遺跡(1)が挙げられ、また、これらの調査に先行する形で赤堀町下触牛伏遺跡(30)や北三木堂遺跡で充実した調査と成果を提起している。いずれも、調査当初時より旧石器調査を目的とした試掘を念頭におき、精力的・合理的に調査を進めた結果と評価できよう。

しかし、上記の遺跡は暗色帯前後の文化層を中核とする調査例であり、八崎火山灰層下や上層の硬質ローム層中の文化層検出には至っていない。今後、当地域の該期調査を行う際の課題としておかなければならないだろう。

(2)　縄文時代

草創期：下触牛伏遺跡において40点弱の「ハ」字形の爪形文が出土している。伊勢崎市内では間之山遺跡(54)が知られる。

早期：明確な遺構が伴わないが、遺物は各遺跡から出土している。代表的なものとして、堀下八幡遺跡からは押型文・撚糸文・無文の三戸式が出土している。書上下吉祥寺遺跡(12)では撚糸文の出土を見る。八寸大道上遺跡(13)でも撚糸文・沈線文・条痕文系の土器片が報告されており、集石土坑からは鵜ヶ島台式の深鉢が注目される。また、下触向井遺跡(20)では条痕文系土器群の良好な出土が報告されている。五目牛東遺跡(44)では沈線文・山形押型文が出土している。波志江権現山遺跡(51)でも早期の土器片とスタンプ形石器が出土している。

前期：非常に濃密な遺跡分布を見せる。そのなかで初頭期に比定される花積下層式土器の出土を見る五目牛清水田遺跡(8)や五目牛南組遺跡(7)が注目されよう。その他では、八幡林古墳群及び縄文住居跡(37)で当該期の住居跡が検出されているとされているが詳細は不明である。

後半期の諸磯式期の遺構は各遺跡で良好な検出状況を見せる。書上下吉祥寺遺跡で住居跡3軒が検出されている他に、堀下八幡遺跡・下触牛伏遺跡・今井柳田遺跡(15)・今井赤坂南遺跡(22)・今井南原遺跡(25)・寺回遺跡(27)・鷹巣遺跡(33)・北通遺跡(34)・五目牛東遺跡(44)・天ヶ堤遺跡(49)・高山遺跡(62)などで住居跡や土坑などが検出されている。

中期：比較的少ない。しかし、各遺跡とも破片資料としては報告されているので、遺跡は存在するのであろう。中西原遺跡(66)からは住居跡、五目牛南組遺跡では小竪穴状遺構から加曽利E3式の完形個体が出土している。当地域では検出されていないが、一般に中期集落は大型のものが知られており、今後該期遺跡の調査例がなされた際には、様々な様相が把握されると期待される。

後期：中期遺跡に比して以外に多い。図上には掲載していないが、赤堀町・東村曲沢遺跡は中期後半から称名寺・堀ノ内式の敷石住居跡などを検出した集落遺跡である。また、五目牛洞山遺跡(39)・今井柳田遺跡も住居跡が検出されており、前述の五目牛清水田遺跡も住居跡は確認されていないが、包含層より良好な遺物出土状況を見せる。その他では、上植木光仙房遺跡では堀ノ内1式の埋設土器が確認されている。

晩期：分布図には乗らないが伊勢崎市八坂遺跡では、初頭期の土器と共に配石遺構が検出されている。北米岡遺跡でも初頭期の土器が出土している。

(陥穴)　上記各遺跡のなかには、陥穴が報告されている遺跡も見られる。蟹沼東古墳群(45)・五目牛南組遺跡・下触牛伏遺跡・波志江天神山遺跡に顕著に認められる。このうち下触牛伏遺跡では25基の

陥穴を報告しており、近接する波志江天神山遺跡との関連が注目されよう。

（3）　弥生時代

報告例は少ない。中期後半期よりの居住が伊勢崎市西太田遺跡などで認められているが、現段階では非常に希薄な存在である。後期にいたると間之山遺跡で住居跡が確認されているが、伊勢崎市内の該期遺跡は濃密な分布を示しているとは言えない。恵まれた地形条件を備えた周辺地形ながら、定着的な居住がなされなかったのは不明点でもある。

（4）　古墳時代

弥生時代後半期の集落が定着しなかったためか、東海系の土器文化が比較的容易に当地域に浸透するようだ。これらの土器文化は、北関東地域の石田川式土器に変容するが、この発展過程において古墳築造を背景とした階層社会を蓄積したのであろう。

当地域の初期古墳としては、華蔵寺裏山古墳(57)が挙げられる。また5世紀の築造とされる御富士山古墳、帆立貝形古墳である丸塚山古墳(61)などは大型古墳として著名である。赤堀町内では、地蔵山古墳群(46)内の初期古墳が挙げられる。その後、6世紀前半の構築が与えられる恵下古墳(76)などを経て、小規模墳丘の群集墳が当地域でも群在するようになる。恵下古墳と空時的にも近接する原之城遺跡(71)が注目される。豪族の居館跡といわれる当遺跡だが、長方形の環濠を持ち、土塁・内部を区画する溝や祭祀跡が検出されている。群集墳は当地域で非常に多い。例えば書上古墳群(65)内の書上上原之城遺跡(11)では2基の古墳が調査され、高山古墳群(63)が近接する。また、波志江今宮遺跡(4)では8基の古墳が調査されており、石山片田古墳群(16)・下触牛伏遺跡で検出された10基の古墳群などとの関連が興味深い。

古墳時代の集落跡も、群集墳と同様に後期に濃密な分布を示す。おそらく生産力の拡大からなされた現象と捉えられ、八寸大道上遺跡・川上遺跡(28)・中畑遺跡(29)・舞台遺跡(48)・天野沼遺跡(68)など数多く調査されている。

（5）　奈良・平安時代

遺跡は主に集落跡として周知されている。その中で上植木廃寺(59)は白鳳時代の創建とされ、本格的な古代寺院跡として位置付けられている。周辺遺跡にも瓦塔片などを出土した遺跡も多く、上植木廃寺は当地域の該期様相の一端をなすものであろう。集落跡は、堀下八幡遺跡・上植木光仙房遺跡・上植木壱町田遺跡(10)などで顕著に検出されている。そのなかで、230点以上の墨書土器を多出した上植木光仙房遺跡は検出された該期住居数も多く、当該地域の中核的な集落と考えられよう。並びに、書上下吉祥寺遺跡も墨書土器を116点出土していることからも、両遺跡とも上植木廃寺との関連を考えるうえで積極的な評価を与えるべき遺跡であろう。その他では、川上遺跡でも寺院跡と思われる建物跡が検出され、同様に墨書土器も出土している。

生産跡としては五目牛清水田遺跡では、古墳時代から中世にいたる幾層もの水田・畑跡が検出されている。また、波志江中峰岸遺跡(5)・波志江今宮遺跡・波志江六反田遺跡でも、B軽石下水田が確認されている。当地域沖積低地の今後の調査増加が望まれる。

さらに、推定東山道(85)も当地域を東西に走るとされていることから、該期における当地域の在り方は、赤城山南麓のみならず、群馬県内でも重要な地域である事が窺われよう。

（6）　中～近世

平安時代から中世にいたる過程の遺跡としては、女堀(84)が挙げられる。12世紀中葉に当該地域の用水供給を主目的として開削されたとされる。

その他には上植木壱町田遺跡では、中世に比定される井戸が検出されており、木簡をはじめとする木製品・石臼・板碑が出土している。

近世遺構は、各遺跡から土坑・井戸・掘立柱建物遺構として報告されている。非常に濃密な分布であり当地域の開発のピークともいえよう。その中で、五目牛南組遺跡で近世農家の屋敷構えが掘立柱建物・礎石建物として検出されたことは注目されよう。

以上のように、当地域の歴史的環境として旧石器時代から通観して概略的な説明を加えた。弥生時代に若干の遺跡減少は認められるが、全体を通して、居住域・生産域として良好な地理的条件を持つ当地域の特徴が分布図にも現れており、人間の活動は地域全般に及んでいたことが解る。

書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡はこれらの遺跡群の中で、各遺跡の性格と同じように多時期の遺構・遺物が認められる複合遺跡として位置付けられるものである。

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
1	書上本山遺跡（伊勢崎市三和町）	○			○	○	○	本報告の遺跡	
2	波志江六反田遺跡（伊勢崎市波志江町）	○			○	○	○	本報告の遺跡	
3	波志江天神山遺跡（伊勢崎市波志江町）		○				○	本報告の遺跡	
4	波志江今宮遺跡（伊勢崎市波志江町）		○		○	○	○	神沢川左岸に位置する。縄文土坑、東側の台地上にある6－7世紀にわたる8基の古墳、奈良時代住居跡1軒を検出。台地の西側には浅間B軽石下の水田跡と溝が検出されている。(古墳は宮貝戸古墳群に含まれる。)	1・2
5	波志江中峰岸遺跡（伊勢崎市波志江町）					○		西桂川左岸の沖積台地上に位置する。浅間山給源のB軽石によって埋没した水田と溝が検出されている。	2
6	堀下八幡遺跡（佐波郡赤堀町堀下）	○	○		○	○	○	旧桂川右岸の洪積低台地上に位置する集落遺跡。踏鞴期の住居跡1軒・土坑4基、平安時代の住居跡9軒を検出。別天文字等の墨書土器が出土。調査区西縁部では暗色帯から約1,000点の旧石器時代の遺物が出土。	3・4
7	五目牛南組遺跡（佐波郡赤堀町五目牛）		○	○	○		○	柏川右岸の洪積低台地上に位置する縄文～近代の複合遺跡。縄文時代は、前期花積下層期の住居跡4軒・陥穴。集石土坑。弥生時代の土坑からは後期樽式土器壺が出土。古墳5基は6世紀前半の構築。近世・近代の屋敷跡検出。	2・4
8	五目牛清水田遺跡（佐波郡赤堀町五目牛）		○		○	○	○	柏川右岸に位置する。洪積微高地上では縄文時代前期から奈良時代に及ぶ55軒の住居跡と前方後円墳1基・祭祀跡等を、沖積地では古墳～平安時代の畠・水田跡、中近世の掘立・井戸・墓壙を調査。	2・4
9	上植木光仙房遺跡（伊勢崎市三和町）	○			○	○	○	大岡々層状地先端部和川左岸。洪積微高地の中央からやや北側より。間山古墳群中の10基（6世紀後半～7世紀後半）を調査。平安時代住居跡123軒、掘立2棟等検出。墨書土器多数出土。	4・5 7・16 32
10	上植木宮町田遺跡（伊勢崎市三和町）				○	○	○	大井戸湧水地による開析谷右岸の洪積微高地上に位置する。古墳時代前期から平安時代に及ぶ住居跡3軒・掘立2棟、地下式土坑1基・土壙墓14基・火葬跡1基、井戸跡13基。溝跡25条を調査。井戸跡からは呪符木簡が出土。	4・6 7
11	書上上原之城遺跡（伊勢崎市豊城町・三和町）				○	○		天ケ池湧水地による小開析谷の右岸台地上。書上古墳群中の2基を調査。奈良・平安時代の住居跡47軒・土坑11基・掘立41棟・井戸跡7基・溝跡21条を検出。墨書土器・緑釉彷徨車・八稜鏡等出土。	6・7 8
12	書上下吉祥寺遺跡（伊勢崎市豊城町）		○		○	○	○	天ケ池湧水地による小開析谷の右岸台地上。縄文時代住居跡3軒・土坑1基、古墳時代住居跡9軒、平安時代住居跡1軒、中世墓壙1基、近世掘立6棟・溝跡13条、土坑7基検出。伊教委調査の「下吉祥寺遺跡」との関連大。	6・7 8

No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
13	八寸大道上遺跡 (佐波郡東村東小保方・西小保方)		○		○	○	○	天ケ池湧水地による開析谷左岸の洪積台地上に位置する。縄文時代集石遺構10基、古墳時代後期の住居跡4軒、奈良・平安時代の住居跡1軒・掘立9棟等を検出。子持器台や古墳時代の工房跡から多量の滑石製品が出土。	8・9
14	多田山田向井古墳群 (佐波郡赤堀町今井)				○			多田山丘陵の東南斜面。古墳時代後期の円墳が集中し、上毛古墳総覧記載の赤堀町分で20基を数える。多田山2基（7世紀初頭）・田向井7基（7世紀前～後・円墳・横穴式石室）調査。	10・12
15	今井柳田遺跡（A区） (佐波郡赤堀町今井)		○		○	○		毛馬から続く沖積地の左岸台地上に位置する。縄文時代住居跡前期1軒・後期9軒・土坑3基。古墳時代後期住居跡12軒、奈良・平安時代住居跡7軒・土坑26基検出。	11
16	石山片田古墳群 (佐波郡赤堀町下触・前橋市東大室町)				○			石山丘陵の全域にわたる。上毛古墳総覧に71基記載。石山南古墳：円墳 横穴式石室 埴輪馬出土・庚塚古墳群：内、円墳 横穴式石室 7世紀末、極小の竪穴式石室 6世紀末・片田古墳群：内、前方後円墳 6世紀末～7世紀初頭等調査。	12・13 14・15 26
17	石山遺跡 (佐波郡赤堀町下触)	○						石山丘陵から南にのびる洪積台地の付け根付近に位置する。100余点の実頭器をはじめとし、約2,500点の剥片等の遺物を出土。旧石器時代末期。	16・17
18	下触下寺遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○	○	○	桂川右岸の洪積低台地上に位置する古墳時代後期～平安時代の集落遺跡。住居跡47軒・掘立3棟と6世紀前半に構築の5基の方形(円形)周溝墓を検出。	18
19	向井古墳群 (佐波郡赤堀町下触)				○			桂川の左岸に位置する。下触向井遺跡に接する。内1基(円墳・横穴式石室)が調査されている。	12
20	下触向井遺跡 (佐波郡赤堀町下触)		○		○	○		毛馬湧水地による開析谷右岸の微高地上に位置する。古墳時代住居跡26軒、奈良・平安時代の住居跡14軒検出。縄文土坑からは早期末の条痕文土器が、平安時代の住居跡・土坑からは「中臣」等の墨書が出土。	19
21	下触向井Ⅱ遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○			毛馬湧水地による開析谷右岸の微高地上に位置する。古墳時代の住居跡17軒を検出。向井遺跡に於ける集落西側の限界を確認。	20
22	今井赤坂南遺跡 (佐波郡赤堀町今井)		○		○			毛馬から湧く湧水による小沢の左岸の低台地に古墳。縄文時代前期の住居跡1軒、古墳時代の住居跡13軒・土坑10基検出。	21
23	今井学校遺跡 (佐波郡赤堀町今井)				○			粕川と鏑木川が合流し段丘を形成した段丘上の北端部。古墳時代の集落遺跡。住居跡11軒・古墳の周溝1基検出。	20・22
24	南原古墳群 (佐波郡赤堀町今井)				○			粕川右岸の洪積低台地上。上毛古墳総覧に愛宕山古墳を中心に28基記載。昭和25年に4基、昭和41年に3基、昭和42年に1基を調査。	10・12 23
25	今井南原遺跡 (佐波郡赤堀町今井)		○	○	○	○	○	粕川右岸の洪積低台地上に位置する集落遺跡。縄文時代前期住居跡1軒・土坑1基、弥生時代住居跡36軒、古墳～奈良・平安時代の住居跡112軒、掘立3棟、土坑7基、「南原古墳群」に属する4世紀後半の古墳1基調査。小形の乳文鏡が出土。墨書・線刻紡錘車等出土。	24
26	武蔵古墳 (佐波郡赤堀町市場)				○			遺跡台帳に周囲が切り崩された円墳との記載がある。	25
27	寺回遺跡 (佐波郡赤堀町市場)		○					粕川と鏑木川の合流点の東、大林寺の西300mに位置する。縄文時代前期の土坑22基他、土器・石器を多量に出土。	26
28	川上遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○	○	○	粕川と桂川に挟まれた洪積台地上に位置する。古墳時代前～後期の住居跡30軒、平安時代の住居跡18軒及び8～11世紀の瓦葺き建物跡(寺院跡)、石製蔵骨器を伴う墓を調査。「寺」「宿」等の墨書を出土。	27・32 44

No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
29	中畑遺跡 （佐波郡赤堀町下触）				○			西桂川右岸の洪積低台地の東縁部に位置する。古墳時代中・後期の住居跡35軒・掘立１棟を検出。	28
30	下触牛伏遺跡 （佐波郡赤堀町下触）	○	○		○	○		神沢川左岸のローム台地上に位置する旧石器～平安時代の複合遺跡。旧石器時代文化層を２層検出し、約3,000点の遺物を出土。縄文時代住居跡３軒・陥穴25基・土坑18基・集石３基、古墳時代住居跡13軒・古墳10基（円墳・方墳 横穴式石室 ７世紀中葉以降）を検出。	16・29
31	牛伏古墳群 （伊勢崎市波志江町）				○			波志江沼東側の舌状台地のほぼ中央部に位置する。１号墳調査。直径30ｍ、横穴式石室を有する。西60ｍに２号墳確認。	30
32	祝堂古墳 （伊勢崎市波志江町）				○			波志江沼東側の舌状台地ほぼ中央部の独立墳。直径70ｍの円墳。２重の周堀、葺石をもつ。截石切組積 横穴式両袖型石室、石室下に約１ｍの版築検出。７世紀末～８世紀初頃構築。	30・32
33	薄巣遺跡 （佐波郡赤堀町下触）		○			○	○	旧桂川左岸の洪積台地西縁部に位置する。縄文時代前期の住居跡２軒・土坑３基、平安時代の住居跡18軒・掘立４棟・土坑等を検出。「川部」「中」等の墨書土器出土。	31
34	北通遺跡Ａ・Ｂ （佐波郡赤堀町下触）		○			○		粕川右岸の台地縁辺。縄文時代前期住居跡７軒・土坑５基、遺構外に後期の土偶が出土。古墳時代住居跡１軒、平安時代住居跡２軒検出。「大門」の墨書土器出土。	31
35	洞山古墳群 （佐波郡赤堀町五目牛）				○			洞山の小丘及びその斜面に分る。上毛古墳綜覧に21基記載。内８基以上が調査。	10・12 31
36	宮貝戸古墳群 （伊勢崎市波志江町）				○			神沢川左岸、波志江沼西の小丘陵上。「波志江今宮遺跡」の８基を含む13基が調査。綜覧三郷村74号墳：小円墳 横穴式両袖型石室 太刀・耳環等出土 ７世紀後半頃。（別称 波志江沼西古墳群・今宮古墳群）	1・10 32・33
37	八幡林古墳群 及び縄文住居跡 （佐波郡赤堀町堀下）		○		○			旧桂川右岸に位置する高さ７ｍの独立丘の南側斜面に位置する。６世紀初頭－７世紀前半構築の４基の横穴式石室の円墳を調査。墳丘下に縄文時代前期住居跡全４軒検出。	34
38	寺跡古墳 （佐波郡赤堀町五目牛）				○			粕川右岸。洞山の南側。横穴式袖無型石室の円墳。６世紀後半。	10・12
39	五目牛洞山遺跡 （佐波郡赤堀町五目牛）		○		○		○	粕川右岸の洪積台地の東縁部に位置する。縄文時代後期の住居跡５軒・土坑13基、古墳時代の古墳の周堀が調査され、土偶・石棒等が出土。	35・36
40	大沼上遺跡 （伊勢崎市波志江町）				○			波志江下沼の台地東縁部。古墳時代の住居跡１軒検出。	30
41	宮貝戸下遺跡 （伊勢崎市波志江町）				○	○		波志江下沼西の平坦地。舌状台地の先端部。８世紀初頭の住居跡２軒検出。	37
42	大沼下遺跡 （伊勢崎市波志江町）				○	○		波志江下沼の南200ｍ。赤城山から延びる舌状台地の先端部。古墳～奈良・平安時代住居跡19軒・溝跡２条・井戸跡１基検出。	38
43	波志江伊勢山古墳 （伊勢崎市波志江町）				○			波志江下沼の南200ｍ。旧三郷村71号墳。横穴式石室の円墳。	12
44	五目牛東遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ （佐波郡赤堀町五目牛）		○		○	○	○	Ａ地点：粕川右岸の低台地上に位置する。古墳時代住居跡12軒を検出。 Ｂ地点：粕川及び旧桂川の氾濫による沖積微高地上に位置する。古墳時代後期－平安時代住居跡22軒を検出、墨書土器出土。中世以降の道跡検出。 Ｃ地点：旧桂川左岸の洪積台地上に位置する。縄文時代前期の住居跡２軒検出。	39

No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
45	蟹沼東古墳群 （伊勢崎市波志江町）		○		○			西桂川左岸の低独立丘（大穴台地）上に築かれた古墳群。地蔵山古墳群の西側500mに位置する。約80基が確認され、内69基の古墳を調査。6～7世紀前半の横墓。他、縄文時代陥穴5基、方形周溝墓6基、溝1条検出。（岡之山古墳群を含む）	32・33 37・40 41・42
46	地蔵山古墳群 （佐波郡赤堀町五目牛）				○			赤堀町の最南端赤城山の残丘状の台地上に位置する。地蔵山古墳を中心に昭和26・27年に調査された連塚山古墳・廐手塚古墳等。5～8世紀にいたる55基が群集する。	10・12 13・39 43
47	関山古墳群 （伊勢崎市本関町 ・三和町）				○			鮎川右岸の台地上に位置する。上原古墳：円墳 横穴式石室7世紀末～8世紀初頭・重田古墳：円墳 箱式石棺 6世紀前半・雉鹿71号古墳：前方後円墳 横穴式石室 7世紀前半・関山古墳・本関町古墳・上武「上植木光仙房遺跡」内の10基（6世紀後半～7世紀後半）の古墳等を調査。	5・10 12・32
48	舞台遺跡F地点 （伊勢崎市三和町）				○	○	○	大岡々扇状地西端の洪積微高地の南西部に位置する古墳時代前期～平安時代の集落遺跡。10軒の住居跡の内5軒が古墳時代後期に属する。井戸からは14世紀代の板碑出土。	44・45
49	天ケ堤遺跡 （伊勢崎市三和町）		○		○			尼ケ池湧水地の関析谷に面する台地上に位置する。縄文時代住居跡1軒、古墳時代住居跡7軒検出。	44・46
50	舞沼東遺跡 （伊勢崎市三和町）		○		○	○	○	大井戸湧水地の関析谷に挟まれた洪積微高地上に位置する縄文時代中期～平安時代の集落遺跡。33軒の住居跡・井戸跡9基検出。	44・45
51	波志江権現山遺跡 （伊勢崎市波志江町）		○					伊勢崎市北部、波志江権現山の山裾部に位置する。縄文時代早期の土器・石器が出土している。	32
52	西稲荷遺跡 （伊勢崎市波志江町）				○			伊勢崎市北部、微高台地の西側部分波志江権現山の南西に位置する。古墳時代の溝跡3条検出。	38
53	台所山古墳群 （伊勢崎市波志江町）				○			鮎川の右岸、華蔵寺の北方の台地上に位置する。10余基（内上毛古墳絵巻8基記載）の古墳の存在が伝えられたが現在にはほぼ消滅している。内、主体部に箱式石棺を用いた1基が調査された。	32
54	岡之山遺跡 （伊勢崎市波志江町）		○	○	○			西桂川が鮎川に合流する手前右側の舌状台地上に位置する。付近一帯は岡之山古墳群であり、古墳下から縄文・弥生・古墳時代の住居跡・方形周溝墓等検出。	32
55	岡之山東遺跡 （伊勢崎市波志江町）				○			鮎川の右岸、地蔵山丘陵の南側に位置する。古墳時代の住居跡が検出。	32
56	上西根遺跡 （伊勢崎市鹿島町）				○	○		鮎川左岸の洪積台地上に位置する。古墳時代前期～奈良時代にわたる住居跡26軒・方形周溝墓5基・石棺1基・井戸跡3基・溝跡15条等を検出。	47
57	華蔵寺古墳群 （伊勢崎市華蔵寺町）				○			鮎川右岸の独立丘上に位置する。華蔵寺裏山古墳：主軸長約40mの前方後円墳。主体部は粘土郭と推定。5世紀初頭の構築・華蔵寺1号墳調査。	32
58	新屋敷遺跡 （伊勢崎市本関町）				○	○		舌状微高台地上に位置する。古墳時代住居跡、平安時代住居跡を検出。墨書土器出土。	32
59	上植木廃寺 （伊勢崎市上植木本町 ・本関町）					○		大岡々扇状地の先端部、舌状微高台地上に位置する。白鳳期創建の地方寺院（金堂・講堂・塔・中門・回廊・基壇検出）、瓦・三彩陶片・墨書土器・瓦塔片などが出土している。	32・44 48
60	上植木廃寺間道遺跡 （伊勢崎市上植木本町 ・本関町）				○	○	○	舌状微高台地上に位置する。古墳時代住居跡、奈良・平安時代住居跡、中・近世溝跡・土坑・井戸跡検出。墨書土器出土。	32

No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
61	丸塚山古墳 （伊勢崎市三和町）				○			大井戸湧水地による開析谷に挟まれた洪積微高地の南端部に位置する。後円部墳頂に箱式棺状竪穴式石室3基をもつ、全長81mの帆立貝形前方後円墳。5世紀後半の構築。	10・12 32
62	高山遺跡 （伊勢崎市三和町）		○		○			舌状台地の先端部に位置する。縄文時代前期の住居跡1軒、高山古墳群中の3基・方形特殊遺構・時期不明の溝跡5条を検出。	32・46
63	高山古墳群 （伊勢崎市三和町）				○			舌状台地の先端部に位置する。6世紀後半構築の3基が「高山遺跡」として調査されている。	32・46
64	下書上遺跡 （伊勢崎市三和町）					○		大井戸湧水地による開析谷の左岸台地上に位置する。土師器片出土。	46
65	書上古墳群 （伊勢崎市三和町）				○			沖積地に挟まれた南へのびる台地の東辺に位置する。上毛古墳綜覧に約30基が記載。上武「書上上原之城遺跡」で横穴式石室の円墳2基（7世紀初頭）が調査されている。	6・7 32
66	中西原遺跡 （佐波郡東村西小保方）		○		○	○		天ケ池湧水地より南下する開析谷の東側台地上に位置する。縄文時代住居跡・集石・土坑、古墳時代住居跡、奈良・平安時代住居跡等出土。（県園芸試験場遺跡）	49・50
67	園芸試験場第Ⅱ遺跡 （伊勢崎市三和町）					○		天ケ池湧水地の開析谷の右岸台地上に位置する。上武「書上上原之城遺跡」に含まれる。奈良・平安時代の住居跡7軒・掘立12棟・井戸跡1基・土坑4基検出。	6・51
68	天野沼遺跡 （伊勢崎市三和町）				○			天野沼を中心としている舌状にのびる台地の基盤。古墳時代末期の住居跡5軒を検出。	46
69	原之城遺跡 （伊勢崎市豊城町）					○		天ケ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。奈良・平安時代の住居跡80軒検出。	52
70	下古祥寺遺跡 A・B （伊勢崎市豊城町 ・三和町）		○		○	○	○	天ケ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。縄文時代住居跡3軒、古墳～奈良・平安時代住居跡64軒、溝跡2条。瓦塔・墨書土器出土。	32・52 53
71	原之城遺跡（環濠跡） （伊勢崎市豊城町）				○			天ケ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。東西方向約105m・南北方向約165mの長方形区画の巡りに幅約20mの濠をもつ古墳時代中期の環濠居館跡。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀跡・内部区画の溝等が検出。	32・44 52・54 55
72	大道上遺跡 （佐波郡東村西小保方 ・東小保方）				○			天ケ池湧水地より南下する開析谷の東側台地上。古墳時代住居跡検出。	50
73	八幡町B遺跡 （伊勢崎市八幡町）				○	○	○	華蔵寺丘陵から南に延びる舌状微高地の先端部よりに位置する。古墳時代住居跡19軒、平安～近世の溝跡8条検出。石製模造品出土。	57
74	八幡町D遺跡 （伊勢崎市八幡町）				○			華蔵寺丘陵から南に延びる舌状微高地の先端部よりに位置する。古墳時代後期住居跡15軒・井戸跡10基・溝跡2条・土坑検出。	58
75	恵下遺跡 （伊勢崎市上植木本町）				○	○	○	大間々扇状地西端の洪積微高地の東縁部に位置する。古墳時代前期～奈良・平安時代住居跡84軒、6世紀構築の円墳3基、窯跡1基・溝10条・井戸12基検出。墨書土器・線刻紡錘車出土。	44・56
76	恵下古墳群 （伊勢崎市上植木本町）				○			大間々扇状地西端の洪積微高地の東縁部に位置する。6世紀中頃の古墳群。恵下古墳：直径27mの円墳 石棺式竪穴式石室 埴輪・副葬品多数出土。「恵下遺跡」で3基の円墳を調査。	10・32 56

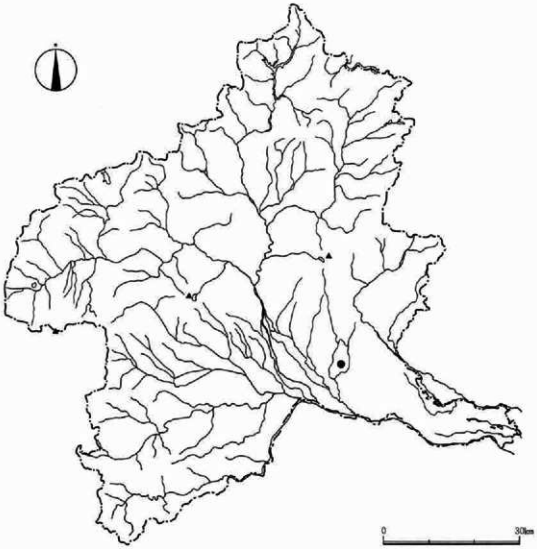
No.	時期 / 遺跡名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
77	大道西古墳群 (伊勢崎市上植木本町・豊城町・三和町)				○			豊城町北西部一帯に広がる。大道西１号墳・行者山１・２号墳の３基を調査。(行者山古墳群を含む)	10・32
78	大道東古墳群 (伊勢崎市豊城町)				○			権現山の北方に広がる。平夷されてしまったため不明な点が多い。	32
79	権現山北古墳群 (伊勢崎市豊城町)				○			権現山の北方に広がる。平夷されてしまったため不明な点が多い。	32
80	権現山古墳群 (伊勢崎市豊城町)				○			権現山の中腹から麓にかけて約20基が群集。内、山裾の傾斜面に位置する４基の横穴式石室を調査。６世紀代の群集墳。	10・32
81	権現山遺跡 (伊勢崎市豊城町)	○						大岡々扇状地の平坦部に小島のように屹立する権現山の南縁斜面上に位置する。前期旧石器文化の存在を最初に説いた遺跡。	16・17 32
82	権現山南古墳群 (伊勢崎市豊城町・上淵詰町)				○			権現山の南側に位置する。上毛古墳綜覧に30基記載。内１基のみ調査。 上淵詰古墳：円墳 横穴式石室 形象埴輪出土 ６世紀後半。	10・32
83	西ノ畑遺跡 (佐波郡東村東小保方)				○	○		天ケ池から南下する開析谷の北側台地上に位置する。古墳～平安時代の住跡跡を検出。	50
84	女堀						○	赤城山南麓から大岡々扇状地の古期面に位置する。前橋市上泉町付近の旧利根川を起点に、幅15～30ｍ・深さ３～４ｍの規模で佐波郡東村西国定の鈴点まで12.75kmにわたって開削された用水遺構。古代末の構築。	27・28 32・49 59
85	東山道（推定）				○			上野国南部を横断する古代の官道。「佐位駅」が上植木・下植木地域にあると推定される。	32・49

参考文献

1　石塚久則『上武国道地域埋蔵文化財発掘調査略報』『今宮遺跡』1981　群馬県教育委員会
2　「昭和60年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1986　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
3　原 雅信　岩崎泰一他『堀下八幡遺跡』1990　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
4　「昭和59年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1985　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
5　飯塚 誠『上植木光仙塚遺跡』1989　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6　原 雅信　飯塚 誠　坂井 隆他『上植木宮町田遺跡 書上上原之城遺跡 書上下吉祥寺遺跡』1988　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
7　「昭和58年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1984　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
8　「昭和57年度・実績報告　上武国道地域埋蔵文化財発掘調査」1983　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
9　坂井 隆　原 雅信他『八寸大道上遺跡』1989　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
10　『群馬県史　資料編３　原始古代３』1981　群馬県史編さん委員会
11　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告18』『今井梅田遺跡発掘調査概報』1982　赤堀村教育委員会
12　尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966　吉川弘文館
13　尾崎喜左雄『日本考古学年報５』1952　日本考古学協会
14　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告25』『蛇野遺跡 炭窯古墳群発掘調査報告』1988　赤堀町教育委員会
15　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告31』『下触片目古墳群発掘調査概報』1990　赤堀町教育委員会
16　『群馬県史　資料編１　原始古代１』1988　群馬県史編さん委員会
17　相沢忠洋　関谷 美『赤城山麓の旧石器』1988
18　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告23』『下触下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報』1987　赤堀町教育委員会
19　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告13』『下触向井遺跡発掘調査概報』1980　赤堀村教育委員会
20　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告26』『町内遺跡発掘調査報告』1989　赤堀町教育委員会
21　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告30』『今井赤堀南遺跡発掘調査概報』1990　赤堀町教育委員会
22　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告29』『町内遺跡発掘調査概報』1990　赤堀町教育委員会
23　松村一昭『赤堀村大字南原古墳発掘調査報告』『群馬文化86』1966　群馬文化の会
24　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告15』『今井南原遺跡発掘調査概報』1981　赤堀村教育委員会
25　『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』1971　群馬県教育委員会
26　松村一昭『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告28』『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』1989　赤堀町教育委員会

27　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告12」「川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報」1980　赤堀村教育委員会
28　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告22」「中堀遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報」1986　赤堀村教育委員会
29　小島敦子　徳江秀夫　岩崎泰一他「下触牛伏遺跡」1986　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
30　中澤貞治「牛伏第１号墳　祝堂古墳　大沼上遺跡」1982　伊勢崎市教育委員会
31　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告20」「剣山古墳群及び北浦、薄巣遺跡発掘調査概報」1983　赤堀村教育委員会
32　「伊勢崎市史　通史編１　原始古代中世」1987　伊勢崎市
33　中澤貞治「宮貝戸古墳群　蟹沼東古墳群」1983　伊勢崎市教育委員会
34　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告19」「八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報」1982　赤堀村教育委員会
35　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告14」「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」1980　赤堀村教育委員会
36　松村永子「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告32」「五目牛地区町道106号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」1990　赤堀町教育委員会
37　中澤貞治　村田喜久夫「蟹沼東古墳群　宮貝戸下遺跡」1978　伊勢崎市教育委員会
38　中澤貞治　村田喜久夫「大沼下遺跡　西輔岡遺跡」1977　伊勢崎市教育委員会
39　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告11」「五目牛東遺跡及び赤堀村８号墳発掘調査概報」1960　赤堀村教育委員会
40　中澤貞治「蟹沼東古墳群」1979　伊勢崎市教育委員会
41　中澤貞治　村田喜久夫「蟹沼東古墳群」1981　伊勢崎市教育委員会
42　須長泰一「蟹沼東古墳群」1988　伊勢崎市教育委員会
43　松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告７・８」「赤堀村地蔵山の古墳１・２」1978・1979　赤堀村教育委員会
44　「群馬県史　資料編２　原始古代２」1986　群馬県史編さん委員会
45　中澤貞治　村田喜久夫「蟹沼東遺跡　舞台遺跡」1977　伊勢崎市教育委員会
46　中澤貞治「高山遺跡　天ケ堀遺跡　天野沼遺跡　下書上遺跡」1978　伊勢崎市教育委員会
47　村田喜久夫　須長泰一「上西根遺跡」1985　伊勢崎市教育委員会
48　松村一圭　須長泰一　早川隆弘「上植木原寺」1988　伊勢崎市教育委員会
49　群馬県佐波郡「東村誌」1979　東村誌編纂委員会
50　横山　巧「佐波郡東村の遺跡－村内遺跡詳細分布調査報告書－」1988　佐波郡東村教育委員会
51　井上唯雄「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報１」「原園芸試験場第二遺跡」1974　群馬県教育委員会
52　中澤貞治「原之城遺跡　下吉祥寺遺跡」1982　伊勢崎市教育委員会
53　村田喜久夫「下吉祥寺遺跡」1980　伊勢崎市教育委員会
54　中澤貞治「原之城遺跡」1986　伊勢崎市教育委員会
55　中澤貞治「原之城遺跡発掘調査報告書」1988　伊勢崎市教育委員会
56　村田喜久夫「恵下遺跡」1979　伊勢崎市教育委員会
57　早川隆弘「八幡町遺跡（B地区）」1988　伊勢崎市教育委員会
58　松村一美　須長泰一　早川隆弘「八幡町遺跡（D地区）」1990　伊勢崎市教育委員会
59　能登　健　鹿田益三他「女堀」1985　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
60　「上毛古墳総覧」1938　群馬郡
61　「群馬県遺跡地図」1973　群馬県教育委員会
62　「全国遺跡地図　群馬県」1977　文化庁文化財保護部

Ⅲ章　書上本山遺跡



第２図　遺跡の位置

第１節　遺跡の概要

（遺跡内の地形）

書上本山遺跡は伊勢崎市三和町に所在し、市の北東部の洪積台地上に占地する。前章でも述べたように、この台地は大間々扇状地桐原面（古期扇状地）に属し、扇状地礫層上に乗る関東ローム層によって構成される。本遺跡調査区南東と北西には湧水地に端を発する沖積低地が本遺跡の乗る低台地を挟んでいる。

周辺地形は概して、低台地とその間を樹枝状に延びる沖積低地の連続であり、本遺跡は北東から南西に緩やかに傾斜する低台地を南東から北西にかけて調査した結果となる。このような低台地はロームの残存状況が悪い傾向にあり、地表下１ｍほどで湧水を伴ったり、粘土化している箇所もしばしば見受けられる。さらに、ローム層自体が互層をなす場合もあり、分層調査の判断の障壁ともなる。例えば、本遺跡の南東部分であるⅢ区は、洪積台地といっても全体の様相は低地的な性格を持ち、黒色土の発達も著しかった。標高も調査区域内では最も低く、湧水も遺構内に認められた。おそらく浅い沖積低地が、南北に存在するのであろう。

反面、Ⅳ～Ⅵ区のローム層は良好な堆積を呈し、調査区の高標高部はⅤ区北隅である。調査区域外の遺構も住居跡などの居住遺構などはこのⅣ・Ⅴ区に見られた緩やかな傾斜地が選ばれているものと想起されよう。ただ、Ⅵ区は台地北西部の傾斜地にあたり、ローム層も互層をなす箇所もあり、旧石器試掘時には、硬質ローム下面より湧水が認められた。

（検出された遺構・遺物の概要）

書上本山遺跡で検出された遺構は比較的少なく、ＪＲ両毛線を隔てて調査された書上上原之城遺跡のような密集した遺構分布ではない。しかしながら、調査区Ⅲ・Ⅳ区を中心に、古墳時代から中～近世にかけての遺構が検出され、それらの遺構が希薄な存在となるⅤ・Ⅵ区には旧石器時代と縄文時代の遺物を調査することができた。ここで、遺跡内の遺構・遺物を各時代毎に概略を説明する。

旧石器時代

試掘の概要はⅠ章に詳しいのでここでは省くが、Ⅴ区から２箇所の石器集中部を検出した。この他に、Ⅵ区においても石器の出土をみたがこちらは散漫な出土状況であった。いずれも石器は、Ⅵ層からⅨ層にかけての出土であり、暗色帯層中からの出土が充実していた。総計348点の出土であるが、製品類は少なくナイフ形石器が２点・台形石器が１点である。他は、大形の縦長剥片であったり剥片類が主だが、剥片接合例は19例を数えている。縦長剥片の作出を目的とする資料が多いが、大形の縦長剥片素材を石核とする手法も見受けられる。また接合資料は同一のブロック内でまとまり、このことは２箇所のブロックの時間的な差、あるいは剥片剥離作業空間の限定を示唆するものかも知れない。石材は、他遺跡の該期石材組成と同様で黒色安山岩・黒色頁岩製のものが多く、比較的入手しやすい石材に依存していた傾向が理解される。

縄文時代

遺跡全域から出土しているが、特にⅤ区からの縄文時代前期の遺物が集中的であった。しかし、その集中度も遺構を伴うものではなく、ソフトローム層上層の遺物包含層からの出土とされる。その中で、縄文時代前期後半に位置付けられる諸磯ｂ式～ｃ式に併行する東関東系の興津式が確認されたことは、当地域の地理的条件を考えるに、今後も問題点を提起することになろう。また、早期撚糸文や条痕文系土器群とともにスタンプ形石器も出土しているが、良好な分布状態ではなく、ブロックとしては把握できない。

弥生時代

遺構は無く遺物も皆無といってよい。しかしながら単独で磨製石鏃が出土しており、当地域の希薄な弥生時代資料のなかで注目される存在であろう。

古墳時代

遺跡は書上古墳群に隣接し、上武道路調査区域内でも本遺跡東に接する書上上原之城遺跡で２基の古墳が調査されている。ただし、本遺跡では古墳は存

第３図　周辺の地形

在せず該期の住居跡3軒が確認された。そのうちの1号住居跡は出土遺物も良好な器種組成を見せ、住居数は少ないながらも好資料を提示している。また、6号井戸もおそらく古墳時代の所産と考える。

奈良・平安時代

住居跡は4号住が充てられるものと思われる。出土遺物はないが、住居平面形から判断したものである。また、9号溝からは瓦塔片が出土しており、周辺の寺院跡などの存在を示唆する。特筆すべきことは、集石遺構が検出され石製骨蔵器が出土している。集石遺構の残存は良好なものではないが、骨蔵器の存在から、墓跡として位置付けられよう。その他では21号土坑と1号住上層土坑がこの時期に比定されるものと考える。

中～近世

溝は7条検出されている。そのうち9号溝は屈曲する平面形を呈し、何らかの区画溝とも捉え得る。覆土の様相から中世段階と考えた。また、1・2号掘立柱建物跡も出土遺物がないが、柱穴の配置からは、おそらくこの段階ではないだろうか。

その他

無遺物の土坑群や小ピットは確定的な時期を充てることはできない。またその性格なども不明な要素が多すぎる。

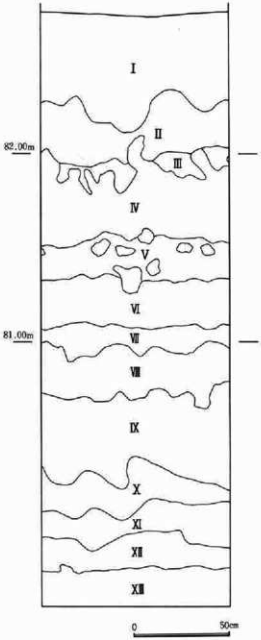
第4図　調査区全体図

第2節 土　　層

当地域の上武道路路線は、洪積台地と沖積低地を横断している。本遺跡はこの洪積台地に占地する遺跡であり、調査の必要性としてローム層の堆積状態を把握する作業が挙げられた。これは、旧石器時代の石器検出作業もさることながら、本遺跡に限らずあらゆる調査遺跡は調査区域内の層位を提示することによって、周辺遺跡との対比が初めて可能になるのである。つまり、旧石器時代の遺物・遺構が検出されなくとも、ローム層位を提示することは最低必要条件なのである。

上記の理由から、洪積台地に乗る本遺跡の調査も、Ⅲ～Ⅵ区の縄文時代～中世にいたる遺構調査が終了する都度、区毎に土層柱状図の記録化を加えた。その結果、Ⅲ区・Ⅳ区の東半及びⅥ区東端はロームの遺存状態が悪く、当地域の基準層位にはなり得ないものと判断した。ローム層の良好な層準を示したⅣ区西半～Ⅴ区において、本遺跡の基本土層とした。また、各地点のローム層の堆積状態を比較すると、少なくともⅤ層の板鼻褐色軽石層からは現地形とほぼ同様に平坦な堆積状態が認められた。

図示した基本土層は、Ⅴ区のものである。また、層位を示すローマ数字は、調査時の数字を充てたものであり、他の遺跡との数字の上での整合性は無い。将来的に当地域でのローマ数字上の統一が図られる可能性もあるが、本県の場合、浅間白糸台軽石や板鼻褐色軽石など、ローム層中にも各種の火山性軽石や火山灰が認められており、その鍵層を基準とした用語の使用も有効であろう。今後の課題としたい。以下、各層毎の説明をする。



第5図　基本土層

Ⅰ　表 土 層　地点によっては Ⅱ 層との間に黒褐色の As－C を混入する層もある。

Ⅱ　褐色土層　主に縄文時代の遺物を包含する。地点・遺跡によっては Ⅲ 層のソフトロームとの分層が困難な層であり、縄文時代の遺構確認に支障をきたす。

Ⅲ　黄褐色軟質ローム層　いわゆるソフトロームである。下面に不連続面を持つ。

Ⅳ　黄褐色硬質ローム層　ハードロームである。As－Bp を数状に含む。Ⅲ 区などの低地部にいたると、層厚が薄くなり、Ⅲ 層が顕著になる。

Ⅴ　板鼻褐色軽石層混土層　硬質で、As－Bp を斑状に含むため砂質の感がある。

Ⅵ　暗褐色硬質ローム層　As－Bp を少量含む。

Ⅶ　黄褐色軟質ローム層　粘性を帯び、橙色粒を少量含む。赤城南麓の遺跡では一般に本層の下位部分にＡＴの極大値が認められる。

Ⅷ　暗色帯１　暗褐色を呈す。軟質。やや明るい。

Ⅸ　暗色帯２　暗褐色を呈す。硬質。やや暗い
暗色帯は２層に分層されるが、色調差としまりによるものである。地点によっては、単層として確認した所もある。

Ⅹ　褐色ローム層　硬質。

Ⅺ　褐色ローム層　硬質。八崎軽石粒を含む。

Ⅻ　八崎軽石層　淡褐色を呈す。

XIII　褐灰色粘土層

第３節　旧石器時代

旧石器時代の遺物は、Ⅴ区・Ⅵ区より出土した。その石器の集中はⅤ区西半に求められ、Ⅴ区東半の石器は剥片２点と磨石類１点で他は自然礫であった。また、Ⅵ区は緩傾斜地のため主体的な出土が期待された箇所だったが、数点の剥片と台石１点が出土したのみであった。

Ⅴ区西半の石器集中分布は２箇所を数える。出土層位はⅤ層～Ⅸ層だが特に集中がみられたのはⅥ層下部からⅧ層上面である。石器の集中分布を西から１号・２号ブロックと分けたが、２つの距離間は約25mを測る。調査区域内では他に石器を集中する箇所が見当たらず、本遺跡が乗る台地でどのような広がりを見せるのか判然としない部分が多いが、本遺跡の北西部のロームの状態は非常に良く、調査区域外においても同様な傾向を見せると思われる。なお、調査中は調査区域内の石器集中箇所はこの２箇所と断定し調査を進めたが、北西部への広がりなどを考慮せず試掘の割合も少く反省点を残している。

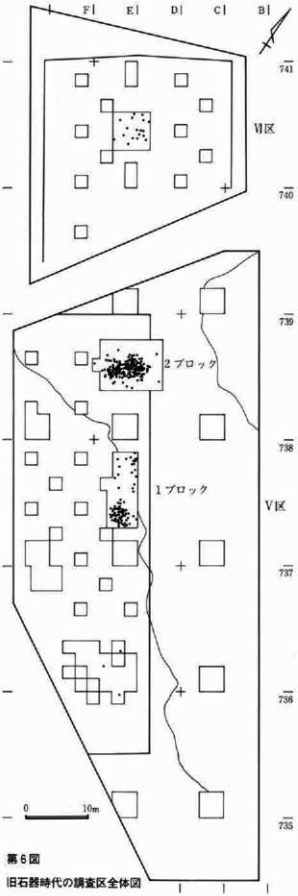
各ブロックの説明だが、Ⅴ区東のブロックおよびⅥ区のブロックはグリッド名で代称し、中心位置を占める１・２号ブロックのみ番号を付した。

(736ＥＧｒブロック)

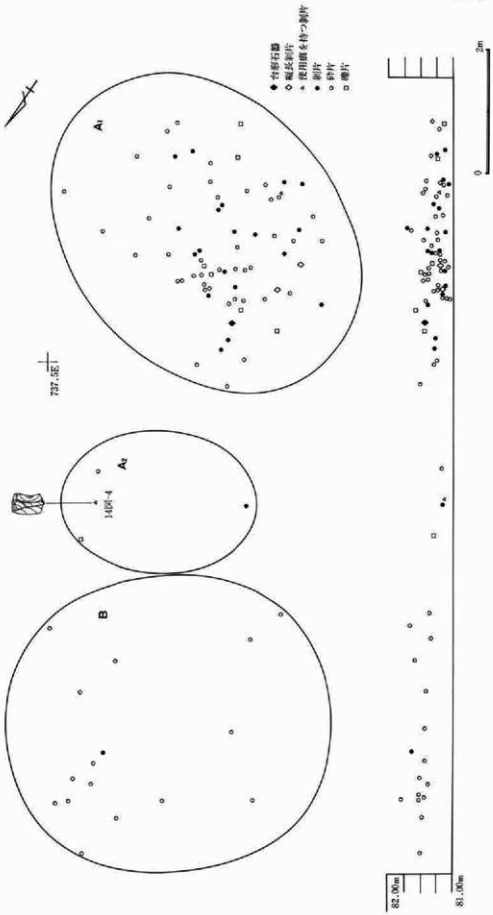
Ⅴ区東のブロックである。本遺跡の調査で最初に石器が出土したグリッドである。砕片の一つがⅤ層上層より出土が認められ、ただちに拡張調査を施した箇所であるが、出土は希薄で、砕片２・小形の磨石類１・その他礫片を確認したのみである。出土層は磨石類がⅨ層上層で出土し、他はⅤ層からⅧ層にかけて散発状態で検出された。

(740.5ＥＧｒブロック)

Ⅵ区傾斜部分のブロックである。地形傾斜のためか、層序が区分しづらく、また、出土石器も想像以上に希薄だったブロックである。出土石器は粗粒安山岩製の台石１を中心に数点の剥片・砕片・他は自然礫片であった。出土層位も台石がⅨ層相当の粘質土から出土し、その他はⅧ層相当のやや砂質の褐色ローム下面からであった。

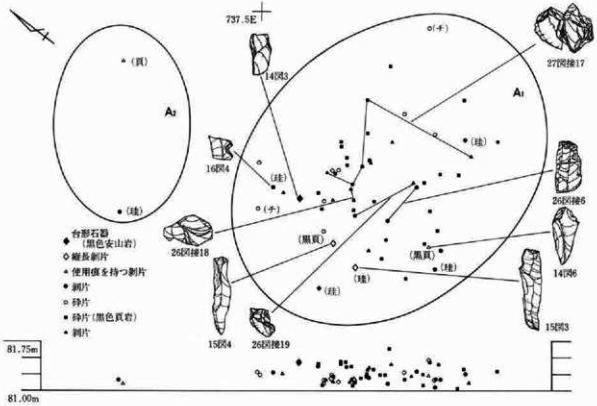


第６図
旧石器時代の調査区全体図

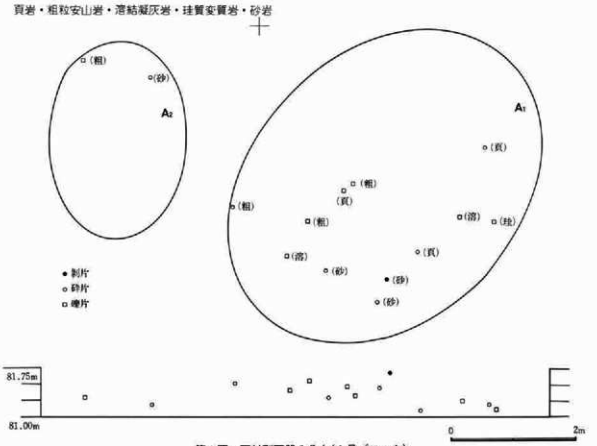


第７図　石器の分布（１号ブロック）

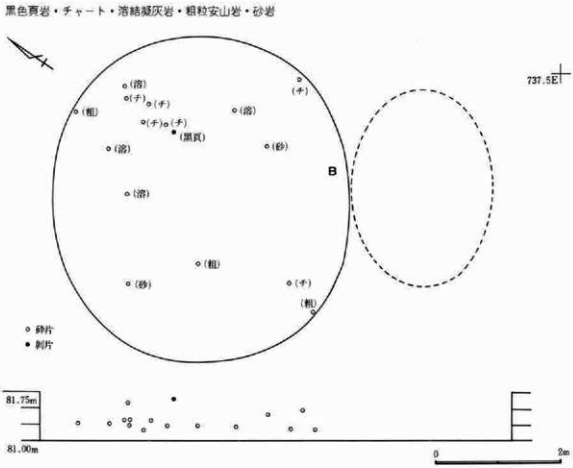
黒色頁岩・黒色安山岩・頁岩・チャート・珪質頁岩



頁岩・粗粒安山岩・溶結凝灰岩・珪質変質岩・砂岩



第8図　石材別石器の分布(1号ブロック)



第9図　石材別石器の分布（1号ブロック）

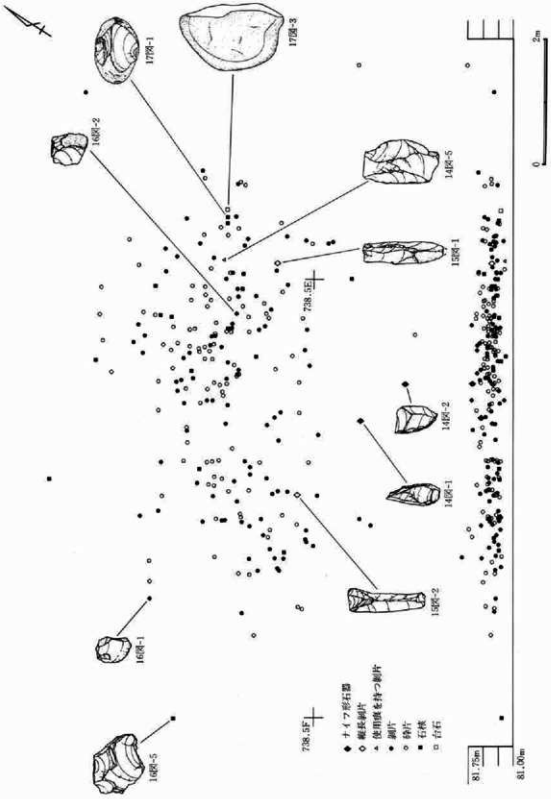
（1号ブロック）

Ⅴ区の中央やや西寄りで検出された。南側に緩やかに傾斜する台地の平坦部分にあたる。ブロックは2つのグループに分別される。東側の総数73点の剥片・砕片が集中した一群（A）と西側の砕片で構成されるもの（B）である。Bの東に接して小形のグループを把握したが、出土石器の内容からAに帰属させ、前述の剥片で構成される一群をA_1、小形のまとまりの一群をA_2とした。

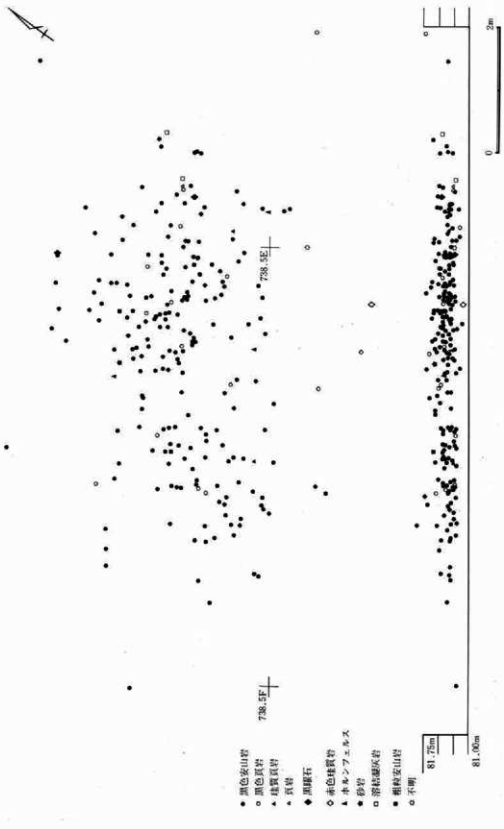
A_1は約5.5×4.3mの規模で楕円形を呈し、長軸を東西に持つ。良好な石器集中分布を見せる。出土石器は総計73点で、その内容は台形石器1・使用痕を持つ剥片石器1・大形縦長剥片2などである。また、接合資料4個（6・17・18・19）を確認している。出土層位は、Ⅴ層下面から小形の剥片が認められ、台形石器はⅥ層から出土している。しかし、大形縦長剥片や接合資料の剥片の多くはⅦ・Ⅷ層中で安定的に集中している。

A_2はA_1の西約1mに位置し、4点の石器が出土している。内訳は、使用痕を持つ剥片1と剥片・砕片である。後述するBブロックと距離的には近いがBブロックは出土層位も高く、砕片で構成されていることから、A_2は出土層位・石器の内容からA_1に近縁性を持つものと判断した。接合資料は認められていない。

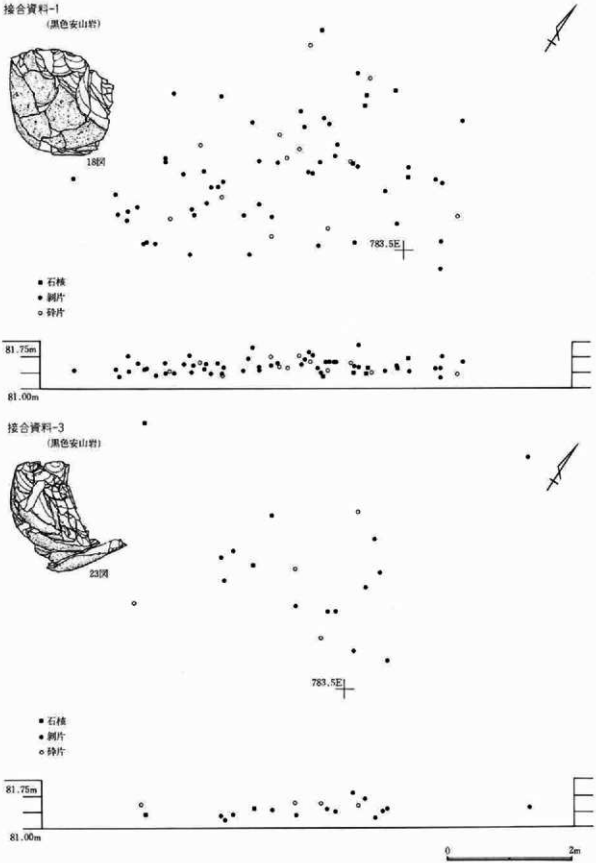
Bは、総計16点の砕片・剥片が主な組成である。図示できなかったが、礫片も多く出土している。出土層位はⅤ層下面からⅧ層上面で集中性に欠け、散発状態ともいえる出土であった。接合資料は無い。



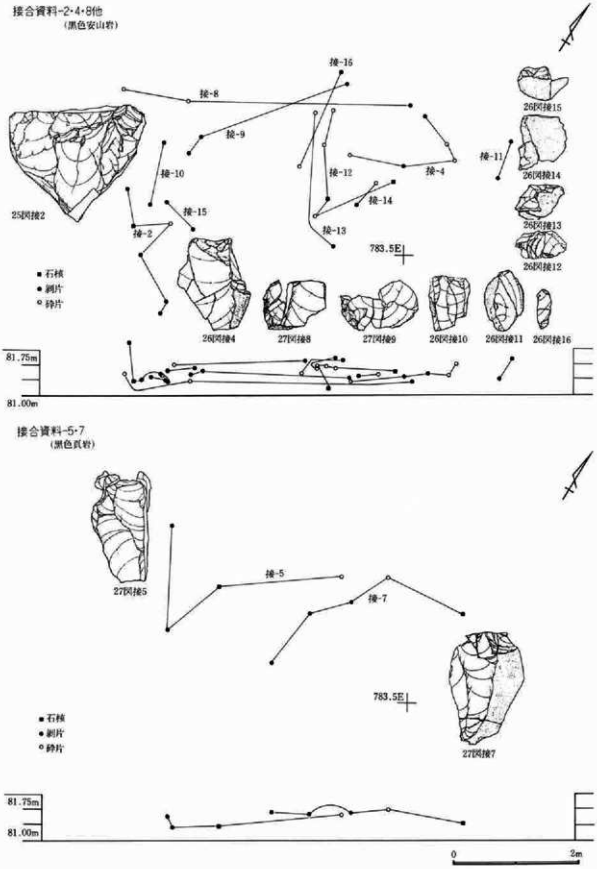
第10図　器種別分布図（2号ブロック）



第11図　石材別分布図（２号ブロック）



第12図　接合資料(1・2)の分布



第13図　接合資料(２・４・５他)の分布

（2号ブロック）

Ⅴ区西側に位置し、南と西側へ傾斜する台地変換部分の平坦部で検出した。前述の1号ブロックA_1との中心間距離は約25mを測り、ある程度の距離を保っている。このことは両ブロックの独立性をも意味するのかもしれない。規模は約8.0×6.0mの楕円形を呈し、長軸を北東に持つ。石器の集中も良好で、総計224点の出土量を誇る。出土層位はA_1と同様でⅤ層からⅥ層にかけて出土し、特にⅥ層には石核などが目立ち、本ブロックの安定的な層位はⅦ・Ⅷ層と考えられよう。石器集中分布状態を概観すると、本ブロック内の南西よりに偏かではあるが空白部が所在する。整理作業当初はこの空白部を分割軸として、本ブロックを2～3分割する案も考えたが、接合資料の在り方などからは、2分割する根拠は少ないため本報告ではまとめて一つのブロックと捉えた。

出土石器の内訳は、剥片・砕片を主な石器組成とし、ナイフ形石器2・使用痕を持つ剥片1・大形縦長剥片2・石核3および接合資料15個を数える。接合資料の中には石核を十数点含み、このことからも当ブロックにおける積極的な石器製作意識が看取される。接合資料は2例を除き、すべて黒色安山岩製で本ブロックの主要石材構成といえよう。母岩別の個体別資料化を図ったが、非常に風化の著名な石材のため断定はできなかった。他の2例の接合資料は黒色頁岩である。該期遺跡においても黒色安山岩の次に安定的に使用される石材であり、本遺跡でもその傾向が把握できる。

石核の出土はブロックの中心から、北東側に集中する。接合資料もこの石核を中心に見られ、おそらく本ブロック内の製作は中心より北東側にややずれた位置にあるのではないだろうか。

さらに、ナイフ形石器はブロック南側で距離を置き、比較的上層のⅤ層下位～Ⅵ層より出土している。大形縦長剥片もブロックの中心からやや外れた位置で出土している。製品類やそれに付随する剥片などは、位置を変えて製作されたかもしれない。

（出土石器）

ナイフ形石器　（第14図1・2）

1は、縦長剥片を素材に用いる。右側縁の下端部に未加工部分を残すほか、二側縁に加工を施す。表面には礫面を一部に残す。黒色頁岩製。剥片の打面部は加工により除去される。2は、やや幅広の剥片を素材に用いる。調整加工は左側縁に施され、右側縁には微細な歯こぼれが見られる。なお、右側縁下端部には調整加工部分を打面に樋状剥離を施している。黒色頁岩。

台形石器　（第14図3）

台形石器と捉えた。幅広の剥片を素材に、打面側および剥片端部の一部に調整加工を施し石器を作出している。石器基部には折れ面がみられる。黒色頁岩。

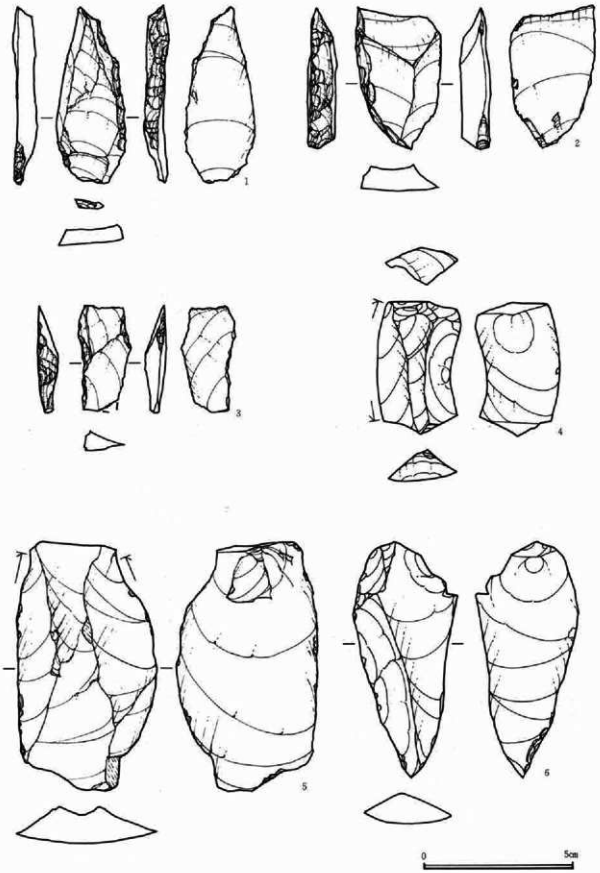
使用痕を持つ剥片石器　（第14図4～6）

4は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とする。左側縁に微細な歯こぼれが認められる。先端部を欠損する。5は、幅広の縦長剥片を素材とし、両側縁および剥片端部に歯こぼれが認められる。黒色頁岩製。6は1号ブロック内で地点を同じにして2点に割れて出土している。薄手の縦長剥片を素材として、剥片形状は緩やかに湾曲し、端部が先鋭に尖る。使用痕は両側縁に歯こぼれが認められる。器表面は風化が著しい。

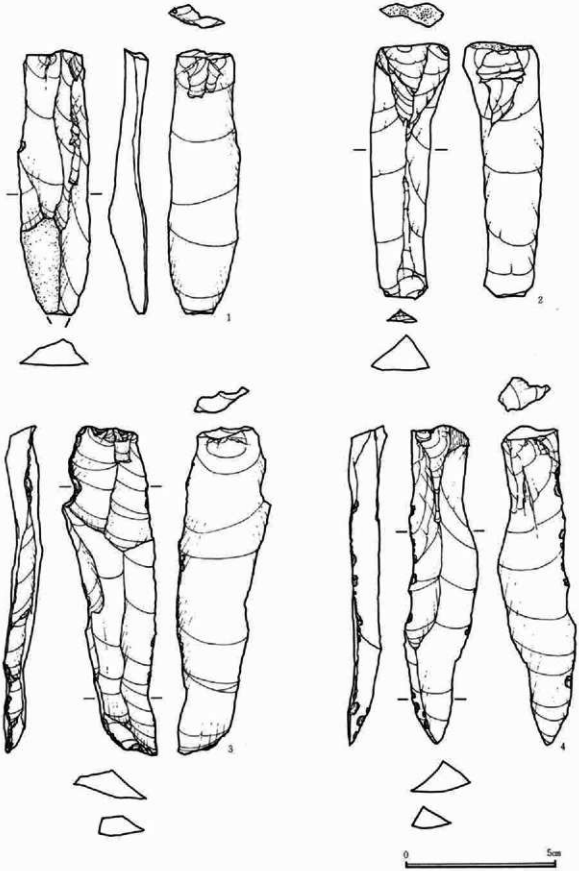
大形縦長剥片　（第15図）

本遺跡で特徴的に出土した石器に、大形縦長剥片の存在がある。いずれも全体的に細身で、石材も頁岩製が目立つ。

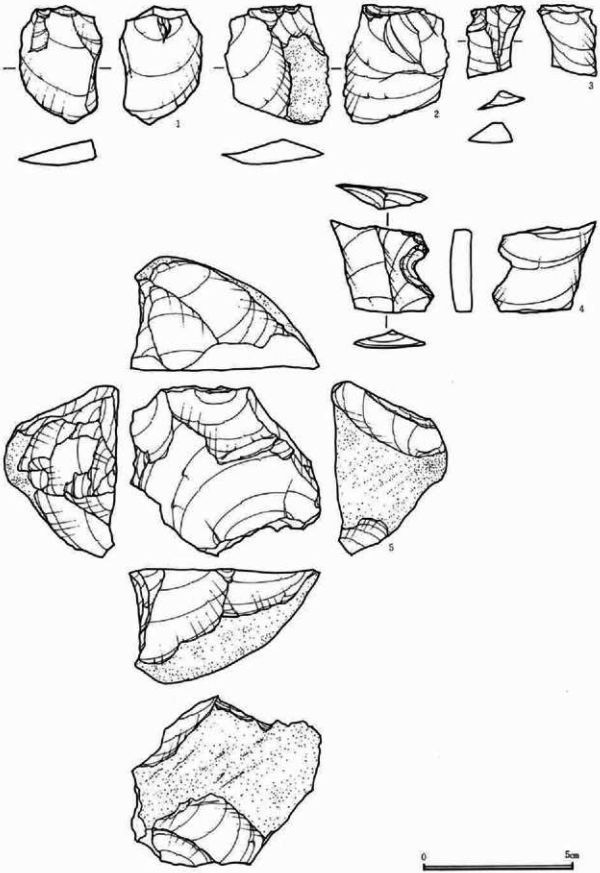
1は、黒色頁岩製の細身の剥片である。若干外湾する両側縁に僅かな歯こぼれは認められるが顕著ではない。表面の左側縁に礫面を残す。先端部欠損。2も黒色頁岩製で細身で直線的な側縁を呈する。裏面の打瘤も削除され平坦である。打面の平坦面は礫面である。黒色頁岩製だが素材自体が軟質で風化が著しいため使用痕などの特定はできない。3は、珪質頁岩製で湾曲する側縁を持ち、断面形も捩れる。両側縁と剥片端部に使用痕が認められ、右側縁の痕



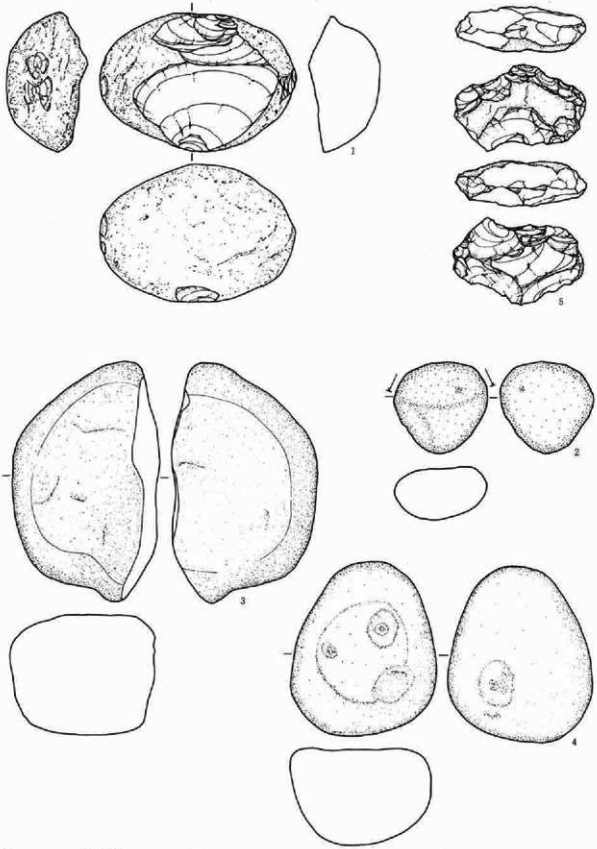
第14図　出土石器（１）



第15図　出土石器（2）



第16図　出土石器（３）



第17図　出土石器(4)

跡が顕著である。表面剥片基部を薄く削除し、僅かな調整を施すが意図は不明である。光沢をもった器面である。４は黒色頁岩製である。細身の素材で、湾曲する側縁に使用痕が認められるが、左側縁に顕著である。剥片端部は尖り先鋭である。

剥片類　（第16図１～４）

１～４は接合され得なかった剥片のうち、剥片形状などが特定できるものを集めた。１・２は黒色安山岩製で小形の縦長剥片である。２は端部を欠損する。３は黒色頁岩製の小形縦長剥片。１号Ｂブロック737.5ＥGr出土。４は縦長剥片の基部、端部を大きく欠損するが側縁に加工が施される。ただ、目的性を持った加工とは捉え難く、剥片の部類とした。

石核　（第16図５、第17図１・５）

ここでは、接合資料を除く石核を集めた。第16図５は拳大状の黒色安山岩製の円礫を素材に打面を他方向に転移して剥片剥離を行う。打面調整や頭部調整は及んではおらず、裏面から側面にかけて礫面を残す。第17図１は頁岩製の楕円状の円礫を、相対する２方向から剥片剥離を行う。礫面を大きく残す。横長剥片を作出したのであろう。ただし、この円礫の端部には敲打痕が認められ敲石としての用途も加味しなければならないだろう。第17図５は、他方向からの剥片剥離を頻繁に行ったものである。

磨石類　（第17図２）

１点のみ出土。１・２号ブロック出土ではなく、736ＥGr出土。小型で礫面全面に光沢を持った磨滅痕が認められるが、図上半に顕著である。溶結凝灰岩製だが、県内産ではなく奥日光周辺所産であろう。

台石　（第17図３・４）

３は２号ブロック出土。溶結凝灰岩製。半欠状態だが、欠損部分も磨滅している。表裏両面とも平坦で光沢状の磨滅痕が認められる。作業面として捉えられよう。４はⅥ区740.5ＥGr出土。２号ブロックからは36ｍの距離を保つ。大型の粗粒安山岩を素材とする。表面に作業面として平坦面を持つが、表裏に僅かな凹みを持つ。

（接合資料）

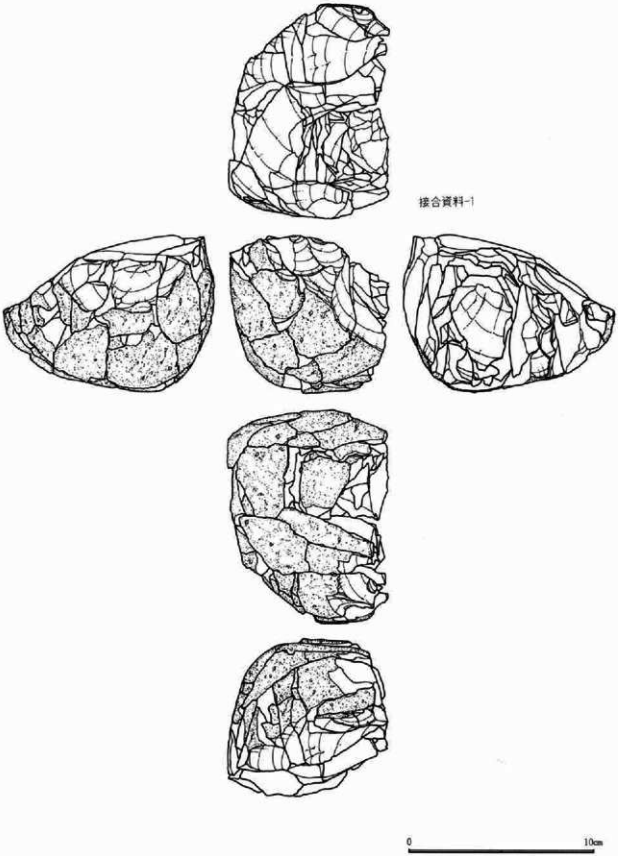
石器の接合作業により、19例の接合資料を得ることができた。ほとんどが黒色安山岩製で、良好な接合状況を見せる。

接合資料－１（第18～22図）

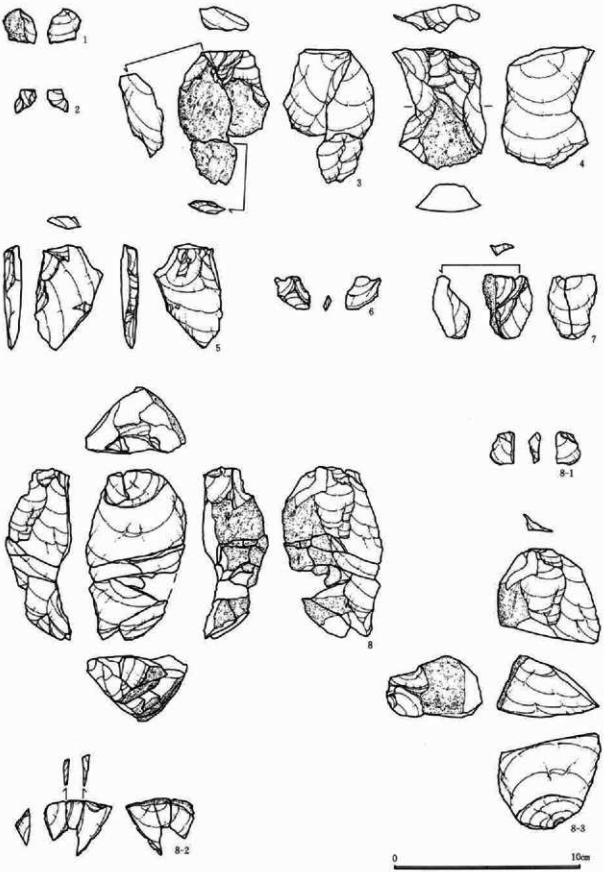
１→２→３→４ ⟶ ５ ／ ６→７→８→９→10→11→12→13→14→15 ⟶ 16 ／ 17→18 ／ 19 ⟶ 20 ⟶ 21 ⟶ 22→23→24→25→26 ／ 27→28 ／ 29→30 ⟶ 31→32→33→34→35

出土位置を確認した68点の剥片・砕片、石核が接合している。接合状態で上面と側面の２ケ所に分割面が見られ、原石の１/４程度の分割礫を石核素材に用いている。剥片剥離の在り方は前半と後半で異なる。剥離の前半では打面と作業面を交互に入れ換え剥離を行うタイプと、作業面を一に打面のみ移動して剥片剥離するタイプが、また、剥離の後半では頻繁な打面転移を行い剥離が進み、最終的には同一の打面から連続して小形の横長剥片を剥離して剥離作業を終えている。打点は稜上を選択する傾向が強く、縦長剥片を意識して剥離している。打面調整や頭部調整は殆ど見られない。

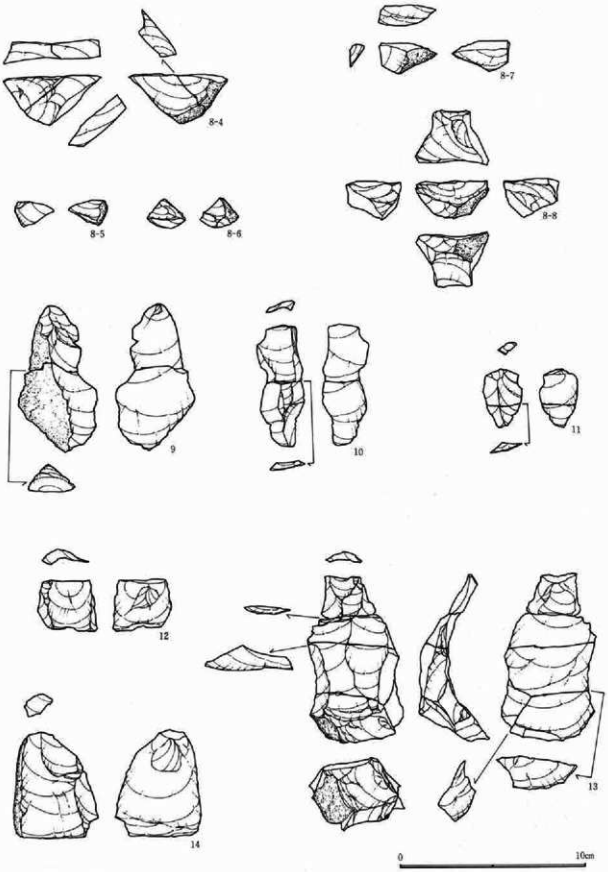
まず、剥離は上面の平坦打面から１～４の剥片や砕片を連続剥離するすることから始まる。剥片剥離は打点を左右に振り、表皮の除去が目的とも見える。３は剥離段階で三分している。５は打面転移の後に剥離され、１～４の剥片作業面を打面に入れ換えている。６～15の剥片剥離は連続するものだが、１～４や５の剥離とは全く反対の部分で展開している。概ね、剥離は打点を左右に振り後退していく。６～15の剥離の中で生じた厚手の剥片（８）は二分した後に石核へ転用され、両端から小形の横長剥片を剥離している。また、14・15は剥片端部に剥離段階でヒンジが生じている。17・18の剥離は不明だが、17は16の剥離に伴い不規則に弾け飛んでいる可能性が強い。



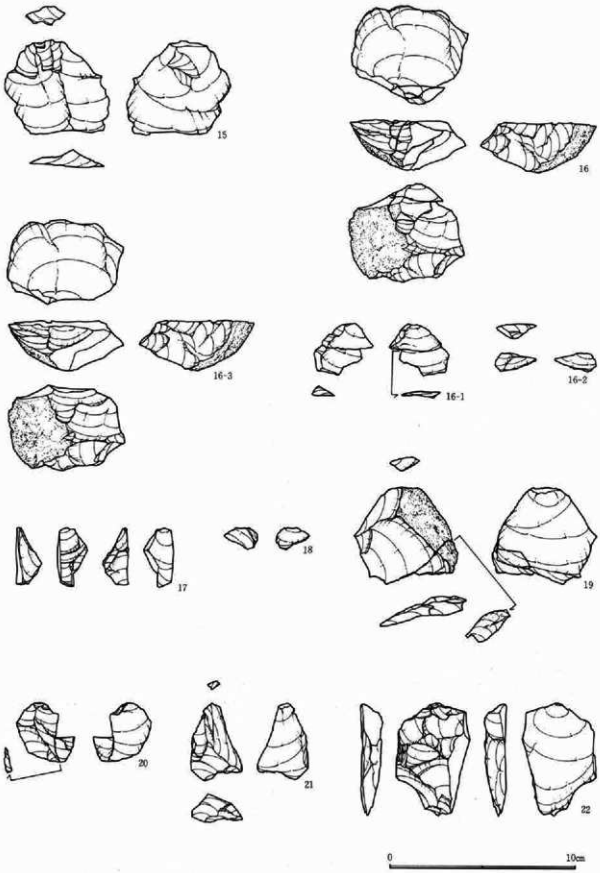
第18図　接合資料－１（１）



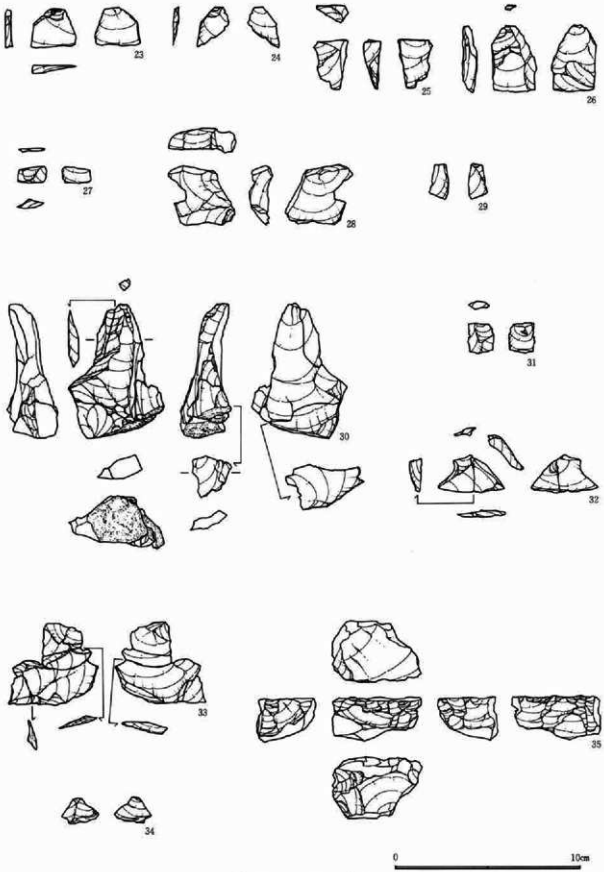
第19図　接合資料－1（2）



第20図　接合資料－1（3）



第21図　接合資料－１（４）



第22図　接合資料－1（5）

19の剥片は右側面の分割面から剥離され、再び剥離は初期（1～4の剥離）の剥離部分に戻る。以後の剥離は石核自体が小さくなるため、頻繁に打面を転移して、剥離が進む。20は19と作業面を共有しており、打面のみ移動して剥片を剥離する例である。21は20の作業面を打面に入れ換え剥離するタイプで、22は作業面を共有するタイプであり、それぞれ90°の打面転移を伴う。22～26の剥離は、同一打面から連続剥離され、打点を左右に振り剥離が進む。以上の剥離で石核は柱状に近い形状を呈する。27・28は柱状を呈する石核の短軸で、29・30は石核の長軸で剥離され、31～34の剥離は再び石核の短軸で剥離が展開する。なお、30は石核に転用され、この部分で小形の横長剥片の剥離を試みている。

接合資料－3（第23・24図）

1→2→3→4→5 → 6→7→8 ／
9 → ○ → 10→11

出土位置を確認した19点の剥片・砕片が接合している。剥離は表皮に近い部分で展開しており、剥離初期の状態を良く示している。接合資料－1と同様に、上面と側面の2ケ所には広い平坦面が見られ、原石の1/4程度の分割礫を石核素材に用い、剥離が展開している。剥片剥離は90°の打面転移を行い展開しており、剥離は同一打面から縦長剥片を連続剥離する傾向を示している。打面調整や頭部調整は見られず、全般に縦長の剥片を志向する傾向が指摘されよう。接合資料には大形剥片を石核に転じる例が存在している。

まず、剥離は上面の平坦打面より1～5の剥片を連続剥離することから始まる。剥離作業は打点を左右に振り後退する。打点は石核の中心に向かうよう後退しており、確実に目的剥片を意識している。やや大形の剥片（4）は、打面部分で小形の横長剥片が交互剥離され、石核に転用している。以上の剥離の後に、90°の打面転移を行い、1～4の作業面を打面に転じ、5～8の剥片を剥離している。9より以後の剥離は、これより以前の剥離とは全く反対の部分で展開する。9と10・11の剥片形状から考えて、著しい石核高の差が想定され、9の剥離以後には90°の打面転移を伴う剥片剥離作業が想定されよう。この間の剥離が別の地点で展開したのか、遺跡の外に資料を持ち出しているのか不明だが、出土資料の中には接合資料と同一母岩は見られないこと、また、量的にもこの間を埋める資料は見られないことの2点は指摘できよう。

接合資料－2（第25図）

石核の裏面に5点の資料が接合している。1～3の資料は打点が明瞭ではない。通常の剥離に比べ、打点も鋭角で、特に3の剥片には同心円状のリングが見られ、意識的な剥離とは思われない。自然現象に基づく剥落と考えている。1・2は打撃の痕跡が遺存するとも思える状態を呈する一方、剥離面が不明瞭であり、そのため現状では3と同様に剥落と考えている。剥片剥離作業は右側面の上端、石核正面、右側面の下端の順で進み、先端の尖る縦長剥片を剥離している。石核形状、及び、想定可能な作出剥片の形状からみて、「磯山技法」に類似する剥離手法を採る、と言える。

接合資料—10（第26図）

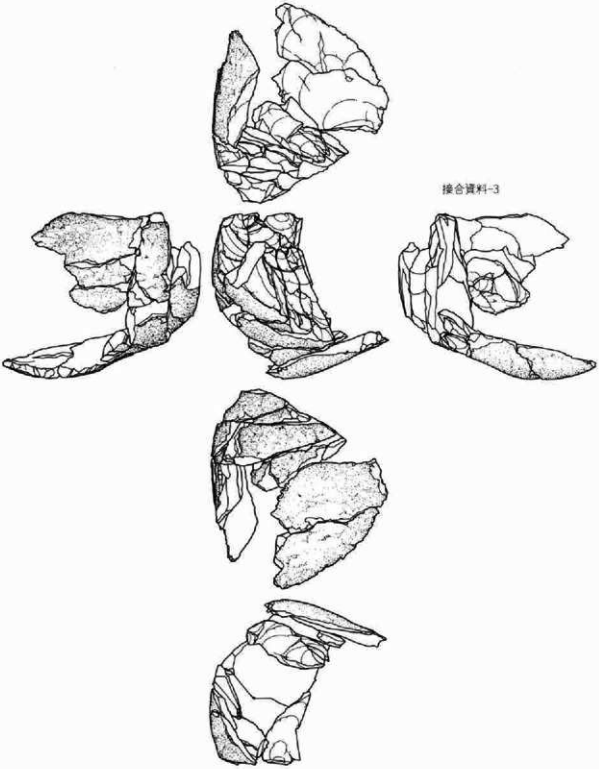
2点の資料が接合している。小形の縦長剥片と不定形剥片の接合例である。両者とも一定方向の打撃による作出ではあるが、目的性などは不明である。

接合資料—12（第26図）

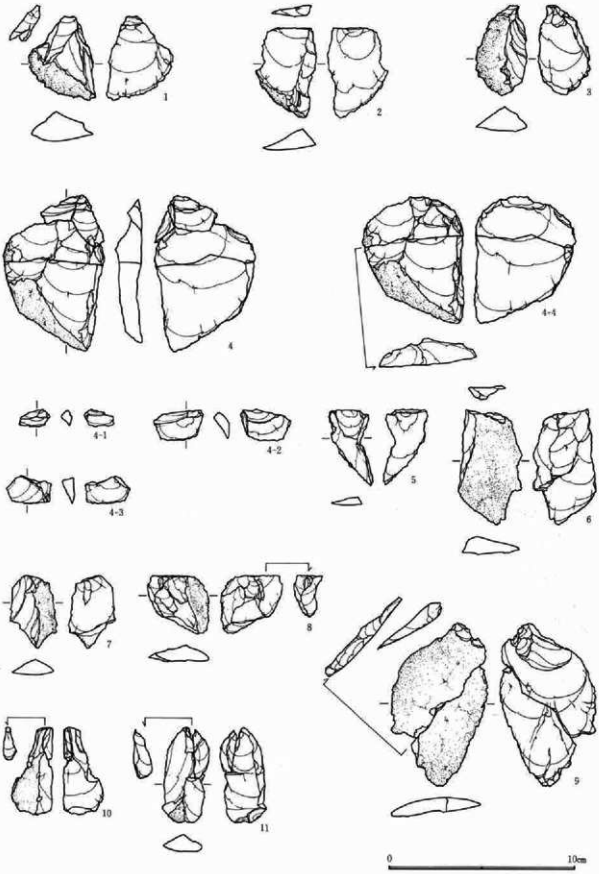
5点の砕片の接合例である。頭部に微細な剥離が認められる。

接合資料—19（第26図）

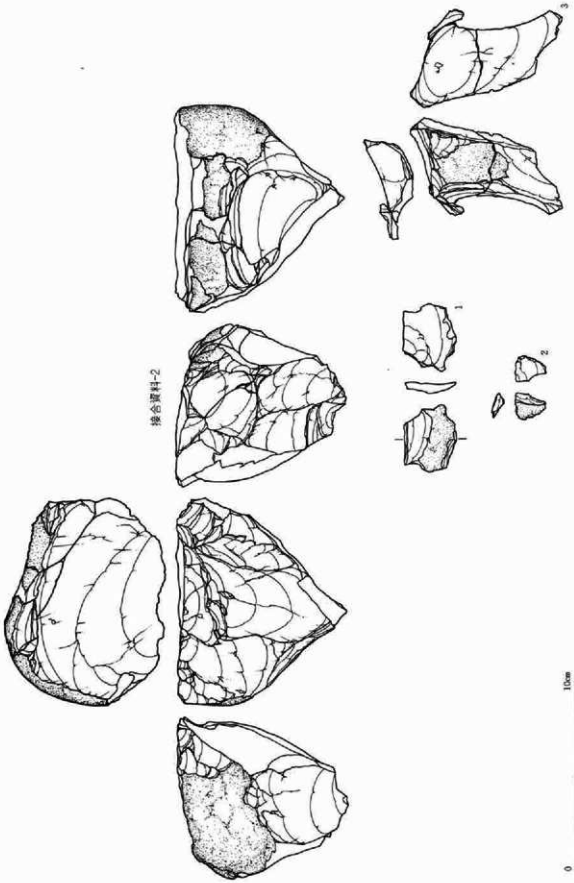
2点の資料が接合する。薄手の小縦長剥片と砕片の接合例である。



第23図　接合資料－３（１）



第24図　接合資料－３（２）



第25図　接合資料－2

接合資料—13（第26図）

２点の資料が接合する。不定形剥片と砕片の接合例である。資料12と同一母岩の可能性もある。

接合資料—11（第26図）

２点の資料が接合する。礫面を残す縦長剥片の打瘤を除去した後の剥離工程を示すものであろう。

接合資料—16（第26図）

２点の砕片の接合例である。摩滅が著しい。

接合資料—15（第26図）

２点の資料が接合する。小形の横長剥片の接合例である。表面に礫面を残し、裏面からの打撃による分割である。

接合資料—14（第26図）

横長剥片と砕片が接合する。剥片端部には微細な剥離が及ぶが、顕著ではない。表面には大きく礫面を残す。

接合資料—４（第26図）

５点の資料が接合する。大型の縦長剥片の中位で折れた後、砕片３ヶが折れている。

接合資料—18（第26図）

２点の資料が接合している。大型で厚手の横長剥片の端部を連続的に切断している。

接合資料—６（第26図）

２点の資料が接合する。縦長剥片の中位で折れる。また、剥片端部も切断されており、数回に渡る折れが存在したことが窺われよう。

接合資料—５（第27図）

４点の資料が接合するほか、同一母岩に分類可能な剥片が２点出土している。大形剥片の裏面部分に作業面を持ち、打点を左右に振り剥離を行う。作出剥片の形状は小形で縦長剥片を指向するようだが、接合状態よりみた想定剥片は横長剥片に近い形状を呈す。

接合資料—17（第27図）

５点の資料が接合する。横長剥片を中位に分割し、加工を施した際の砕片が接合する。加工は特に４の剥片に著しく、台形状に成型している。

接合資料—７（第27図）

５点の資料が接合する。大型の縦長剥片頭部に小剥片と砕片が接合する。また、縦長剥片下位で先端部が折れる。剥片頭部の接合状況は、接合資料—５と類似し、大形剥片を石核素材として使用した可能性も考えられよう。黒色頁岩製。

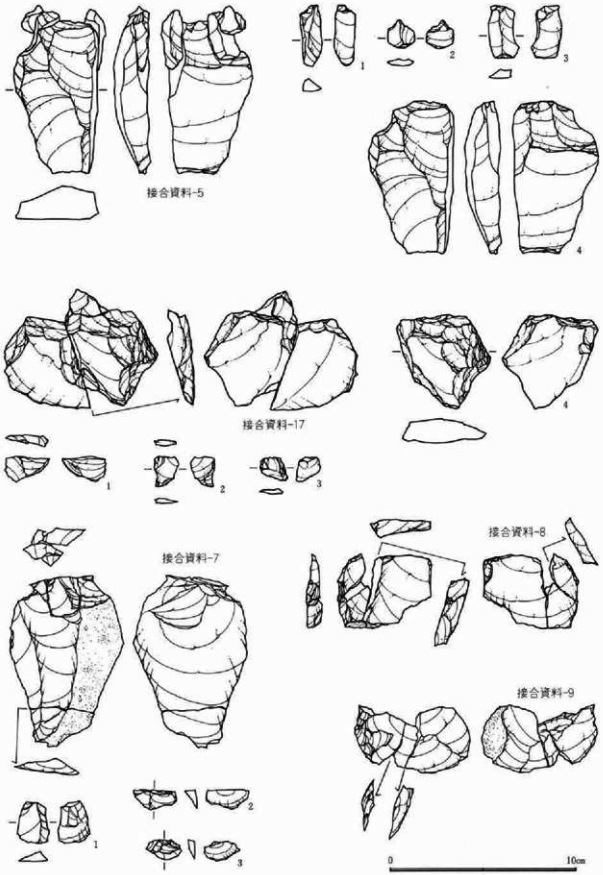
接合資料—８（第27図）

３点の資料が接合している。接合状態よりみて、本来は幅広の剥片であることがわかる。中央の折れ面、及び、右側縁には微細な加工が見られ、剥片の打点部が接合部に一致することからみて、剥離段階に二分した各々の資料で加工が加わるもの、と判断している。

接合資料—９（第27図）

３点の資料が接合する。加工痕を持つ横長剥片を不規則に３分する。

第26図　接合資料－10・12他



第27図　接合資料－5・17他

第4節　縄文時代

本遺跡における縄文時代に比定される遺構は検出されなかった。遺物が集中する地点も無く、良好な一括遺物を出土する包含層も認められなかった。遺物は、遺跡全体から希薄な散布といってよい程の出土状況であった。出土層位は主にⅢ層であり、遺構確認の際に出土している。ただし、このⅢ層の遺存が良好なⅤ区・Ⅵ区に限り、遺物包含層として、積極的に位置付け、出土遺物の記録化は施している。本来ならば、この記録化に基づく分布図を提示するべきなのだが、出土遺物の時期的な傾向も、また数量的な偏りなども認められなかった。よって、出土遺物の図示にとどまり本遺跡の縄文時代の様相としたい。

（土　器）

1～4は撚糸文系の土器群である。Ⅵ区緩傾斜面より出土したが、細片であり全容は把握できない。胎土に細砂粒を含み、薄手の器肉で焼成は良好である。2～4は、内面の研磨から同一個体の可能性が高い。4は口縁部。この時期に伴う石器としては、スタンプ形石器や三角錐形石器が挙げられるが、本遺跡ではⅥ区を中心に6点の出土を見る。まとまった出土ではなくユニット・ブロックとしての把握はできなかったが、当該期の土器と石器組成の一側面として捉えておきたい。

5～14は条痕文系土器群。Ⅴ区東半で出土した。表裏ともに条痕が施され表面は縦位のものが多い。全体に砂質である。以上は縄文時代早期後半に比定されよう。

15・16は半截竹管による平行沈線で、木葉状・幾何学状のモティーフを施す。諸磯a式と捉えた。胎土に細砂を含み、焼成も堅緻である。

17～23は地文に縄文を施し、横位平行沈線が施される。17は結節縄文。18・19は同一個体か。内面に煤が付着する。20は平行沈線内に刻みを連続し、横方向の強い撫でにより器面に凹部を持たせる。21・22は同一個体。平行沈線を基調として、渦巻状のモティーフなどに変化する。諸磯b式。

24～30は縄文施文のものを集めた。24は折り返し状の口縁部でＬＲ同士の結束縄文である。24・25は同一個体。胎土に小礫を含む。26は横位ＲＬ、27はＬＲ縄文を横位、斜位に施す。28は底部破片。ＲＬ縄文を疎らに施す。底面の器厚は薄く、僅かに上げ底気味である。29は表面が荒れ、判然としないが恐らく横位ＲＬであろう。30も横位ＲＬ。緩やかに膨らむ胴部器形を呈する。諸磯b式と捉えた。

31～33は小型の半截竹管による平行沈線と刺突文の構成。刺突文は、押し引きによる結節沈線状の効果を見せるが、施文角度は著しく深い。諸磯b式の範疇で捉えた。

34は薄手の器厚で内湾する胴部上半破片。浅い沈線で渦巻文を描く。粗砂粒を含む。諸磯b式。

35～39は半截竹管による平行沈線の密接施文例。35・36・39は同一個体。条線化した集合沈線で三角形や円弧状の空白部を描出するものであろう。37・38はやや砂質の胎土で、38の平行沈線は、規則正しく直交する。諸磯b式後半段階か。

40～51は地文に集合沈線を施し、ボタン状貼付文を付す一群を集めた。諸磯c式であろう。この段階の土器は周辺地域で濃密ではないとしても、出土は各遺跡で認められている。高山遺跡の深鉢などその好例であろう。赤城山麓域の該期集落のようにまとまった出土は認められないものの、確実に居住がなされ、東関東地域や南東北地域との交流や交換に重要な役割を果たした地域と考えられよう。このことは後述する、東関東系の興津式の出土も関連性が認められている。

40～42は口縁部。各種の突起が付され、地文の平行沈線も矢羽状のものや横位平行するものなど多様性に富む。44は平縁で口唇部内面に、斜位の沈線が施され、外面は横位平行沈線である。

43・45～49は胴部破片。貼付文は円形のものと小楕円形の2種類が当てられるが、その配置などに有る程度の傾向や規則性が認められるといわれる。しかし、本遺跡からは破片の出土であり全容は判然としない。

また、この時期の深鉢は50～52に見られるように底部は内傾し、胴部下端まで集合沈線を施す特徴を持つ。集合沈線は殆どが縦位あるいは斜位の平行施文が基本であり、いわば諸磯ｂ式で見られた横位平行沈線から諸磯ｃ式期の縦方向への変化であり、これは諸磯ｃ式の主文様構成と位置付けて良いだろう。この縦位・斜位施文によって生じた空白部は無施文であったり、大きな縦位山形文が充填される。この山形文の変形として53のような縦位連続菱形文が施されるのであろう。

54～65は貝殻腹縁文を文様要素とする一群である。殆どが胎土の砂の混入が多くザラついた器面である。東関東系の興津式と捉えた。54・55は同一個体。平縁を呈し、口唇部に大きめの刻みを入れる。口唇部直下から貝殻腹縁による波状文が横位に施されるが、施文距離は短く、施文毎に強く止める手法を持つため、器面が若干盛り上がる箇所もある。57・59も同様な手法の胴部破片。56は外反する口縁部に爪形状の大きな刻みを施すが、深く雑な切り込みである。以下は貝殻腹縁を連続押圧する。58・60～62は貝殻腹縁を結節沈線状に押し引く。胎土も砂質である。63・64は同一個体。貝殻腹縁を交互回転施文する胴部下半。波状貝殻腹縁文である。空白部が縦位の菱形状に残される特徴である。65も同様な手法で、腹縁が平滑な貝殻を使用している。

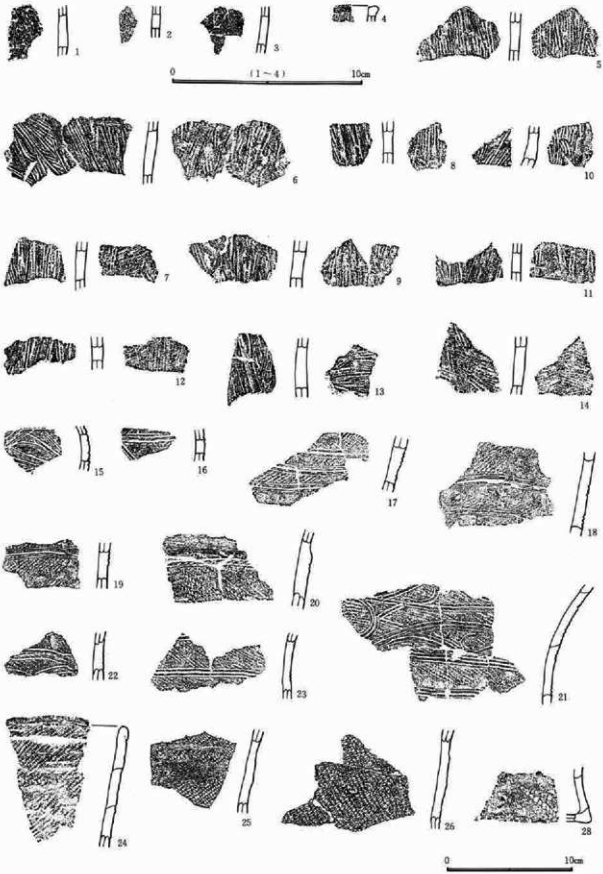
東関東系の前期土器群である浮島式・興津式は異系統土器群として、群馬県で主体的に出土する諸磯式との共存状態が県内でも徐々にではあるが報告されている。本遺跡の場合、両者には明らかに胎土に差が認められ、施文具の採用も異なっている。おそらく描出される文様効果も諸磯式とは別方向を意識していると思われる。この方向が、どのような展開をみせるのかは今後の出土資料の再吟味によってなされると思われるが、前述している本遺跡の資料がその分布範囲において、重要な位置を占めることは確信している。

66～74は中期に比定される。出土量は前期に比して少ない。66・69は同一個体。平縁で折り返し状の口縁部を特徴とし、肥厚部分が外湾する。横位ＲＬを口唇部にまで施す。下小野式などの中期初頭に位置付けられるが類例は少ない。67は２条の凹線による隆線と渦巻状小突起の描出。加曽利Ｅ２式。68・70～73は加曽利Ｅ３式。70は頸部破片。71は波状口縁部で口縁下に微隆線が付される。72は橋状把手を持つ。把手両下端から伸びた隆線が体部で懸垂文に派生するのだろう。縦位ＬＲを施すが、把手側面にまで施文が及ぶ。73は胴部下半。２条の沈線文による懸垂文構成である。

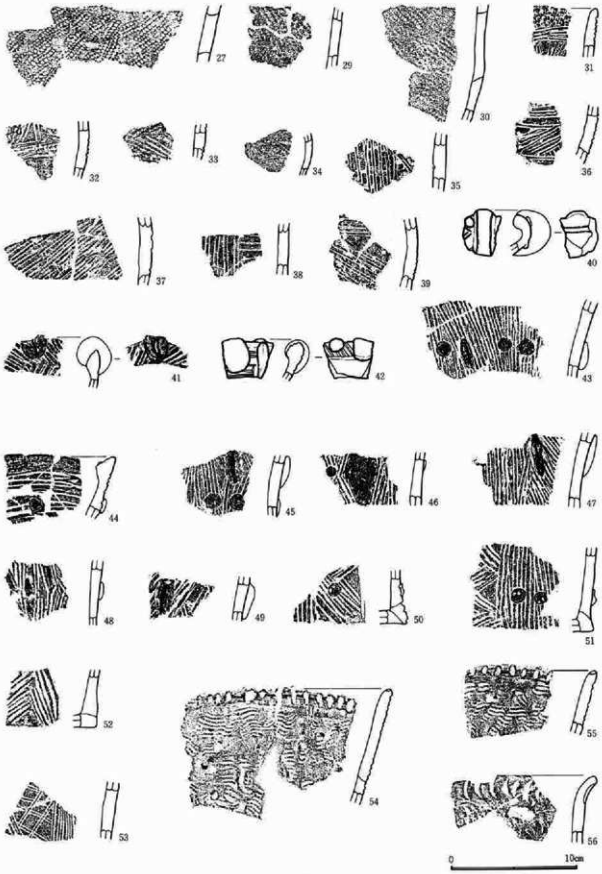
74は内稜を持ち、頸部に楕円状の区画が設けられる浅鉢。

後期の土器片も少ない。75～78は同一個体。横位沈線文下を羽状沈線が施される。内外面とも丁寧に研磨される。加曽利Ｂ２式。79の底部も胎土・整形技法から同一個体の可能性が強い。底面に網代痕が残る。80は口唇部に紐線文を施し、地文に撚り戻りの著しいＬＲ縄文を施す。加曽利Ｂ１式段階の粗製土器か。81・82は同一個体。口唇部に８字状の小突起を付し、以下帯縄文構成で、細縄文ＬＲが充填施文される。加曽利Ｂ２式である。

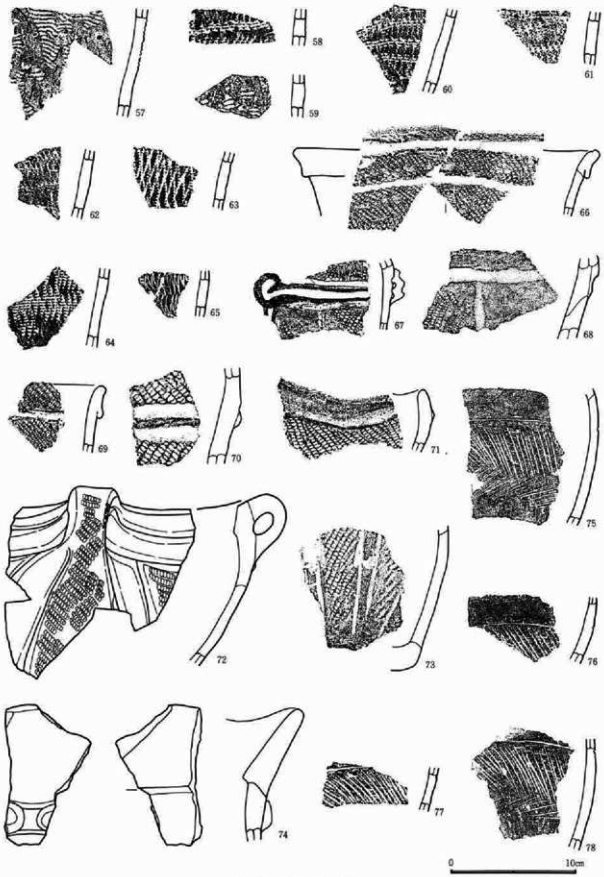
時期が前後するが、83～94はⅤ区・Ⅵ区から出土したもので、１～２個体の破片である。平縁で器厚は厚く、その文様要素は口唇部に刻みを施し、直下にＲＬ縄文の結束部を施す。83はその下位に横位沈線文が施されるが、胴部には深い沈線で各種の意匠文が描かれる。また86は口縁部が外反する83とは違う器形を呈し、口縁部下の横位沈線が施されない。このことから複数個体の存在を考えているが、胎土・色調、施文具・施文方法など非常に類似しており、あるいは同一個体の可能性もある。県内に類例が無く、時期的な位置付けが非常に難しい土器群だが、本報告では中期前半期の東北系統の土器群に類縁性を求めたい。また、第30図66との関連や同時期の土器文様のバリエーションなど未だ不明な部分が多く、詳細な記述はできないが、例えば東関東地域で出土する諏訪タイプとの比較も重要であろう。資料の蓄積を待ちたい。



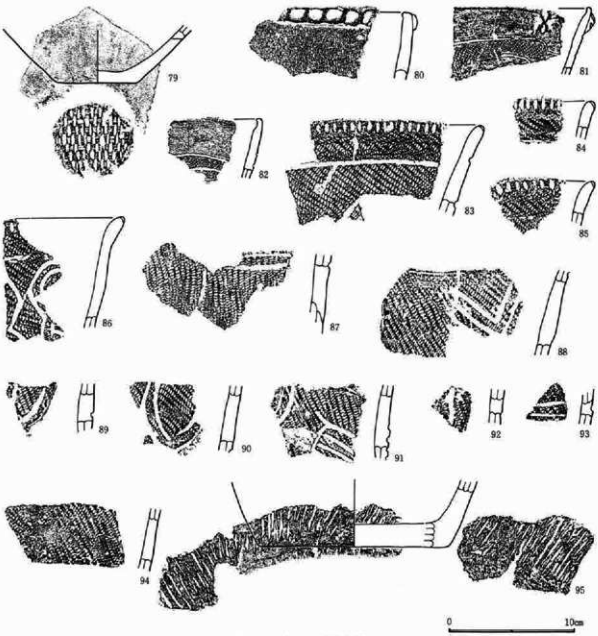
第28図　グリッド出土土器



第29図　グリッド出土土器



第30図　グリッド出土土器



第31図　グリッド出土土器

95は、Ⅰ区出土のもので、試掘時に検出したものである。太めの撚糸文ℓを胴部下端にまで施す底部である。加曽利Ｅ１式。

以上のように、本遺跡の縄文時代の土器を説明したが、出土量は少ないながらも前期後半から中期前半期に特徴的な異系統土器が存在することが判明した。また、出土土器も早期から後期に至り、一時期に集中するような傾向ではない。このことは、本遺跡のみならず当地域における、縄文時代の集落が決して希薄な存在ではなく、各台地に積極的に居住されていることを物語る。

本遺跡では、たまたま縄文時代の遺構が検出されなかったが、出土土器の様相から隣接地域に集落跡が存在することは確実である。将来的に調査の手が及ぶこともあろうが、その際に本遺跡の出土土器群が調査の参考になれば幸いである。

（石　器）

縄文時代の石器も土器と同様に、包含層出土のものが多い。ただし、時期を限定する事はできず、器種分類による説明に依存せざるを得ない。

石鏃（第32図１～14）

各種形態に富み、出土範囲も遺跡全体に及ぶ。１は先端部が尖らない凹基鏃。右側縁を裏面からの調整で湾曲する特徴を持つ。チャート製。２は左片脚端部を欠損する。薄手で周縁に入念な調整を施しているが、剥片中央部には達していない。黒曜石製。３は長身で、雑な調整加工を施す。薄手だが中央部にわずかな厚みを残す。黒色安山岩製。４は小型の石鏃で、おそらく素材の打瘤部分を利用したものと思われる。黒曜石製。５も小型の石鏃だが、薄手の作りである。調整は側縁に顕著であり、また、凹部も著しく内湾する。黒色頁岩製。６は舌部を僅かに欠損する凸基鏃。長身で直線的な側縁である。調整は中央部に及ばないものの丁寧である。７は小型で、短い舌部が特徴的である。舌部調整も細かく入念である。８は側縁の垂直的な加工で鋸歯状の刃部を作出する。黒色頁岩製。９も凸基鏃だが、木葉状の長身が特徴的であり、先端部も細く尖鋭的である。10は薄手の縦長剥片を素材とし、片面からの調整を施す、粗製の石鏃である。黒曜石製。11は脚部の調整が及ばない未製品か。先端部は丁寧な調整が施される。チャート製。12は裏面を欠損しているが、周縁を丁寧に調整する小型の凸基鏃と捉えた。13は未製品。基部及び側縁の調整が認められるものの、石鏃を果たして目的とした調整とは断定し難い。ただし、本遺跡の場合小型の石器が石鏃以外見当たらず、石鏃に器種属性を求めた。14も未製品であろう。先端部は丸みを帯び、脚部の調整も十分とは言えず、表面の背稜も削除していない。チャート製。

打製石斧（第32図15～17、第33図１・２）

13点の出土を見るが、殆どが頭部・刃部のみの残存であり、全容を把握できるもの５点を図示した。

15は薄手の横長剥片を素材とした撥形で、縁辺を僅かに加工する。刃部にも加工が及ぶが片面からの簡単なものである。ホルンフェルス製。16は、側縁が若干内湾する短冊形で横長剥片を素材とする。断面形状は長軸方向に湾曲し、刃部を薄く作出する。刃部には縦位方向に摩滅状の使用痕が認められる。頭部裏面欠損。17は、厚手の横長剥片を素材とする短冊形。頭部を欠損するが、刃部の縦位方向の使用痕が著しい。第33図１は大型の分銅型打製石斧。厚手の横長剥片を素材とし、側縁に礫面を残す。両側縁中位の抉りは大きくないが、集中しており、湾曲意識は強かったようだ。２も大型で厚手の横長剥片を素材とした撥形の打製石斧。側縁の加工が顕著であり、反面頭部は無調整である。刃部は両面からの大きな剥離により作られている。灰色安山岩製。

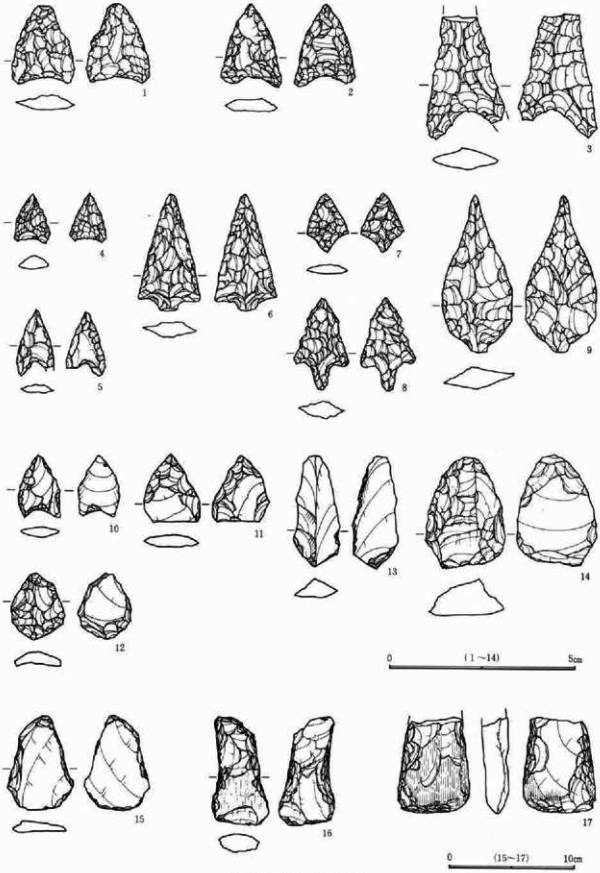
スクレイパー（第33図３～第34図３）

不定形石器ながらその調整に有る程度の規則性や目的性を持つものを一括してスクレイパーとした。15点の出土が見られ、10点を図示した。第33図３は側縁が欠損しているため判然としない部分が多く、打製石斧の欠損品の可能性もある。器厚も厚く、剥片端部も刃部を意識した調整ではない。４・５は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、４は両側縁、５は右側縁に調整が及ぶ。６はスクレイパーとしては調整が少ないが、剥片端部を直刃状に持たせ、僅かながらの調整で鋸歯状の刃部形態を作る。７も剥片端部調整が集中し、鋸歯状の直刃を呈する。８は台形状の横長剥片を素材とし側縁と剥片端部に調整が施される。９は側縁に丁寧な調整を施し、剥片端部を尖り出す。第34図１は側縁の一部を除き、入念な調整を施す。調整は片面に集中し片刃状の刃部である。２は砂岩製の横長剥片を素材とし、鋸歯状の刃部を呈す。３は横長剥片を素材とし剥片端部と左側縁に調整が及ぶ。剥片端部の一部に摩滅状の使用痕が認められる。

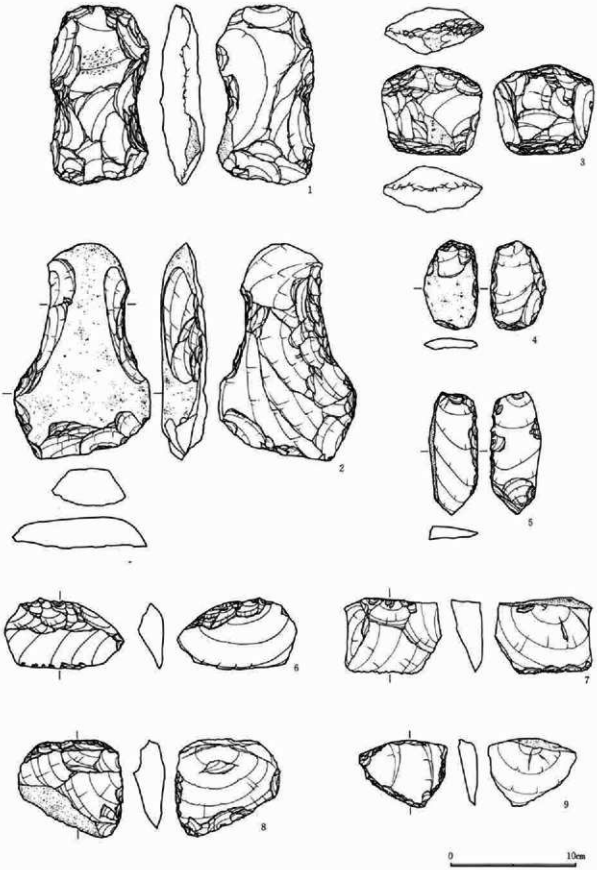
加工痕を持つ剥片石器（第34図４～第35図２）

スクレイパーと同様に、不定形石器で調整がスクレイパーに比して、素材の一部のみに及ぶ石器を一括した。

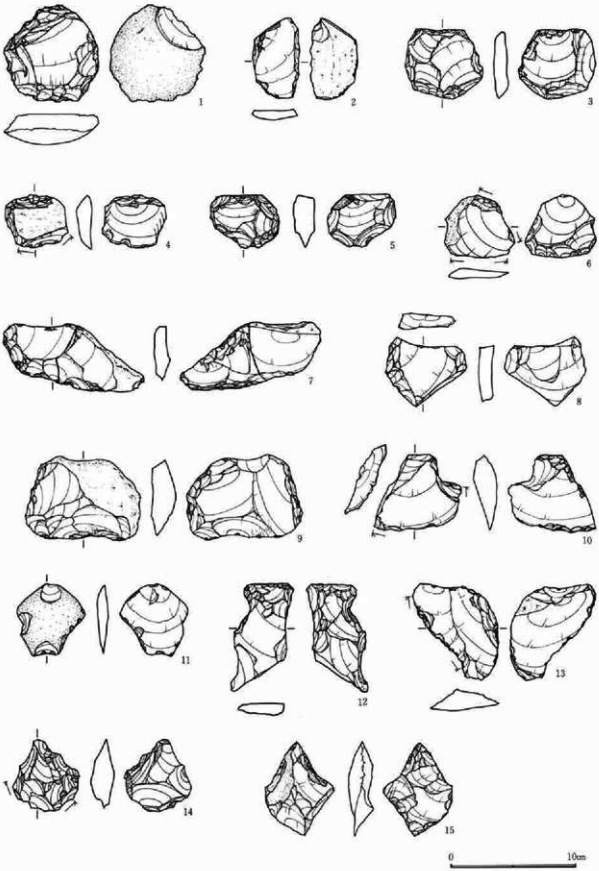
第34図４は小型の横長剥片を素材とし、剥片端



第32図　グリッド出土石器



第33図　グリッド出土石器



第34図　グリッド出土石器

部・側縁に僅かながらの加工が施され、端部には微細な歯こぼれが認められる。5の加工も剝片端部・側縁に及ぶが、刃部は端部の一部に限られる。6は薄手の縦長剝片を素材とし、剝片端部・右側縁に調整を集中し、使用痕も認められる。7、厚手の横長剝片を素材とし、左側縁から剝片端部にかけて加工を施す。8、剝片基部および端部を欠損するが、側縁に加工が認められる。9は剝片端部・側縁に加工が施されるが、雑な調整であり規則性はない。端部を凹刃状に処理し、摩滅状の使用痕も認められる。10は大型の横長剝片を素材とし、左側縁を欠損する。加工は剝片端部の一部に認められ、また、欠損部分にも調整が及ぶ。端部は刃部をなし歯こぼれが認められる。11は薄手の縦長剝片を素材とし、側縁に僅かな加工を施す。12、板状の横長剝片を素材とし、縁辺に加工を施す。特に基部、左側縁の調整は入念であり、側縁の調整はノッチ状の凹部を作出する。あるいは未製品か。13、横長剝片を素材とし、側縁に加工が施される。剝片端部はめくり上がり、厚めで刃部状をなしていない。14、厚めの横長剝片を素材とし、周辺を雑な加工で調整するが、明瞭な刃部を作出していない。剝片端部にわずかな歯こぼれが認められる。15は横長剝片を素材とし基部を丁寧な調整で尖らせる。剝片端部は刃部をなすが右側縁にかけて未調整であり、未製品の可能性が強い。35図1はチャート製で小型の縦長剝片を素材とし右側縁と剝片端部に加工を施す。端部を刃部とし、僅かな歯こぼれが認められる。2は小型の縦長剝片を素材とし、剝片端部に加工が施される。

使用痕を持つ剝片石器（第35図3～16）

素材剝片の側縁や端部に歯こぼれや線状痕が認められる不定形石器を一括した。

3は縦長剝片が素材。薄手で表面の礫面を残す。基部を除く縁辺に歯こぼれが認められる。4も縦長剝片。左側縁の湾曲を刃部として使用し、歯こぼれが生じている。5、縦長剝片を素材とし、両側縁を刃部とし摩滅痕が認められる。6、小型の縦長剝片を素材とし、剝片端部を尖らせる。使用痕は両側縁に歯こぼれがある。7も小型の剝片端部を素材とし、直線的な右側縁と剝片端部を刃部とし歯こぼれが認められる。8、黒色安山岩製の縦長剝片を素材とし、両側縁を刃部とする。歯こぼれは右側縁の方が顕著である。9、縦長剝片を素材とし、両側縁を刃部とする。10は大形の縦長剝片が素材で、剝片端部を欠損する。使用痕は両側縁に認められるが、左側縁の歯こぼれが顕著である。11は横長剝片を素材とし、剝片端部を刃部とする。刃部に剝離が認められるが歯こぼれであろう。12・13は三角形状の横長剝片を素材としている。12の側縁と剝片端部には加工痕が認められるものの、積極的なものではない。13の側縁も加工を施して刃部状としている。14は厚手の素材で剝片端部を刃部としている。15、左側縁を除き歯こぼれが認められる。16、横長剝片端部欠損後、欠損部位を含めて歯こぼれが認められる。

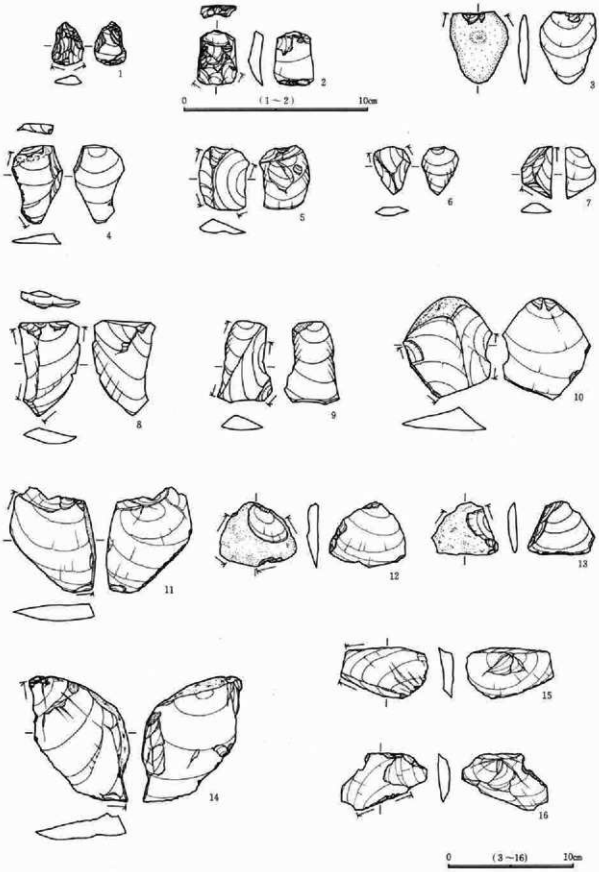
石核（第36図1～5）

5点を図示した。規則的な剝片剝離工程を示す資料はなく、黒色頁岩製で多方向からの打撃が加わるものが殆どである。

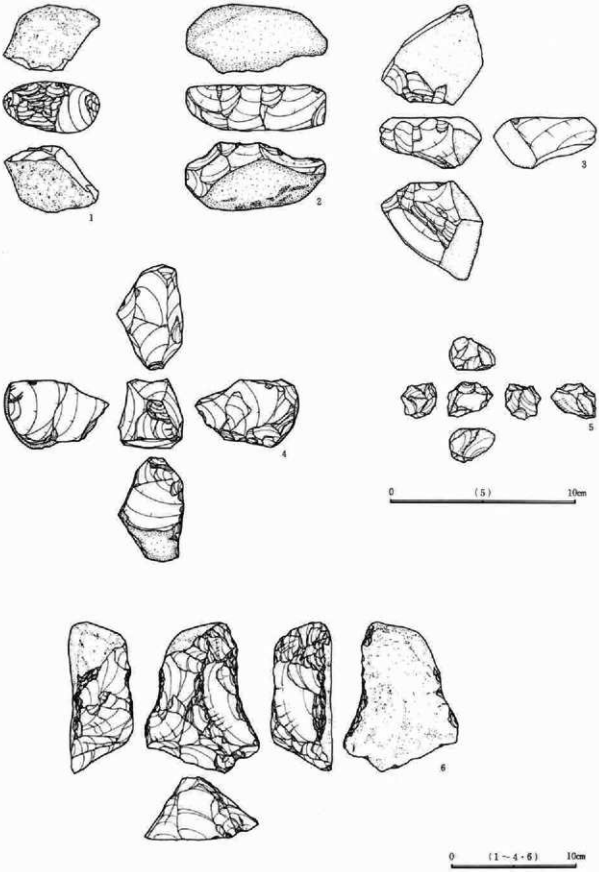
1は拳大の円礫を素材にし、縦長剝片を作出し、打面調整のためか、多方向から小型の剝片を剝ぎ取っている。2は偏平な円礫に垂直方向に打撃を加え、小型の剝片を作出する。3は節理面を2面持つ。多方向からの剝離であり、大型の横長剝片を作出している。4は縦長剝片を作出しながらも別方向から横長剝片を得ている。5は黒曜石製。多方向からの剝離である。

三角錐形石器（第36図6～第37図2）

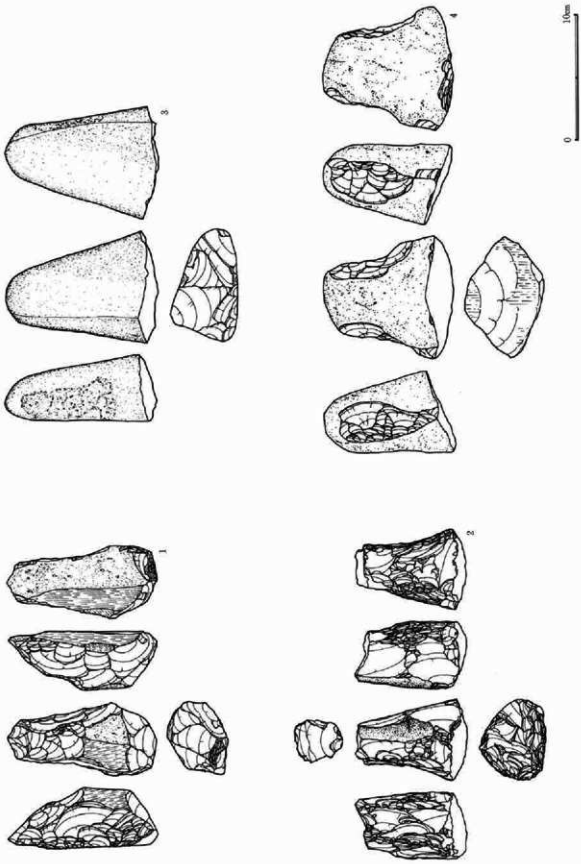
3点出土している。すべて黒色頁岩製である。第36図6は片面に大きく礫面を残し、側縁が広がる形態を呈す。側縁からの強い加工で形を整え、頭部の調整も意識している。素材端部も数回の強い加工で断ち割る。側縁調整は右側縁が顕著である。第37図1は乳棒状の素材で、礫面及び節理面を大きく残す。側縁からの加工が大きく、また左側縁の調整は入念である。素材端部及び頭部の加工は数回にとどまっている。2も乳棒状の素材である。頭部が欠損する。



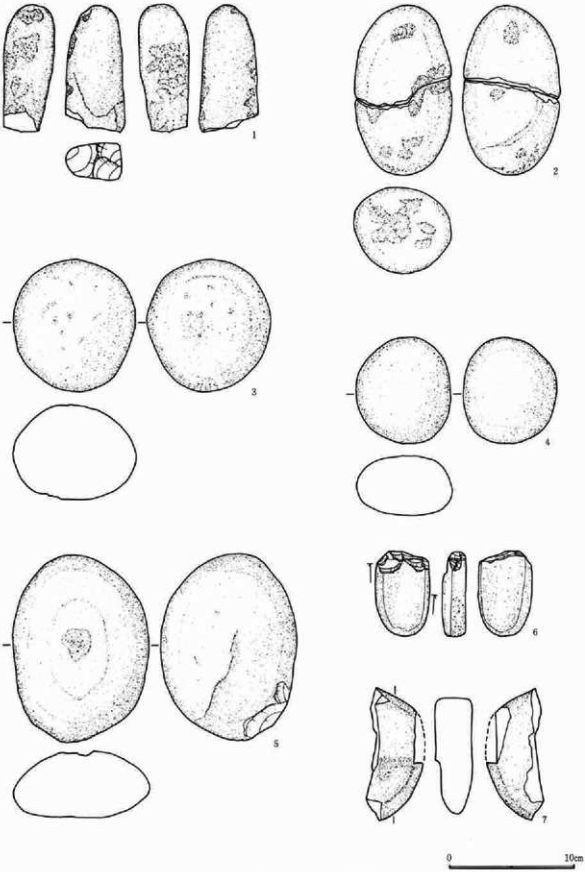
第35図　グリッド出土石器



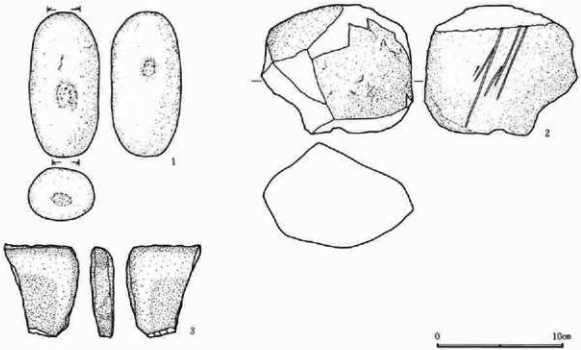
第36図　グリッド出土石器



第37図　グリッド出土石器



第38図　グリッド出土石器



第39図　グリッド出土石器

礫面は表面に残するものの、その割合は少ない。ただし、裏面の平坦面に対する意識は働いたようで、入念な調整で面を築く。また、素材端部も細かな調整により一面を作出している。

スタンプ形石器（第37図3～第38図1）

3点の出土を見る。石材は黒色頁岩に依存せず、多種にわたる。3は変質安山岩。楕円状の素材で、幅広になる中位を断ち割り、縁辺からの調整で平坦面を築く。また側縁には敲打痕が認められる。4は石英閃緑岩製。楕円状の大型の素材である。両側縁には入念な調整が及び握り部のように器形を整える。素材の幅広部分を断ち割り平坦面を築き、摩滅痕が認められる。第38図1は、比較的小型の乳棒状のホルンフェルスを素材とし、幅狭部分を断ち割り対極方向からの調整を施すが、平坦ではなく凹凸が著しい。両側縁・頭部の一部に敲打痕が認められる。

磨石類（第38図2～7）

磨石類は殆どが粗粒安山岩である。中世溝・集石などから相当量出土した自然礫に混入して検出されたものが多く、形態など特徴的なものを抽出した。2は半欠状態で出土した。楕円状の磨石。全面に長軸に沿った擦痕状の使用痕、素材端部に敲打痕、表裏面に僅かであるが凹み穴が認められる。3は球形の磨石。ただし丸石のような球形ではなく、ややいびつな断面形状である。全面に使用痕。平坦面には浅く小さな凹み穴が認められる。4は円盤状の磨石。全面に使用痕が認められる。5は単孔の凹み石。ただし、表裏両面に使用痕は認められる。6は小型の楕円状の磨石。半分を欠損するが、意識的な打ち欠きである。縁辺にも使用痕が認められる。7も磨石。表面に段を持つ。使用痕は表面に認められる。

敲石（第39図1）

1点を図示した。1は凹み穴を有し、素材両端に敲打痕を持つ。

線状痕を持つ磨石（第39図2）

粗粒安山岩製で、表面に同方向の線状痕を持つ。反対面には摩滅痕が認められる。線状痕は砥石状の機能が考えられるが、類例も無く根拠に乏しい。

その他の石器（第39図3）

砂岩製でおそらく方形を呈するものと思われる。中央部分が僅かに凹み、表裏面、側面の一部に使用痕が認められる。砥石状の機能が考えられよう。

第5節　古墳時代～中・近世

第Ⅰ章でも述べたように、本遺跡の周辺地域は、古墳時代、奈良・平安時代の良好な集落跡・墳墓・寺院跡が濃密な分布を見せる。上武道路関連の調査でも本遺跡南東に隣接する書上上原之城遺跡では古墳が2基、奈良・平安時代の住居跡を47軒、北西の沖積低地を隔てた上植木苍町田遺跡では、中世に比定される土壙墓・井戸が検出されており、特に井戸からは呪符木簡や板碑が出土している。

本遺跡の調査当初も、試掘の結果から上記の遺構の存在を想定し、調査区域内のあらゆる落ち込みの記録化に務め、個々の遺構に対して相応の評価を持たせる努力をした。

記録方法も、通常の図面・写真以外に調査担当者の所見・メモを付加しており、その枚数は膨大な数を数える。本節では、古墳時代～中世の遺構・遺物を説明するが、この調査当時の担当者の所見を参考にして、用語・表現の統一を図り本文化したものである。また、遺物の説明・計測値は表組としているため、詳細な観察は章末の表を参考にしていただきたい。

本遺跡調査区全体を概観するとⅢ・Ⅳ区に住居跡・溝・掘立柱建物跡などが集中する傾向が見られる。対象的にⅤ・Ⅵ区は、土坑などの遺構が見られるのみで、古墳時代～中世の生活に密着した遺構群はⅢ・Ⅳ区にまとまる景観が看取できる。これは、Ⅴ・Ⅵ区に集中した旧石器時代と縄文時代の遺物分布状況と反対であり、時期的な居住地の選定の差とも言うべき現象であろう。

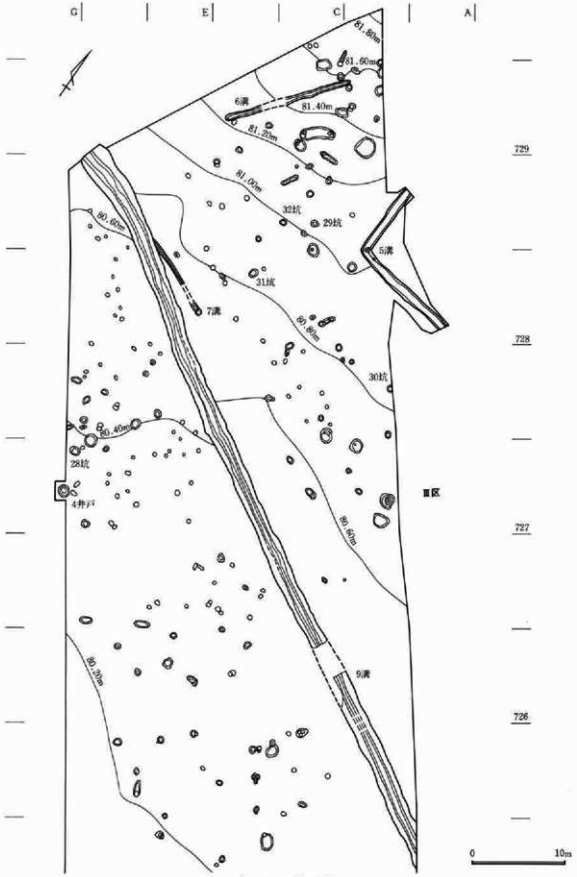
例えば、当地域の農家などに見られる母屋北西に見られる防風林などの存在を古墳時代の集落景観に当て嵌める要素も加味することも可能であろう。ただし、本遺跡では遺構の配置のみがその構成を示唆するだけであり実証性に乏しい。周辺の該期集落跡とその台地内の住居跡配置や性格付けがなされて、初めて可能になる作業である。機会を改めたい。

さらに、本遺跡は書上古墳群に包括される地理的な位置にありながら、古墳・周堀などは検出されなかった。古墳時代の遺構としては、Ⅳ区で検出された後期の住居跡と井戸が認められており、周辺の該期墓域として位置付けられる様相とは性格を異にするようだ。ただし、この住居跡は3軒のみの検出であり、また、隣接する調査区域外には濃密な遺物分布は認められず、おそらく大規模な集落には成り得ないと思われる。本遺跡北東に位置する天ヶ堤遺跡では古墳時代の住居跡7軒が報告されているが、本遺跡からは約0.8kmと距離を保つため、同一集落とは捉え難い。本遺跡の古墳時代住居跡は、地点的な小規模集落の一端と考えたい。

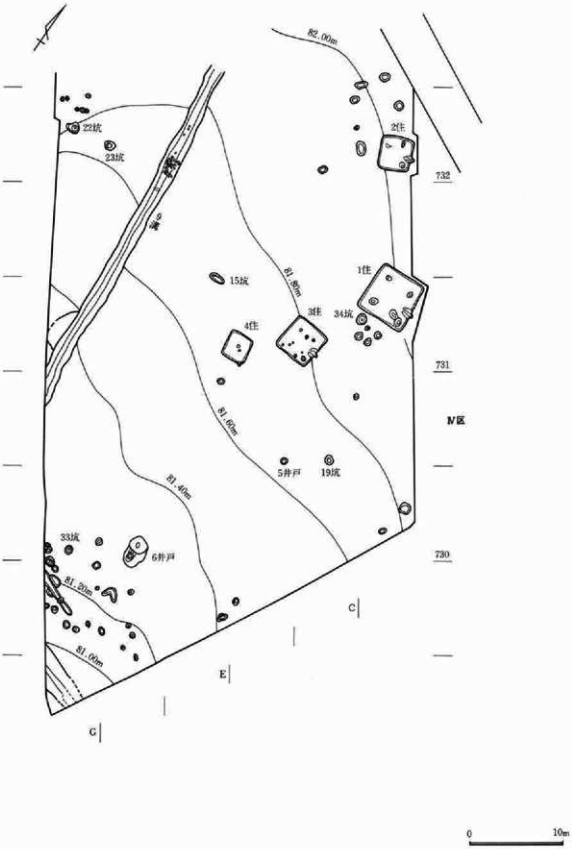
奈良・平安時代の集落は周辺の様相とは一線を画す。この時期の遺構としてはⅣ区4号住居跡を充てたが、出土遺物も希薄であり確定的ではない。また、9号溝より出土した瓦塔片の存在から周辺に寺院跡などを想起することも可能である。さらに、集石遺構の石製骨蔵器や、1号住土層の土坑・杯片を出土した21号土坑の在り方は、この時代には、本遺跡内には積極的な居住地域としてではなく、墓域などの特定地域としての用途が考えられる。

中世遺物の出土も希薄である。青磁片3点を見るが遺構などに密着した例ではない。遺構は出土遺物が希少なため、その覆土から判断を余儀なくされた。無遺物の土坑・溝の時期は、その判断基準に常に疑問符が付きまとうが、本遺跡の場合もその例にもれず、確証的な方法を見いだすことはできなかった。今後の問題点としたい。

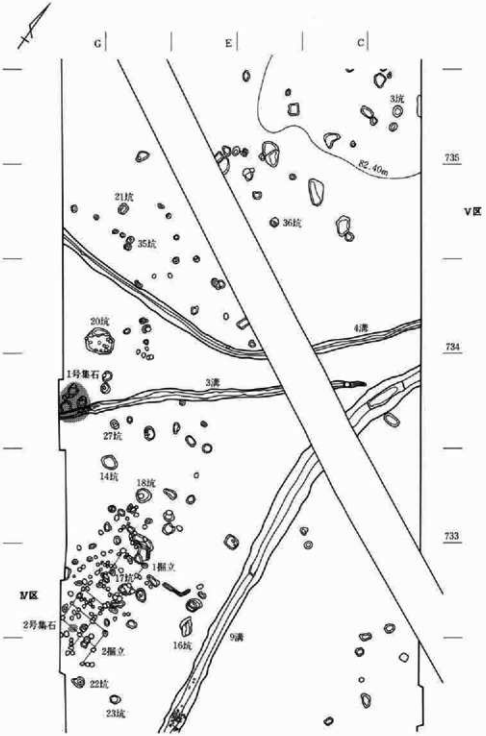
その中で、9号溝は大規模なものであり、調査区域外で屈曲する平面形を呈する。瓦塔片を出土しているが、覆土の様相から中世段階に時期を求めた。調査着手時は、現代の地割りに沿うものとして、近世～現代の段階のものとも考えられた溝だが、屈曲し、西辺が必ずしも地割りに沿うものではなく、何等かの区画・用水を兼ねた性格を求めた経緯を持つ。また、9号溝の内縁に5号溝がほぼ直角に屈曲する形態を見せる。調査区域外に伸びるため、区画規模は不明だが検証の余地を多く残した溝である。この9号溝・5号溝はⅢ・Ⅳ区に認められている


G
E
C
A
81.80m
81.60m
6溝
81.40m
81.20m
81.00m
32坑
29坑
5溝
80.80m
31坑
7溝
80.60m
30坑
80.40m
28坑
4井戸
Ⅲ区
80.60m
9溝
80.20m
729
728
727
726
0
10m

第40図　遺構配置図

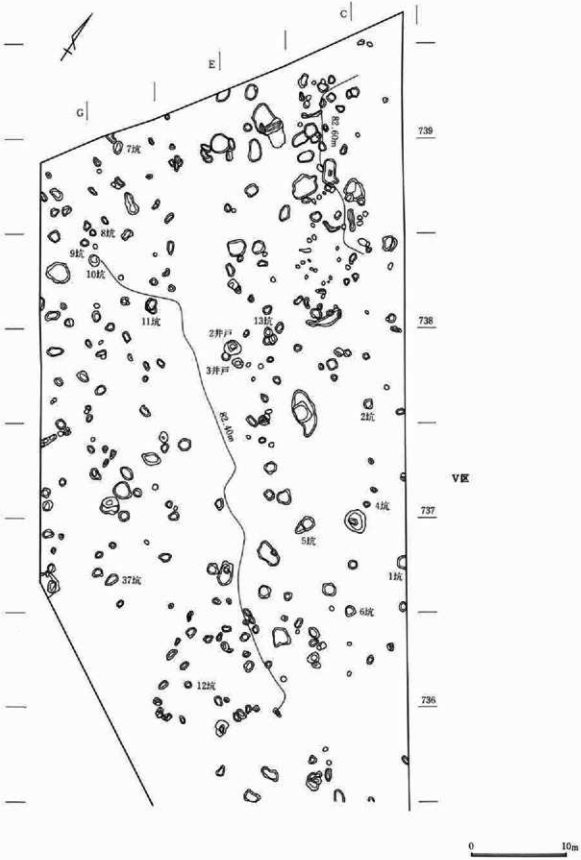

82.00m
22坑
23坑
2住
732
15坑
81.80m
1住
4住
3住
34坑
731
Ⅳ区
81.60m
5井戸
19坑
81.40m
33坑
6井戸
730
81.20m
81.00m
C
E
G
0
10m

第41図　遺構配置図

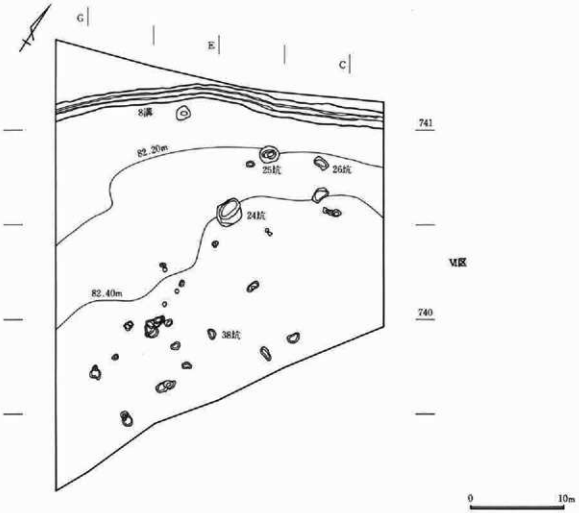


0　10m

第42図　遺構配置図


C
E
G
7坑
8坑
9坑
10坑
11坑
2井戸
3井戸
13坑
2坑
4坑
5坑
1坑
6坑
37坑
12坑
V区
739
738
737
736
0
10m

第43図　遺構配置図



第44図　遺構配置図

が、VI区台地傾斜地区の下端で８号溝が検出されている。台地の縁辺に沿うものであり、覆土からおそらく近世段階の所産と捉えている。

掘立柱建物跡は２棟を考えた。柱穴の規模・配置から大規模な規則性を持つ建物ではなく、不規則な柱穴配置であることからも、中世段階の所産と捉えた。

土坑群は、調査区各区で検出されている。その中では井戸が数基検出されており興味深い。中・近世に比定される井戸は３基であり、いずれも深さ１～２ｍ程度の井戸の中では浅い深度を測る。それでも調査段階で湧水し、この地域の地下水位の高さを物語る。

以上のように、本遺跡の古墳時代以降の遺構密度は周辺遺跡に比して、決して濃いものではない。しかしながら、本遺跡が乗る台地の各時期毎の景観を考える際に、重要な要素を数多く提示するものといえよう。

本節では、各遺構の説明をし、遺構の帰属時期とその性格を明らかにすることを目的としたい。

（住居跡）

前述のように、住居跡は古墳時代３軒、平安時代１軒が検出されている。この４軒の住居跡は試掘段階でその存在は総て判明しており、調査手順・記録化などは比較的容易になされた。

住居跡は一般に居住を目的とした施設であり、そこから出土するものも、日常の生活用品が主な出土遺物である。しかしながら、我々が調査によって目にする遺物は、言うなれば既に生活用品としての機能を果たさなくなった器具であり、当時の人々の廃棄行為によって我々に提供された廃棄物である。

故に、この廃棄行為による同時性や一括性を論証しなければ、それらの遺物に細かな時間的な検証・空間的な位置付けを与えることが不可能な作業である。しかし、現段階の発掘調査の各種の方法論は、常に限界性が見え、問題点も多い。

書上本山遺跡の住居跡調査も、上記各種調査方法を踏まえ、従来の調査方法に準拠した経緯を持つが、同様に１軒の住居跡から得られる情報の限界性を追認することになった。反省点として明記する。

１号住居跡（第45～50図）

Ⅳ区中央の東端で確認された古墳時代後期の大形の住居跡である。Ⅲ区の低地部に向かう緩やかな傾斜地に占地し、南西約５ｍに３号住が近接する。

平面形はおおよそ5.0×5.0ｍの正方形を呈し、確認面からの壁高は約50㎝を測り、比較的しっかりした掘り込みの住居である。

床面はほぼ平坦で中央部から南側にかけて硬化した床が確認された。ロームによる地床である。

柱穴は主柱穴４本を正位置で検出した。４本とも径50～75㎝、深さ55～70㎝の均一した掘り方である。

貯蔵穴は竈南側の壁際に設けられており、平面形は60×40㎝の長方形で、深さは70㎝を測る。壁周溝は竈部分を除き全周する。

竈は東壁中央南よりに位置し、130×110㎝の中型の規模である。壁外への煙道の突出は短い。構築材は白色粘土とローム層土を主体にし、袖材に顕著に現れていた。天井部などの焼土化した構築材は焚口部などに堆積していたが量的には少なかった。掘り方調査では煙道の掘り込みが方形に検出された。

本住居跡には明瞭な床下遺構は認められなかったが、掘り方調査において、間仕切り溝が確認された。溝は北側と西側に２条一組で検出され、幅約10㎝・深さ約10㎝の浅いものである。おそらく床面上の施設であろう。

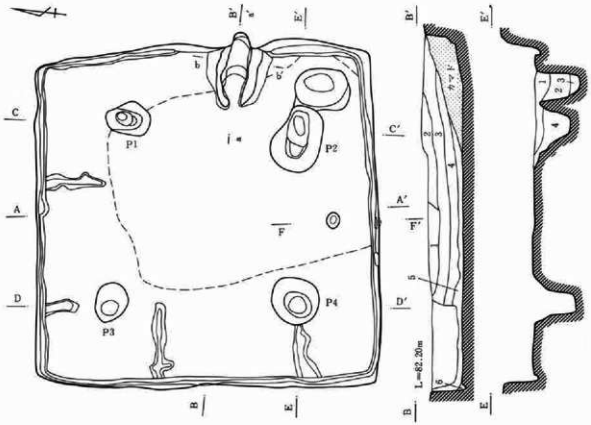
このほかの遺構としてはＰ２と４のほぼ中央やや南よりに浅い小穴が検出された。この小穴に対応するように南壁中央にわずかな凹みが認められ、調査時は昇降施設―例えば「はしご穴」としての機能も想起されたが２つの小穴間に横位に出土した長甕やはしごの構造など問題点が多く、積極的な確証はない。

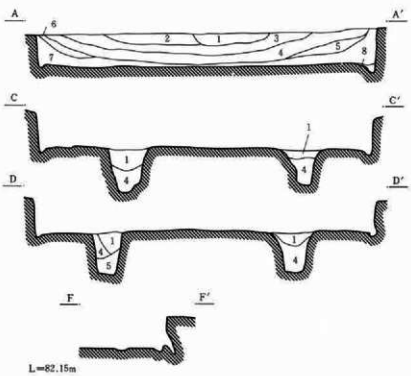
遺物は、本遺跡の住居跡の中では充実した出土量である。その多くが覆土・床面などからの出土であり、竈からの遺物は意外に少なかった。

杯類は５点を図示したが、１・２は覆土上層からの出土で、本住居跡に帰属する遺物ではない。恐らく上層に掘り込まれた土坑の存在が予想される。

３・４は外稜を持つこの段階の普遍的な杯。３は竈南側の東壁下端で出土した。４の底部は覆土から、口縁部は竈周辺から出土している。５は内面黒色処理を施された杯で竈南の床上で出土した。６の須恵器横瓶（杯蓋？）は西壁側辺の覆土下層より出土している。

甕の出土量は多い。７は細片だが床面中央の床上より出土した。９の小型甕は完形である。東壁竈北側の壁下端で11の長甕などと集中して出土した。10の丸胴甕破片は覆土下層より出土した。集中する傾向は見いだせなかった。11の長甕底部と胴部下半は北東隅で、胴部上半や口縁部は底部の南方で集中して19などと出土した。12の甕口縁部も北東隅に床直で出土している。13は竈西で覆土下層より、14は貯蔵穴より出土している。15の甕底部は恐らく14と同一個体であろう。貯蔵穴より出土している。16・17の甕底部は覆土からの細片。18は南壁中央の下端で





1号住居跡

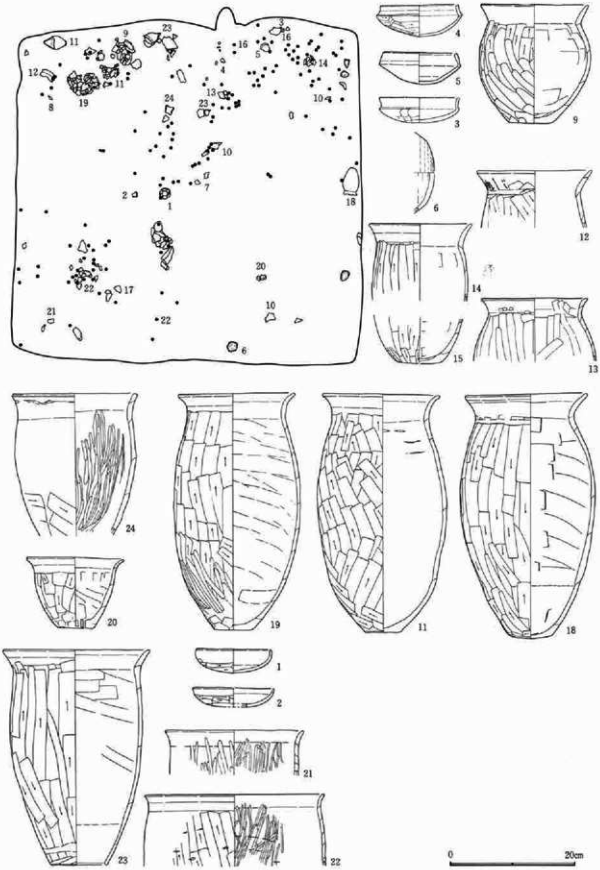
1　黒色土　As－C含　しまり弱い
2　黒褐色土　As－C含　しまり弱い
3　黒褐色土　As－C・ローム粒含　しまり弱く砂質
4　暗褐色土　ローム粒多く含　しまり弱く砂質
5　黒褐色土　As－C・ローム粒極少量含　しまり弱い
6　黄褐色土　純い色調　As－C・ローム粒を多く含
7　褐色土　ローム粒多く含　緻密
8　褐色土　ローム粒多く含　緻密

貯蔵穴・ピット

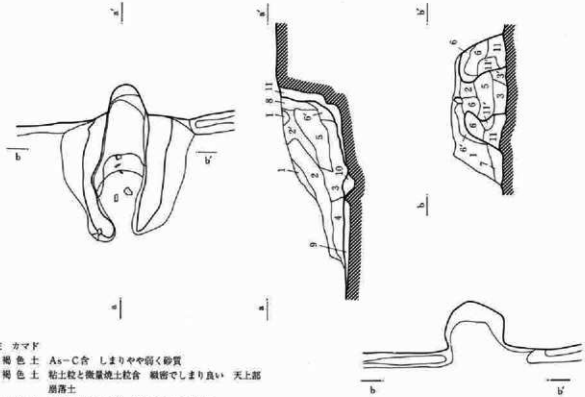
1　暗褐色土　ローム粒含　緻密
2　黒褐色土　ローム粒を多く含　緻密だがしまり弱い
3　灰黄褐色土　均質で含有物無　緻密で粘性強い
4　褐色土　ローム粒多含　緻密
5　暗褐色土　ローム粒含　しまり弱い

0　2m

第45図　1号住居跡



第46図　1号住居跡遺物分布



1住　カマド
1　褐色土　As－C含　しまりやや弱く砂質
2　褐色土　粘土粒と微量焼土粒含　緻密でしまり良い　天上部崩落土
2′褐色土　焼土及び粘土粒含　緻密だがしまり弱い
3　暗褐色土　焼土粒含　粒細かくしまり弱い
3′暗褐色土　小型の焼土塊及びローム粒含
4　黄褐色土　純い色調　粘土及び焼土粒含　緻密で粘性良好　崩落土
5　褐色土　焼土塊含　緻密だがしまりやや弱く粘性やや強い
6　黄褐色土　純い色調　粘土を主体としローム粒含　緻密で粘性強い　袖
6′褐色土　粘土粒を多く含　緻密
7　暗褐色土　ローム粒塊状に含　緻密だがしまりはやや弱い
8　褐色土　焼土粒・ローム粒含　緻密だがしまり弱い

（掘り方）

9　褐色土　焼土粒・ローム粒含　しまり弱い　上面使用面
10　黒褐色土　灰が主体　微小の焼土粒・ローム粒含　緻密だがしまりやや弱い　上面使用面
11　黄褐色土　ローム層土主体とする　緻密で粘性強い　袖材
11′黄褐色粘質土　11層中に大量の焼土が混在

0　1m

第47図　1号住居跡カマド

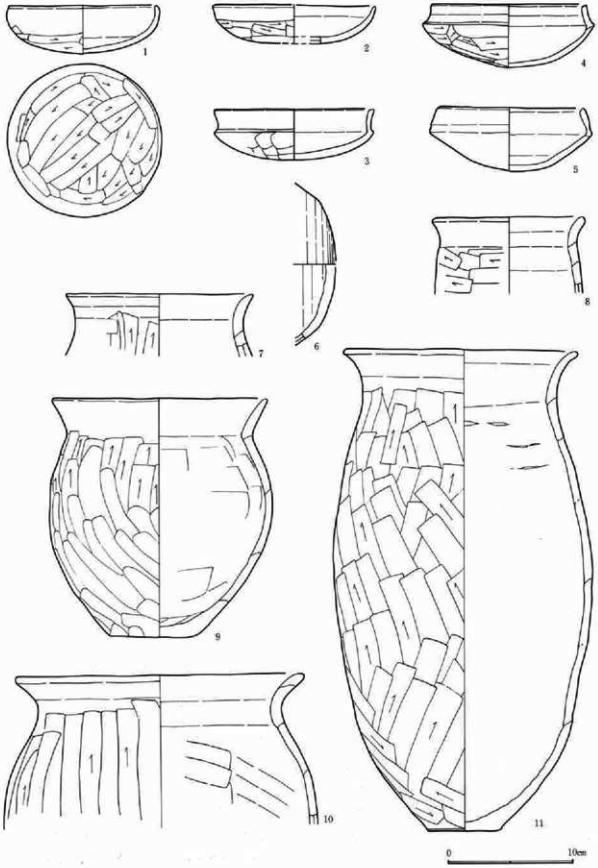
横位で出土した。19は9・11・12などと、北東隅の床直上で、押し潰された状態で出土している。20の小型甑は柱穴4の覆土中で出土した。

21・22の薄手の甕（甑？）口縁部破片は覆土上層より出土したが、1・2の杯と同様で別種の遺構の存在も考えられよう。検討を要する。23の甑は竈北側に接するように横位で出土した。24の小型甕は竈西で覆土下層より出土している。底部が丁寧に欠けており、あるいは甑としての二次利用も考えられよう。

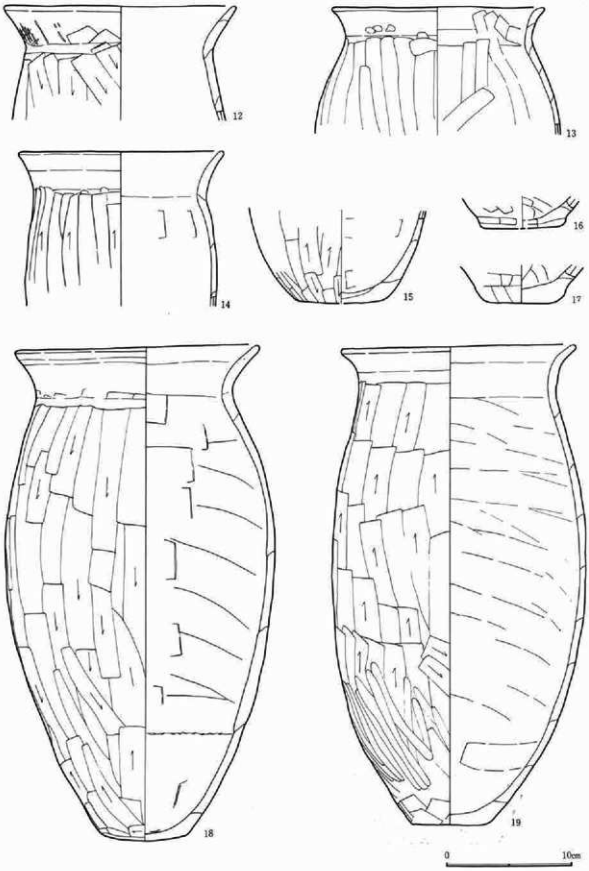
以上のように、出土遺物の豊富な本住居跡だが、その殆どが古墳時代後期（鬼高期）に属し、6世紀後半の所産と考えた。器種組成も杯類・小型甕・長胴甕・甑と一応のセットは揃っているといえよう。

ただし、本住居跡の覆土上層には、奈良時代の土坑が重複しており、それらの遺物の分離が必要であろう。即ち、1・2・21・22は本住居跡に帰属し得ない遺物である。

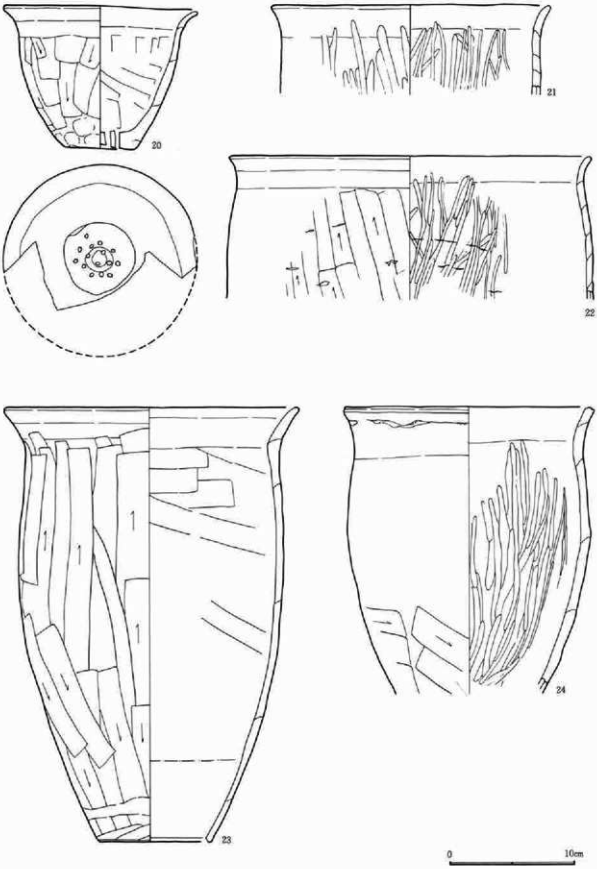
また、住居跡施設としても「はしご穴」様の存在が東壁に認められるが、他の住居跡に類例もなく本報告では問題提起にとどめたい。



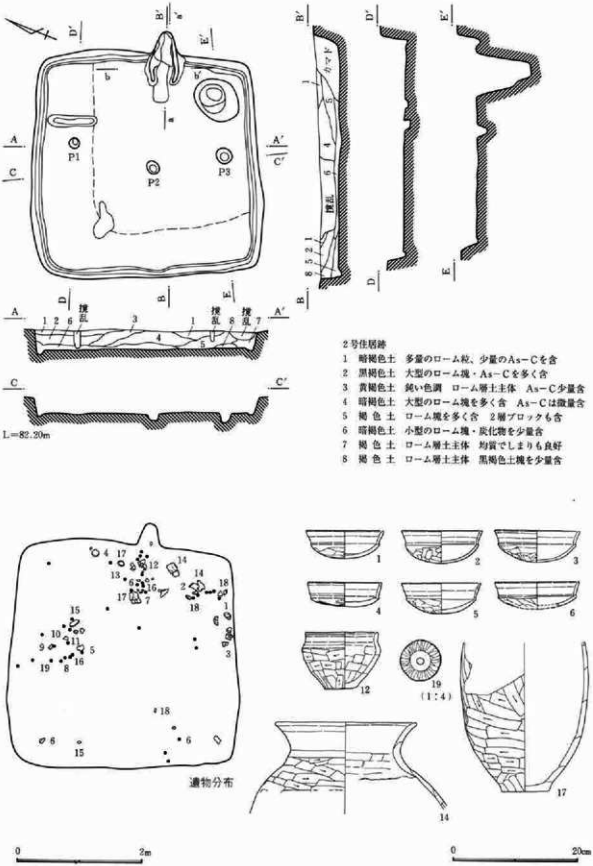
第48図　1号住居跡出土遺物



第49図　1号住居跡出土遺物



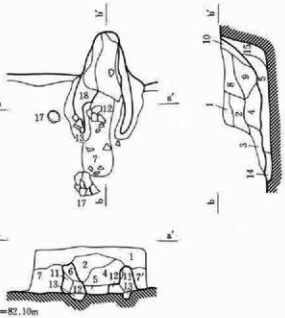
第50図　1号住居跡出土遺物



2号住居跡

1　暗褐色土　多量のローム粒、少量のAs－Cを含
2　黒褐色土　大型のローム塊・As－Cを多く含
3　黄褐色土　鈍い色調　ローム層土主体　As－C少量含
4　暗褐色土　大型のローム塊を多く含　As－Cは微量含
5　褐色土　ローム塊を多く含　2層ブロックも含
6　暗褐色土　小型のローム塊・炭化物を少量含
7　褐色土　ローム層土主体　均質でしまりも良好
8　褐色土　ローム層土主体　黒褐色土塊を少量含

第51図　2号住居跡



2住　カマド

1	暗褐色土	焼土・ローム塊含	8	赤褐色土	焼土粒多含
2	褐色土	ローム塊を多く含	9	赤褐色土	暗い　焼土粒多含
3	褐色土	大型ローム塊含	10	赤褐色土	緻密　焼土粒含
4	暗褐色土	ローム粒・炭化物・焼土粒を含	11	黄褐色土	緻密で硬い粘土
			12	赤褐色土	緻密　焼土塊含
5	暗褐色土	炭化物・焼土粒含	12′	赤褐色土	焼土粒含
6	褐色土	粘土粒・焼土化した粘土　舗	13	褐色土	緻密　ローム粒・焼土粒含
7	暗褐色土	ローム塊含	14	暗褐色土	灰・焼土粒多含
7′	大型ローム塊含		15	褐色土	微量灰・焼土粒含

0　　1m

第52図　2号住居跡カマド

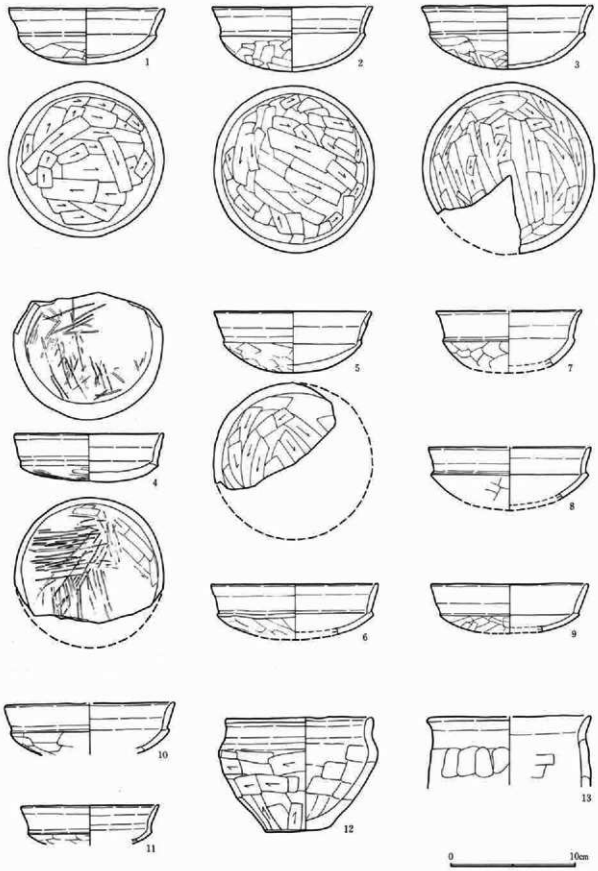
2号住居跡（第51～54図）

Ⅳ区中央の東端で検出された。本遺跡の4軒の住居跡では北端にあたる。南東約11mに1号住を見る。この1号住に比べ本住居はやや小型の規模を測り、平面形は約3.5×3.5mの隅丸正方形を呈する。壁高は約30cmを測る。床面は北側に僅かな凹凸が認められるもののほぼ平坦であり、地山のロームを踏み叩いて硬くしまる。特に竈から床中央部南側にかけての広い範囲に硬化面が認められた。柱穴はしっかりした掘り込みを持つピットが検出されなかった。住居跡の南北を軸をずらして3ケの小穴が検出されたが、浅く小規模なため、1号住のように積極的に断言はできない。位置的には中央の小穴にその可能性を見いだすことができよう。貯蔵穴は竈南側に径約60cm、深さ約80cmを測る円形の土坑が検出された。

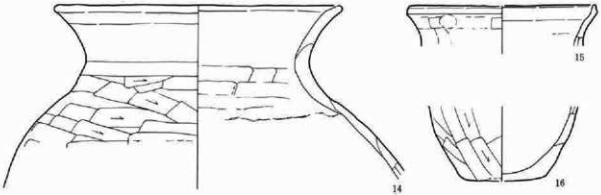
周溝は竈部分を除き全周する。竈は東壁の中央やや南よりに構築されている。煙道は30cmほど壁外に突出し、袖などの構築材はロームと粘土で構成されしっかりした作りである。使用面には焼土粒・炭化物が比較的多く残存し、床面にまで散布が認められた。なお、袖除去後、下面に小ピットが列状に検出された。おそらく袖の心材として黄褐色の粘土材を組み込んだ痕跡と思われる。掘り方調査では、1号住と同様に明瞭な床下遺構は検出されなかった。床面調査で検出されていた北壁からの間仕切り溝に加え西壁から2条新たに確認した。

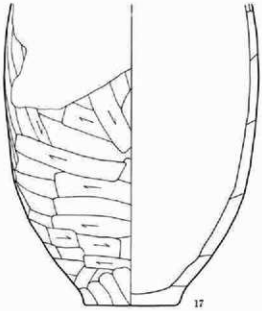
遺物は杯類を中心に比較的豊富な出土量である。1は南壁下端より床面からやや浮いた状態で、2は貯蔵穴より、3は1や南側に接してまとまった状態で、4は竈の北側の床直から出土した。6は竈の前面と住居跡全体の主に床直、7も竈前面の床直から出土している。5・8～11は住居跡中央のやや北寄りの覆土から出土した。12の小型甕はおもに竈内の火床面からまとまって出土した。13は竈袖上より出土し、竈崩落に伴う散逸と捉えられよう。丸胴甕口縁部14は竈前から南側にかけて床直上及び貯蔵穴内で出土した。15は小片ながら床直、16の底部は竈前面の床面と5などと同レベルでの覆土の出土である。17の長胴甕の底部は竈北で逆位で、胴部破片は竈前面で出土した。18の長胴甕頸部破片は覆土下層より出土している。紡錘車19は北壁近くで、また西壁下端に小玉が1点出土している。小玉は住居跡の覆土すべてを水洗別したところ4点が検出された。ただし、覆土を一括して水洗別したため、出土位置や層位に不明点が残る。地点別の水洗別作業が望まれたのであろう。反省点である。

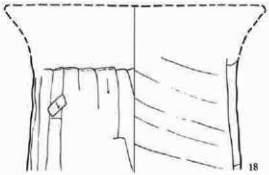
本住居跡はその出土遺物から、1号住とほぼ同時期の古墳時代後半に帰属するものと考える。出土土器の様相からは1号住よりも若干先行する。器種組成は杯類が充実し、小形甕・丸胴甕・長胴甕が伴う。また、紡錘車と土製小玉3点・土製臼玉1点・石製臼玉1点が出土した例は特筆されよう。



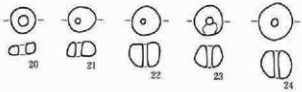
第53図　2号住居跡出土遺物

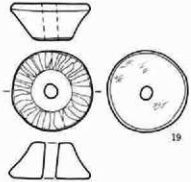






0　(14～18)　10cm





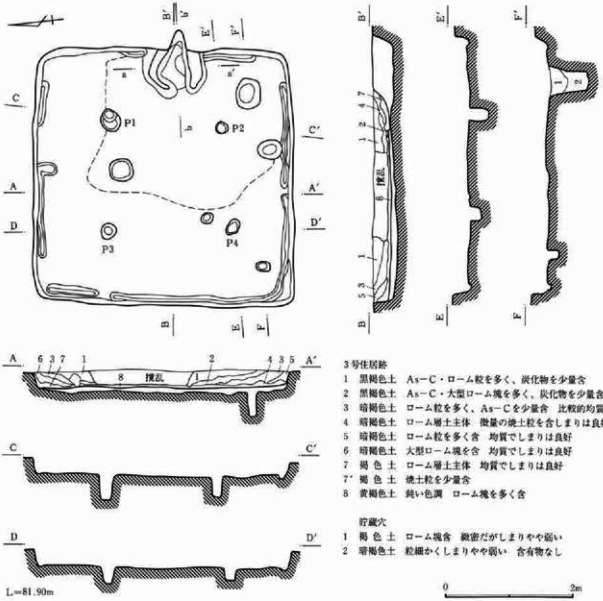
0　(20～24)　5cm
0　(19)　10cm

第２表　２号住居跡出土臼玉・小玉観察表

No	名称	出土位置	残存状態	材質	径	高さ	重量	色調
20	臼玉	覆土	完形	滑石	0.75	0.30	0.19	——
21	臼玉	覆土	完形	土製	0.70	0.40	0.15	純黄褐
22	小玉	覆土	完形	土製	0.75	0.65	0.32	黒褐
23	小玉	覆土	ほぼ完形	土製	0.80	0.60	0.29	純褐
24	小玉	覆土	完形	土製	0.95	0.70	0.52	純褐

単位：cm・g

第54図　２号住居跡出土遺物



第55図　3号住居跡

3号住居跡（第55～57図）

Ⅳ区中央で検出された。北東約5mに1号住、南西約3mに4号住が近接する。

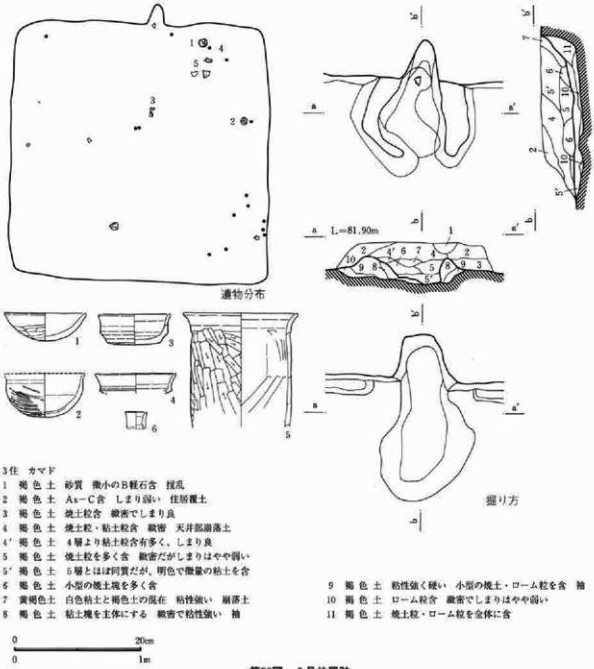
平面形はおおよそ4.0×4.0mの正方形を呈し、1号住に次ぐ大きさを測る。確認面からの壁高は約25cmを測り、比較的しっかりした掘り込みを持つ。

床面はほぼ平坦だが中央部と南東隅にかけて緩やかに凹む傾向が看取される。貼り床を持たない地床で、竈周辺から中央部にかけて硬化面が認められた。

床面上に8ケのピットを確認したが、そのうち柱穴に特定されるものは、その配置からP1～4であろう。4本ともしっかりした掘り込みである。

貯蔵穴は竈南側に検出された。規模は約50×40cmの不整長方形を呈し、深さ約60cmとしっかりした掘り込みを測る。壁周溝は南東・北東・北西隅と北壁の一部を除いて設けられる。また、北壁の周溝から短い太めの溝が伸びており、あるいは間仕切り溝の痕跡かも知れない。

竈は東壁中央やや南よりに設けられ、約110×100cmの中型の規模である。壁外への煙道の突出は



3住　カマド
1　褐色土　砂質　微小のB軽石含　撹乱
2　褐色土　As−C含　しまり弱い　住居覆土
3　褐色土　焼土粒含　緻密でしまり良
4　褐色土　焼土粒・粘土粒含　緻密　天井部崩落土
4′褐色土　4層より粘土粒含有多く、しまり良
5　褐色土　焼土粒を多く含　緻密だがしまりはやや弱い
5′褐色土　5層とほぼ同質だが、明色で微量の粘土を含
6　褐色土　小型の焼土塊を多く含
7　黄褐色土　白色粘土と褐色土の混在　粘性強い　崩落土
8　褐色土　粘土塊を主体にする　緻密で粘性強い　袖
9　褐色土　粘性強く硬い　小型の焼土・ローム粒を含　袖
10　褐色土　ローム粒含　緻密でしまりはやや弱い
11　褐色土　焼土粒・ローム粒を全体に含

0　20cm
0　1m

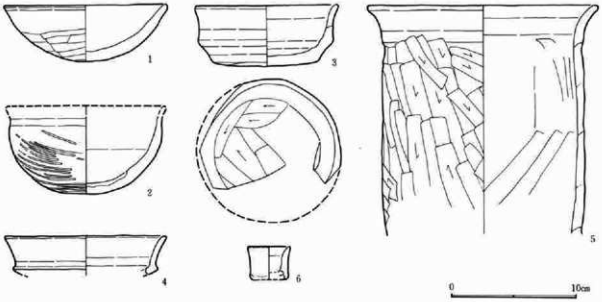
第56図　3号住居跡

短い。構築材は粘土とローム層土を主体とし袖材に顕著だった。天井部などの崩落土は焼土化し、かなりの量が焚き口部に堆積していた。袖は北側が湾曲するが、崩落土との区別の結果である。本住居跡の竈は、掘り方を持つ特徴が挙げられる。不整楕円状の形態で浅く掘りくぼめられ、ローム塊が少量認められた。

竈掘り方以外に本住居跡の床下遺構は認められなかった。

遺物は少ない。竈南側の床上から1・5、南壁下の床上から2の杯が出土したが、5の甕も破片状態の出土であり集中する傾向は見られない。また、3の体部に屈曲を持つ杯は床直。4は覆土中から、6の手捏ね土器も覆土からの出土である。

以上のように、3号住居跡は1号住居跡と長軸を



第57図　３号住居跡出土遺物

同じにし、その平面規模などは相似的な様相を呈する。出土遺物は少なく、その器種組成は貧弱な組成といえよう。遺物の様相から１号住よりは若干先行する傾向が認められるが、杯類の内外面には敲打痕や線状痕が認められ、通常の使用ではなかったようだ。また、手捏ね土器の出土も他の住居跡とは様相を異にすることからも、本住居跡の出土遺物は時間軸を求める作業には援用できない。

４号住居跡（第58図）

Ⅳ区中央で３号住の南西約３ｍに近接して確認された。１辺約2.5ｍの隅丸正方形を呈す平面形で、壁高は約30㎝と比較的しっかりした掘り込みである。

床面は平坦面を基調とするが、北西隅に凹凸が見られる。床構成土は、ローム塊を主に使用した貼床土である。上面を叩き締め、特に硬化面が竈から中央部分にかけて認められた。

柱穴は中央部分に大小２ケのピットが確認されているが、大型のＰ１を柱穴として捉えたい。

壁周溝は竈部分を除きほぼ全周する。

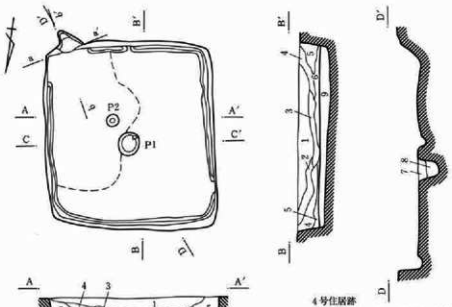
竈は南東隅で検出された。壁外に約20㎝ほど突出した煙道部で、壁内の規模も小型である。構築材は粘土を主としているが、袖・天井部などは特定できず、残存率は極めて悪い。焼土・灰も少量検出されただけである。ただし、竈構築の掘り込みは深く、約50㎝を測る。

掘り方調査において、貼床の存在は認められたが、床面下には明瞭な床下遺構は検出されなかった。

住居跡覆土は、自然堆積状態を呈し、As－Cを少量含む褐色土を基本としている。この傾向は他の住居跡と同様だが、色調は１～３号住居跡が黒褐色～暗褐色を呈する覆土に対し、本住居跡は褐色土が主で、やや明るい色調といえよう。この色調差が時期差によるものであれば、本住居跡は、１～３号住居跡よりも後出する要素として考えられよう。

遺物も極めて少ない。土師器細片少量と砥石が出土しているが、図示し得たのは砥石のみである。

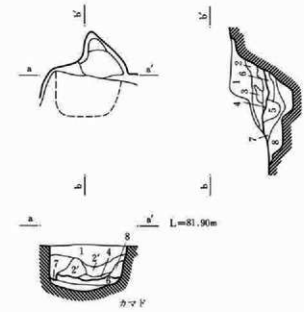
本住居跡の時期は出土遺物からは求めることはできない。竈が住居跡隅に設けられるという特徴から、平安時代の所産としたが問題は残る。



4号住居跡

1　褐色土　As−C・ローム塊を多く含　粘性は乏しい
2　褐色土　As−Cを少量含　粘性はやや富む　しまりもある
3　黒褐色土　ローム塊を少量含　比較的均質な層である
4　黒褐色土　ローム塊・少量のAs−Cを含
5　黄褐色土　純い色調　ローム層土を主体とする均質な層
6　黄褐色土　純い色調　ローム層土を主体とする　3層塊も混入
7　褐色土　大型のローム塊を含　均質でしまりも良好
8　黄褐色土　大型のローム塊を含
9　黄褐色土　ロームを主体とし、褐色土を部分的に混入

0　2m



カマド

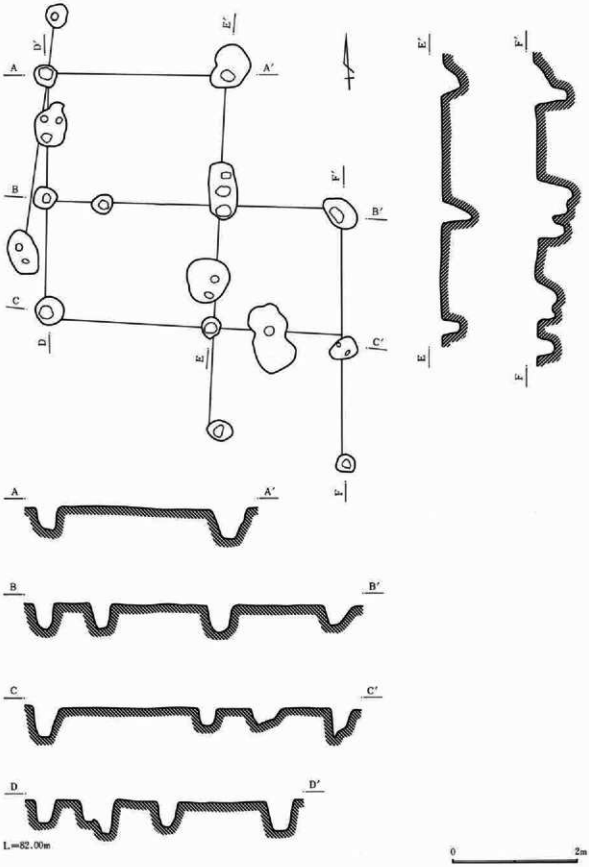
1　褐色土　少量の焼土粒・粘土塊を含　しまりは良好
2　褐色土　焼土粒・粘土小塊を多く含　しまりは良好
2′　2に類似するが、粘土塊が大型化する
3　灰褐色土　粘土粒・塊層・焼土粒を含　やや粘質
4　暗褐色土　少量の炭化物・粘土粒・焼土粒を含
5　黒褐色土　少量の炭化物・ローム粒を含
6　暗褐色土　ローム粒を多く含　しまりは著しく乏しい
7　暗褐色土　ローム塊を多く含　しまりは乏しい
8　黄褐色土　ローム塊と褐色土塊の混在

0　1m

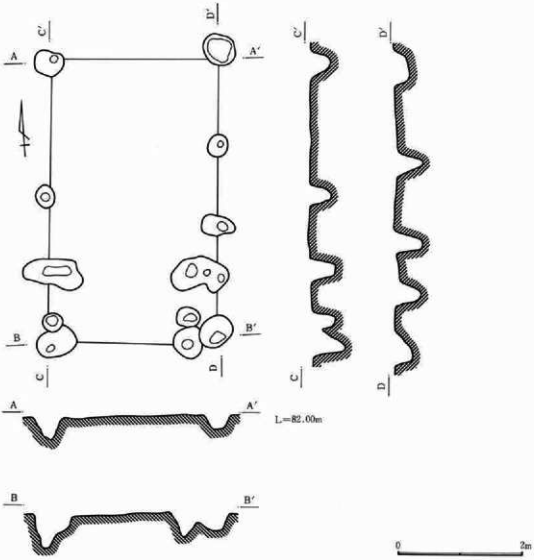
1
出土遺物(砥石)

0　10cm

第58図　4号住居跡



第59図　1号掘立柱建物跡



第60図　2号掘立柱建物跡

（掘立柱建物跡）

Ⅳ区中央西端で確認された。2棟の掘立柱建物跡である。集石遺構の調査中に確認された小ピット群によるものであり、その重複関係から集石遺構より新しい。周辺には同様に小ピットが群在しいるが、殆どが浅く、柱穴としては認定できないものであり、本掘立柱建物跡はその中で良好なピットを選び、検出したものである。

1号掘立柱建物跡（第59図）

1×2間の長方形の建物を基本として、その他の小ピットが直線的な配置を見せる。調査区域外に伸びる様相もあり、全容は把握できなかったが、長方形の建物は、約4.0×2.8mの北側が僅かに広がるピット配列である。

2号掘立柱建物跡（第60図）

1号掘立柱建物跡の北西に近接する。約4.5×2.7mの長方形を呈するピット配列である。長軸をほぼ南北に持ち、西辺と東辺のピット数とその配置が不規則である。短軸方向を結ぶ中間位置にピットは無いが全体形状は比較的整った長方形である。

両掘立柱建物跡とも出土遺物は無いため、時期的な特定はできないが、集石との重複関係や、ピット配列から中世段階の所産と考える。

（土　坑）

本遺跡の土坑は、遺物を伴うものが少なく、明確に時期を確定できる判断材料に乏しい。さらに、その性格も土坑群の規模・配置に規則性が認められず、用途不明と言わざるを得ない。故に、判断材料としては平面形・深さ・覆土の様相から、ある程度の傾向を把握しておきたい。また、本遺跡で検出されたすべてのピットや落ち込みをすべて報告するのではない。上記のピット・落ち込みには木根によるものや、自然的落ち込みが混じり、本報告では明らかに人為的な要素を持つものを主体にして説明する。

本遺跡の土坑平面形には、円形・楕円形・不整形と量的に少ない割には多様性を帯びる。深さ・断面形も、掘り込みのしっかりしたものや浅く皿状のものもある。このなかで、円形で掘り込みの比較的しっかりした土坑はその覆土に黒褐色砂質土が埋められる共通項を持つ。これらの円形土坑は他の遺跡でも確認されており、時期も中・近世に求められている。本遺跡の円形土坑も、１号土坑に代表されるように黒褐色砂質土にAs－Bを含むことからも、中世以降の所産と考えられよう。

各土坑の概略的な説明をする。

１号土坑

Ⅴ区北東の調査区壁に半分だけ検出した。調査区域外に伸びる土坑だが、恐らく円形を呈するものであろう。比較的しっかりした掘り込みを持つ。

２号土坑

Ⅴ区中央の北よりで検出された。やや不整の円形を呈し、掘り込みもしっかりしている。黒曜石の小剥片が出土したが本土坑に伴うものではない。覆土は１号土坑と同様である。

３号土坑

Ⅴ区南東の調査区壁で検出された。やや不整の円形で掘り込みはしっかりしている。覆土は１号土坑と同様である。

４号土坑

Ⅴ区中央やや北東よりに位置する。不整円形を呈し、浅い掘り込みである。覆土は１号土坑と類似。

５号土坑

Ⅴ区中央やや北東よりで４号土坑の南西６ｍに位置する。現代の撹乱が重複する。重複部分を除けば円形でしっかりした掘り込みである。

６号土坑

Ⅴ区中央やや東より検出され、１号土坑の南６ｍに位置する。円形の平面形を呈し、浅い皿状の断面形である。

７号土坑

Ⅴ区西よりで検出された。長楕円の不整形を呈する。掘り込みはしっかりしているが、覆土は不均質土である。近代の所産か。

８号土坑

Ⅴ区西よりに検出され、９号土坑の北に近接する。小型の円形土坑。掘り込みは浅いがしっかりしている。覆土は１号土坑に類似。

９号土坑

Ⅴ区西よりで検出され、８・10号土坑と近接する。小型の円形土坑。掘り込みも深くしっかりしている。覆土は１号土坑に類似。

10号土坑

Ⅴ区西よりに位置し、９号土坑の東に接する。不整楕円形を呈し、坑底面も不連続である。近代か。

11号土坑

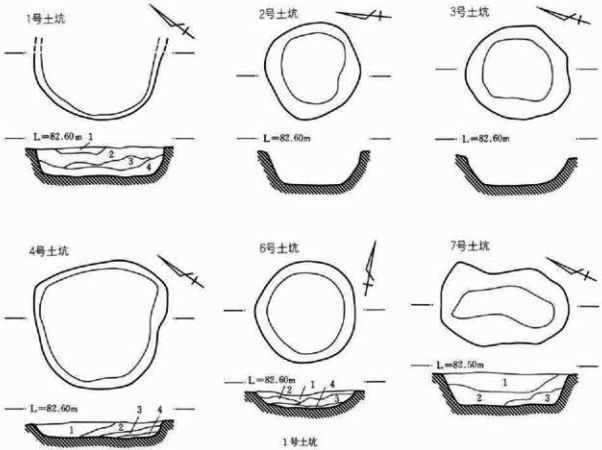
Ⅴ区中央やや西よりで検出され、２号井戸の西約８ｍに位置する。不整形を呈するが、数個の土坑・ピットの重複の可能性もある。掘り込みはしっかりする。覆土は暗褐色土の不均質土で、おそらく近代の所産であろう。

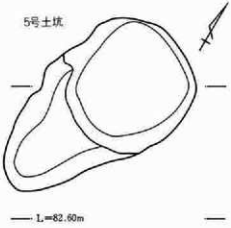
12号土坑

Ⅴ区南東に位置する。小型の円形土坑で、浅い皿状の断面形である。自然石の集石を出土するが、性格は不明である。褐色土を覆土とし、その様相から近代の所産と考えた。

13号土坑

Ⅴ区中央やや北西より検出され、２号井戸の北東に位置する。円形の平面形だが、坑底面は不連続で





1号土坑

1　暗褐色土　やや砂質　少量のローム塊を含　粘性・しまり共に乏しい

2　黒褐色土　やや砂質　ローム塊を含　粘性・しまり共に乏しい

3　黒褐色土　少量の砂質土塊・ローム塊を含　粘性・しまり共に乏しい

4　黒褐色土　大型ローム塊を多く含　粘性は他に較べて富むようである

4号土坑

1　暗褐色土　砂質土　ローム小塊を多く含　しまりはややある

2　暗褐色土　少量の砂粒を混入する　ローム塊少量含　しまりは乏しい

3　黒褐色土　全体的に砂質ローム塊少量含　しまりは乏しい

4　純黄褐色土　大型のローム塊　3層塊を主体とする　しまりは乏しい

5号土坑

①　黒褐色土　砂質土　黒色土塊を多く含　しまりは乏しくパサパサしている

②　暗褐色土　小型のローム塊・ローム粒を多量に含　しまりは乏しい

1　黒褐色土　砂質土　ローム塊を少量含　①より明るい　しまりは乏しい

2　黒褐色土　砂質土　小型のローム塊を含　しまりは乏しい

3　暗褐色土　少量の砂混入　ローム塊・ローム粒を少量含　しまりは乏しい

4　暗褐色土　ローム塊　黒褐色土塊を主体とする　しまりは乏しい

6号土坑

1　褐灰色土　砂層（純層に近い）黒褐色土塊混じる　しまりは乏しい

2　黒褐色土　ローム塊少量含　砂粒混入は少ない　しまりは乏しい

3　黒　色　土　炭化物を多く含　粘性は若干ある　しまりも若干ある

4　純黄褐色土　大型のローム塊を主体とする　しまりは乏しい

7号土坑

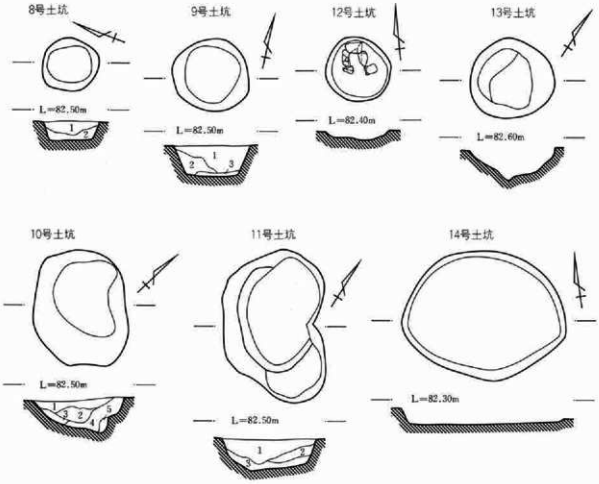
1　褐　色　土　大型のローム塊を主体とし、しまりのない不均質な土層

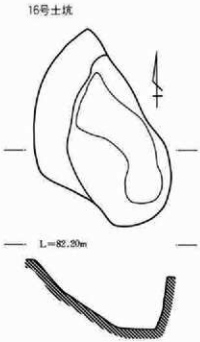
2　暗褐色土　ローム塊をシミ状に含　粘性・しまり共に乏しい

3　純黄褐色土　大型ローム塊・ローム粒を主体とする　しまりは著しく乏しい

0　2m

第61図　土　坑





８号土坑
1　黒褐色土　砂質土　ややしまりはある
2　黒褐色土　砂質土　大型のローム塊を多く含

９号土坑
1　黒褐色土　砂質土　ローム塊を含　しまりは乏しい
2　黒褐色土　砂質土　ローム塊を多く含　しまりは乏しい
3　暗褐色土　やや砂質土　大型のローム塊を多く含

10号土坑
1　暗褐色土　砂質土　ローム塊をシミ状に含　パサパサしている
2　黒褐色土　砂質土　１層の塊　ローム塊を含　粘性・しまり共に乏しい
3　黒褐色土　砂質土　小型のローム塊を少量含　しまりは乏しい
4　暗褐色土　砂質土　１層よりやや暗い　２層塊を多く含　しまりは乏しい
5　褐 色 土　砂質土　ローム粒を多く含　しまりは著しく乏しい

11号土坑
1　暗褐色土　大型ローム塊・黒褐色土塊を主体とし不均質
2　暗褐色土　小型のローム塊を多く含　ややしまりはある
3　褐 色 土　大型のローム塊・ローム粒を多く含　しまりは著しく乏しい

0　2m

第62図　土　坑

遺構としての積極性をもたない。

14号土坑

Ⅳ区北西で検出された。大型の不整楕円形を呈し、浅い掘り込みである。

15号土坑

現代の撹乱坑であり、図化に及ばない。

16号土坑

Ⅳ区中央やや西よりで検出され、9号溝が東側を走る。不整形で、掘り込みは深いものの、整・坑底面は不連続であり、遺構としての確証は少ない。

17号土坑

Ⅳ区中央やや西よりで16号土坑の西方6mで検出された。不整形を呈する平面形で小ピットが重複する。坑底面上より自然石が出土したが、周辺の集石遺構の影響であろう。

18号土坑

Ⅳ区北西で14号土坑に近接した位置で検出された。大型の不整円形を呈し、坑底面にピットを設ける。

19号土坑

Ⅳ区東よりで5号井戸の北東に近接する。やや不整の円形を呈する。掘り込みはしっかりしている。覆土は褐色土の埋土。近代か。

20号土坑

Ⅳ区西で3号溝と4号溝に挟まれた位置で検出された。大型で方形を基調とした不整形土坑。調査当初は住居跡として期待されたが、浅く、小ピットを設ける土坑になった。

21号土坑

Ⅳ区西端で検出された。長楕円形の平面形で、掘り込みは深いものの坑底面は不連続である。土師器杯片が出土している。

22号土坑

Ⅳ区中央南西よりの調査区域端で検出された。不整形の平面形で、断面形は東に向かって傾斜する。覆土は21号土坑に類似する。

23号土坑

Ⅳ区中央南西よりで22号土坑の東に近接する。円形の平面形で、掘り込みは浅いものの比較的しっかりしている。覆土は21号土坑に類似。

24号土坑

Ⅵ区中央の傾斜地で旧石器試掘時に確認された土坑。大型の不整形を呈する。東側に段をもち、不整の断面形を見せるが、坑底面は平坦である。覆土はローム塊を主体とする褐色土であろう。近代か。

25号土坑

Ⅵ区北よりで旧石器試掘時に検出された。24号土坑の北に近接する。不整楕円形の平面形で、段をもつ断面形を見せる。覆土の様相は24号土坑と同様で、近代の所産と捉えた。

26号土坑

Ⅵ区北よりで25号土坑北東に近接して、旧石器試掘時に検出された。不整楕円形を呈し、比較的しっかりした掘り込みを見せる。覆土は1号土坑などと同様に暗褐色～黒褐色の砂質土を基調としており、中世段階の所産と捉え得る。

27号土坑

Ⅳ区西よりに位置する。北西側を3号溝が走る。平面形は不整円形で、掘り込みは深くしっかりしている。自然石が出土しているが、本土坑に伴うものではない。暗褐色土の不均質土を覆土とし、近代に時期を求めた。

28号土坑

Ⅲ区中央南西よりの調査区端、4号井戸の北西3mで検出された。不整形で坑底面も不連続である。覆土は褐色土で近代の所産であろう。

29号土坑

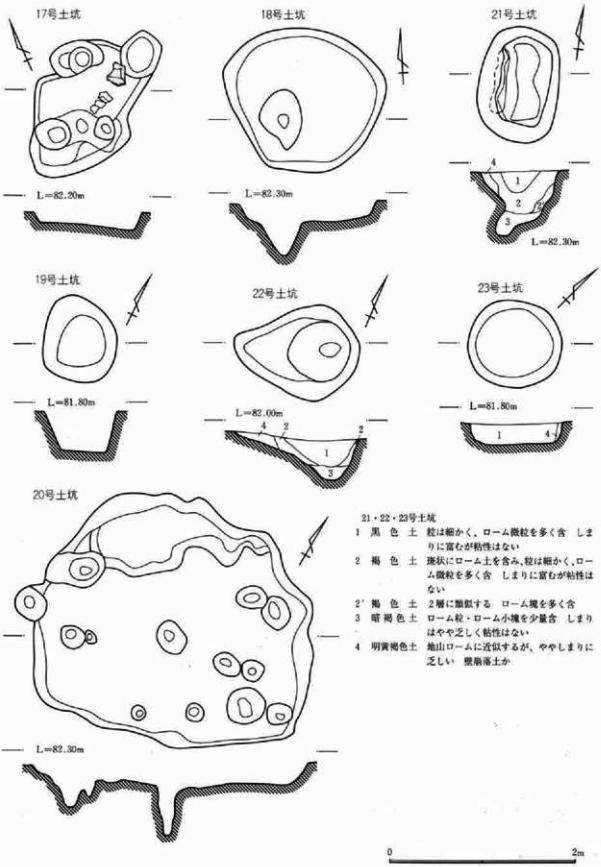
Ⅲ区北西に位置する。東側に5号溝が近接する。小型の円形を呈し、比較的深い掘り込みをもつ。坑底面は平坦で、覆土は褐色土である。

30号土坑

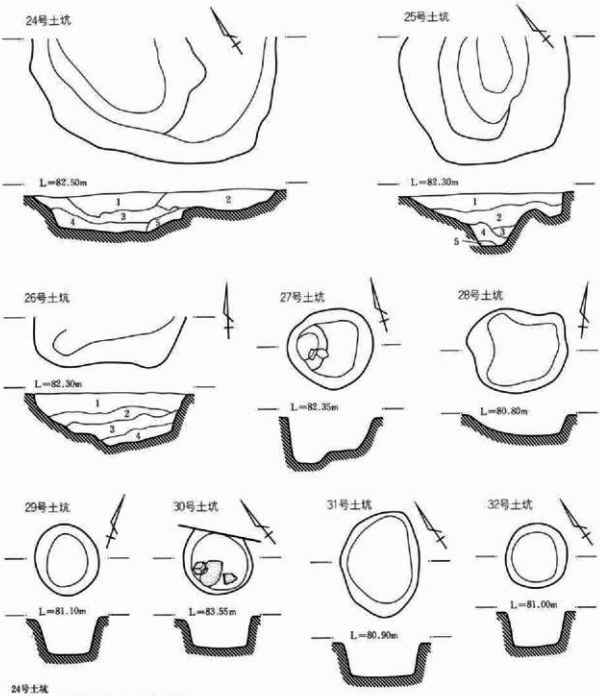
Ⅲ区北東の調査区域端で検出された。小型の円形を呈し、掘り込みも深くしっかりしている。自然石を伴うが、本土坑に帰属するものかは不明。

31号土坑

Ⅲ区中央やや北西よりで検出した。不整楕円形を


17号土坑
L=82.20m
18号土坑
L=82.30m
21号土坑
4
1
2
3
L=82.30m
19号土坑
L=81.80m
22号土坑
L=82.00m
4
2
2
1
3
23号土坑
L=81.80m
1
4
20号土坑
L=82.30m
21・22・23号土坑
1　黒　色　土　粒は細かく、ローム微粒を多く含　しまりに富むが粘性はない
2　褐　色　土　漸移にローム土を含み、粒は細かく、ローム微粒を多く含　しまりに富むが粘性はない
2'　褐　色　土　2層に類似する　ローム塊を多く含
3　暗褐色土　ローム粒・ローム小塊を少量含　しまりはやや乏しく粘性はない
4　明黄褐色土　地山ロームに近似するが、ややしまりに乏しい　壁崩落土か
0
2m

第63図　土　坑



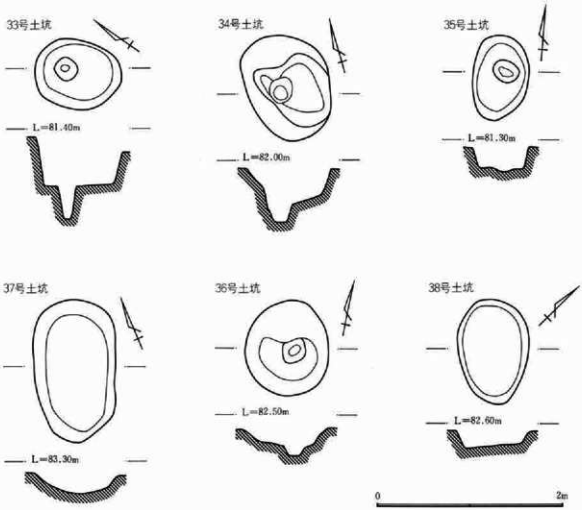
24号土坑
1　褐　色　土　黒色土塊・ローム粒少量含
2　褐　色　土　ローム塊を少量含　粘性・しまり乏しい
3　褐　色　土　ローム塊を多く含　不均質でしまりも乏しい
4　純黄褐色土　大型ローム塊を多く含　しまりも乏しい
5　黄褐色土　ローム塊主体の層　しまりは乏しい

25号土坑
1　褐　色　土　ローム塊を含み砂質　粘性・しまりは乏しい
2　褐　色　土　大型ローム塊を含　粘性・しまりは乏しい
3　純黄褐色土　大型ローム塊を含　しまりは著しく乏しい
4　黒褐色土　小型ローム塊を少量含　粘性・しまり乏しい
5　黄褐色土　地山に近似

26号土坑
1　暗褐色土　砂質　少量のローム粒を含　しまりは乏しい
2　黒褐色土　砂質　少量のローム粒を含
3　褐　色　土　ローム塊を主体とする　しまりは乏しい
4　暗褐色土　ローム塊を少量含　粘性はややある

0　2m

第64図　土　坑



第65図　土　坑

呈する。比較的しっかりした掘り込みで、覆土は褐色土である。近代の所産。

32号土坑

Ⅲ区北西に位置し29号土坑が北東に近接する。小型円形で、掘り込みはしっかりしている。覆土は黒褐色粘質土が主体だが時期的な判断はできない。

33号土坑

Ⅳ区南の調査区端、６号井戸が南西６ｍに位置する。小型の楕円形を呈し、坑底面に小ピットを設ける。掘り込みは比較的深く、覆土も均質土の堆積だが、小規模なため縄文時代の陥穴ではないようだ。

34号土坑

Ⅳ区の東、１号住居跡の南に位置する。不整楕円形を呈し、ピットを坑底面に設ける。掘り込みはしっかりしているが、覆土は軟質褐色土で、近～現代の所産と捉え得る。

35号土坑

Ⅳ区西よりで検出された。不整楕円形の平面形で、坑底面は不連続だが掘り込みも深い。覆土は褐色土。

36号土坑

Ⅴ区東に位置する。不整円形を平面形とし、小ピットを坑底面に設け不連続で覆土も褐色土である。

37号土坑

Ⅴ区中央やや南よりで検出された。長楕円形の平面形で、断面形も浅く皿状を呈す。

38号土坑

Ⅵ区中央やや南東よりで検出された。楕円形を呈する。掘り込みはしっかりしているが浅い。

（井　戸）

本遺跡では、５基の井戸を検出した。いずれも素掘りで石敷きなどの施設は持たない。その深さは確認面から１～２ｍと浅く、本遺跡の周辺の洪積台地における地下水位の高さを物語る。実際に調査中も、Ⅲ・Ⅳ区は深度１ｍを超えた場合は湧水した。井戸の時期も土坑と同様に確定的なものではない。しかし、その中で６号井戸は覆土中位より古墳時代後期の丸胴甕や杯などが出土し、この段階の時期を充てることができる。なお１号井戸は欠番である。

２・３号井戸

Ⅴ区中央やや北西よりで検出された。周辺には13号土坑や東に距離を置いて１～６号土坑といった、中世段階に比定した土坑群が近接する。

重複した井戸であり、２号井戸は径約1.5ｍの円形の平面形を呈し、深さは約２ｍを測る。断面形は、上位から中位にかけて壁崩落により袋状になっており、不安定な形態を見せる。井戸坑底面は平坦で、崩落の痕跡は無い。

３号井戸は２号井戸南に重複して検出された。径約1.0ｍの円形で、深さは約1.5ｍを測る。２号井戸に比して、平面規模・深さとも小型の井戸である。崩落による壁の崩れは認められず、整った断面形状である。井戸坑底面は平坦で断面形と同様に安定している。

重複関係は土層観察からは２号井戸が３号井戸を切る。ただし上端のみの重複であり、対比土層も黒色土と黒褐色土との観察のため確定的な新旧ではない。さらに言及すれば占地状況や上面に堆積する土質から両者は時期的にも近い存在とも捉え得る。

両者ともその土層堆積状態は、塊状土が主体であり、人為的な埋土と思われる。その場合、２号井戸を新たに掘削する際にその排土を３号井戸の埋め立てに使用するのが通常である。しかし、３号井戸に確認された塊状土は概して小型であり、２号井戸掘削によって生じた排土とは捉え難い。このことは、３号井戸が廃棄されて、ある程度の時間が経過してからの２号井戸の掘削がなされたのであろう。

４号井戸

Ⅲ区中央南西よりの調査区端で検出された。規模は径約1.2ｍの円形で、深さは約1.1ｍを測る。周辺には浅い土坑が群在するが、本井戸とは関連性を持たない。また、帰属する時期については、覆土の様相から、褐色土を基調としている近代期に比定される土坑に近似しており、４号井戸も、近世～近代にその段階を追えよう。

５号井戸

Ⅳ区東側で検出された。北東に19号土坑が近接する。また、南東に位置する６号井戸とは約17ｍと距離を保つ。径約0.6ｍの小型の円形を平面形とし、深さは約1.1ｍを測る。壁の崩落は認められず、しっかりした立ち上がりを見せる。坑底面は平坦で中央に自然石を埋めるが人為的なものかは不明である。

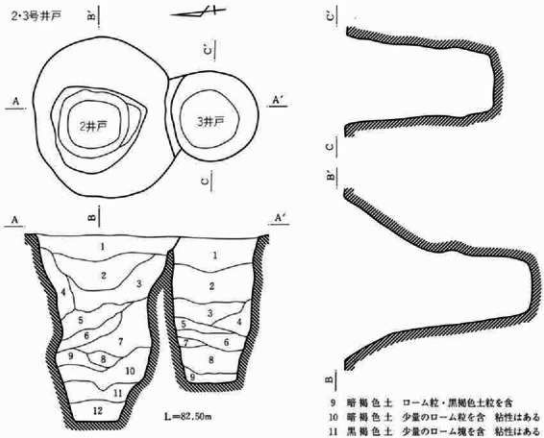
６号井戸

Ⅳ区南東で検出された。確認面で楕円形を呈した井戸である。平面形は長軸約3.0ｍ、短軸約2.0ｍを測り、井戸主体部となる部分は径約1.7ｍの円形を呈する平面形である。

井戸主体部より南側に伸びる楕円状の落ち込みは新旧関係もなく、井戸に付随する施設と考えられる。用途としては、洗い場・水汲み場などが想定されるが、覆土中位より出土した自然石にも注意を要する。また、この楕円状の落ち込みと井戸主体部との接点壁は若干ながら凹みが認められ、水汲みなどに伴う使用の痕跡と捉え得る。

井戸主体部の深さは約2.0ｍで、比較的安定した壁と坑底面を持つ。断面形は上方に大きく広がり、他の井戸の形状とは一線を画す。時期的な井戸掘削技術の差とも考えられよう。

遺物は、覆土上層より杯２点、中層より丸胴甕１点、下層より小型甕１点が出土した。古墳時代後期に属する遺物であり、１～３号住居跡との関連が興味深い。この遺物群が、井戸使用に伴う容器として位置付けることはできないが、少なくとも、井戸廃棄時における一括性は保証できよう。

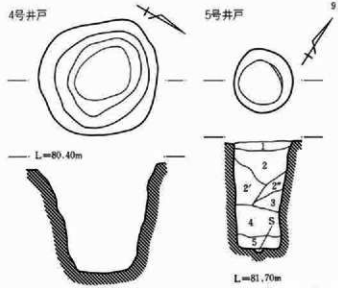


2号井戸

1　黒　色　土　砂質　白色粒・砂粒を多く含　しまりはある
2　黒褐色土　砂質　暗褐色土塊を多く含　しまりは乏しい
3　黒褐色土　砂粒を少量、ローム塊を多く含
4　褐　色　土　砂質　ローム塊を多く含　しまりは乏しい
5　黒褐色土　砂粒・暗褐色土塊を少量含　しまりは乏しい
6　暗褐色土　ローム塊を多く含　砂粒は含まない
7　純黄褐色土　大型ローム塊を多く含　しまりは乏しい
8　純黄褐色土　ローム塊・黒褐色土塊を多く含　層自体が塊状堆積を示す
9　暗褐色土　ローム粒・黒褐色土粒を含
10　暗褐色土　少量のローム粒を含　粘性はある
11　黒褐色土　少量のローム塊を含　粘性はある
12　黒褐色土　ローム塊等を含まない　若干砂粒混入

3号井戸

1　黒褐色土　砂質　ローム塊を少量含　しまりは乏しい
2　暗褐色土　砂質　ローム塊を多く含　やや粘性はある
3　黒褐色土　砂質　ローム塊を少量含　しまりは乏しい
4　黒褐色土　砂質　ローム小塊を多く含　しまりは乏しい
5　暗褐色土　砂質　少量のローム粒を含　しまりは乏しい
6　黒褐色土　砂質　ローム塊・粒子含まない　しまりは乏しい
7　暗褐色土　若干砂粒の量少なくなる　ローム粒子を多く含
8　暗褐色土　ローム塊を含　しまりは乏しい
9　黒褐色土　大型のローム塊を含　しまりは乏しい

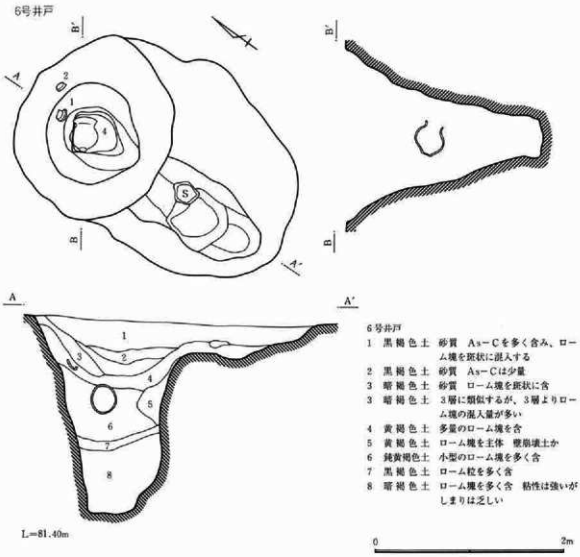


5号井戸

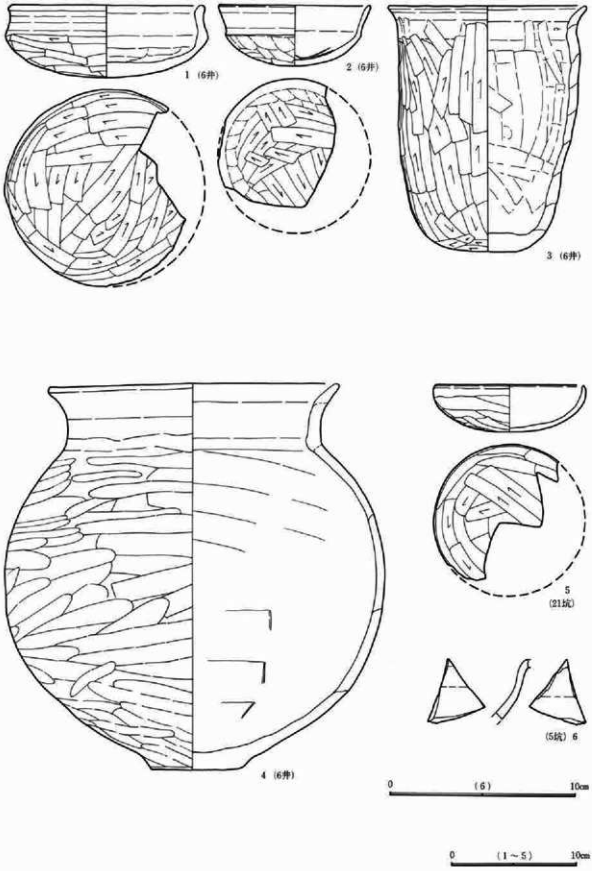
1　褐　色　土　砂質　ローム粒を多量に含
2　暗褐色土　砂質　ローム粒を多量に含
2′　暗褐色土　砂質　ローム粒の混入が2層より少ない
2″　暗褐色土　砂質　ローム粒を含まない
3　黒褐色土　砂質土　ローム粒子を少量含
4　黒褐色土　砂質土　ローム塊を多く含　しまりは乏しい
5　暗褐色土　砂質土　ローム塊を多く含　しまりなし

0　2m

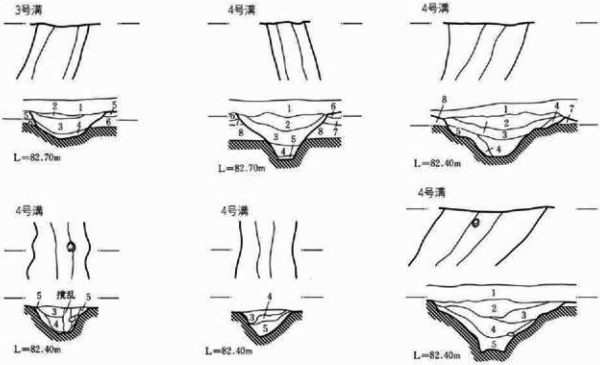
第66図　井　戸


6号井戸
B'
A
B
A'
S
A
A'
L=81.40m
6号井戸
1　黒褐色土　砂質　As－Cを多く含み、ローム塊を斑状に混入する
2　黒褐色土　砂質　As－Cは少量
3　暗褐色土　砂質　ローム塊を斑状に含
3　暗褐色土　3層に類似するが、3層よりローム塊の混入量が多い
4　黄褐色土　多量のローム塊を含
5　黄褐色土　ローム塊を主体　焼焼壊土か
6　鈍黄褐色土　小型のローム塊を多く含
7　黒褐色土　ローム粒を多く含
8　暗褐色土　ローム塊を多く含　粘性は強いがしまりは乏しい
0
2m

第67図　井　戸



第68図　井戸出土遺物



3号溝
1　耕作土
2　暗褐色土　砂質土　斑状に褐色土塊・As－Cを少量含
3　黒褐色土　砂質土　斑状に褐色土塊を多く含
4　黒褐色土　砂質土　3層よりやや粘性を持つ
5　暗褐色土　地山　Ⅱ層土
6　褐色土　地山　Ⅲ層土

4号溝
1　耕作土及び褐色砂質土　As－B含
2　暗褐色土　斑状に褐色土塊含
3　黒褐色土　粒子細かくしまり弱い　斑状に褐色土塊含
4　黒褐色土　砂質　粒子細かくしまり弱い
5　暗褐色土　粒子細かくしまり弱い　ローム粒多く含
6　黒褐色土　地山　Ⅱ層、As－C含
7　暗褐色土　地山　Ⅱ層、As－C含
8　褐色土　地山　Ⅲ層、ローム漸移層

0　2m

第69図　溝

（溝）

本遺跡の特徴として、幾条もの溝が検出されており、その様相は屈曲する溝・平行する溝など多種の形態を見せている。発掘調査による溝の性格付けは難しく、走行状態・断面形態で様々な用途を考えるが、確定的な性格の確定にはいたっていない。

そのような背景もあり、本遺跡の溝個々の用途を本報告で言及することはできないが、その特徴と想定される時期を提示する。なお、1・2号溝は書上上原之城遺跡との通番のため、本遺跡では欠番扱いである。

3号溝

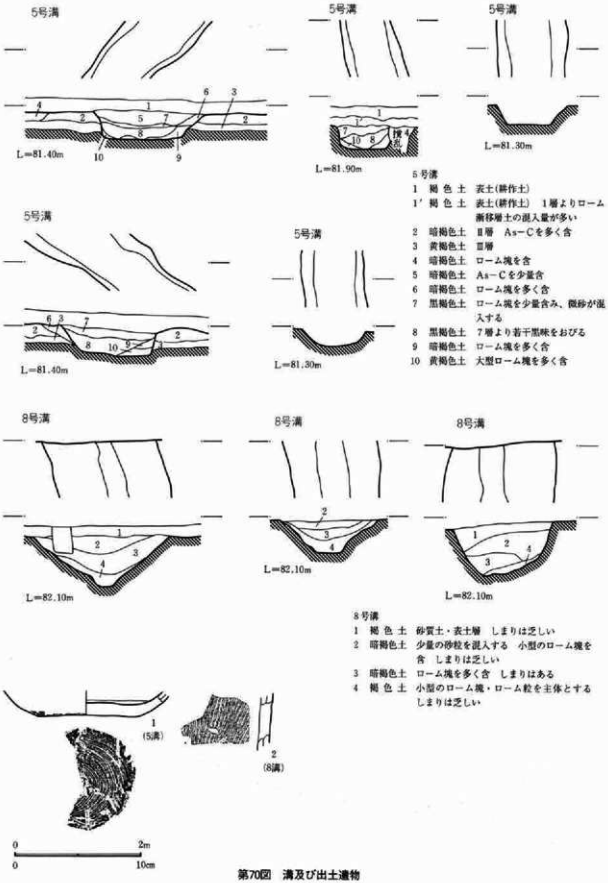
Ⅳ区西の集石遺構下位からⅤ区東端にかけて直線的に伸びⅤ区で収束する。収束する終点には9号溝が隣接し、両者の関連を想起させる地点である。

断面形は緩やかなU字形を呈し、溝底面のレベルは北東から南西に徐々に下る。

4号溝

Ⅳ区西からⅤ区東端にかけて緩やかな屈曲を見せながら、3号溝と平行するように調査区を横断する。断面形はV字状を呈する箇所が多く、坑底面の平坦部分も狭小である。坑底面のレベルも3号溝と同様で北東から南西に下る。

3号・4号溝は平行する溝として、その覆土に共通性があり、これは9号溝の上層の覆土に類似する。おそらく、中世段階以降の所産であろう。また、3号溝は集石遺構と重複しているが、その新旧関係は集石遺構が新しい様相を見せる。



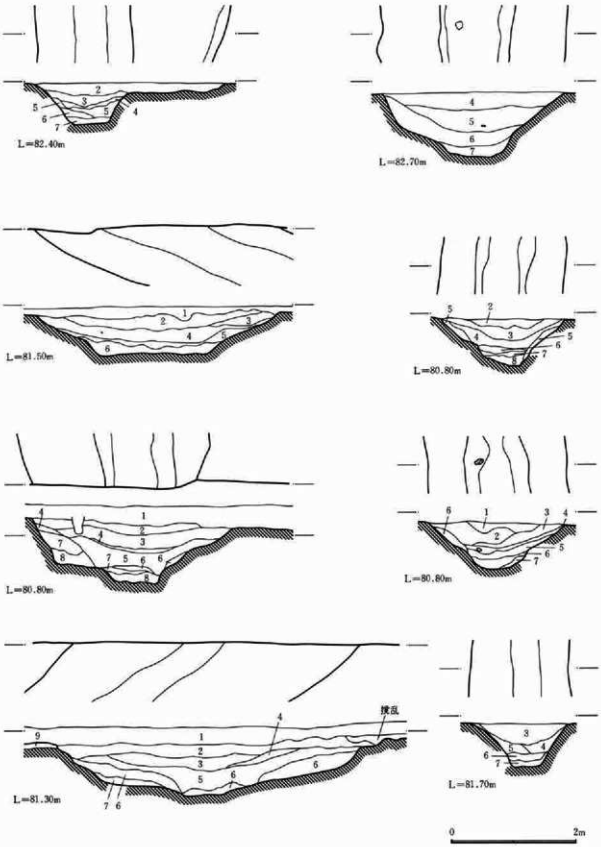
5号溝

1　褐色土　表土(耕作土)
1′褐色土　表土(耕作土)　1層よりローム面移層土の混入量が多い
2　暗褐色土　Ⅱ層　As－Cを多く含
3　黄褐色土　Ⅲ層
4　暗褐色土　ローム塊を含
5　暗褐色土　As－Cを少量含
6　暗褐色土　ローム塊を多く含
7　黒褐色土　ローム塊を少量含み、微砂が混入する
8　黒褐色土　7層より若干黒味をおびる
9　暗褐色土　ローム塊を多く含
10　黄褐色土　大型ローム塊を多く含

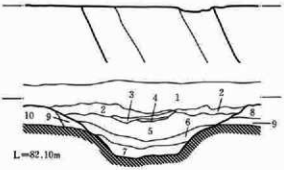
8号溝

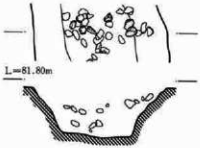
1　褐色土　砂質土・表土層　しまりは乏しい
2　暗褐色土　少量の砂粒を混入する　小型のローム塊を含　しまりは乏しい
3　暗褐色土　ローム塊を多く含　しまりはある
4　褐色土　小型のローム塊・ローム粒を主体とする　しまりは乏しい

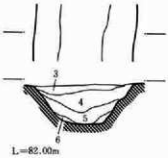
第70図　溝及び出土遺物


L=82.40m
L=82.70m
L=81.50m
L=80.80m
L=80.80m
L=80.80m
撹乱
L=81.30m
L=81.70m
0
2m

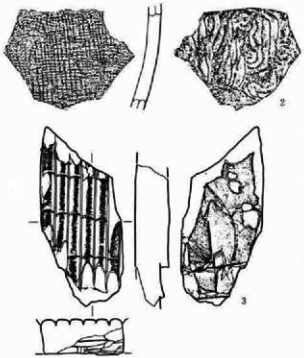
第71図　9号溝

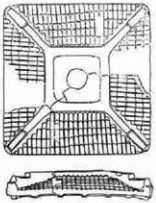






９号溝
1　黒褐色土　表土層　しまりに乏しい
2　褐　色　土　少量のAs－Cを含　しまりは乏しい
3　黒褐色土　褐色土塊を不連続に含　As－Cを含
4　黒褐色土　３より若干暗い　褐色土塊は少量含
5　暗褐色土　褐色土塊を多く含　As－Cは少量含
6　純黄褐色土　黄褐色ローム塊を多く含
7　黒褐色土　比較的均質　ローム塊を含　少量だが酸化粒子も認められる　粘性は強い
8　暗褐色土　比較的均質　ローム粒を少量含
9　褐　色　土　比較的均質　ローム粒・酸化粒子を少量含
10　黒褐色土　比較的均質ローム粒を微量含





参考図
左・上植木廃寺出土瓦塔
右・埼玉県甘粕山遺跡出土瓦塔

0　2m
0　10cm

第72図　９号溝と出土遺物

5号溝

Ⅲ区北西部の調査区端で検出された。屈曲する溝であり、延長が調査区域外に伸びるため、その全容は把握できないが、おそらく区画溝のような性格を持つものであろう。掘り込みは浅く、坑底面は平坦で南東方向に徐々に下る。また、坑底面には小ピット1ケが隅部分に検出されたが性格は不明である。覆土はAs－Cを含む暗褐色～黒褐色土を基調としており、本遺跡では古墳時代の住居跡覆土に類似する。遺物を出土していないが、同時期の所産と判断したい。

6号溝

Ⅲ区北西隅に位置する。走行を北東から南西に持ち連続せず両端で収束する。坑底面のレベルも傾向を持たず、覆土も黒褐色均質土が堆積しており、自然的営力による溝の生成と考えられる。

7号溝

Ⅲ区南西で9号溝と重複して検出された新旧関係を見いだすことはできなかった。走行は9号溝とほぼ平行し、9号溝との重複後は不明である。深さも浅く、走行も短いことからも特に有機的な用途を特定できない。

8号溝

Ⅵ区北西端で検出された。走行を北東から南西に持ち、急傾斜する台地縁辺を台地形状に沿って調査区を横断する形となる。比較的深い掘り込みであり、断面形状もV字状を呈す。坑底面レベルは北東から南西にかけて緩やかに下がる。遺物は須恵器杯底部と縄文土器片が出土しているが、本溝に伴うものではない。覆土は不均質な暗褐色土を基調としており、24号土坑覆土などと近似する。時期はこの覆土の様相から、近世～近代に求めた。また台地縁辺を巡る形態から、地区割りの機能を持った溝であろう。

9号溝

本遺跡で最大規模を誇る遺構である。Ⅲ区からV区にわたる調査区域外で屈曲部を持ち、幅約1.5～3.0m、深さ約70cmを測り掘り込みもしっかりしている。走行は、Ⅲ区では直線的に現地形の地割り線に沿い、屈曲した後のⅣ区では南北に地形傾斜に直行し、V区に至ると若干ながら湾曲する兆しを見せる。また、このV区の平面形は大きく広がり、僅かながら坑底面も下がる。坑底面のレベルは全体に北西から南東にかけて傾斜するが、各所に平坦面やV区に見られたような下がる箇所もあり、必ずしも水利を主目的にした形態ではない。土層は暗褐色砂質土を上層に下層は黒褐色土が基調となる。含有物はAs－B・As－Cを含み、両テフラが地山層位として存在してからの埋没と考えられる。中世～近世段階と捉えたい。遺物は、おそらく流れ込みによるものであろう。特筆すべきは瓦塔片が出土している。周辺の寺院跡の存在を想起させる好資料である。また、Ⅳ区では自然石などがまとまって出土したが、これは南東に位置する集石遺構崩壊によるものと判断した。その他では、青磁碗底部・須恵器甕胴部破片が出土している。

本遺跡の溝は、上述のように特徴的な在り方を呈する。6・7号溝を除く、5条の溝はいずれも調査区域外に伸び、その走行などに不明点が多く、今回の調査範囲では詳細には言及できない。今後隣接地域の調査によって、その様相は把握できるものと期待する。

（集石遺構）

2ヵ所の集石遺構を検出した。各遺跡で各時期の集石遺構は存在しているが、本遺跡の集石遺構は、おそらく中世以前の所産と考えられる。

1号集石遺構

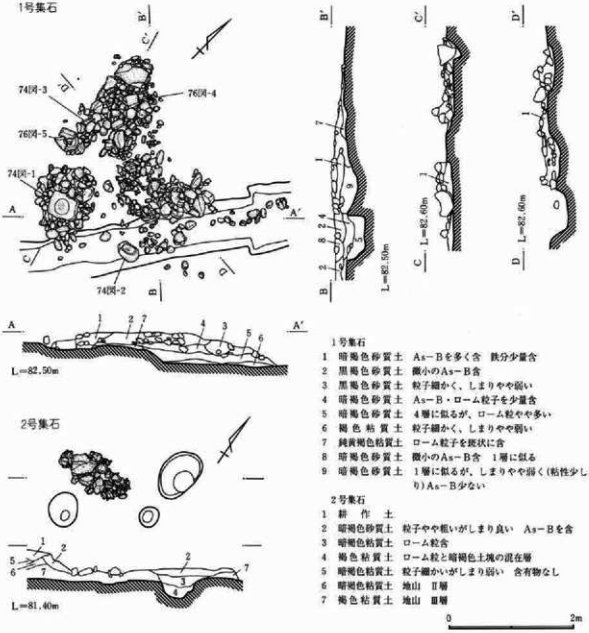
Ⅳ区北西の調査区端で検出された。調査着手時は確認面において自然石が散乱し、凝灰岩製の骨蔵器破片も同様に散布していた。覆土も撹乱を受けたものであり、遺存状態は必ずしも良好とはいえない。これらの自然石・覆土を除去し、下面の検出を試みた結果、おおむね3ヵ所の集石のまとまりを確認できた。それぞれに骨蔵器が散乱した状態で出土し、明らかに集石墓が撹乱を受けた様相を呈していた。

おそらく、この３カ所に連環して、複数の骨蔵器による主体が構築されていたものであり、残念ながら骨蔵器の散乱状態からは原位置を確実に動かされたものと判断できよう。

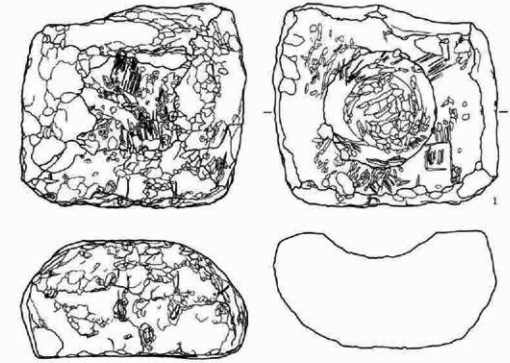
骨蔵器１は蓋部である。白色凝灰岩製で、６面を丁寧に打ち欠き成型する。特に凹部は集中した成型で平滑に仕上げている。２も蓋部であろう。石皿様の形態を呈し、凹部を切り込むように成型する。粗粒安山岩製。３は破片のため全体形状が不明だが、残存部分には磨面が残る。４は身部であろう。残存率は極めて悪い。表面の成型痕も一部のみしか看取できなかったが、骨蔵器１と同様に白色凝灰岩製であり、成型方法などは骨蔵器１との関連が強い。５も身部と捉えた。半欠状態で出土したが、表面凹部上端の蓋を受ける突出が良好に残存する。これも白色凝灰岩製で骨蔵器１や４と強い関連性を持つ。

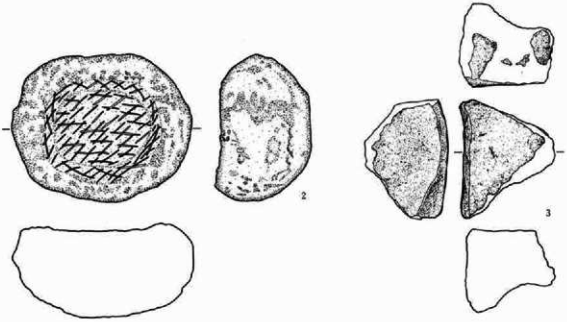
２号集石遺構

Ⅳ区１号掘立柱建物跡と重複し、土坑を伴う集石



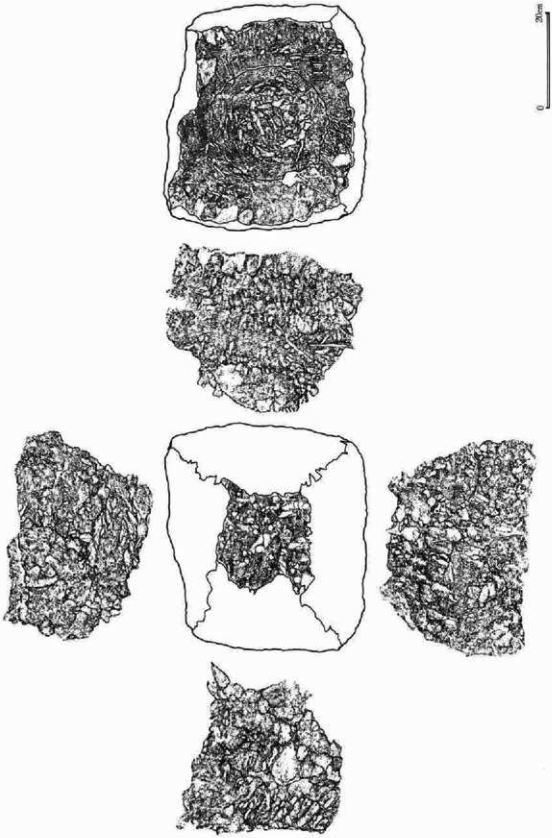
第73図　集　石



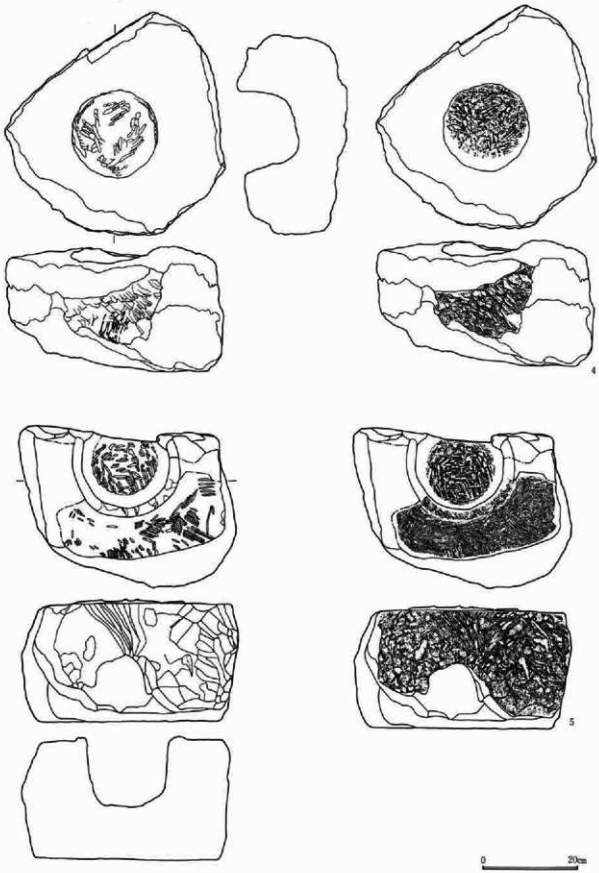


0　20cm

第74図　集石遺構出土遺物



第75図　集石遺構出土遺物－１（原開図）



第76図　集石遺構出土遺物

である。この土坑は不整楕円状で浅い断面形状を呈す。集石は自然石を集めたもので、集石下から近世段階の陶器細片が出土したことから、近世耕作時の1号集石遺構平夷に伴う廃棄によるものであろう。

グリッド出土遺物（第77図）

1はⅣ区集石遺構覆土出土。ナイフ形石器である。黒曜石製の横長剥片を素材とし、全体形状は切出状を呈す。左側縁に細かな調整を施す。右側縁下端の剥離は新しい欠損である。

2は長身の磨製石鏃。薄手で脚部上位に両面から穿孔する。両側縁は直線的に平行し、先端部はわずかに湾曲する。しのぎは不明瞭である。

3は小玉。鉛ガラスか。

4・5は砥石。いずれも両端を欠損し、4の短軸断面は正方形。5は断面長方形で偏平である。

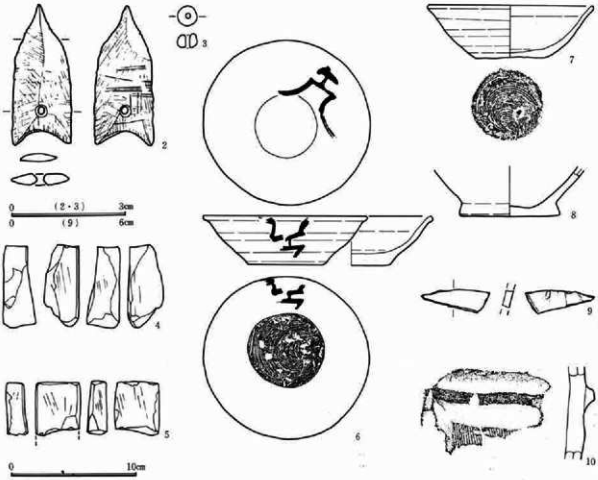
6は須恵器杯。内外面に墨書を施す。右回転。

7は須恵器杯。底部回転糸切り無調整右回転。

8は土師器壺底部か。甕の可能性もある。内外面とも撫で調整。古墳時代。

9は青磁片。龍泉窯系青磁蓮弁文碗であろう。13～14世紀の所産か。

10は埴輪片。家型埴輪か。



第77図　グリッド出土遺物

第3表　旧石器時代の単独石器一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第14図－1	2ブ−10	ナイフ	8.9	2.3	10.85	黒頁
2	2ブ−2	ナイフ	4.7	2.8	14.62	黒頁
3	1ブ−22	台形	3.5	1.8	3.42	黒頁
4	1ブ−73	使剥	4.4	2.8	15.38	黒頁
5	2ブ−303	使剥	8.2	4.6	51.50	黒頁
6	1ブ−31	使剥	7.7	3.4	18.38	黒頁
第15図－1	2ブ−286	縦長剥	8.7	2.4	20.62	黒頁
2	2ブ−159	縦長剥	8.4	2.6	16.66	黒頁
3	1ブ−28	縦長剥	10.8	3.2	27.46	珪質
4	1ブ−29	縦長剥	10.5	2.5	22.40	黒頁
第16図－1	2ブ−248	剥片	3.9	2.8	9.13	黒安
2	2ブ−216	剥片	3.9	3.5	12.30	黒安
3	737.5E-6	剥片	2.4	1.8	3.01	黒頁
4	1ブ−67	剥片	3.0	3.4	6.79	珪質
5	2ブ−244	石核	5.6	6.3	118.84	黒安
第17図－1	2ブ−299	石核	7.3	10.5	40.77	頁岩
2	736E周辺-4	磨石	4.9	5.0	89.87	溶凝
3	740.5E-15	台石	18.6	15.7	4150.00	輝安
4	2ブ−331	台石	25.4	15.6	4333.00	溶凝
5	2ブ−137	石核	7.0	4.6		
第77図－1	725Gトレ覆土内	ナイフ	3.0	2.1	3.91	黒曜石

第4表　旧石器時代の接合資料一覧表

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料－1　(第18～22図)						
1	2ブ−236	砕片	1.8	1.8	1.22	黒安
2	2ブ−193	砕片	1.2	1.1	0.38	黒安
3左	2ブ−171	剥片	4.6	2.9	23.96	黒安
右	2ブ−166	剥片	4.5	3.7	19.46	黒安
下	2ブ−168	剥片	2.6	2.5	4.50	黒安
4	2ブ−155	剥片	6.4	5.0	49.14	黒安
5	2ブ−8	剥片	5.5	3.7	18.34	黒安
6	2ブ−161	砕片	1.8	1.9	1.78	黒安
7左	2ブ−180	剥片	3.5	1.7	4.34	黒安
右	2ブ−33	剥片	3.3	2.0	3.63	黒安
8－1	2ブ−69	剥片	1.8	1.3	0.96	黒安
2左	2ブ−85	剥片	2.1	1.3	1.70	黒安
中	2ブ−92	剥片	1.5	1.0	0.70	黒安
右	2ブ−70	剥片	2.9	1.9	1.35	黒安
3	2ブ−290	石核	3.3	5.5	78.92	黒安
4左	2ブ−62	剥片	1.8	3.3	5.16	黒安
右	2ブ−158	剥片	2.6	4.1	10.17	黒安
5	2ブ−64	砕片	1.3	2.0	1.06	黒安
6	2ブ−59	剥片	1.6	2.0	1.90	黒安
7	2ブ−95	剥片	1.6	3.1	4.20	黒安
8	2ブ−239	石核	2.0	3.9	19.22	黒安
9上	2ブ−54	剥片	3.5	2.8	12.50	黒安
下	2ブ−185	剥片	4.7	4.2	29.88	黒安
10上	2ブ−99	剥片	3.0	2.4	4.79	黒安
下	2ブ−253	剥片	3.5	2.4	6.59	黒安
11上	2ブ−53	剥片	2.0	2.1	3.21	黒安
下	2ブ−23	剥片	1.3	1.8	0.73	黒安
12	2ブ−42	剥片	2.7	3.2	5.68	黒安
13上	2ブ−52	剥片	2.3	2.9	4.20	黒安
中	2ブ−170	剥片	1.9	4.7	10.03	黒安
中	2ブ−169	剥片	3.3	4.9	29.22	黒安
左下	2ブ−243	剥片	2.7	4.5	33.19	黒安
右下	2ブ−7	剥片	2.5	1.6	2.69	黒安
14	2ブ−58	剥片	5.6	4.6	39.52	黒安
15	2ブ−247	剥片	5.0	5.5	33.48	黒安
16－1上	2ブ−292	剥片	1.4	2.8	1.92	黒安
下	2ブ−67	剥片	1.6	2.6	1.89	黒安
2	2ブ−284	砕片	1.0	2.2	1.15	黒安
3	2ブ−305	石核	2.7	6.1	72.13	黒安
17	2ブ−118	剥片	3.1	1.6	5.12	黒安
18	2ブ−142	砕片	1.1	1.8	0.60	黒安
19上	2ブ−156	剥片	5.1	5.5	33.69	黒安
下	2ブ−24	剥片	1.8	2.3	2.05	黒安
裏	2ブ−153	剥片	1.1	1.9	1.04	黒安
20左	2ブ−32	剥片	3.2	2.2	4.42	黒安
右	2ブ−46	剥片	1.3	1.1	0.45	黒安
21	2ブ−282	剥片	4.0	2.7	9.75	黒安
22	2ブ−277	剥片	5.9	3.9	26.76	黒安
23	2ブ−315	剥片	2.0	2.4	1.96	黒安
24	2ブ−212	砕片	2.1	1.7	0.66	黒安
25	2ブ−157	砕片	2.6	1.8	3.45	黒安
26	2ブ−150	剥片	3.5	2.4	10.17	黒安
27	2ブ−19	砕片	0.9	1.6	0.53	黒安
28	2ブ−138	剥片	3.2	3.6	8.50	黒安
29	2ブ−148	砕片	1.9	1.1	0.49	黒安
30左上	2ブ−112	砕片	3.0	1.2	1.49	黒安
右上	2ブ−233	石核	6.3	4.7	35.91	黒安
左下	2ブ−232	石核	2.0	3.9	17.31	黒安
右下	2ブ−198	剥片	2.2	2.1	3.05	黒安
31	2ブ−122	砕片	1.6	1.4	0.83	黒安
32左	2ブ−291	剥片	2.0	2.2	1.71	黒安
右	2ブ−289	剥片	1.9	1.8	1.57	黒安
33上	2ブ−139	剥片	1.8	2.1	2.15	黒安
中	2ブ−176	剥片	1.1	2.7	1.46	黒安
左下	2ブ−74	剥片	1.6	1.3	0.71	黒安
右	2ブ−213	剥片	2.4	4.5	8.93	黒安
34	2ブ−190	砕片	1.4	1.9	1.04	黒安
35	2ブ−234	石核	2.3	4.8	37.80	黒安
接合資料－3　(第23・24図)						
1	2ブ−220	剥片	4.4	3.6	19.82	黒安
2	2ブ−302	剥片	4.7	3.3	14.42	黒安
3	2ブ−287	剥片	4.7	2.7	16.30	黒安
4－1	2ブ−231	砕片	0.9	1.5	0.61	黒安
2	2ブ−240	剥片	1.6	2.7	2.38	黒安
3	2ブ−209	剥片	1.5	2.4	1.82	黒安
4上	2ブ−204	石核	2.7	5.4	19.17	黒安
下	2ブ−268	石核	4.6	5.2	40.33	黒安
5	2ブ−301	剥片	4.0	2.4	3.74	黒安
6	2ブ−311	剥片	6.1	3.4	19.05	黒安
7	2ブ−60	剥片	3.8	2.5	7.21	黒安
8左	2ブ−327	剥片	3.1	2.9	8.05	黒安
右	2ブ−47	砕片	2.2	1.5	1.03	黒安
9上	2ブ−255	剥片	6.1	5.0	22.75	黒安
下	2ブ−254	剥片	6.3	4.1	14.40	黒安
10上	2ブ−309	砕片	1.8	0.5	0.64	黒安
下	2ブ−283	剥片	4.6	2.2	4.29	黒安

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
11左	2ブ-218	剥片	5.0	2.5	9.88	黒安
右	2ブ-141	砕片	2.6	0.9	1.33	黒安
接合資料－2（第25図）						
1	2ブ-130	剥片	2.8	3.6	6.06	黒安
2	2ブ-160	砕片	1.6	1.4	1.10	黒安
3左上	2ブ-39	剥片	1.8	1.5	0.47	黒安
下	2ブ-131	剥片	4.7	4.4	14.07	黒安
右上	2ブ-129	剥片	4.5	4.5	30.22	黒安
	2ブ-167	石核	9.1	11.0	820.90	黒安
接合資料－10（第26図）						
1	2ブ-181	剥片	4.4	2.3	11.22	黒安
2	2ブ-163	剥片	3.3	2.7	5.81	黒安
接合資料－12（第26図）						
	2ブ-219	石核	2.1	2.1	6.88	黒安
	2ブ-147	石核	2.2	1.9	6.43	黒安
1	2ブ-72	砕片	1.3	2.0	1.68	黒安
2	2ブ-17	砕片	2.2	1.6	1.62	黒安
	2ブ-90	砕片	1.1	1.6	1.37	黒安
接合資料－19（第26図）						
左	1ブ-61	砕片	2.0	1.1	0.36	黒安
右	1ブ-82	剥片	2.9	2.5	3.12	黒安
接合資料－13（第26図）						
上	2ブ-16	剥片	2.6	3.9	10.33	黒安
下	2ブ-241	砕片	0.7	1.8	0.49	黒安
接合資料－11（第26図）						
左	2ブ-319	剥片	4.3	2.6	14.44	黒安
右	2ブ-323	剥片	3.7	2.1	4.29	黒安
接合資料－16（第26図）						
上	2ブ-196	砕片	1.6	1.0	0.71	黒安
下	2ブ-88	剥片	3.1	1.2	3.05	黒安
接合資料－15（第26図）						
左	2ブ-25	剥片	2.7	2.8	6.33	黒安
右	2ブ-28	剥片	1.7	1.5	0.93	黒安
接合資料－14（第26図）						
左下	2ブ-215	砕片	2.2	1.7	2.54	黒安
右	2ブ-145	剥片	3.8	3.6	14.15	黒安
接合資料－4（第26図）						
左上	2ブ-300	砕片	2.9	1.3	1.08	黒安
右上	2ブ-310	剥片	4.8	4.4	32.82	黒安
中	2ブ-298	砕片	1.9	1.4	0.92	黒安
左下	2ブ-306	砕片	2.0	2.0	2.03	黒安
右下	2ブ-221	剥片	4.1	3.3	22.41	黒安
接合資料－18（第26図）						
右	1ブ-60	砕片	2.0	1.3	1.67	黒安
左	1ブ-55	剥片	4.1	5.7	53.25	黒安
接合資料－6（第26図）						
上	1ブ-47	剥片	3.0	3.4	9.24	黒頁
下	1ブ-78	剥片	4.3	3.6	15.60	黒頁
接合資料－5（第27図）						
1	2ブ-249	剥片	3.2	1.2	3.20	黒頁
2	2ブ-41	剥片	2.8	1.6	3.24	黒頁
3	2ブ-75	砕片	1.5	1.5	1.42	黒頁
4	2ブ-188	石核	8.0	4.6	73.31	黒頁
接合資料－17（第27図）						
	1ブ-41	加剥	4.8	4.6	23.84	黒安
1	1ブ-54	砕片	1.6	1.3	0.59	黒安
2	1ブ-53	砕片	2.4	1.3	1.26	黒安
3	1ブ-50	砕片	1.2	1.5	0.51	黒安
4	1ブ-59	加剥	4.9	5.0	32.42	黒安
接合資料－7（第27図）						
1	2ブ-66	剥片	2.2	1.6	2.19	黒頁
2	2ブ-230	剥片	1.0	2.3	1.11	黒頁
3	2ブ-80	砕片	1.1	1.9	0.76	黒頁
上	2ブ-297	石核	7.2	6.0	72.76	黒頁
下	2ブ-20	剥片	2.1	3.3	4.26	黒頁
接合資料－8（第27図）						
左	2ブ-307	加剥	3.9	3.7	13.14	黒安
右上	2ブ-250	加剥	2.4	1.8	4.32	黒安
右下	2ブ-103	加剥	2.5	1.5	2.18	黒安
接合資料－9（第27図）						
左	2ブ-48	剥片	3.1	2.8	6.97	黒安
中	2ブ-49	剥片	2.4	1.3	1.76	黒安
右	2ブ-237	剥片	3.5	3.5	11.42	黒安

第5表　縄文土器観察一覧表（第28～31図）

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
1	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	早期
2	Ⅵ区740.5F	①細砂 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
3	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
4	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
5	Ⅴ区738.5E	①細砂 ②良好 ③純橙	〃
6	Ⅴ区736.5C・G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
7	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
8	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
9	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
10	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
11	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
12	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
13	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
14	Ⅴ区736.5G	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
15	Ⅴ区738D	①微砂 ②堅緻 ③純黄橙	前期
16	Ⅴ区738.5D	①細砂②やや軟質③純黄橙	〃
17	Ⅳ区Eトレ・Ⅴ区表採	①砂粒 ②良好 ③純黄橙	〃
18	Ⅳ区Eトレンチ	①細砂 ②良好 ③明赤褐	〃
19	Ⅳ区Eトレンチ	①細砂 ②良好 ③橙	〃
20	Ⅴ区737.5G・738G	①粗砂 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
21	Ⅴ区737.5F・738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
22	Ⅴ区738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
23	Ⅴ区738G・Ⅴ区表採	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
24	Ⅴ737.5E・Ⅵ739.5E	①粗砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
25	Ⅵ区739.5E	①粗砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
26	Ⅴ区738.5F	①砂粒 ②堅緻 ③純褐	〃
27	Ⅲ区727F	①粗砂 ③堅緻 ③橙	〃
28	Ⅴ区737G	①粗砂 ②やや軟質 ③純橙	〃
29	Ⅵ区739.5D・740D	①砂粒②やや軟質③明赤褐	〃
30	Ⅵ区740F・740.5B	①砂粒 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
31	Ⅴ区739D	①粗砂 ②やや軟質 ③純褐	〃
32	Ⅴ区737.5D	①砂粒 ②やや軟質 ③明褐	〃
33	Ⅴ区738.5F	①砂粒 ②やや軟質 ③純橙	〃
34	Ⅴ区Cトレンチ	①砂粒 ②良好 ③純黄橙	〃
35	Ⅲ区725B	①砂粒 ②堅緻 ③明赤褐	〃
36	Ⅲ区725B	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃

番号	出土位置	①胎土　②焼成　③色調	備　考
37	Ⅴ区736.5F・728.5F	①細砂 ②軟質 ③浅黄橙	前期
38	Ⅴ区737.5G	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
39	Ⅲ区725B	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
40	Ⅴ区738G	①細砂 ②堅緻 ③浅黄	〃
41	Ⅴ区737.5F	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
42	Ⅴ区Aトレンチ	①砂粒 ②堅緻 ③純黄橙	〃
43	Ⅴ区738F・Bトレンチ	①砂粒 ②やや軟質 ③浅黄	〃
44	Ⅴ区737.5D	①粗砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
45	Ⅴ区738E	①砂粒 ②堅緻 ③純黄橙	〃
46	Ⅴ区738.5D	①粗砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
47	Ⅴ区738E	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
48	Ⅵ740D	①細砂 ②やや軟質 ③浅黄	〃
49	Ⅴ区Bトレンチ	①細砂 ②堅緻 ③純褐	〃
50	Ⅴ区737.5F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
51	Ⅴ区738F	①粗砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
52	Ⅴ区738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
53	Ⅴ区737F	①砂粒②やや軟質③純黄橙	〃
54	Ⅴ区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
55	Ⅴ区738C	①微砂 ②良好 ③純黄橙	〃
56	Ⅴ区737.5G	①微砂 ②良好 ③純黄橙	〃
57	Ⅴ区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
58	Ⅴ区738G	①微砂 ②良好 ③暗灰黄	〃
59	Ⅴ区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
60	Ⅴ区738F	①微砂 ②良好 ③純黄橙	〃
61	Ⅴ区738F	①微砂 ②良好 ③純黄橙	〃
62	Ⅴ区737.5F	①微砂 ②堅緻 ③灰黄	〃
63	Ⅴ区738F	①微砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
64	Ⅴ区738.5G	①微砂 ②良好 ③橙	〃
65	Ⅴ区737.5F	①微砂 ②良好 ③灰黄	〃
66	Ⅴ区738.5F	①砂粒 ②良好 ③橙	中期
67	Ⅲ区727.5F	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
68	Ⅴ区738C	①砂粒 ②軟質 ③浅黄	〃
69	Ⅴ区738.5F	①砂粒 ②良好 ③橙	〃
70	Ⅴ区Cトレンチ	①細砂③やや軟質③明赤褐	〃
71	Ⅵ740D	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
72	Ⅳ・ⅤEトレンチ	①砂粒 ②堅緻 ③灰白	〃
73	Ⅴ区737.5C	①細砂 ②堅緻 ③純橙	〃
74	Ⅴ区739C	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
75	Ⅲ区727.5B	①細砂 ②堅緻 ③黄橙	後期
76	Ⅲ区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
77	Ⅲ区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
78	Ⅲ区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
79	Ⅲ区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
80	Ⅴ区739.5D	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
81	Ⅲ区726.5D・727G	①細砂 ②堅緻 ③赤褐	〃
82	Ⅲ区726.5E	①細砂 ②堅緻 ③赤褐	〃
83	Ⅴ73C・Ⅵ740E他	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	中期
84	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③浅黄	〃
85	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
86	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
87	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
88	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純橙	〃
89	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
90	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
91	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
92	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純橙	〃
93	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③純黄橙	〃
94	Ⅴ区737C	①粗砂 ②良好 ③橙	〃
95	Ⅰ区714.5B・Eトレンチ	①粗砂 ②やや軟質 ③橙	〃

第6表　縄文時代の単独石器一覧表

掲図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第32図－1	740.5D-19	石鏃	2.1	1.6	1.17	チャート
2	737D-3	石鏃	2.2	1.6	0.76	黒曜石
3	727.5D-2	石鏃	3.2	2.1	1.89	黒安
4	739C-5	石鏃	1.3	1.0	0.26	黒曜石
5	739.5D-37	石鏃	1.7	1.0	0.32	黒頁
6	739C-5	石鏃	3.1	1.7	1.86	黒頁
7	729.5G-3	石鏃	1.5	1.1	0.31	黒曜石
8	736C-1	石鏃	2.5	1.5	1.01	黒頁
9	739.5F-6	石鏃	4.2	1.9	3.77	黒頁
10	738G-29	石鏃	1.6	1.1	0.29	黒曜石
11	740.5E-3	石鏃	1.8	1.6	1.16	チャート
12	740D-46	石鏃	1.7	1.5	1.00	チャート
13	737.5F-8	石鏃	3.0	1.2	1.78	黒頁
14	738C-4	石鏃	3.0	2.1	5.29	チャート
15	737C-18	打斧	7.4	5.3	35.96	ホルン
16	740E-20	打斧	8.5	4.5	50.51	黒頁
17	737F-4	打斧	7.5	5.6	114.89	頁岩
第33図－1	738.5C-1	打斧	14.2	8.0	418.40	砂岩
2	740.5B-2	打斧	17.0	11.0	780.00	灰安
3	727.5F-1	スクレ	7.0	8.1	219.70	黒頁
4	736.5B-1	スクレ	7.0	4.4	37.08	黒頁
5	729C-1	スクレ	9.6	3.9	47.36	黒頁
6	739.5D-82	スクレ	5.6	9.5	85.18	黒頁
7	740D-107	スクレ	6.7	7.7	130.63	黒頁
8	739.5C-2	スクレ	7.6	8.1	151.22	黒頁
9	740D-13	スクレ	5.3	7.0	52.38	黒頁
第34図－1	740.5E-25	スクレ	7.7	7.6	155.93	黒頁
2	737C-3	スクレ	6.4	3.8	25.10	砂岩
3	738.5G-7	スクレ	5.5	6.2	48.25	黒頁
4	739G-2	加剥	4.1	5.0	25.04	硬安
5	740.5D-6	加剥	4.2	5.5	54.55	黒頁
6	737F-5	加剥	5.0	5.2	25.13	黒頁
7	740D-14	加剥	5.5	11.3	99.94	黒頁
8	740.5D-1	加剥	5.5	6.5	51.09	黒頁
9	738E-1	加剥	6.7	9.3	112.67	頁岩
10	740.5E-21	加剥	6.1	7.0	66.45	黒頁
11	736E-1	加剥	5.7	5.5	28.19	黒頁
12	726E-2	加剥	8.5	5.1	40.71	黒頁
13	726.5F-2	加剥	6.7	7.2	68.09	黒頁
14	740.5D-15	加剥	5.3	5.7	47.16	黒頁
15	740D-31	加剥	5.2	5.6	51.36	黒頁
第35図－1	740.5B-1	加剥	3.4	2.5	5.05	チャート
2	740D-156	加剥	2.9	2.1	6.15	チャート
3	738F-53	使剥	5.4	4.7	22.31	黒頁
4	727F-1	使剥	6.1	4.0	22.65	黒頁
5	740G-2	使剥	5.0	4.1	22.39	黒頁
6	740.5F-2	使剥	3.8	3.0	5.35	黒頁
7	740F-3	使剥	4.1	2.4	6.28	黒頁
8	740D-12	使剥	7.5	5.0	42.07	黒安
9	740.5E-8	使剥	6.5	4.4	31.23	黒頁
10	740D-91	使剥	8.0	7.0	102.28	黒頁
11	739.5C-3	使剥	8.2	6.9	80.55	黒頁
12	739.5G-12	使剥	5.0	6.1	27.56	黒頁
13	740D-154	使剥	4.2	5.3	14.42	黒頁
14	740.5E-26	使剥	9.8	8.0	145.87	黒頁
15	740D-56	使剥	4.0	6.9	23.84	黒頁
16	738D-1	使剥	4.5	6.8	25.33	黒頁

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第36図－1	739.5E-3	石核	4.1	7.6	179.40	黒質
2	740.5E-20	石核	5.5	11.3	287.10	黒質
3	738.5G-9	石核	4.0	8.1	236.00	黒質
4	1号集石-6	石核	5.3	8.2	282.70	黒質
5	740.5E-30	石核	2.4	1.9	6.71	黒曜石
6	740F-9	三角錐	11.8	9.3	530.10	黒質
第37図－1	740D-26	三角錐	11.3	5.8	344.20	黒質
2	731A-1	三角錐	8.9	6.4	359.10	黒質
3	740F-26	スタンプ	12.1	8.9	611.50	変安
4	740C-14	スタンプ	10.3	9.7	639.70	石閃

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第38図－1	740.5C-9	スタンプ	10.0	4.7	300.60	ホルン
2	740E-30	磨石	13.3	7.9	952.30	粗安
3	726B-2	磨石	10.6	9.9	530.00	粗安
4	740F-8	磨石	8.4	7.5	448.70	粗安
5	736E-3	磨石	14.7	11.0	920.00	粗安
6	740.5D-7	磨石	6.7	4.4	92.45	輝緑
7	739.5C-4	磨石	10.4	4.6	177.42	粗安
第39図－1	740.5D-13	敲石	11.4	5.7	410.00	粗安
2	728A-2	磨石	10.2	12.2	1650.00	粗安
3	740E-1	その他	7.3	5.9	83.91	砂岩

第７表　古墳時代以降の遺物観察表

１号住居跡（第48～50図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第48図１ 土師器杯	口径：11.8 器高：3.8	覆土 ほぼ完形	口縁部内湾、体部偏平。口縁部内外横撫で。底部外面削り。内底面は凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好　③橙
第48図２ 土師器杯	口径：(13.0) 器高：(3.0)	覆土 1/4残存	口縁部僅か内湾、体部偏平。口縁部内外横撫で。底部外面削り。内底面は平滑だが凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好 ③橙
第48図３ 土師器杯	口径：(12.8) 底径：(12.4) 器高：(3.2)	覆土 1/5残存	口縁部外反気味に直立。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で、体部外面削り、内面撫で。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第48図４ 土師器杯	口径：12.4 底径：13.6 器高：5.0	床直・覆土 3/4残存	口縁部内傾。体部身深。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で、体部外面削り後雑に撫で。内面横撫で。内底面凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③にぶい橙
第48図５ 土師器杯	口径：11.5 底径：13.0 器高：5.0	床直・貯蔵穴・ 覆土 ほぼ完形	口縁部内傾。体部身深。外稜は不明瞭。器壁外面荒れ、内面横撫で後黒色処理。内底面凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③橙
第48図６ 須恵器横瓶	器高：(12.8)	覆土 胴部破片	杯蓋の可能性もある。内面の轆轤痕明瞭。外面自然釉。左回転。	①透明・白色鉱物粒子 ②還元焔　堅緻　③灰
第48図７ 土師器甕	口径：(15.0) 器高：(4.9)	床直 口縁部破片	口縁部外反。頸部～体部張る。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好　③にぶい橙
第48図８ 土師器甕	口径：(12.4) 器高：(6.1)	覆土 口縁部破片	小型甕。口縁部は僅か外反。体部直立気味。口縁部内外横撫で。体部横位削り。	①白色・黒色・透明鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　堅緻　③明赤褐
第48図９ 土師器甕	口径：17.0 底径：6.8 器高：19.0	床直 完形	小型甕。口縁部外傾。頸部屈曲。体部張る。口縁部内外横撫で。体部縦位削り後下半は雑な撫で。体部内面撫で。	①透明・白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③淺黄橙　④胴部最大径：17.7cm
第48図10 土師器甕	口径：(23.1) 器高：(12.0)	床直・覆土 口～胴部破片	丸胴甕。口縁部外傾。頸部緩屈曲。体部張る。口縁部内外横撫で。体部縦位削り。体部内面斜め撫で。内面剥落著しい。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙
第48図11 土師器甕	口径：18.6 底径：5.7 器高：38.2	床直・柱穴・ 覆土 ほぼ完形	長胴甕。口縁部外反。頸部緩屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫で。体部縦位斜位削り。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焔 ③橙　④胴部最大径：20.5cm

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第45図12 土師器甕	口径：18.2 器高：(9.0)	床直・覆土 口縁部残存	口縁部外傾。頸部屈曲。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面指ナデ。内面器壁荒れ。	①白粒子、黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③浅黄橙
第45図13 土師器甕	口径：(17.0) 器高：(11.1)	床直・覆土 口～胴部破片	口縁部外反。頸部緩屈曲。体部は張る。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面縦位撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③にぶい黄橙
第45図14 土師器甕	口径：16.4 器高：(12.2)	貯蔵穴 体部下半欠損	小型甕。口縁部外傾。頸部緩屈曲。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面横撫で。	①白粒子、白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③橙
第45図15 土師器甕	底径：7.0 器高：(7.4)	貯蔵穴・覆土 底部残存	14と同一個体。外面縦位削り、内面撫で。底部外面も不定方向に削る。	①白粒子、白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　良好　③赤褐
第45図16 土師器甕	底径：(6.5) 器高：(2.5)	覆土 底部破片	内外面とも撫で調整か。底面の器厚薄い。	①白色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻　③浅黄橙
第45図17 土師器甕	底径：(5.6) 器高：(2.9)	床直 底部破片	外面削り後撫で。内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好　③にぶい黄橙
第45図18 土師器甕	口径：19.5 底径：6.5 器高：39.2	床直 完形	口唇部丸みを帯びる。口縁部外傾。頸部屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面横斜位撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焔 ③灰黄褐　④胴部最大径：21.5cm
第45図19 土師器甕	口径：18.7 底径：6.1 器高：38.0	柱穴・覆土 ほぼ完形	口唇部丸みを帯びる。口縁部外傾。頸部屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り、下半は縦状の撫で。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焔 ③橙　④胴部最大径：20.2cm
第50図20 土師器甕	口径：15.5 底径：5.6 器高：11.2	柱穴・覆土 3/5残存	口縁部外反。体部丸みを帯びる。底面中心は僅かに凹み、小穴を穿つ。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り後下半指撫で。内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③灰黄
第50図21 土師器甕	口径：(22.4) 器高：(7.0)	覆土 口縁部破片	口縁部緩外反。口縁部内外横撫で後、体部縦位研磨。内面も縦位研磨。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻　③褐灰
第50図22 土師器甕	口径：(29.0) 器高：(11.5)	床直・柱穴・覆土 口～胴部破片	口縁部緩外反。口縁部内外横撫で、体部縦位削り後縦位の雑な研磨。内面も縦位研磨。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③明赤褐
第50図23 土師器甕	口径：23.5 底径：8.8 器高：34.4	床直・覆土 ほぼ完形	口縁部外傾。頸部緩屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り、下半に撫で。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焔 ③にぶい黄褐　④胴部最大径：21.2cm
第50図24 土師器甕	口径：(20.0) 器高：(23.1)	床直・柱穴・覆土 1/3残存	口唇部平坦面を持つ。口縁部外傾。頸部緩屈曲。体部上位最大径。体部外面削り後不明瞭な撫で。下半に横位・斜位の削り。内面縦位研磨。	①白粒子、透明・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③淡黄

2号住居跡（第53・54図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第53図1 土師器杯	口径：12.5 底径：11.0 器高：4.5	床直・覆土 ほぼ完形	口縁部外傾。体部身深。外稜は明瞭。口縁部内外面中位に浅い稜。口縁部内外横撫で。体部外面削り、内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好 ③橙

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第53図2 土師器杯	口径：12.9 底径：11.6 器高： 5.2	床直・貯蔵穴 ほぼ完形	口縁部外傾。体部身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面丁寧な撫でで平滑。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③にぶい褐
第53図3 土師器杯	口径：13.6 底径：12.3 器高： 5.0	覆土 4/5残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は明瞭で尖る。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面丁寧な撫でで平滑。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第53図4 土師器杯	口径：11.8 底径：10.9 器高： 3.9	床直 4/5残存	口縁部直立気味に外傾。体部浅い。口縁部下位に撫でによる凹線。外稜はやや不明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面は撫で。体部内外面に縦状の擦痕。使用痕か。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③にぶい黄橙
第53図5 土師器杯	口径：(12.6) 底径：(11.0) 器高： 4.8	覆土 1/3残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は明瞭。口縁部中位に撫でによる浅い稜。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。	①透明・白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第54図6 土師器杯	口径：(13.4) 底径：(12.5) 器高：(4.1)	床直・貯蔵穴・ 覆土 1/4残存	口縁部外傾。口辺部僅か消曲。外稜は明瞭。体部はやや浅い。口縁部内外横撫で。体部外面削り。	①白色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③橙
第54図7 土師器杯	口径：(11.7) 底径：(10.6) 器高：(4.5)	床直 破片	口縁部緩外反。体部身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り後撫で。体部内面平滑。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③明赤褐
第54図8 土師器杯	口径：(13.0) 底径：(12.6) 器高：(4.2)	床直・覆土 口縁部1/3残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は尖鋭で明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り後撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③明赤褐
第54図9 土師器杯	口径：(12.6) 底径：(11.0) 器高：(3.8)	覆土 破片	口縁部外傾。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部中位に撫でによる稜。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第54図10 土師器杯	口径：(13.6) 底径：(12.6) 器高：(3.8)	覆土 破片	口縁部外傾。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第54図11 土師器杯	口径：(11.1) 底径：(9.9) 器高：(3.0)	覆土 破片	口縁部緩外反。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面は削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③橙
第54図12 土師器 小型甕	口径：11.9 底径： 5.2 器高： 9.0	竈床直・覆土 3/5残存	口縁部直立気味に緩外反。肩部に最大径。口縁部内外横撫で。体部縦位削り後上半に横位削り。体部内面横撫で。	①白色・透明・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい橙
第54図13 土師器甕	口径：(13.0) 器高：(5.2)	床直 口縁部破片	口縁部外反。体部直線的落ちる。口縁部内外横撫で。体部上半撫で。内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　軟質　③にぶい橙
第55図14 土師器甕	口径： 23.2 器高：(13.5)	床直・貯蔵穴 口～胴部破片	丸胴甕。口縁部強く外反。頸部屈曲。体部中位に最大径。口縁部内外横撫で。体部外面横位削り。内面横位撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③浅黄橙
第55図15 土師器甕	口径：(15.0) 器高：(3.2)	床直 口縁部破片	口唇部内傾。口縁部は緩外反。口縁部内外横撫で。外面に指頭痕。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質　③にぶい黄橙
第55図16 土師器甕	底径：(6.8) 器高：(5.8)	床直・覆土 底部破片	長胴甕か。外面縦位削り。内面撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質　③にぶい橙

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第55図17 土師器甕	底径：(7.3) 器高：(24.0)	床直・貯蔵穴 胴～底部1/3残存	長胴甕。底部突出。外面上半縦位・斜位削り、下半横位削り。底部上は縦位撫で。内面は撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙
第55図18 土師器甕	器高：(9.1)	床直・貯蔵穴・覆土 頸部破片	長胴甕。外面縦位削り。内面斜位撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③にぶい黄橙
第55図19 紡錘車	径：4.3 高：1.9 重：43.89 g	床直 完形		①蛇紋岩

3号住居跡（第57図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第57図1 土師器杯	口径：13.0 器高：4.4	床直 ほぼ完形	蓋状杯。口縁部は丸み を帯びる。外稜・屈曲部を持たず、器厚は比較的厚い。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面は撫で。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　軟質 ③にぶい黄橙
第57図2 土師器椀	器高：(6.2)	床直 口縁部のみ欠損	口縁部短く外傾。屈曲を持つ。体部は身深で張り、球形を呈す。口縁部内外横撫で。体部外面削り後撫で。線状使用痕が認められる。体部内面の剥落著しい。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　軟質 ③淡黄
第57図3 土師器杯	口径：(11.5) 底径：(8.5) 器高：4.8	床直・覆土 1/2残存	口縁部直立気味に外反。体部との境に屈曲を持たせる。内外面とも丁寧な横撫で。底面平底で削り調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙
第58図4 土師器杯	口径：(13.0) 器高：(11.6) 器高：(3.0)	覆土 破片	口縁部外反。外稜は明瞭で矣る。口縁部内外横撫で。体部は削りか。	①白色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第58図5 土師器甕	口径：18.2 器高：(18.0)	床直・貯蔵穴・覆土 口～胴部破片	長胴甕。口縁部緩外反。体部との境に凹みを持つ。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面縦位・斜位撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好 ③淡黄
第58図6 土師器 手捏ね	口径：3.4 器高：(2.6)	覆土 1/4残存	口縁部強外反。体部直立。雑な作り。内外面とも指撫で調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　良好 ③橙

4号住居跡（第58図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第58図1 砥石	長：2.8 幅：2.6	覆土 破片	上端のみ残存。断面形はほぼ正方形を呈する。	①砥沢石 ④重：17.13 g

6号井戸（第68図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図1 土師器杯	口径：15.6 底径：16.0 器高：5.7	覆土 3/4残存	口縁部直立気味に外反。体部は身深ながら、やや偏平で底面は安定。外稜は不明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り、内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③灰黄褐

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図2 土師器杯	口径：(12.1) 底径：(10.8) 器高： 4.8	覆土 1/2残存	口縁部外傾。体部は身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。極一部に研磨。	①白色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③橙
第68図3 土師器甕	口径：15.8 底径： 9.6 器高：19.5	床直・覆土 ほぼ完形	小型甕。口縁部は短く外反。体部は直立し、底部は丸みを帯び不安定。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面縦位・横位撫で。底部外面も削りを施す。	①白粒子，白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③淡黄
第68図4 土師器甕	口径：23.2 底径： 7.1 器高：30.6	覆土 ほぼ完形	丸胴甕。口唇部丸みを帯び、口縁部外反。最大径は体部中位。底部は僅突出。口縁部内外横撫で。体部外面横位削り後横撫で。下半は丁寧。体部内面横撫で。	①黒色・白色鉱物粒子，白粒子 ②酸化焔　良好 ③淡黄　④胴部最大径：30.3cm

土坑 出土遺物（第68図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図5 土師器杯	口径：(11.8) 器高： 3.7	21号土坑 1/2残存	口縁部内湾。体部は浅く偏平。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子，白粒子 ②酸化焔　堅緻　③橙
第68図6 磁器皿		5号土坑床直 破片	青磁(白磁)片。皿片か？	

グリッド出土遺物（第77図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第77図2 磨製石鏃	長：3.7 幅：1.6 重：1.46g	738EGr 完形	薄手で脚部上位に両側から穿孔する。両側縁は直線的に平行し、先端部は僅かに湾曲する。しのぎは不明瞭である。	①変玄武岩
第77図3 小玉	径：0.54 高：0.40	734.5DGr 完形		①翡翠 ④重：0.12g
第77図4 砥石	長： 6.5 幅： 2.8	738.5GGr 一部欠損	両端を欠損。短軸断面は正方形を呈する。	①砥沢石 ④重：54.05g
第77図5 砥石	長： 4.2 幅： 3.6	739.5GGr 破片	両端を欠損。断面は長方形で偏平である。	①砥沢石 ④重：38.38g
第77図6 須恵器杯	口径：13.1 底径： 6.0 器高： 3.9	I区 完形	底部回転糸切り無調整右回転。内外面に墨書を施す。	①白色・黒色鉱物粒子 ②還元焔　やや軟質 ③淡黄　④内外面共に墨書あり。
第77図7 須恵器杯	口径：13.2 底径： 5.4 器高： 4.2	I区 口縁部一部欠損	底部回転糸切り後撫で調整。右回転。	①白色鉱物粒子 ②還元焔　良好 ③にぶい黄橙
第77図8 土師器壺	底径：(8.0) 器高：(3.8)	II区 底部	甕の可能性もある。内外面とも撫で調整。	①黒色・透明・白色鉱物粒子 ②酸化焔　良好　③にぶい橙
第77図9 青磁碗		VI区740.5CGr 破片	龍泉窯系青磁連弁文碗であろう。13～14世紀の所産か。	
第77図10 形象埴輪		I区 破片	外面に斜方向の刷毛目、内面撫で。突帯がT字を横にした形で取り付く。横先端部が直角に近い角度で折れ曲がることから、家形埴輪の一部と考えられる。	①中・細砂、黒色鉱物粒子 ②酸化焔 ③橙

1号集石（第74・76図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第74図 1 骨蔵器蓋部	縦：43.1 横：48.2 高：25.0	覆土 ほぼ完形	①白色凝灰岩 ④重：57.0kg
第74図 2 骨蔵器蓋部	縦：39.2 横：31.4 高：21.0	覆土 完形	①粗粒安山岩 ④重：26.1kg
第74図 3 骨蔵器	縦：25.7 横：20.2 高：17.9	覆土 破片	①粗粒安山岩 ④重：6.9kg
第76図 4 骨蔵器身部	縦：47.6 横：47.7 高：26.4	覆土 欠損	①白色凝灰岩 ④重：46.8kg
第76図 5 骨蔵器身部	縦：(35.2) 横：46.4 高：26.4	覆土 2/3残存	①白色凝灰岩 ④重：42.7kg

旧石器時代

器 種 73点 （1号ブロック）

②	剥 片 17点(23.29%)	砕 片 42点(57.53%)	礫片 7点 (9.59%)

① 台形石器 1点(1.37%)

② 縦長剥片 2点(2.74%)
使用痕を持つ剥片 2点(2.74%)
加工痕を持つ剥片 2点(2.74%)
} 8.22%

石 材 73点 （1号ブロック）

黒色安山岩 36点(49.32%)	黒色頁岩 14点 (19.17%)	珪質頁岩 7点 (9.59%)	①	②	③	④	⑤

① 砂 岩 5点(6.85%)
② 頁 岩 3点(4.11%)
③ 粗粒安山岩 3点(4.11%)
④ チャート 2点(2.74%)
溶結凝灰岩 2点(2.74%)
} 5.48%
⑤ 珪質変質岩 1点(1.37%)

台形石器 1点

黒色頁岩 1点(100%)

剥 片 17点

黒色安山岩 7点(41.18%)	珪質頁岩 5点(29.41%)	黒色頁岩 4点(23.53%)	①

① 砂 岩 1点(5.88%)

縦長剥片 2点

黒色頁岩 1点(50%)	珪質頁岩 1点(50%)

砕 片 42点

黒色安山岩 27点(64.29%)	①	②	③	④

① 黒色頁岩 6点(14.29%)
② 砂 岩 3点(7.14%)
③ チャート 2点(4.76%)
頁 岩 2点(4.76%)
} 9.52%
④ 溶結凝灰岩 1点(2.38%)
珪質変質岩 1点(2.38%)
} 4.76%

加工痕を持つ剥片 2点

黒色安山岩 2点(100%)

礫 片 7点

粗粒安山岩 2点(28.58%) 溶結凝灰岩 2点(28.58%) } 57.16%	①

① 砂 岩 1点(14.28%)
頁 岩 1点(14.28%)
珪質変質岩 1点(14.28%)
} 42.84%

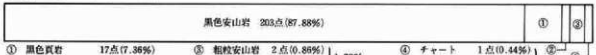
使用痕を持つ剥片 2点

黒色頁岩 2点(100%)

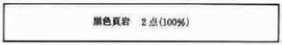
第78図 石器の器種と石材構成

器　種　231点　（2号ブロック）

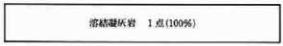
石　材　231点　（2号ブロック）



縦長剥片　2点

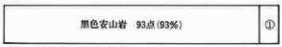


台　石　1点



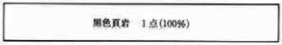
ナイフ形石器　2点

剥　片　100点

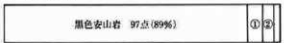


① 黒色頁岩　7点(7%)

使用痕を持つ剥片　1点

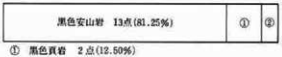


砕　片　109点



① 黒色頁岩　3点(2.75%)
ホルンフェルス　3点(2.75%)
5.5%
② 粗粒安山岩　2点(1.83%)
黒曜石　2点(1.83%)
3.66%
③ チャート　1点(0.72%)
赤色珪質岩　1点(0.72%)
1.84%

石　核　16点



① 黒色頁岩　2点(12.50%)
② 頁　岩　1点(6.25%)

第79図　石器の器種と石材構成

器 種 43点 （ブロック外）

①	②	砕片 5点 (11.63%)	礫 片 33点(76.74%)

① 台 石 1点(2.33%)
磨 石 1点(2.33%) } 4.66%
② 剥 片 3点(6.97%)

石 材 43点 （ブロック外）

粗粒安山岩 11点(25.58%)	チャート 10点(23.26%)	砂 岩 9点(20.93%)	溶結凝灰岩 6点(13.95%)	①	②	③

① 黒色頁岩 3点(6.97%)
② 黒色安山岩 2点(4.65%)
③ 珪質頁岩 1点(2.33%)
ホルンフェルス 1点(2.33%) } 4.66%

磨 石 1点

溶結凝灰岩 1点(100%)

砕 片 5点

砂 岩 2点(40%)	黒色頁岩 1点(20%)	黒色安山岩 1点(20%)	チャート 1点(20%)

台 石 1点

粗粒安山岩 1点(100%)

礫 片 33点

粗粒安山岩 10点(30.30%)	チャート 9点(27.27%)	砂岩 7点 (21.21%)	①	②

① 溶結凝灰岩 5点(15.15%)
② 珪質変質岩 1点(3.04%)
ホルンフェルス 1点(3.04%) } 6.08%

剥 片 3点

黒色頁岩 2点(66.67%)	黒色安山岩 1点(33.33%)

縄文時代

器 種 572点

①	②	③	④	使用痕を持つ剥片 69点(12.06%)	⑨	剥 片 363点(63.46%)	⑪

① 石 鏃 26点(4.55%)
② 打製石斧 15点(2.62%)
③ スクレイパー 15点(2.62%)
④ 加工痕を持つ剥片 34点(5.94%)
⑤ 石 棒 6点(1.05%)
⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
④ スタンプ形石器 3点(0.52%)
⑦ 三角錐形石器 3点(0.52%)
⑧ 磨石類 12点(2.10%)
⑨ 敲 石 1点(0.17%)
⑩ 小形の石器 4点(0.70%)
⑪ 砕 片 11点(1.92%)
⑫ 焼 礫 8点(1.40%)
⑫

石 材 572点

黒色頁岩 248点(43.36%)	チャート 186点(32.52%)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪

① 黒曜石 34点(5.94%)
② 粗粒安山岩 20点(3.50%)
③ 砂 岩 18点(3.15%)
④ 黒色安山岩 16点(2.80%)
⑤ ホルンフェルス 12点(2.10%)
⑥ 頁 岩 11点(1.92%)
⑦ 灰色安山岩 5点(0.87%)
⑧ 細粒安山岩 5点(0.87%)
⑨ 輝緑凝灰岩 3点(0.52%)
⑩ 変質珪質岩 2点
変質頁岩 2点
珪質頁岩 2点
溶結凝灰岩 2点 } 1.41%
⑪ 石 英 1点
石英片岩 1点
石英閃緑岩 1点
輝緑岩 1点
緑色片岩 1点
黒色片岩 1点 } 1.06%

第80図 石器の器種と石材構成

石　鏃　26点

チャート　12点(46.15%)	黒曜石 8点(30.77%)	黒色頁岩 5点 (19.23%)	①

① 黒色安山岩　1点(3.85%)

三角錐形石器　3点

黒色頁岩　3点(100%)

打製石斧　15点

黒色頁岩　6点(40%)	①	②

① ホルンフェルス　2点
頁　岩　2点
灰色安山岩　2点
(40%)

② 粗粒安山岩　1点
細粒安山岩　1点
砂　岩　1点
(20%)

磨　石　12点

粗粒安山岩　9点(75%)	①

① 変質珪質岩　1点
輝緑岩　1点
黒色片岩　1点
(25%)

スクレイパー　15点

黒色頁岩　14点(93.33%)	①

① 砂　岩　1点(6.67%)

敲　石　1点

粗粒安山岩　1点(100%)

加工痕を持つ制片　34点

黒色頁岩　22点(64.71%)	①	②	③

① チャート　3点(8.82%)
② 黒曜石　2点
粗粒安山岩　2点
(11.78%)

③ 黒色安山岩　1点
頁　岩　1点
砂　岩　1点
ホルンフェルス　1点
緑色片岩　1点
(14.70%)

焼　礫　8点

粗粒安山岩　5点(62.5%)	溶結凝灰岩 2点(25%)	①

① 石英片岩　1点(12.5%)

使用痕を持つ制片　69点

黒色頁岩　60点(86.96%)	①	②	③

① ホルンフェルス　3点(4.35%)
② 黒色安山岩　2点(2.90%)

③ 黒曜石　1点
砂　岩　1点
灰色安山岩　1点
変質安山岩　1点
(5.8%)

制　片　363点

チャート　160点(44.08%)	黒色頁岩 129点(35.54%)	①	②

① 黒曜石　20点(5.51%)
② 砂　岩　14点(3.86%)
③ 黒色安山岩　12点(3.31%)
④ 頁　岩　8点(2.20%)
⑤ ホルンフェルス　5点(1.38%)
⑥ 粗粒安山岩　4点(1.10%)

⑦ 灰色安山岩　2点
細粒安山岩　2点
珪質頁岩　2点
輝緑凝灰岩　2点
(2.2%)

⑧ 変質珪質岩　1点
溶結凝灰岩　1点
(0.55%)

石　核　6点

黒色頁岩　4点(66.67%)	黒曜石 2点(33.33%)

小形の石器　4点

チャート　2点(50%)	黒色頁岩 1点(25%)	黒曜石 1点(25%)

砕　片　11点

チャート　6点(54.55%)	黒色頁岩 4点(36.36%)	①

① 石　英　1点(9.09%)

スタンプ形石器　3点

ホルンフェルス 1点(33.33%)	変質安山岩 1点(33.33%)	石英閃緑岩 1点(33.33%)

礫　3点

チャート　3点(100%)

第81図　石器の器種構成

第6節　胎土分析

一遺跡から出土した土器はその器形・整形技法などで他の遺跡出土土器との共通性が指摘され、空時的な位置を充てられてきた。近年は、この器形などとの比較に加え、土器の胎土の特徴やその含有物の組成比率などから、各個体の産地を同定する作業を有効な手段としている。

恐らく土師器研究においても、産地の同定・供給範囲・生産量を加味した総合的な見地から、各遺跡出土土師器の属性分析の視野が広げられ、その研究も新たな段階を迎えようとしているのであろう。

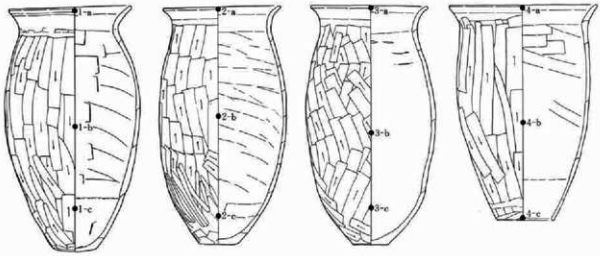
今回書上本山遺跡の古墳時代出土土器の胎土分析を行うにあたっては、その出土量が他遺跡に比して少ないことからも、生産地同定を試みるには資料の量的な制約を受ける前提を持っていた。ここで、胎土分析の視点を従来の生産地同定や他遺跡との比較を主眼とせず、一軒の住居跡から出土した土器という限定した空間と時間を提供する資料をもって、かつ、一器種に限った分析を試みることによって、本遺跡の古墳時代後期の土師器胎土の一側面を明らかにすることを目的とした。

また、一個体の土器はその製作法から同一の粘土を使用しなければ焼成段階で破損することが知られている。故に、胎土分析の資料採集も一個体に一資料という前提がある。

しかし、我々が取り扱う土器の中には一個体の色調が土器の上下で著しく違うものも認められ、この現象を我々は二次焼成による色調変化と捉えていた。確かに、通常二次焼成による色調変化は土器の器表面を分けており、この色調変化を使用痕跡と看取し、その土器の使用状態が想起できるのであるが、果たして、その全てが使用痕によるものかも立証されてはいない。

ここで、書上本山遺跡1号住居跡の土師器長胴甕に注目すると、明らかに胴部下半から底部に至る色調が口縁部や胴部上半と差が生じていた。この長胴甕の各部位の胎土を分析することによって、一個体内の粘土使用状況が把握できるものとした。

分析にあたっては、1号住出土の長胴甕3個体を選び、また、若干ながら色調差が認められる甑を加えた。資料採集箇所は3箇所とし、口縁部・胴部中位・胴部下位を選んだ。　(山口)



1-a 鈍橙
1-b 橙
1-c 鈍褐

2-a 橙
2-b 橙
2-c 鈍橙

3-a 明褐
3-b 鈍褐
3-c 鈍橙

4-a 鈍橙
4-b 鈍橙
4-c 鈍褐

第82図　胎土分析資料

出土土器胎土分析鑑定報告

(株)第四紀 地質研究所 井上　巌

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第8表胎土性状表に示すとうりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10m/mの試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1－2　X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製ＪＤＸ－8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target：Ｃu、Filter：Ｎｉ、Voltage：40Ｋv、Current：30mＡ、ステップ角度：0.02°、計数時間：0.5SEC。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製Ｔ－20を用い、倍率は、35, 350, 750, 1500, 5000, の5段階で行い、写真撮影をした。

35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2　実験結果の取扱い

実験結果は第8表胎土性状表に示すとうりである。

第8表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分類

1）Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム（第84図）

参考図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb）のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトはMo／Mo+Mi+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は参考図に示すとうりである。

2）Mo-Ch、Mi-Hb菱型ダイアグラム（第85図）

参考図に示すように菱型ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）のうち、a）3成分以上含まれない、b）Mont、Chの2成分が含まれない、c）Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo／Mo+Ch＊100と計算し、Mi，Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi，Hb，Ch，の4成分を含み、各辺はMo，Mi、Hb，Ch，のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は参考図に示すとうりである。

2－2　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c）焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第8表の右端の備考に理由を記した。

2－3　タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

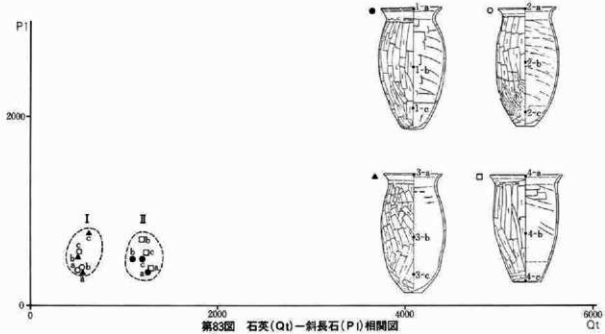
タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合いにである。なお、タイプ分類のA，B，C，などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3　実験結果

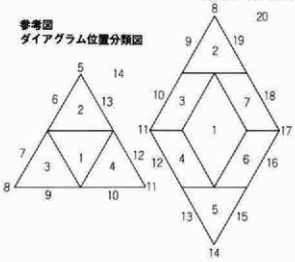
3－1　タイプ分類

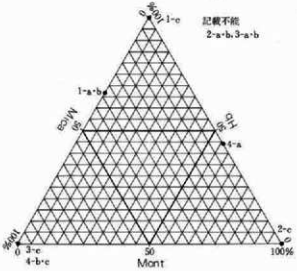
書上本山遺跡より出土した土器4点について次のような目的をもって分析を行った。



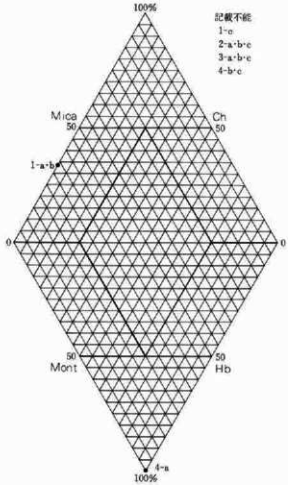
第83図　石英(Qt)ー斜長石(Pl)相関図

参考図
ダイアグラム位置分類図





第84図　Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム位置分類図



第85図　Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム位置分類図

第8表　胎土性状表

試料No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物						ガラス	備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Qt	Pl		
書上1－a	B	Ⅲ	6	10		81	163	124	1247	338	中粒	中粒砂，砕層性粘土
1－b	B	Ⅲ	6	10		76	157	114	1107	482	中粒	中粒砂，砕層性粘土
1－c	A	Ⅲ	5	20			103		1191	482	中粒	中粒砂，砕層性粘土
2－a	F	Ⅲ	14	20					523	366	中粒	細粒砂，砕層性粘土
2－b	F	Ⅲ	14	20					543	394	中粒	細粒砂，砕層性粘土
2－c	D	Ⅲ	11	20	111				526	544	中粒	中粒砂，砕層性粘土
3－a	F	Ⅲ	14	20					507	368	中粒	中粒砂，砕層性粘土
3－b	F	Ⅲ	14	20					520	501	中粒	中粒砂，砕層性粘土
3－c	C	Ⅲ	8	20		87			634	653	中粒	中粒砂，砕層性粘土
4－a	E	Ⅲ	12	14	114		89		1282	284	中粒	中粒砂，砕層性粘土
4－b	C	Ⅲ	8	20		103			1189	683	中粒	中粒砂，砕層性粘土
4－c	C	Ⅲ～Ⅳ	8	20		169			1237	347	細粒	中粒砂，砕層性粘土

焼成ランク　Mu：Ⅰ　Mu－Cr：Ⅱ　Cr－glass：Ⅲ　glass：Ⅳ　原土：Ⅴ
Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石　Ch：緑泥石　Qt：石英　Pl：斜長石

各々の土器は胴部より幾分下で胎土が異なっているように見受けられた。上部と下部で使用している胎土が異なるものであるかどうかを判別するために、土器の上部、中部、下部の3箇所について分析を行った。各土器については、例えば、1の土器については上部より1－a、1－b、1－cとした。胎土の境界はbとcの間にあり、cが異質と言うことになる。

土器胎土は第8表胎土性状表に示すように、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類と、焼成ランクに基づいてA～Fの6タイプに分類された。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはⅢとあまり高くない。

Aタイプ…書上1－c
Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ…書上1－a，1－b
Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Cタイプ…書上3－c，4－b，4－c
Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ…書上2－c
Mont 1成分を含み、Mica, Hb, Chの3成分に欠ける。

Eタイプ…書上4－a
Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

Fタイプ…書上2－a，2－b，3－a，3－b
Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

おもに、$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$（アルミナゲル）で構成される。

書上－1の土器は1－aと1－bの上部はBタイ

プで構成され、下部の1－cはAタイプで構成され、境界より上部と下部では胎土の組成が異なっている。

書上－2も同様に、2－aと2－bの上部はFタイプ、下部の2－cはDタイプで構成され、胎土の組成は上部と下部とでは異なっている。

書上－3も同様に、3－aと3－bの上部はFタイプ、下部の3－cはCタイプで構成され、胎土の組成は上部と下部とでは異なっている。

書上－4は上部の4－aがEタイプであるが、中部と下部はCタイプで構成され、上記3点の土器とは異なった結果を示している。

以上の結果から明らかなように、土器の上部と下部とでは胎土の組成が異なり、2種類の胎土を使用して一個体の土器を製作していることがわかる。

3－2　石英(Qt)－斜長石(P1)の相関について（第83図）

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英－斜長石比を有しているといえる。

この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

第83図のQt－P1相関図に示すように、ⅠとⅡの2つのグループに分類された。

Ⅰグループ…書上2－a，2－b，2－c，3－a，3－b，3－c
このグループには書上－2と3の土器の上部から下部の分析した各々3箇所がすべて含まれている。

Ⅱグループ…書上1－a，1－b，1－c，4－a，4－b，4－c
このグループには書上－1と4の土器の上部から下部の分析した各々3箇所すべてが含まれている。

Ⅰグループの土器の上部はすべてFタイプであり、下部は2－cがDタイプ、3－cがCタイプと異なっているが、全体に胎土の使い方は似ている。

Ⅱグループの書上－1はⅠグループと同じように上部はBタイプ、下部はAタイプと異なっている。書上－4は最上部がEタイプ、中部と下部がCタイプと異なっている。

この様にみてくると、同じ土器においては胎土の組成が異なっても砂の混合比は同じであるという特徴が認められる。

4　まとめ1

i）　土器胎土はA～Fの6タイプに分類された。各土器においては上部と下部とでは胎土の組成が異なり、明らかに2種類の胎土が使用されていることがタイプ分類で明らかとなった。

ii）　電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはⅢとあまり高くない。焼成ランクとしてはどの土器のどの部分においても大差は認められなかった。

iii）　Qt－P1相関では、ⅠグループとⅡグループの2つのグループに分類された。Ⅰグループには書上－2と3，Ⅱグループには書上－1と4の土器が属し、各土器の上部から下部にいたる3箇所は同じグループに属し、1個の土器の中で異なる2種類の胎土を使用しているが、砂の混合比は同じであるということが判明した。

（井上）

5　まとめ2

以上のように、本報告で分析した古墳時代後期の土師器長胴甕は、一個体内に異なる2種類の胎土を使用していたことが判明した。その在り方は、長胴甕胴部上半と下半で胎土が違い、その胎土の差によって、一次焼成段階で色調差が顕著になったのである。この現象は、恐らく本遺跡のみの現象ではなく他遺跡にも同様な例は認められるものと思われる。しかしながら、製作者がなぜ使用胎土を異なるものとしたかその目的は不明である。しかし敢えて考えを巡らすと、例えば

1　底部欠損を目的とした二次利用の容易さ。具体的には、甑への再利用が考えられるが、4の甑の胎土も使用粘土の差が認められているため確証的ではない。

2　甕・甑の下半部過熱状態と温度差を意識し、熱効率を調整するため、効率的な煮沸を目指したのか、特殊な食物の煮沸のためか判然としないが、熱伝導の差が土器の上下で存在したと思われる。

3　製作上、胴部下半～底部は「型作り」で行われ、上半は輪積み、紐作りで行われるためとも捉え得る。その製作工程において、体部下半と上半の製作が分けられた可能性を指摘しておきたい。下半の製作を「型作り」で行うことによって、器形の安定化が図られ、かつ大量生産が容易になったとも考えられる。

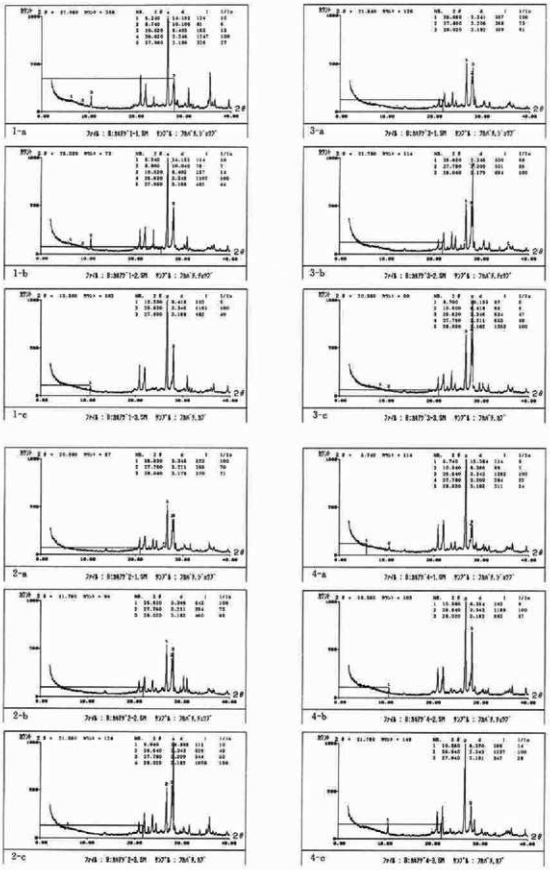
上記3点を想定したが、いずれも根拠は乏しい。大半の該期長胴甕がこの"異種粘土使用技法"によって製作されてはいないだろうし、本来の長胴甕や甑の製作方法を念頭に置くと、本例は特殊例なのかもしれない。さらにこの"異種粘土使用技法"を古墳時代後期の土師器製作方法と限定することも、この4個体の分析だけでは言及できない。他の時期、または他の器種の一個体内の異種粘土の存在を明らかにしなければならないだろう。

次に本分析によって、この"異種粘土使用技法"においてもその胎土内の混和材として砂の混合比が同一の傾向を示す数値が提示された。これは、異種粘土を使用しても、砂の混合比を同率にすることによって、焼成段階の破砕を防ぐ技法として考えておきたい。つまり、胎土が異なる場合でも、粘土に混ぜる砂の混合比を同じにすることによって、焼成時の失敗は無いものと理解できる。このことは、当時の焼成技術が、胎土の砂混合比にまで注意が払われるという高次の制作技術を持っていたと考えられる。土師器焼成遺構の存在は未だ不明確な様相だが、胎土混和材にこのような、統一性が認められることからも、製作者・焼成遺構などに一定の方向が見いだせよう。

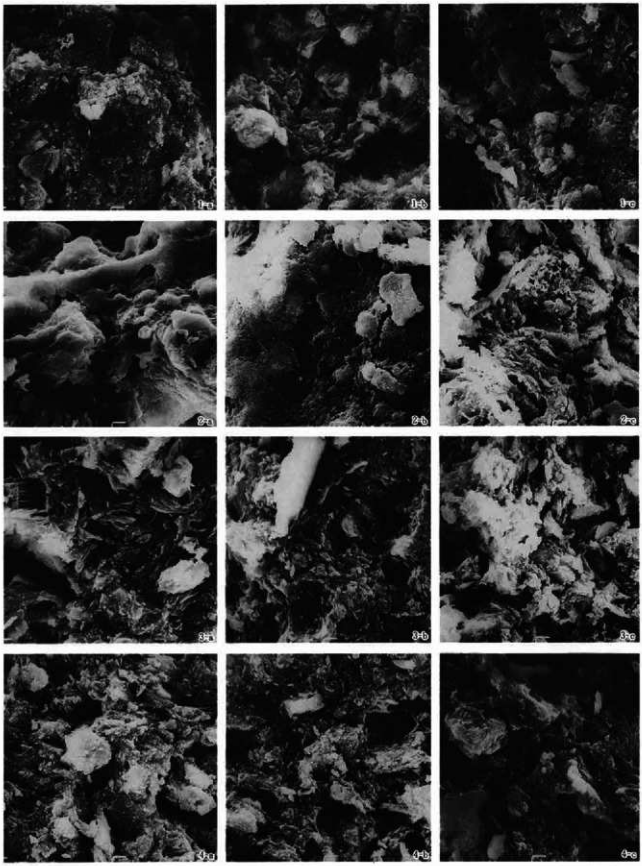
今回の分析では一住居、一個体という単位で胎土分析を行った。それによって、従来の一個体の土器には一種類の粘土が使用されるという前提を覆す結果を得たが、これはいままでの産地同定や時期的な使用粘土の傾向などを把握する目的ではなく、微視的な土師器製作の特殊例を呈示したに過ぎないのであって、普遍的な存在ではない。

しかし、今回の分析の目的の一つとして、土器の胎土分析をその方法・目的に様々な可能性が内在する有効な手段と位置付ける意味もあり、本分析のような製作技法の一手段を明らかにする視点も必要と考え、分析を試みた次第である。将来的には胎土分析を行う際には、従来の遺跡間・個体間の比較を一義的としながらも、一個体における各部位の比較も行い、その集落や集団の土器製作の技法も明らかにした分析を行わなければならないだろう。今回の分析結果がその一助となれば幸いである。

（山口）



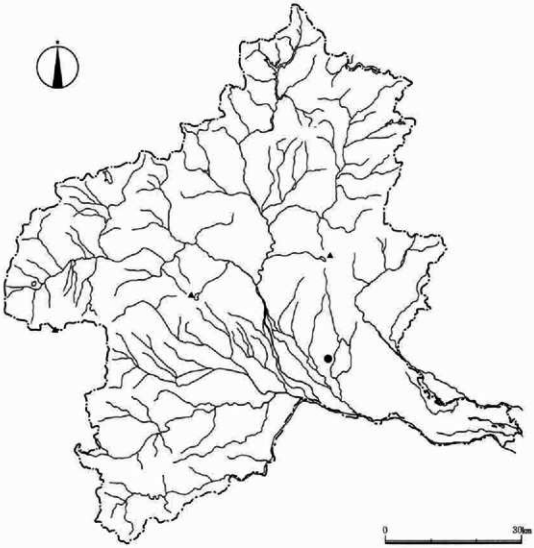
第86図　X線回折チャート



(×5000)

第87図　電子顕微鏡写真

Ⅳ章　波志江六反田遺跡



第1図　遺跡の位置

第１節　遺跡の概要

（遺跡内の地形）

赤城山南麓の平野部に市街地を展開する伊勢崎市は県中央部のやや東よりに位置することになり、古くは東山道など古道の沿線であり、近年はＪＲ両毛線・東武伊勢崎線の鉄道交点として、将来は上武道路と北関東横断道が東西・南北に交わる自動車交通要所として、その交通を核とした発展が約束されている地域である。伊勢崎市を中心とした地形区分は概ね下記の５地形に分けられる。

１．赤城火山斜面
２．大間々扇状地（ａ　桐原面、ｂ　埋没地域）
３．前橋台地
４．伊勢崎台地
５．広瀬川低地帯

波志江六反田遺跡及び波志江天神山遺跡は地形区分としては、１の赤城山斜面の洪積台地に占地し、東の西桂川・西の神沢川によって挟まれ、さらに中央に波志江沼を持つ沢が入り込むローム台地である。赤城山斜面には小河川による開析谷によって形成された樹枝状に延びる舌状台地が発達し、桑園などの生産域・集落・墓域などに利用されている。開析谷は沖積地として、水田・養魚場などに利用される。前述の波志江沼は養鯉池として著名である。

波志江六反田遺跡は、このローム台地のうち県道深津伊勢崎線から西桂川間を調査区とし、調査区域内の地形は、西の県道側から東にかけて傾斜する緩斜面である。東には、旧西桂川流路が検出されており、この旧流路を境にして東に沖積低地が展開する。沖積低地における調査区は新西桂川で止まるが、東に隣接する波志江中峰岸遺跡に連なる沖積低地であり、検出された水田跡も同一の性格を持つものと考えられる。

周辺地形は、巨視的に見ると南北に緩やかに傾斜する洪積台地と同様の傾斜を見せる沖積低地が連続する地形であり、本遺跡はこの洪積台地が周辺の沖積低地に侵食され、狭小になった部分の東斜面側に占地する。

（検出された遺構と遺物の概要）

波志江六反田遺跡で検出された遺構は、その殆どが、近世～近代段階の溝、井戸などが主体である。調査は、これらの溝・井戸という比較的新しい時期の遺構と前述の水田跡の調査が先行し、その後平安時代の住居跡や旧石器時代の調査を行った。

旧石器時代

試掘は、調査区内でローム層の遺存が良好な箇所、また、作業上表土などの崩落の危険性が無い箇所を選んで２×４ｍの試掘坑を基本にして行った。

その結果、調査区のほぼ中央の台地傾斜が緩分変換する箇所で、Ⅳ層（板鼻褐色軽石混土層）中より６点の黒曜石製などの石器出土を見た。調査はこの石器出土地点と調査区高標高部分である西側を中心に暗色帯上下の石器検出を試みたが、下面より石器は出土しなかった。また、湧水も著しく台地低端部の暗色帯までの掘り下げは断念せざるを得なかった。

縄文時代

遺構は検出されなかった。ただし、包含層として撚糸文の出土を見る。１箇所に集中する傾向はあるものの、散漫であり同一個体ながらも完形に復元できる資料ではない。出土地点は調査区中央やや西よりだが、周辺は近世～近代遺構が密集しており、撹乱を受けている為、出土状況も良好とはいえない。

平安時代

３軒の住居跡を検出することができた。８世紀に比定される土器が出土しているが、３軒とも残存状態は良好ではなく、近世遺構の撹乱を受けている。

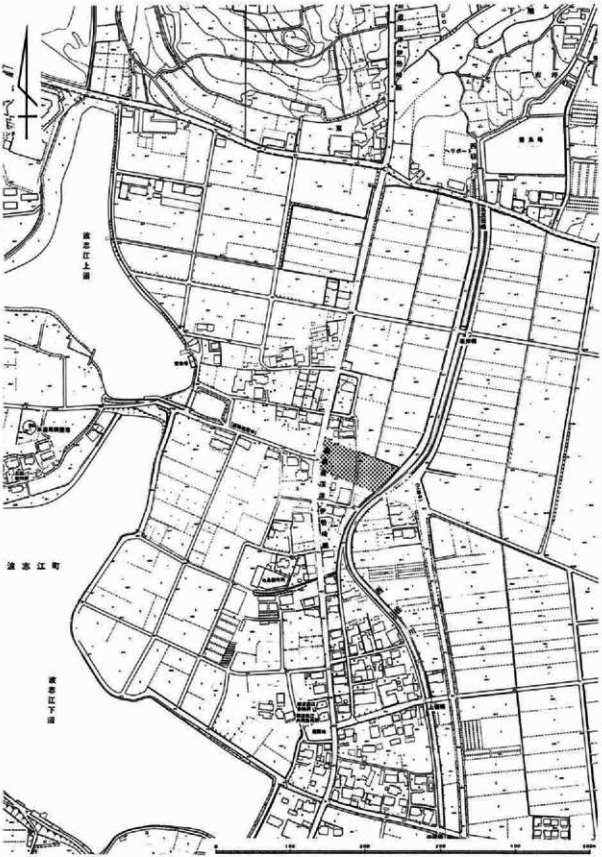
水田跡はＡｓ－Ｂ下で検出された。同様の水田が隣接する波志江中峰岸遺跡でも検出されている。

近世～近代

溝は４条・井戸３基・土坑32基を検出した。また、掘立柱建物跡も１棟確認しているが、これらの時期決定を確立する積極的な遺物の出土がなく、遺構の配置・規模・覆土の状態から本段階と捉えた。

現代

県道側におびただしい撹乱坑を確認したが、いわ



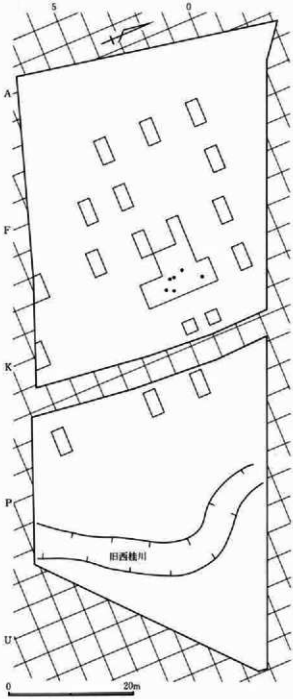
第２図　周辺の地形

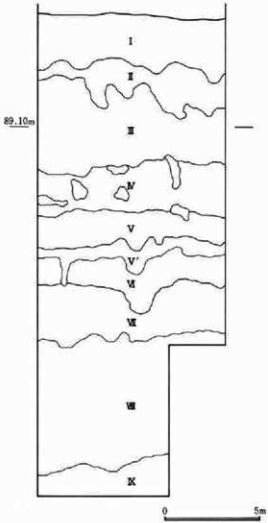
ゆるゴミ穴であり、調査対象から除外した。中には重機による掘削坑に産業廃棄物が充満しており、その深度は暗色帯下まで及んでいた。

第2節　基本土層

旧石器試掘坑北側壁を分層し、遺跡内のローム層序を資料化した。3図はC－1Grの土層図である。

Ⅰ　表土層　洪積台地部分では層厚は非常に薄く、そのことが遺構残存状況を悪くしている。
Ⅱ　黄褐色軟質ローム層　ソフトローム層。地点によっては、この上層に土壌化した同色の縄文時代の遺物包含層に相当する層が存在する。
Ⅲ　黄褐色硬質ローム層　ハードローム層。As－Spを含む。
Ⅳ　褐色硬質ローム層　As－Bpを塊状に含むためやや砂質。本遺跡の石器出土層位である。
Ⅴ　黄褐色硬質ローム層　粘性が強く、橙色の粒子を含む。
Ⅴ'　黄褐色軟質ローム層　Ⅴ層の軟質化した層。地点によっては認められない。ATはこの層の下位にあるといわれる。
Ⅵ　暗褐色硬質ローム層　暗色帯。クラックが入りやや淡色。
Ⅶ　暗褐色硬質ローム層　暗色帯。Ⅵ層より暗い色調を呈する。
Ⅷ　褐色硬質ローム層
Ⅸ　八崎火山灰層
尚、沖積低地部分は第22図を参照してほしい。





第3図　旧石器出土位置と基本土層図

第３節　旧石器時代

調査区中央台地東斜面で出土した本遺跡の旧石器時代の石器は、総計７点の出土である。試掘により２点の石器を見ることができ、拡張調査を行ったが、石器は５点を追加するのみであった。ブロックとしてはまとまりを持たず、希薄な出土状態といえよう。この石器出土箇所は傾斜変換地点のためか、Ⅴ層より湧水し、調査は困難を極めた。このため出土石器７点の内、砕片１は調査時の誤認により出土位置の記録化が及ばなかった。本報告で、平面図示できたのは６点である。また、石器出土箇所西側には２号井戸が位置するように、近世～近代の遺構が集中する箇所でもある。石器出土層位の上層であるⅢ・Ⅳ層の遺存は良好ではなかった。

また、調査区西側の高標高部分も試掘を行い、特にⅣ層・Ⅴ層の精査を中心に、かつ暗色帯上下の石器群も考慮に入れ石器の検出に努めたが、前述の６点の石器以外は出土していない。さらに、西に隣接する波志江天神山遺跡でも旧石器時代の試掘を行ったが、ここでも石器は検出されていない。

本遺跡の石器はⅣ層の板鼻褐色軽石混土層下位から出土しており、スクレイパーの出土はⅤ層の黄褐色軟質ローム層上面である。３層にわたる出土であるが、板鼻褐色軽石層下でＡＴ上に挟まれる層位であり、出土状況から安定的な出土層位はⅤ層の黄褐色硬質ローム層と捉えられよう。

出土石器の内訳は、スクレイパー２・使用痕を持つ剥片石器２・剥片１・砕片２である。１点の黒色頁岩製の砕片を除くと全て黒曜石製であり、主要石材となっている。

石器の接合関係は認められなかったことからも、いわゆる石器製作址としての場ではなかったようだ。

（出土石器）

７点の出土石器の内４点を図示した。

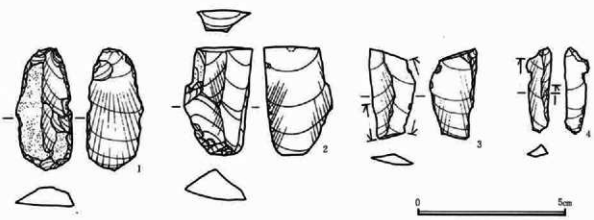
１はスクレイパー。黒曜石製の小型縦長剥片を素材とし、表面に礫面を残す。裏面も打瘤を残し湾曲する。剥片端部に入念な調整を施すエンドスクレイパーである。また、両側縁打面周縁にも細かな調整が及ぶ。なお、右側縁中位の剥離は新しいものである。

２もスクレイパー。黒曜石製の縦長剥片を素材とし打面側を欠損する。比較的厚手の素材であり、緩やかな湾曲を持つ。剥片端部に入念な調整を集中するエンドスクレイパーである。両側縁特に右側縁に使用痕として歯こぼれが認められる。

３は使用痕を持つ剥片石器。薄手で黒曜石製の小形縦長剥片を素材とし、打面端部を欠損する。使用痕は両側縁に歯こぼれが認められる。

４も使用痕を持つ剥片石器。黒曜石製の細身の縦長剥片を素材としている。使用痕は両側縁に認められるが、左側縁の歯こぼれが顕著である。

その他は剥片１と砕片２が出土しているが、いず



第４図　旧石器時代の出土石器

れも図示するものではない。ただし、黒曜石の剥片・砕片とも判然としないが、おそらく縦長剥片であろう。黒色頁岩製の砕片の素材形状は不明であるが、横長剥片の可能性が強い。

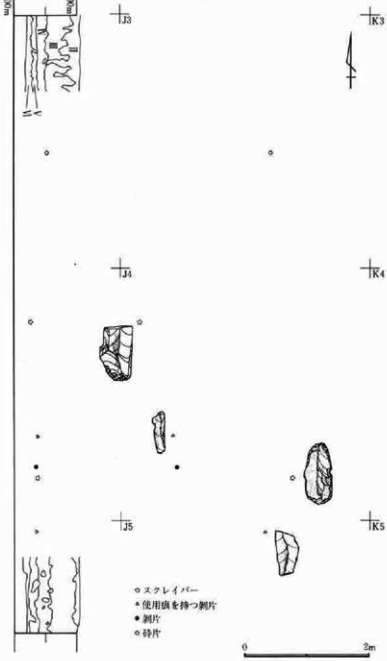
以上のように図示した4点の石器は全て黒曜石製である。黒曜石の積極的な使用が本遺跡の旧石器時代の特徴と捉えられよう。しかし、黒色頁岩製の砕片があるため、本遺跡の石材組成が黒曜石のみの単純な組成ではなく、複数石材が混在する組成の可能性は高い。

また、石器出土の集中傾向を見ると、黒色頁岩製の砕片はその他の黒曜石製の石器とはやや距離を保つ位置より出土している。製作址などの性格であれば同一のブロックへの帰属が考えられるが、本遺跡の場合は石器製作址としての判断はできないため、この黒色頁岩の砕片の出土位置が意味するところは検討を要するだろう。

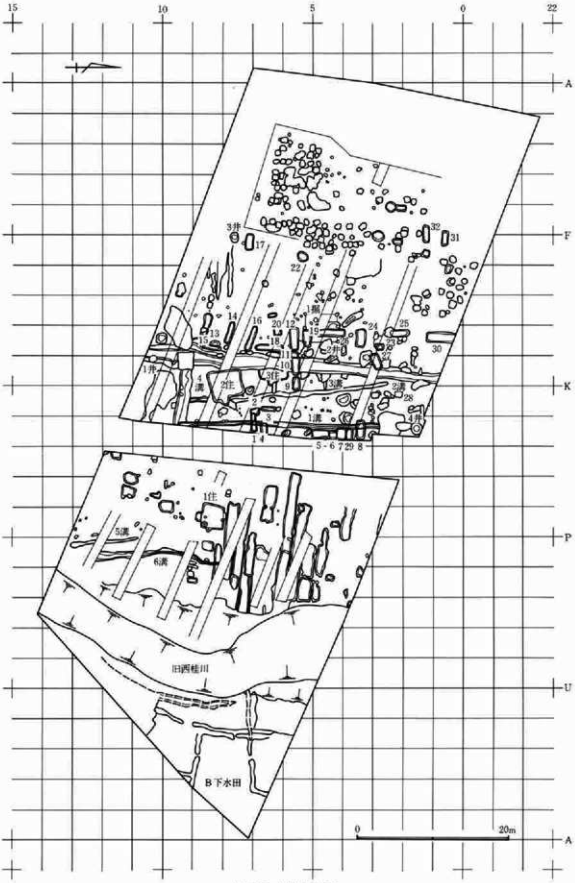
本遺跡の旧石器時代の出土石器は以上のように少なく、ブロックやユニットといったまとまりを持った石器群ではない。また、エンドスクレイパーなどの定形石器が出土を見るものの、器種組成などは偏りを見せ、文化層としてのその全容は把握できない資料である。ただし、比較資料として周辺の該期遺跡を概観しても、同一層位より出土した例を見ないことから、本遺跡の調査例が周辺の遺跡でも重要な位置を占めることは疑う余地もない。

石器製作址としての在り方から、石器が次段階に使用される様相は現状の群馬県の調査例ではなかなか把握できない。石器対象物の加工・解体といった作業の場も存在するはずであり、そのような場に残される石器の組成や比率を明らかにしなければならないだろう。本遺跡の石器出土状況からは断定はできないが、将来的には明らかになるべき要素である。

また、石材として黒曜石への依存度が高く、黒色安山岩などの群馬県域の主要石材が見られない特徴は、今後該期石材組成に一石を投じる資料となろう。



第5図　旧石器遺物分布


15
10
5
0
22
A
F
K
P
U
A
3井
6
17
22
32
31
1
8
14
16
20
12
1溝
1住
24
25
23
27
30
15
18
2井
1井
1
溝
21住
19
13溝
9溝
28
2
1溝
14
5-6 7 29 8
1住
8
5溝
6溝
旧西桂川
B下水田
0
20m

第6図　遺構全体図

第4節　縄文時代

（概　要）

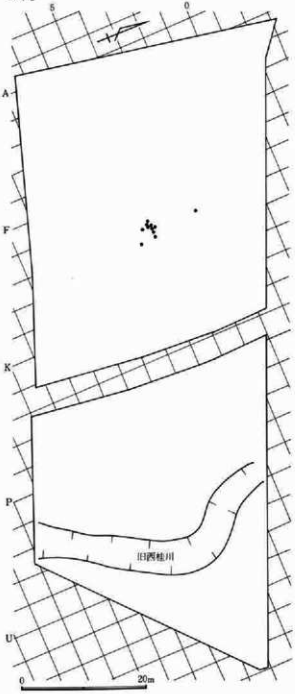
検出された縄文時代に比定される遺構はなく、出土遺物も少ない。周辺遺跡では、波志江天神山遺跡で、前期の遺物包含層と陥穴が調査され、下触牛伏遺跡では前期諸磯c式期に比定される深鉢が出土した住居跡を検出している。また、東の中峰岸遺跡を隔てた堀下八幡遺跡では、諸磯b式期の住居跡が報告されているように、各台地毎に集落跡などの遺構として存在している。また、各遺跡とも包含層出土として爪形文や撚糸文・押型文系土器群が報告されており、当地域の縄文時代の様相として、草創期～早期という比較的早い段階での活動が認められている。これは他地域には認められない当地域の特色として把握しておきたい。

本遺跡の場合、近世～近代の遺構が密集しているが、それらの遺構によって縄文時代の遺構群が破壊されたとは捉え難い。遺物も少なく、周辺遺跡の様相からはやや性格を異にするようだ。東斜面という、縄文時代の居住条件としては比較的適した地でありながら、殆ど生活の痕跡が認められない状況を検討しなければならないだろう。尤も今後、南北に隣接する地点で遺構が検出される予想もでき、本遺跡の様相だけで例えれば集落の空白地域を設定することは避けなければならない。

出土遺物は、縄文時代早期に属する撚糸文系土器群を主体とする。総計39点の出土であり、図示に堪え得るもの17点を第9図に挙げた。出土位置は、調査区中央西よりで散漫ながらも比較的集中した出土を見せ、集中分布として認知できよう。おそらく、口縁部の在り方から数個体分の破片と思われるが、器形復元できる資料ではない。スタンプ形石器などの伴出する石器群は認められず、生活跡としての集中分布ではなく、廃棄・流入としての土器片集中としたい。

出土層位は、Ⅱ層上面であり黄褐色軟質ロームと同様な色調ながら、土壌化したような層である。この層位は他の遺跡でも縄文時代の遺物包含層として周知されているが、黄褐色を呈しており、これを覆土とする遺構の確認に手間取る原因となっている。また、出土地点周辺は近世遺構が重複しており、撚糸文系土器群の出土範囲も限定されている。

撚糸文系土器以外に中期土器片が数片混入するが、これは近世遺構等からの出土であり、主体的ではない。後述する石器と同様、流入によるものであろう。



第7図　撚糸文土器集中分布

出土石器は13点と客体的な存在であり、殆どが近世遺構などから出土したものである。内訳は剝片石器や磨石類であり、撚糸文系土器群に伴うものとは捉えられない。出土した遺構位置をグリッド化して対比したが(第8図)、撚糸文系土器群が出土した地点とは距離を置く。台地傾斜部分の端部に認められ、傾斜に沿った流入とも捉えられる。よって出土石器は、撚糸文系土器群とは伴わないものと判断して本章では取り扱わず、次章の波志江天神山遺跡の石器群と共に報告した。

(グリッド出土土器)

ここで扱う土器は前述の撚糸文集中分布地点より出土した土器片を中心に述べるが、2点の中期土器片も併せて説明する。

1は強く外反する口縁部破片。口唇部は肥厚するが、器厚は比較的薄い。口唇端部は丸みを帯び、内面にまで撚糸文ℓを施す。絡状体施文で、原体幅は短く口唇部下で止め、体部は縦位に回転施文する。明赤褐色を呈し、胎土の砂粒は多い。

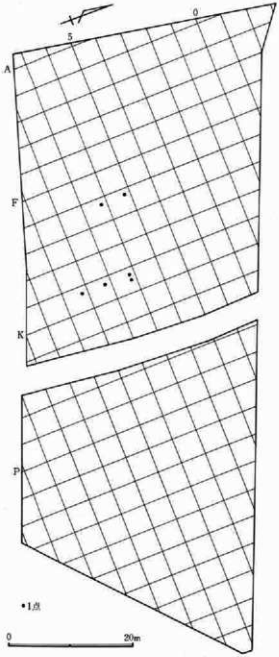
2、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し、器厚は薄い。口唇端部は平坦面を持ち、絡状体撚糸文ℓを横位に施す。口唇下及び体部は縦位、斜位の回転施文である。鈍い橙色を呈し胎土の砂粒は多い。

3、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し、器厚は薄い。口唇端部は比較的丸みを帯び、絡状体撚糸文rを横位に施文し、外面と内面で施文方向を変えるため羽状効果を見せる。口唇部下は縦位施文。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒も多い。砂粒にガラス質の黒色粒が認められる。黒曜石か。

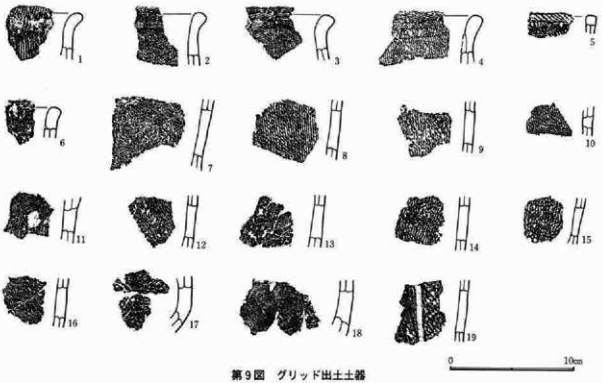
4、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し丸みを帯びる。比較的厚手の器厚。口唇部内面に顕著ではないが、撫でによる凹線が認められ口唇部の丸みを強調する。口唇部は3と同様に、絡状体撚糸文で羽状効果を見せ、口唇部下は縦位と斜位の回転施文だが、屈曲部は押圧するような施文である。原体幅は1.50㎝と短い。・橙色を呈し、砂粒は多い。内面は剝落が著しい。

5、直立気味に外反する口縁部細片。狭小な平坦面を口唇端部に持ち、撚糸文ℓを施す。口唇下は縦位回転施文。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は少なく細かい。

6、外反する口縁部細片。口唇部は肥厚し丸みを帯びる。器壁は荒れており判然としないが、口唇部端部は横位施文、口唇下は縦位の施文であろう。色調は橙色を呈し白色鉱物粒など胎土の砂粒は多い。



第8図　縄文時代の石器分布



第９図　グリッド出土土器

7、体部破片。おそらく上半の屈曲部下であろう。4と同一個体の可能性もある。撚糸文ｒを縦位・斜位に施す。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

8、体部破片。やや太めの撚糸文ｒを縦位を基調に施文する。原体幅は比較的長く2.5cm程である。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は大粒だが少ない。

9、体部破片。8と同一個体か。やや薄手の器肉である。原体幅は不明。色調は8よりやや明るい橙色を呈する。

10、体部破片。細めの撚糸文ｒを密接縦位施文する。明るい橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

11、体部破片。おそらく上半の屈曲部下であろう。比較的厚手の器厚で、撚糸文ｒを縦位に施す。内面は丁寧に撫で調整が施される。橙色を呈し、胎土の砂粒は少ない。

12、体部破片。細めの撚糸文ｒを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、大粒の砂粒を多く含む。

13、体部破片。細めの撚糸文ｒを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含む。撹乱層の出土のためか、器表面の風化が著しい。

14、体部破片。撚糸文ｒを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

15、体部細片。やや太めの撚糸文ℓを施す。薄手の器厚で、内面調整は丁寧ではない。鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒はやや少ない。

16、体部破片。細めの撚糸文ｒを縦位に施す。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は細かい。

17、丸底底部破片。判然としないがおそらく、撚糸文ℓを縦位に施す。底部の径に沿って平行沈線が巡るが、どのような要素かは不明である。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は細かく少ない。

18、体部破片。勝坂式に比定した。頸部との境の破片で、横位連続三叉文が沈刻される。色調は橙色を呈し、胎土に黒色鉱物粒を含む。

19、体部破片。加曽利Ｅ３式に比定した。凹線が懸垂し、ＬＲ縄文を縦位施文する。鈍い黄橙色を呈し、白色鉱物粒を多量に含む胎土である。

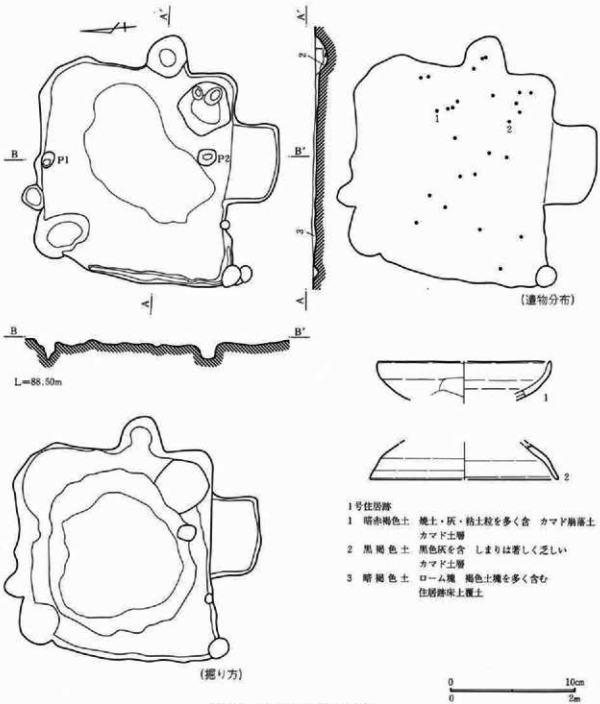
撚糸文系土器群は、口唇部への施文や密接な回転施文を特徴としており、井草式に比定されよう。

第5節　住　居　跡

本遺跡では、3軒の住居跡を検出した。いずれも8世紀代の所産と考えられ、調査区東斜面部から低地部に至る箇所で検出されている。このうち1号住居跡のみが、他の2軒と距離を置いて低地部に近い傾斜地で確認されている。

3軒とも近世遺構などと重複するが、平面規模や竈方位の在り方など統一性が認められ、当地域の該期集落の一端と捉えられよう。

住居跡は洪積台地上に立地していたため、表土の堆積が薄く、必ずしも良好な遺存状況とは言えない。出土遺物もやや貧弱であり、良好な器種組成を見せる住居跡はなく、明確な時期を特定することはできない。



1号住居跡
1　暗赤褐色土　焼土・灰・粘土粒を多く含　カマド崩落土
　　カマド土層
2　黒 褐 色 土　黒色灰を含　しまりは著しく乏しい
　　カマド土層
3　暗 褐 色 土　ローム塊　褐色土塊を多く含む
　　住居跡床上覆土

第10図　1号住居跡及び出土遺物

1号住居跡

調査区東側の台地部分と低地部分の境界で検出された。上面を近代の耕作で削平されており、住居跡確認時には床面が露出している箇所もあった。

平面規模は、約3.4×3.1mで方形を呈する。東側壁に小型の竈を設ける。調査当初は、南側壁の張り出し部分を本住居跡の施設と捉えたが、重複の可能性も強く積極的な確証を持たない。

床面の残存状況は非常に悪く、凹凸が著しい。ただし、貼り床がなされており、また中央部から竈周辺にかけては硬化面が認められている。

柱穴はP1・P2の2本をその深さと配置から特定した。貯蔵穴は竈南側に径約90cmの不整円形を呈し、深さ約10cmを測る落ち込みを充てたい。

壁周溝は南西隅から西側にかけて検出されたが浅く、残存状態は悪い。その他、壁に重なるピットを確認したが、覆土の様相から壁柱穴などの施設ではなく、近世段階の小ピットとの重複の可能性が強い。

床下遺構として、貼り床土を除去したのち、中央部分に径約2.4mの円形の土坑を検出したが、浅い掘り込みである。

遺物は少なく、土師器細片が主である。そのうち竈東側より出土した杯口縁部と杯蓋を図化した。遺物の時期は8世紀後半代と捉える。

2号住居跡

調査区中央やや南よりで検出した。試掘時に検出されていた住居跡である。北約2mに3号住居跡が近接する。また、2・3号溝などの近世遺構が接しており、特に3号溝は竈上面を重複していたが、浅いため大きな破壊はなされていない。

平面規模は、3.9×4.1mで比較的整った方形を呈する。壁高は約25cmを測り垂直の立ち上がりである。

床面は、比較的平坦な貼り床で、ローム塊を混入する黄褐色土を基調にしている。全体にやや軟弱だったが、硬化面は竈周辺が若干ながら堅く踏み固められていた。

柱穴は、床面の西よりに3ケの小ピットが検出されたが、比較的深さのしっかりしたP1が妥当性を帯びる。また北東隅、西壁北よりに壁柱穴と考えられる小ピットがあくが、連続性がなく疑問は残る。

貯蔵穴は竈南側に約55×45cmの不整円形を呈するピットを充てる。深さはやや浅く約13cmである。断面形は方形である。

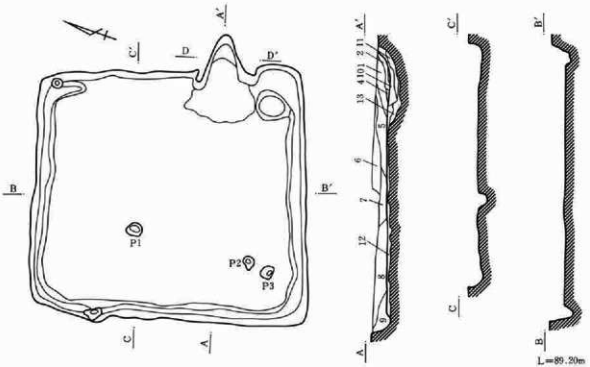
壁周溝は東壁を除く3壁を巡る。前述の壁柱穴2ケを伴い、幅約20～25cm、深さ約15cmと比較的しっかりした溝である。

竈は東壁南よりに設けられ、壁外に煙道が伸びる。平面規模も比較的大きく、長さ75cm・焚口幅65cmを測る。構築材は黄褐色粘質土を基調として、地山のロームを袖芯材とする。崩落はかなり進んでおり、焚口部には焼土化した粘土塊が灰・炭化物と共に認められた。竈掘り方は焚口部下に円形の掘り込みを持ち、灰・焼土を敷き込み火床を整えていた。

住居跡床下遺構は、掘り方調査において、十数個の円形・楕円形の土坑を検出した。ローム塊を多量に含む黄褐色土を埋土としているが、比較的浅く、貯蔵などの用途ではない。また、北壁に沿った4ケの土坑は連続性を持ち、住居跡構築時の平面規模を示唆しているようだ。

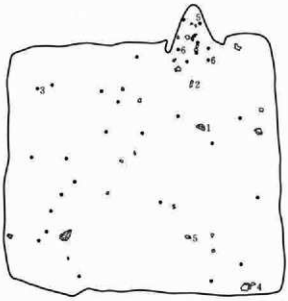
遺物は、本遺跡の住居跡の中では充実している。杯3・甕2・須恵器杯蓋1の6点を図示したが、他にも細片は多く出土した。このうち1の杯は竈西側の床直上から、2はほぼ同様の位置から覆土下層、3は破片ながら北東隅の床直から出土した。甕類は竈からの出土である。5は竈の奥壁と西壁よりの床直の破片が接合している。6は竈中央の火床面から出土したが、5・6は同一個体の可能性が強い。4は須恵器杯蓋だが、転用砥でもある。顎部を全周して欠損し、内面に研磨痕が認められる。墨痕も看取され、内面中位に小穴が穿たれるが、用途は不明である。出土位置も、南西隅の壁周溝内から、斜位に傾いて出土しており、意図的な配置を窺わせる。

本住居跡は、3軒の住居跡の中で最も遺存状態が良好であり、出土遺物も住居跡に帰属するものが主体であろう。遺物から8世紀前半とした。

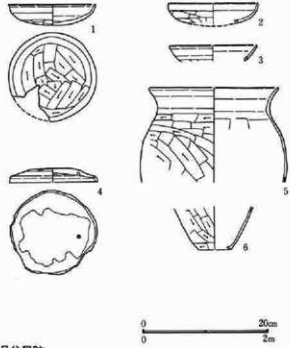


2号住居跡

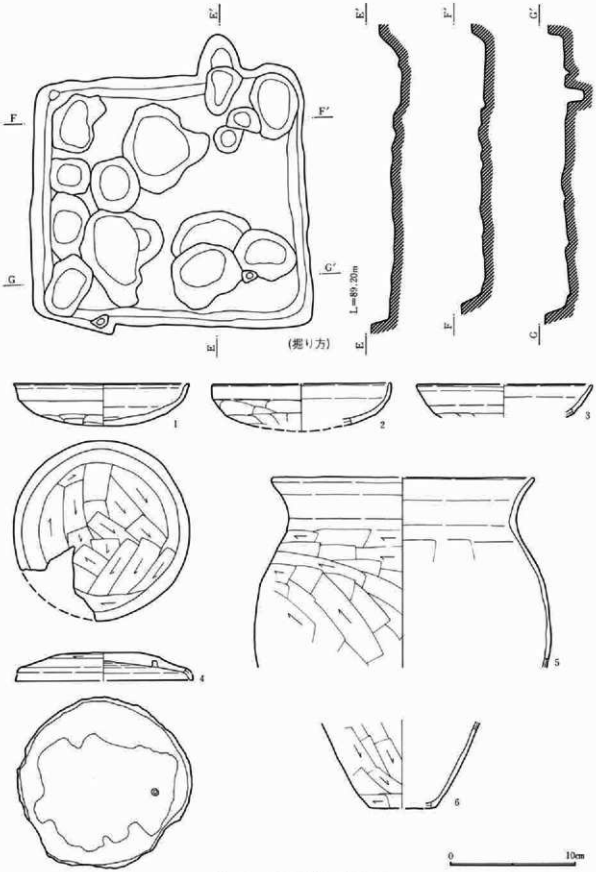
1　褐　色　土　ローム塊と暗褐色土の混土層
2　赤　褐　色　土　焼土塊・灰の混層
3　極暗赤褐色土　軟質　焼土混り　灰が多い
4　極暗赤褐色土　灰層　同層下は火床となる
　　焼土塊なし
5　黄　褐　色　土　ローム塊と褐色土塊の混層
6　褐　色　土　As－C含
7　暗　褐　色　土　As－C・炭化物を含
8　暗　褐　色　土　ローム粒多く含
9　褐　色　土　ローム塊　壁崩壊土
10　暗赤褐色土　焼土・灰・炭化物・褐色土含
11　明　褐　色　土　ローム塊・焼土粒を含
12　黄　褐　色　土　ローム塊・暗褐色土塊を含
13　暗赤褐色土　焼土・ローム小塊・灰の混層



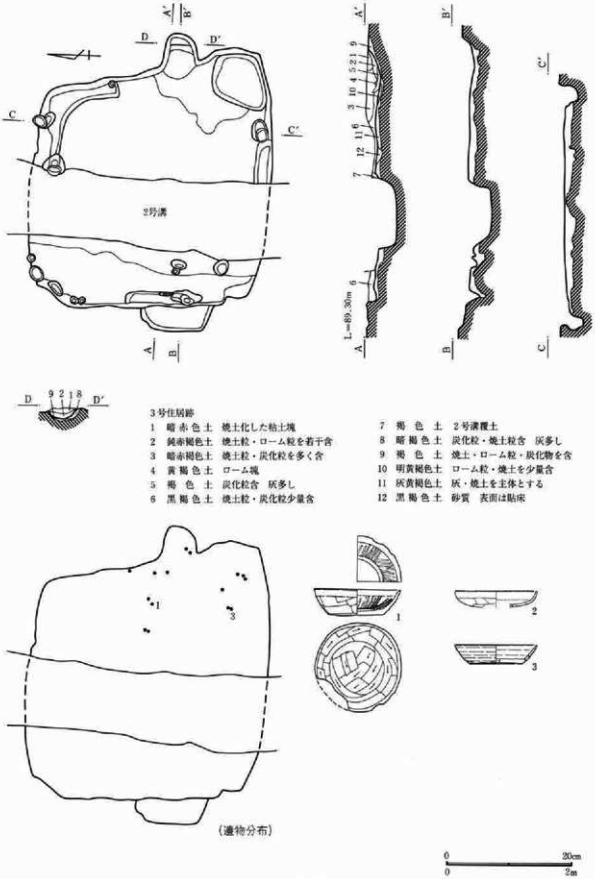
(遺物分布)



第11図　2号住居跡



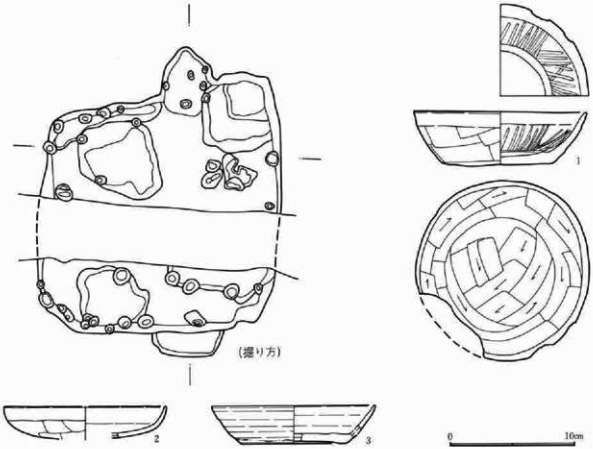
第12図　2号住居跡及び出土遺物



3号住居跡

1　暗赤色土　焼土化した粘土塊
2　鈍赤褐色土　焼土粒・ローム粒を若干含
3　暗赤褐色土　焼土粒・炭化粒を多く含
4　黄褐色土　ローム塊
5　褐　色　土　炭化粒含　灰多し
6　黒褐色土　焼土粒・炭化粒少量含
7　褐　色　土　2号溝覆土
8　暗褐色土　炭化粒・焼土粒含　灰多し
9　褐　色　土　焼土・ローム粒・炭化物を含
10　明黄褐色土　ローム粒・焼土を少量含
11　灰黄褐色土　灰・焼土を主体とする
12　黒褐色土　砂質　表面は貼床

第13図　3号住居跡



第14図　3号住居跡及び出土遺物

3号住居跡

調査区中央やや南よりで検出した。本住居跡も試掘時に検出されていた遺構である。南約2mに2号住居跡が近接する。また、2号溝が南北に大きく切る。平面規模は約3.6×3.5mの方形を呈するが、南辺が3.9mとやや長く不整方形の平面形である。深さは約15cmを測り、残存状態は良くない。

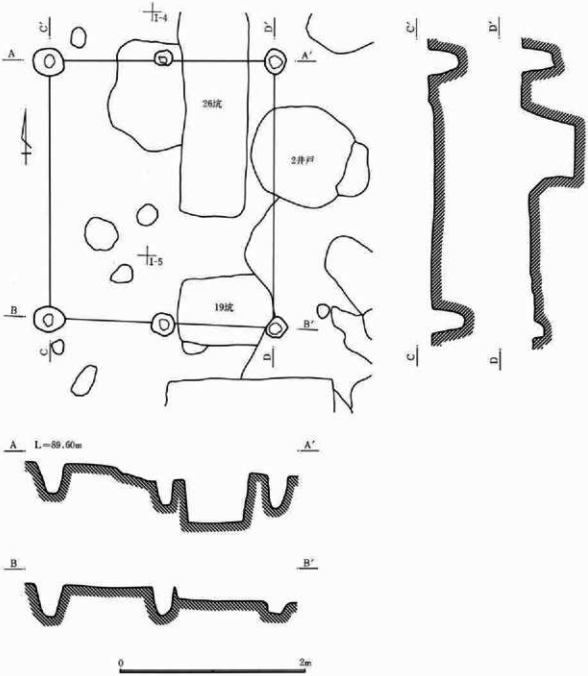
床面はほぼ平坦だが、南側に若干傾斜する。硬化面は竈西、南側で顕著である。柱穴は床面上では良好なものはなく、壁柱穴として壁下に10数個の小ピットが検出されている。貯蔵穴は竈南に浅い凹みが設けられている。壁周溝は断続して巡る様相を呈す。竈の縁辺は除かれており、また、北西隅も壁柱穴のみである。

竈は東壁やや南よりに設けられており、煙道は壁外に突出する。焚口幅60cm・長さ70cmの規模で、焼土が前面から貯蔵穴にわたって確認された。構築材は黄褐色粘質土を使い、掘り方として浅い凹みを設ける。袖は認められなかった。

その他の施設としては、西壁南よりに1.1m×0.4mのテラス状の落ち込みが検出された。住居跡覆土と連続しており、あるいは入り口部として考えられる。1号住の張り出しと類似するが、ここでは問題提起としておきたい。

遺物は少ない。覆土中より細片が出土しているが、図示し得たのは杯3個体である。1は竈西の床直上より出土したほぼ完形の暗文土師器杯。2は覆土からの細片。3は貯蔵穴西の覆土から出土した須恵器杯である。その他にも竈周辺より細片が出土しているが土師器甕胴部破片であり、図示できなかった。

本住居跡は、残存状態も悪く中央を溝に撹乱されているが、西壁のテラス状遺構の存在や、床直出土の暗文土師器杯は、当地域の8世紀代の集落研究や土器様相を考える際に好資料となろう。



第15図　1号掘立柱建物跡

第6節　掘立柱建物跡遺構

調査区中央西よりで検出された。近世から近代に比定される建物跡である。長方形土坑の26号土坑や2号井戸が建物内に位置している。また、柱穴1ケは19号土坑に切られる。柱穴は6本の素掘りのピットを確認し、平行する3本のピットはほぼ等間隔に位置する。全体規模は1間(4.2m)×2間(3.6m)であり、建物長軸方向は南北を向く。

この建物軸は、周辺の連続する長方形土坑の長軸と一致し、相互に強い関連性を窺わせるものの、重複することから時間的な隔たりは存在する。ただし、東側を走る2号溝を意識した占地と思われ関係は深いものとしたい。

遺物は出土していない。

第7節　土　　坑

本遺跡の土坑は出土遺物も無く時期判定に苦慮したが、覆土の様相や現代の撹乱との重複状況から、その殆どを近代の所産とした。平面形は長方形のものが圧倒的に多く、掘り込みがしっかりした断面形である。これは、近代農家に見られる貯蔵用や屋敷構えの区画土坑に類似する。本遺跡の場合、近代の民家などが検出されていないが、検出された長方形土坑群は、当時の民家に付随する貯蔵性や区画性を持った施設と捉えたい。

1号土坑　K・L－6・7Grで検出した。2号坑、1号溝と重複する長方形土坑である。深さ約15cmを測る浅い箱形の断面形を呈す。覆土はローム塊を含む軟質暗褐色土でこの層位から近代の所産とした。

2号土坑　K－6・7Grで検出した。1号坑を切る。不整形の平面形を呈するが、南側は方形を呈し、隣接する1・3・4号坑と関係は深い。

3号土坑　K－6Grで南の2号坑と近接する。長方形の平面形を呈し、同様な1号坑と直交する基軸である。

4号土坑　L－6Grで1号溝の東に接して検出された。前述の1号坑と平行し、3号坑と直交する位置にある。

1・3・4号坑は方形の平面形を基本とし、平行・直交する位置関係にあるところから、同時期の構築と考えられる。

5号土坑　L－4Grで6・7・29号坑と軸を同一にし連続して検出された。長軸を南北に持つ。

6号土坑　L－4Grで南を5号坑、北を7号坑に接して検出された。両者の重複関係は不明である。

7号土坑　L－3・4Grで南に6号坑、北に29号坑が接する。長軸を東西に持つ。

29号土坑　L－3Grで南に7号坑と重複する。正方形の平面形を呈す。

5～7号土坑・29号土坑は浅いものが多いが、掘り込みは直立気味の壁であり、しっかりしている。覆土は1号坑と同様であり近代の所産としたい。

8号土坑　L－3Grに位置する。方形の土坑であり、深さも80cmとしっかりした掘り込みである。長軸を東西に持つ。29号坑の北に位置し、一群の土坑群と関連性は深い。

9号土坑　J・K－5Grに位置する。西に10号坑と近接する。平面形は長方形で、掘り込みはしっかりしている。

10号土坑　J－5Grで11号坑と重複して検出された。新旧は不明。平面形は長方形でしっかりした掘り込みである。

11号土坑　I・J－5Grで10号坑と東側を重複して検出された。おそらく長方形の土坑で、10号坑より浅い掘り込みだがしっかりしている。

12号土坑　I－5Grで11号坑と近接して検出された。両土坑の間には浅い落ち込みが検出されたがこれも同様の土坑であろう。平面形は長方形で、しっかりした掘り込みである。

9～12号土坑は長軸を同一にし、列をなして確認された。おそらく同時期に一群を構成していたものと考えられよう。時期は近代であろう。

13号土坑　H・I－8Grで長軸を東西に持って検出された長方形土坑である。掘り込みはやや浅いもののしっかりしている。不整形の土坑と重複するがこれは現代の犬墓だった。

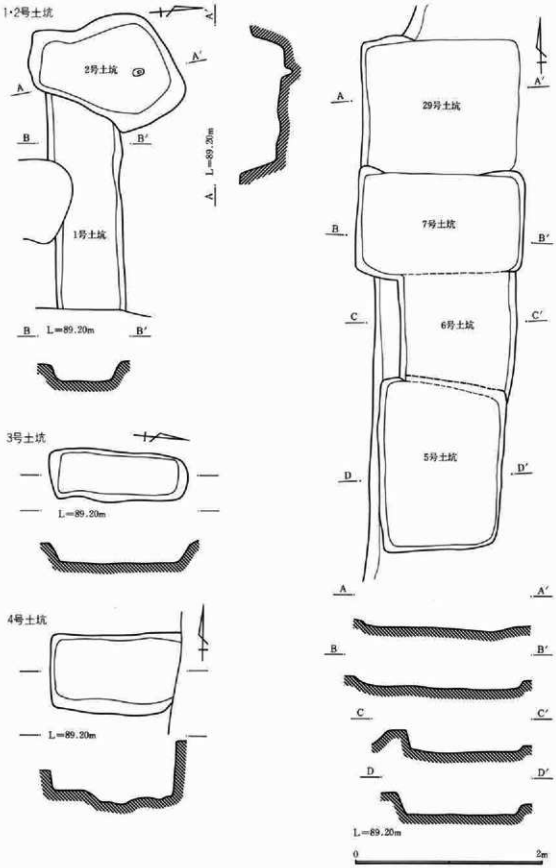
14号土坑　H・I－7Grで13号坑と平行するように検出された。東に直交するように15号坑が近接する。上端はやや不整方形ながら、下端平面形は長方形である。立ち上がりは若干緩やかで浅い。

15号土坑　I－8Grで13・14号坑と直交する位置に検出された。浅く緩やかな立ち上がりである。

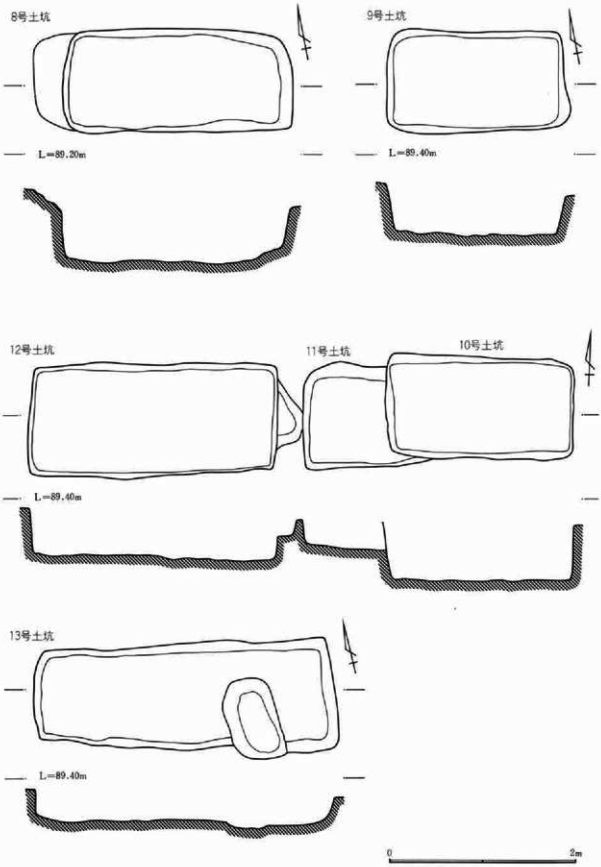
16号土坑　I－6・7Grで14号坑と長軸を平行するかたちで検出された。長方形を呈するが浅い。

13～16号土坑は軸を同一にし、特に13・14・16号土坑は等間隔に平行することからも同時期の関連性の強い一群としたい。

17号土坑　E・F－6・7Grで3号井戸と近接する。不整長方形の平面形で浅い。周辺に同様な土坑がなく単独の検出となった。


1・2号土坑
2号土坑
1号土坑
A
A′
B
B′
L=89.30m
L=89.20m
3号土坑
L=89.20m
4号土坑
L=89.20m
29号土坑
7号土坑
6号土坑
5号土坑
C
C′
D
D′
L=89.20m
0
2m

第16図 土 坑(1)


8号土坑
L=89.20m
9号土坑
L=89.40m
12号土坑
11号土坑
10号土坑
L=89.40m
13号土坑
L=89.40m
0
2m

第17図　土　坑(2)

18号土坑　Ⅰ－5・6Grで南に16号坑が近接するが、直交関係ではない。平面形は整った長方形で、しっかりした掘り込みである。

19号土坑　Ⅰ－5Grで12号坑と平行して検出された。東半分を坑底面とほぼ同レベルの撹乱坑に壊され、平面形は判然としないが長方形であろう。

20号土坑　Ⅰ－6Grで18号坑の西に近接する。小型の長方形で比較的しっかりした掘り込みである。

21号土坑　Ⅰ－9・10Grで調査区南西端で検出された。東に2号溝が走るが、現代の撹乱坑が密集する箇所でもあり近接する土坑は無い。西・南辺の壁は整って直交するが他は不整形を呈する平面形である。掘り込みは約70㎝と深い。

22号土坑　F－5Grで単独で検出された円形の土坑である。掘り込みは浅いが、立ち上がりなどはしっかりしている。覆土は黒褐色土を基調としたローム塊混土層で、他の土坑とは違う様相を呈する。断定的ではないが、中～近世に時期を求めたい。

23号土坑　Ⅰ－2Grで試掘トレンチにかかり検出した。周辺には24・25号坑が近接する。小型の方形で南側壁はしっかりした立ち上がりを呈する。

24号土坑　Ⅰ－3Grで25号坑と26号坑に挟まれた位置で検出した。長軸を東西に持ち、25・26号坑とは直交する関係を持つ。平面形は長方形で掘り込みもしっかりしている。坑底面はやや不連続である。

25号土坑　Ⅰ－1・2Grで24・30号坑に挟まれた位置で検出された。平面形は不整形を呈すが、これは現代の小撹乱坑が重複するためで、おそらく方形を呈していたものと思われる。掘り込みは浅く、坑底面も凹凸が著しい。

26号土坑　Ⅰ－3・4Grで1号掘立柱建物跡内で検出された。2号井戸と東壁を接する。長方形の平面形を呈し掘り込みも深くしっかりしている。

24～26・30号土坑はやや距離を置く位置にありながら、軸を同一にし一群の同時期の所産と考えられる。また、9～12号土坑との関係も、その配列が直交することから何等かの区画をも想起させる様相である。これらは近代の所産であろう。

27号土坑　Ⅰ・J－2・3Grで23号坑の東に近接して検出された。幅広の長方形を呈し、坑底面は緩やかに凹む。掘り込みはやや軟弱といえよう。長軸など他の土坑とは差が認められる。

28号土坑　調査区中央の北側のK－1・2Grで検出された。単独の土坑。ほぼ正方形の平面形を呈し掘り込みも深くしっかりしている。近代の所産。

30号土坑　Ⅰ－0・1Grに位置する。25号坑と長軸を同一にし、一群の土坑と捉えられる。北半が調査区域外に伸びる大型の長方形を呈する土坑である。掘り込みも深くしっかりしている。

31号土坑　調査区北西のE・F－0Grで32号坑と平行して検出された。小型の長方形を呈し、掘り込みは深くしっかりしている。近代の所産。

32号土坑　E・F－1Grで31号坑の南側を平行する。小型の長方形で、壁は緩やかに立ち上がる。

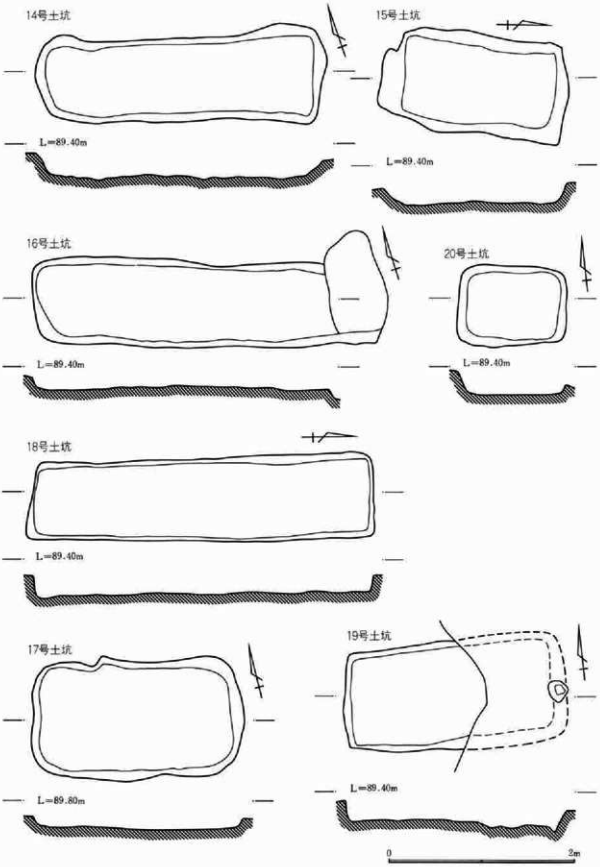
第8節　井　　戸

本遺跡では4基の井戸を検出したが、そのうち1号井戸は現代の所産と判明したため、本報告では割愛して欠番扱いとした。2～3号井戸は中世～近代の所産である。

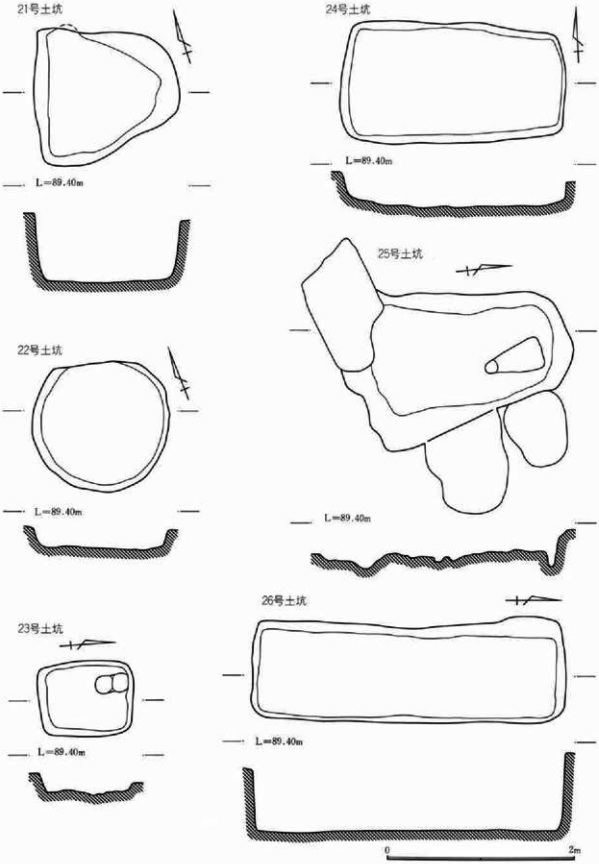
2号井戸　調査区中央のⅠ－4Grで検出した。1号掘立柱建物跡と重なり新旧は不明。素掘りで径約160㎝の円形を呈し、深さは170㎝を測りやや浅い。壁は傾斜を持って立ち上がる。近代の所産であろう。

3号井戸　調査区南西のE・F－7Grで検出した。17号坑が北に近接する。現代の耕作溝と重複しているが平面形は径約130㎝の円形を呈し、深さは約220㎝を測る。底面は平坦で、壁は上位が開くものの、下位は直立する。出土遺物は中世段階の鉢口縁部と奈良時代の須恵器破片が認められるが、本井戸に帰属する時期は中世と捉えておきたい。

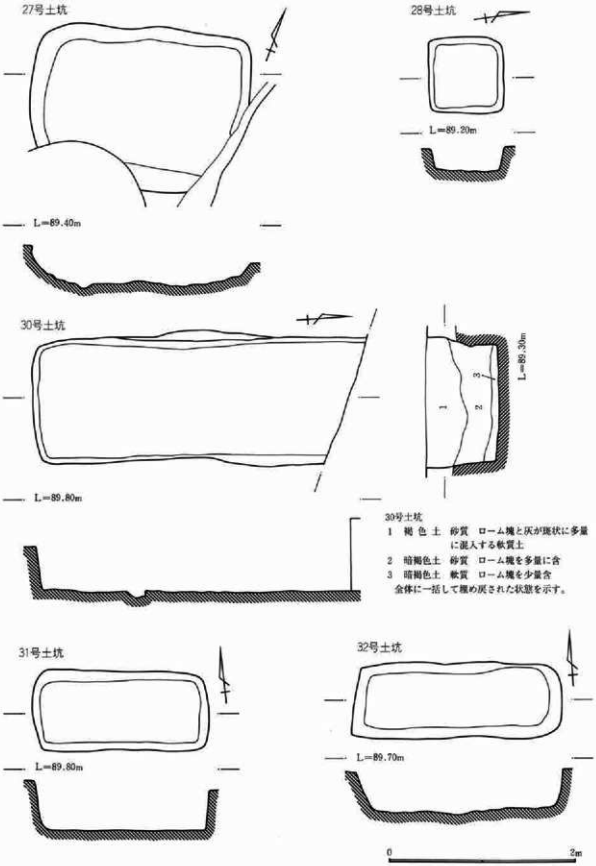
4号井戸　調査区北端のL－1Grで検出した。単独であり、近接する遺構は無い。径約150㎝の円形を呈し、深さは約180㎝を測る。底面は段を持ち、壁は上位が開くが、下位は直立気味である。出土遺物は無く、覆土の様相から近代の所産とした。


14号土坑
L=89.40m
15号土坑
L=89.40m
16号土坑
L=89.40m
20号土坑
L=89.40m
18号土坑
L=89.40m
17号土坑
L=89.80m
19号土坑
L=89.40m
0
2m

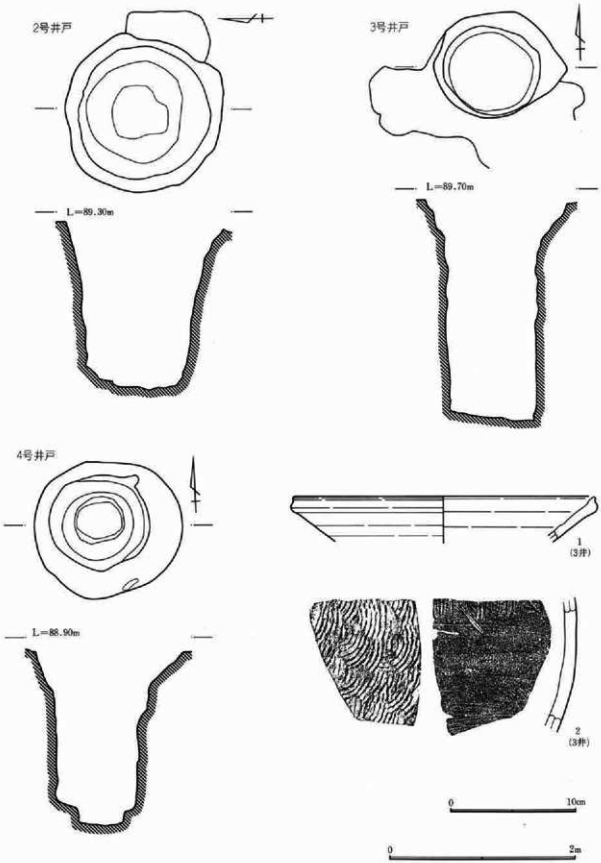
第18図　土　坑(3)


21号土坑
L=89.40m
22号土坑
L=89.40m
23号土坑
L=89.40m
24号土坑
L=89.40m
25号土坑
L=89.40m
26号土坑
L=89.40m
0
2m

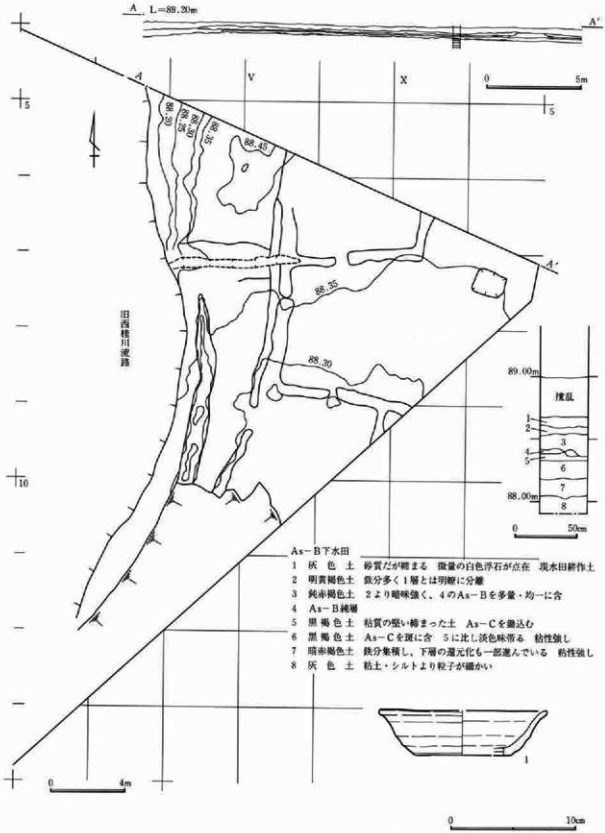
第19図 土 坑(4)


27号土坑
L=89.40m
28号土坑
L=89.20m
30号土坑
L=89.80m
L=89.30m
1
2
3
30号土坑
1　褐色土　砂質　ローム塊と灰が斑状に多量に混入する軟質土
2　暗褐色土　砂質　ローム塊を多量に含
3　暗褐色土　軟質　ローム塊を少量含
全体に一括して埋め戻された状態を示す。
31号土坑
L=89.80m
32号土坑
L=89.70m
0
2m

第20図　土　坑(5)



第21図　井戸及び出土遺物


A
L=89.20m
A'
V
X
0
5m
5
10
旧西桂川流路
89.45
89.35
89.30
89.00m
撹乱
88.00m
0
50cm
0
4m
0
10cm
As－B下水田
1　灰　色　土　砂質だが粘まる　微量の白色浮石が点在　現水田耕作土
2　明黄褐色土　鉄分多く1層とは明瞭に分離
3　純赤褐色土　2より暗味強く、4のAs－Bを多量・均一に含
4　As－B純層
5　黒 褐 色 土　粘質の堅い粘まった土　As－Cを混込む
6　黒 褐 色 土　As－Cを斑に含　5に比し淡色味帯る　粘性強し
7　暗赤褐色土　鉄分集積し、下層の還元化も一部進んでいる　粘性強し
8　灰　色　土　粘土・シルトより粒子が細かい

第22図　As－B下水田

第９節　水田跡（As－Ｂ下）

調査区東側に西桂川の旧流路が確認された。調査区内の地形区分はこの旧流路を境にして、西側が洪積台地、東側が沖積低地に分けられる。

本遺跡で検出された水田跡はこの東側の沖積低地に展開するものである。この水田跡のさらに東側を現西桂川が流れ、As－Ｂ下水田を検出した波志江中峰岸遺跡が本遺跡と同様に上武道路関連で調査されている。すなわち本遺跡のAs－Ｂ下水田は旧西桂川左岸に占地し、東に位置する波志江中峰岸遺跡の水田跡と連続し、その西端にかかるものである。

調査はAs－Ｂ上面まで重機の掘削により、その後手作業による軽石除去作業を行った。その結果、数条の畦畔が確認され、水田跡として認知されることになった。

水田を形成する床土は黒褐色粘質土が充てられ、平坦面を築く。地形に沿って南北と西桂川に傾斜する傾向は認められるが、非常に緩やかである。この床土は微量のAs－Ｃが認められているが、おそらく下層のAs－Ｃを含む層を鋤き込むことによって混入したものであろう。

畦畔は概ね薄く、僅かな高まりを検出した。その様相は、南北に緩やかに傾斜する地形に沿うものと直交するものが認められた。畦畔による区画形状は方形が基調となっているが、整然とした規則性は認められない。水口は南北の地形に沿うものが２カ所、西桂川に落ち込む東西のもの１カ所が観察された。

また、旧西桂川に沿ってAs－Ｂを覆土とする細い溝を検出した。南北に伸びる溝であり、本水田跡に伴うものであろう。なお、畦畔に重複して１条の溝が確認されたが、覆土は褐色土であり、近～現代の所産と捉えた。

出土遺物は、水田面から須恵器杯が出土している。10世紀のもので本水田跡の上限段階としたい。

前述したように、本水田跡は波志江中峰岸遺跡の水田跡と同一の様相である。本遺跡では検出面が狭く、その全容を把握できないが、将来的には波志江中峰岸遺跡報告と併せて活用されるものである。

第10節　溝

６条の溝を検出した。このうちの５・６号溝は洪積台地部分の低標高部分を南北に走行するものであるが、覆土は均質土で自然営力によるものとし、報告には掲載していない。

１号溝

調査区中央を横断する農道に沿って検出された。１号・８号土坑を切る。小規模な溝である。近代の土坑群を切り、覆土の様相から現代の所産とする。

２号溝

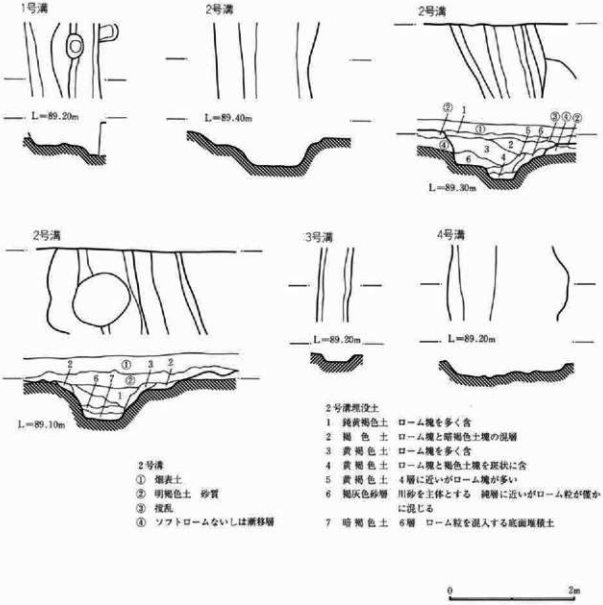
調査区中央を南北に走る。近代に比定した土坑群に切られ、奈良時代の住居跡を切ることから、中～近世に時期を求めたい。溝底面は徐々にではあるがそのレベル数値を南に高め、台地の巨視的な標高差に準拠するものである。溝幅も南に広がる傾向を見せ、当地域の開発に有機的な位置を持つと思われる。断面形は箱状で、西側に犬走り状の平坦面を築く。遺物は陶器片などが出土している。

３号溝

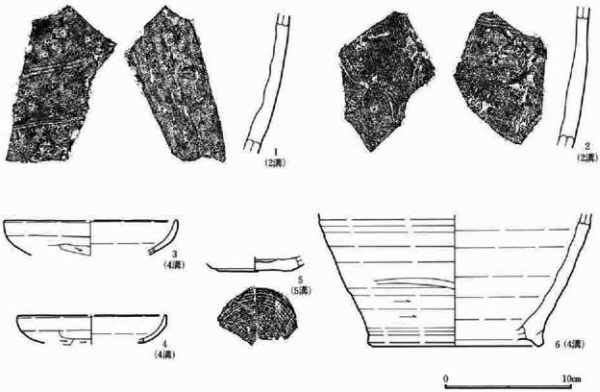
１号溝と２号溝の間を南北に走行する。小規模な蛇行は認められるもののほぼ直線的に４号溝と２号溝をつなぐ位置にある。幅は狭く、断面は浅いため覆土の様相も捉え難く、時期は不明である。

４号溝

調査区中央南側で検出した。東西に走行が認められるが、２号溝と現農道で消える。浅く皿状の断面形だが、幅約160cmを測り、１・３号溝に比して有機性に富む。溝底面は東に落ちる。時期は不明だが、土師器杯片や須恵器甕底部が出土している。


1号溝
L=89.20m
2号溝
L=89.40m
2号溝
L=89.30m
2号溝
L=89.10m
3号溝
L=89.20m
4号溝
L=89.20m
2号溝
① 畑表土
② 明褐色土　砂質
③ 撹乱
④ ソフトロームないしは漸移層
2号溝埋没土
1　純黄褐色土　ローム塊を多く含
2　褐　色　土　ローム塊と暗褐色土塊の混層
3　黄褐色土　ローム塊を多く含
4　黄褐色土　ローム塊と褐色土塊を斑状に含
5　黄褐色土　4層に近いがローム塊が多い
6　褐灰色砂層　川砂を主体とする　純層に近いがローム粒が僅かに混じる
7　暗褐色土　6層　ローム粒を混入する底面堆積土
0
2m

第23図　溝



第24図　溝出土遺物

井戸・水田・溝出土遺物

ここにあげる遺物は、水田出土遺物を除き必ずしも出土した遺構に伴うものではない。おそらく1～3号住や調査区域外からの流入と捉えられよう。

第21図1　3号井戸。推定口径24.2㎝の小型の鉢である。軟質陶器。口唇部は僅かに突出し、口縁部は直立気味に内傾する。口縁部内面も僅かに凹む。灰色を呈し、胎土に白色鉱物粒・黒色鉱物粒を含む。

第21図2　3号井戸。須恵器破片。外面に自然釉。おそらく大甕か。あるいは横瓶の可能性もある。外面に平行叩き目、内面に波状の当て目。黄灰色を呈し、胎土に微小の白色粒を含む。

第22図1　As－B下水田。須恵器杯。1/3残存。復元推定値は口径13.4・底径7.6・器高4.1㎝。口縁部は緩やかに外反。体部は丸みを帯びる。底部撫で調整。右回転。10世紀代。色調は黄灰色を呈し、胎土に白色・黒色鉱物粒を含む。

第24図1　2号溝。焼き締め陶器大甕破片。常滑系。12～13世紀。明赤褐色を呈し、大粒の砂礫や白色透明粒・黒色鉱物粒を含む。

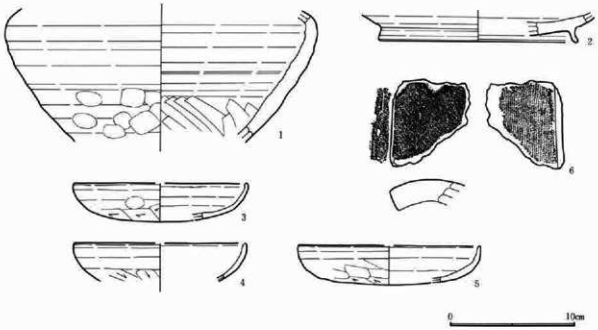
第24図2　2号溝。焼き締め陶器大甕破片。常滑系。12～13世紀。灰白色を呈し、白色鉱物粒を含む。

第24図3　4号溝。土師器杯細片。口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部は削り、内面は平滑。色調は鈍い褐色を呈し、胎土に微小の白色鉱物粒・黒色鉱物粒を含む。復元口径13.9㎝。

第24図4　4号溝。土師器杯細片。口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部は削り。色調は鈍い橙色を呈し、胎土に微小の白色鉱物粒・黒色鉱物粒を含む。復元口径12.0㎝。

第24図5　5号溝。酸化焔焼成須恵器杯底部。左回転糸切り無調整。橙色を呈し、白色鉱物粒と褐色粒を含む。復元底径6.0㎝。

第24図6　4号溝。須恵器高台甕。付け高台。右回転調整後外面横位削り。灰白色を呈し大粒の白色鉱物粒を含む。復元底径14.0㎝。



第25図　グリッド出土遺物

第11節　グリッド出土遺物（第25図）

ここに挙げる遺物は、撹乱坑や遺構平面確認時に出土した縄文時代以外の遺物を集めた。撹乱からの出土遺物は多いが、殆どが細片であり、また摩滅が著しく図化に至らなかった。

1　Q－6Gr周辺にある撹乱溝から出土した。須恵器台付き壺胴部破片である。肩部は屈曲し、外面に自然釉がかかる。右回転調整だが内面の調整痕は著しい。体部下半は指頭による撫で。内面下半は斜位の撫で。灰色を呈し、胎土に黒色鉱物粒・微小の白色鉱物粒・大粒の砂礫を含む。

2　P－5Gr周辺の撹乱溝から出土した。須恵器盤であろう。細みの高台を付し、底面の器厚は厚い。右回転調整。黄灰色を呈し微小の白色鉱物粒を含む。

3　P－8Gr。1号住が近接する。土師器杯破片。口縁部は僅かに内湾、口唇部は内面にやや丸みを持つ。口縁部内外面横撫で。体部は削り、内面は平滑。鈍い橙色を呈し、胎土に微小の白色・黒色・透明鉱物粒を含む。

4　P－8Gr。1号住が近接する。土師器杯細片。口唇部僅かに内湾。口縁部内外面横撫で。体部は削り、内面は平滑。鈍い橙色を呈し、胎土に白色・透明鉱物粒を含む。

5　K－6Gr。2号住と3号住の中間から出土。口唇部端部は比較的尖る。口縁部はやや直立気味。口縁部内外面横撫で。体部外面は削り。内面は平滑。色調はにぶい橙色を呈し、微小の白色鉱物粒・透明鉱物粒を含む。

6　R－3Gr。旧西桂川上端部分より出土。男瓦破片。還元焔焼成の布目瓦。半截作り、凸面木目叩き。側部面取り3回か。

第1表　旧石器時代の単独石器一覧表（波志江六反田）

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第4図－1	六Ⅴブレ拡張区	スクレイパー	4.0	1.8	4.70	黒曜石
2	六Ⅴブレ拡張区	スクレイパー	3.6	2.3	6.56	黒曜石
3	六Ⅴブレ拡張区	使剥	3.0	1.6	1.93	黒曜石
4	六Ⅴブレ拡張区	使剥	2.9	0.8	0.56	黒曜石

第２表　古墳時代以降遺物観察表

１号住居跡（第10図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第10図１ 土師器杯	口径：(13.8) 器高：(３.1)	床直 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。 体部外面削り、内面平滑。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好　③褐
第10図２ 須恵器杯蓋	口径：(17.9) 器高：(２.9)	貯蔵穴 破片	口縁部～体部緩やかに屈曲。左回転。	①白色鉱物粒子 ②還元焔　良好　③灰

２号住居跡（第12図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第12図１ 土師器杯	口径：13.9 器高：３.4	床直 ほぼ完形	口縁部僅かに外反。体部は浅く底部はやや尖り気味。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面平滑で中央が凹む。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③明赤褐
第12図２ 土師器杯	口径：(14.2) 器高：(３.4)	覆土 口縁部1/3残存	口縁部直立気味に内傾。体部は浅く偏平。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面は平滑ながら凹凸もある。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　堅緻 ③明赤褐
第12図３ 土師器杯	口径：(14.1) 器高：(２.5)	床直 破片	口縁部外傾。体部は恐らく偏平か。口縁部内外横撫で。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　良好　③橙
第12図４ 須恵器壺	器高：(1.8)	覆土 脚部欠損	転用硯。天井部につまみを設けず、僅かに内湾する体部。脚部は全周欠損。天井部回転削り。左回転。体部は撫で、内面は撫で中央部はやや凹む。国中央が縦密範囲。内面中位に焼成前の小孔が設けられる。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②還元焔　良好 ③灰白
第12図５ 土師器甕	口径：(20.9) 器高：(15.0)	床直・竈・覆土 口～胴部破片	口縁部緩外反。頸部は直立気味。体部は膨らみ、最大径は上半。口縁部内外横撫で。体部外面上位横削り、下位斜位削り。内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③橙
第12図６ 土師器甕	底径：(5.3) 器高：(6.8)	竈 底部破片	底端部は絞く立ち上がる。外面縦位削り内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焔　やや軟質　③橙

３号住居跡（第14図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第14図１ 土師器杯	口径：13.8 底径：８.7 器高：４.2	床直・竈・覆土 ほぼ完形	口縁部体部外傾。底部は平底。内面のみこみ部は明瞭。口縁部内外横撫で。体部横位削り。底面も削り。体部内面放射状暗文。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質 ③橙
第14図２ 土師器杯	口径：(14.0) 器高：(２.6)	覆土 破片	口縁部僅かに内湾。体部浅く偏平。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面凹凸有り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　軟質　③にぶい橙
第14図３ 須恵器杯	口径：(13.0) 底径：(８.1) 器高：(３.0)	覆土 1/4残存	口縁部体部外傾。底面の器厚厚い。 底部回転糸切り後撫で調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②還元焔　堅緻 ③灰

３号井戸（第21図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第21図１ 軟質陶器鉢	口径：(24.2) 器高：(３.5)	覆土 破片	口縁部に薄い段を持ち口唇部は丸みを帯びる。口縁部の屈曲部も丸みを帯びる。	①白色・黒色鉱物粒子 ②軟質　③灰

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第21図 2 須恵器大甕		覆土 破片	外面平行叩き目。内面波状の当て目。	①白色・黒色鉱物粒子 ②還元焔　堅緻　③黄灰

As－B下水田（第22図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第22図 1 須恵器杯	口径：(13.4) 底径：(7.6) 器高：(4.1)	U－8GrB下面 破片	口縁部は緩外反。体部丸みを帯びる。底部回転糸切り後撫で。全体に砂質である。	①白粒子，黒色・透明鉱物粒子 ②軟質 ③黄灰

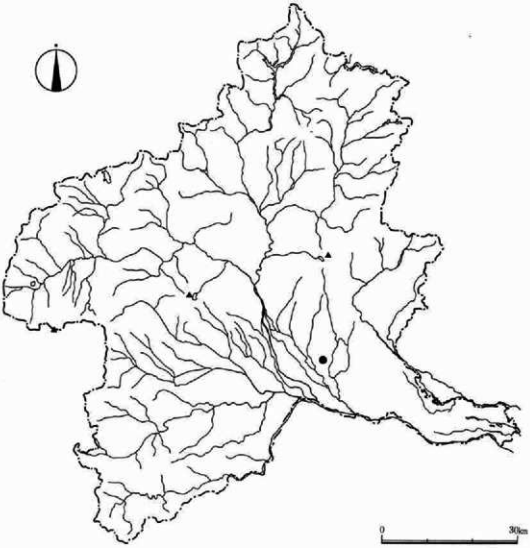
溝（第24図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第24図 1 焼締陶器 大甕		2溝 胴部破片	外面撫で。内面は指頭痕による凹凸残る。	①白色鉱物粒子 ②還元焔　良好 ③明赤褐
第24図 2 焼締陶器 大甕		2溝 胴部破片	内外面撫で調整。	①白色・透明鉱物粒子 ②還元焔　良好 ③灰白
第24図 3 土師器杯	口径：(13.9) 器高：(2.7)	4溝 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・黒色鉱物粒子，白粒子 ②酸化焔　やや軟質　③にぶい褐
第24図 4 土師器杯	口径：(12.0) 器高：(2.2)	4溝 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部削り。外面刷毛。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　やや軟質　③にぶい橙
第24図 5 須恵器杯	底径：(6.0) 器高：(1.1)	5溝 底部破片	底部回転糸切り無調整。左回転。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焔　軟質　③橙
第24図 6 須恵器甕	底径：(14.0) 器高：(10.4)	4溝 胴～底部破片	底部内面。使用による摩滅。体部下半に横位削り。右回転。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②やや軟質　③灰白

グリッド（第25図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第25図 1 須恵器壺	器高：(10.4)	Q－6Gr 胴部破片	外面自然釉。内面横撫で調整が著しく，下半は斜位撫で。外面下半に指頭痕。	①黒色・白色鉱物粒 ②還元焔　③灰
第25図 2 須恵器盤	底径：(16.0) 器高：(2.2)	P－5Gr 底部破片	高台・体部薄い。右回転。	①白色鉱物粒子 ②還元焔　③黄灰
第25図 3 土師器杯	口径：(14.0) 器高：(3.0)	P－8Gr 破片	口縁部内湾。口唇部内面に丸み。体部偏平。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　③にぶい橙
第25図 4 土師器杯	口径：(13.8) 器高：(3.1)	P－8Gr 破片	口縁部内湾。やや身深。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　③にぶい橙
第25図 5 土師器杯	口径：(14.6) 器高：(3.0)	K－6Gr 破片	口縁部内湾。体部偏平。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焔　③にぶい橙
第25図 6 男瓦		Ⅱ区R－3Gr 破片	布目瓦。半截作りで，凸面木目叩き。	①白色・透明鉱物粒 ②還元焔　③灰白

Ⅴ章　波志江天神山遺跡



第26図　遺跡の位置

第１節　遺跡の概要

(遺跡内の地形)

波志江天神山遺跡は、前章で述べた波志江六反田遺跡と同一台地上にあり県道深津伊勢崎線を境に字名が変更するため、別名称となっている。また、検出遺構の内容も趣を異にし、遺跡総体の評価も波志江六反田遺跡とは別のものである。

波志江天神山遺跡は波志江六反田遺跡の西に隣接し、洪積台地上に占地する遺跡である。ローム層の遺存も非常に良好で、波志江六反田遺跡で見られたような旧石器試掘坑内の湧水は認められなかった。本遺跡調査区内に沖積低地や埋没谷は存在しないが、西には波志江沼に水を湛え、南側を沖積低地が広がる地形を形成する。

また、波志江沼の西も良好な洪積台地と狭小な沖積低地が連続し、伊勢崎市と前橋市の市境である神沢川にいたる。ここは波志江今宮遺跡として、８基の古墳とＡs－Ｂ下水田が調査されている。

調査区内の地形は、県道よりが最も標高が低く、台地形状としてはその断面形ではやや平坦面ともいえる箇所である。標高は調査区西に行くに従い徐々に高くなり、北西隅で最高標高地点を測る。参考までにこの最高標高地点と波志江六反田遺跡の沖積低地との比高差は約2.8ｍである。調査区西には構造物があり、波志江沼に向かって崖状に落ちる。概観すれば、西側は急激な傾斜を形成するが、東側には緩やかな斜面を持つ洪積台地といえ、波志江天神山遺跡はほぼ平坦にも見える緩斜面に位置する。調査はこの緩斜面上に刻まれた各時期の遺構・遺物を検出したのである。

(検出された遺構と遺物の概要)

発掘調査は調査事務所用地として県道側から着手した。しかし、県道寄りは波志江六反田遺跡と同様に現代の撹乱が著しく、調査対象からは除外せざるを得なかった。その後徐々に調査の手を西に伸ばし、調査区東半分は近代の溝・土坑といった波志江六反田遺跡に見られた同様の遺構群の調査、西半分は縄文時代の陥穴などの土坑と、包含層の調査が主であった。それらの遺構群の調査、記録化が終了した後、旧石器時代の試掘調査を行った。

旧石器時代

隣接する波志江六反田遺跡で石器の出土が見られ、また下触牛伏遺跡においても良好な石器群がブロックを形成していることからも、本遺跡においても旧石器時代の遺物出土の期待が高まった。

試掘は調査区内を網羅するように、かつ当然ながら作業上表土などの崩落の危険性が無い箇所を選んで２×４ｍの試掘坑を基本にして行ったが、石器の出土は見なかった。

縄文時代

遺構は土坑を６基検出したが、内５基は陥穴である。調査区西半分に集中する傾向を見せる。近接する遺跡では、下触牛伏遺跡で27基の陥穴を検出しており、縄文時代における当地域の特徴ともいえよう。本遺跡の陥穴は調査区中央で検出された一群と北西の一群が認められ、ある程度のまとまりが認められた。またその長軸方向も一定の規則性が看取され、労働対象物に対する陥穴設置の方法などが存在するようだ。

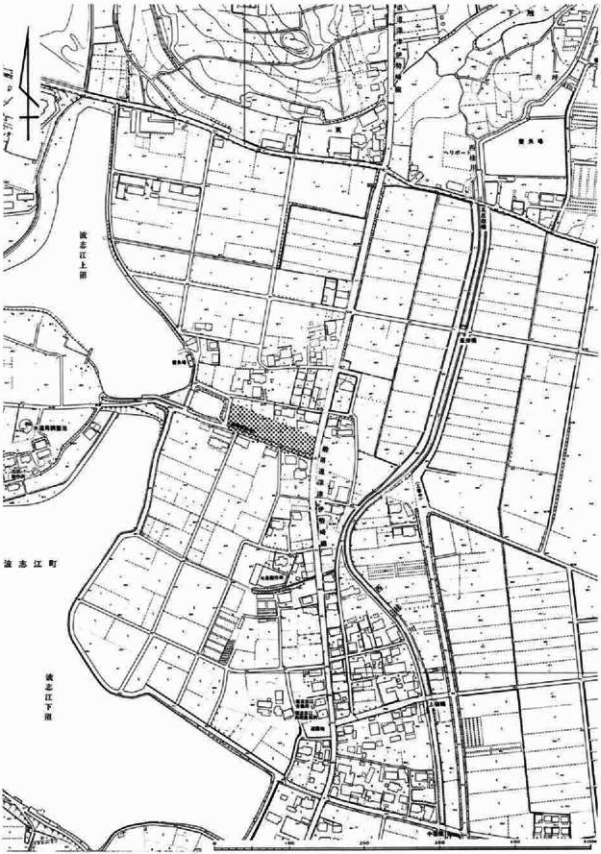
遺物も土坑と同様に西半に集中する。しかし、遺構から出土するものではなく包含層出土である。土器は前期後半の諸磯ｂ式期に集中する。おそらく石器もこの段階の所産のものが主体を占めると思われる。

弥生時代～中世

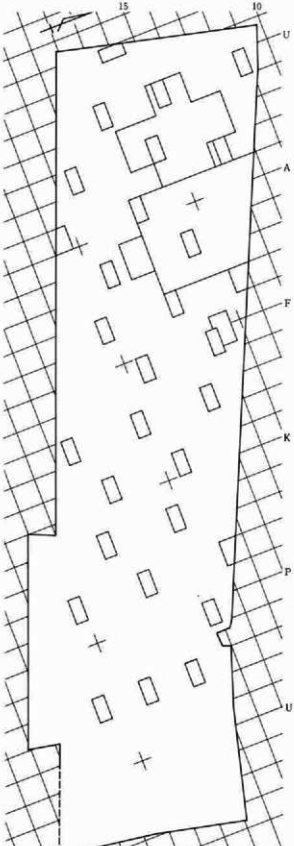
遺構は検出されなかった。ただし、現代のサク状遺構から８世紀代の須恵器盤脚部が出土しており、一概に皆無とは言い難い。南北の調査区域外には当該期の遺構遺物は存在するものと考えられる。

近世～近代

調査区東半を中心に、溝を８条・井戸１基・土坑17基などを検出した。波志江六反田遺跡とほぼ同様な様相と捉えられ、当地域の近～現代における居住域、開発行為の集中箇所として注目されるものである。屈曲する溝や方形土坑など検証の余地の多い遺構群である。



第27図　周辺の地形



第28図　旧石器調査範囲と基本土層

第2節　調査方法

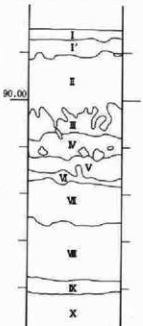
遺構確認面はⅡ層上面である。近世段階の遺構は、その覆土が砂質であったり、ローム塊を含む埋土のため確認は容易であった。しかし、縄文時代の土坑覆土は均質なものが多く、平面的には地山であるソフトロームとの識別は困難を極めた。

調査方法としては、グリッドを4×4mの正方形に組み、軸を国家座標軸に一致させた。グリッド名は波志江六反田遺跡から連続して数えるようにした。

原則的に出土遺物の地点、レベルの記録化を施したが、細片に至ってはグリッド名と出土層位を明記し取り上げた。遺構平面図は1/20を基本としたが、近世段階の溝などは1/40で作図した。また、遺構覆土はセクション図を充てるようにしたが、近世遺構はその覆土が類似し、かつ単層のものが多いため、エレベーション図を充て覆土の様相を記述した。

第3節　基本土層

旧石器試掘坑北側壁を分層し、遺跡内のローム層序を資料化した。第28図の土層図はO－18Grのものである。同一台地上の波志江六反田遺跡と層序の変更は特に認められないが、各層の遺存状態は本遺跡が良好であった。



Ⅰ　表土層
Ⅰ'　旧表土層
Ⅱ　黄褐色軟質ローム層
Ⅲ　黄褐色硬質ローム層
Ⅳ　褐色硬質ローム層
Ⅴ　褐色硬質ローム層
Ⅵ　暗褐色硬質ローム層
Ⅶ　暗褐色硬質ローム層
Ⅷ　褐色硬質ローム層
Ⅸ　八崎火山灰層

各層の詳細はⅣ章第2節を参照していただきたい。Ⅰ'はAs－Bを含む暗褐色土である。

第4節　検出された遺構と遺物

波志江天神山遺跡では住居跡が検出されなかった。周辺の様々な遺跡が生産跡や住居跡が確認されている中で本遺跡に「住まい」としての居住痕跡が認められない現象は偶然的ではないだろう。当地域の集落占地を考える際に注意を要する遺跡として評価を与えたい。

本遺跡では、土坑・溝という直接的な居住施設ではない遺構が検出されている。これらの遺構は出土遺物も少なく、用途・時期などの特定が難しいが、確実に人間の歴史的所産物であり、その調査・報告はないがしろにはできない。本報告では、これらの遺構を積極的に扱うことによって、当地域のそれぞれの時代の側面を明らかにしたい。

1．土　坑

土坑は縄文時代と近世～近代のものが確認されている。その内訳は、

縄文時代：6・8～10・20・21号土坑の6基を検出した。このうち6号土坑を除く5基が陥穴であり、比較的まとまった資料といえよう。

近世～近代：1～5・7・11～19・22・23号土坑の17基である。この段階の時期判別は各遺構の重複状況や、波志江六反田遺跡で得た土層による判別を参考にした。

この他にも、小ピットや浅い皿状の断面形の土坑を確認し調査では図化したが、整理作業によって木根や自然的営力による落ち込みのものと判断し、報告には掲載していない。

ここでは、各時代毎に調査時の番号順に説明を加えるが、近世～近代の土坑群は多少の時間差や性格差が生じる結果となっている。

（縄文時代）

6号土坑　調査区西のW－14・15Grで検出された。北に8号坑が位置するが、関連性は薄い。平面規模は、径約1.4×1.6mの不整円形を呈し、深さは約40cmを測る。坑底面は凹凸を持ち小ピットが重複するが、これは木根によるものである。壁は直立気味に立ち上がるが、東側は緩やかな傾斜を示す。

本土坑上面は多量の諸磯b式土器が出土し、住居跡などの遺構の存在を想定した調査が行われたが、検出された遺構は本土坑だけであった。また、遺物の集中的な出土は上面にとどまり、土坑覆土からの遺物は少量であり、下層に至ると無遺物になった。よって本土坑は遺物を有機的に出土する性格ではなく、上面の出土遺物は、グリッド扱いとして図示している（第41図1）。

覆土は炭化物を含む暗褐色～明黄褐色土を基調とした均質土で構成され、堆積状況は緩やかな自然堆積と捉えた。

時期は上面の諸磯b式土器を重視するべきであろう。土坑埋没が完了せず凹部となった箇所に土器片が炭化物などと共に集中したのであろう。よって、本土坑の構築は前期後半以前と捉えた。

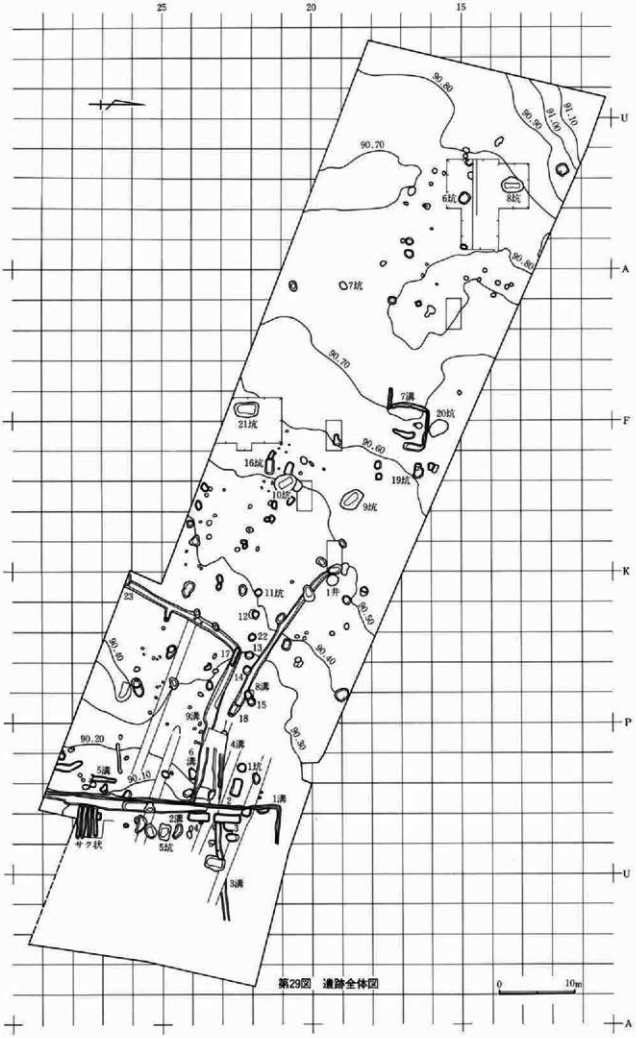
8号土坑　陥穴である。調査区北西のV・W－12・13Grで検出された。南約4mに6号坑が検出されている。本土坑北西はやや傾斜を強くしており、台地縁辺のやや内側に位置する。長軸をほぼ南北に持ち、西壁上端が崩れており不整形を呈するが約2.3×2.0mの長楕円形を平面形と捉えられる。長辺の中位が僅かに内湾する特徴を持つ。深さは約1.3mで、坑底面は幅約0.6mと狭小であるが平坦であり、暗色帯に達している。

壁は上位が崩落によって漏斗状を呈するが、下位は比較的直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを呈する。

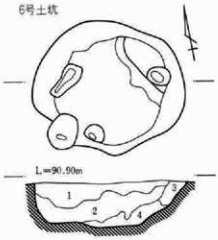
坑底面の小ピットは3ケが正位に開けられているが深くはない。中位の穴が小型で浅い。ただし、規則性を持っており意図的な配置と捉えられよう。

土層は自然堆積状態を呈し、3・4層は壁崩落によるものと考えられる。

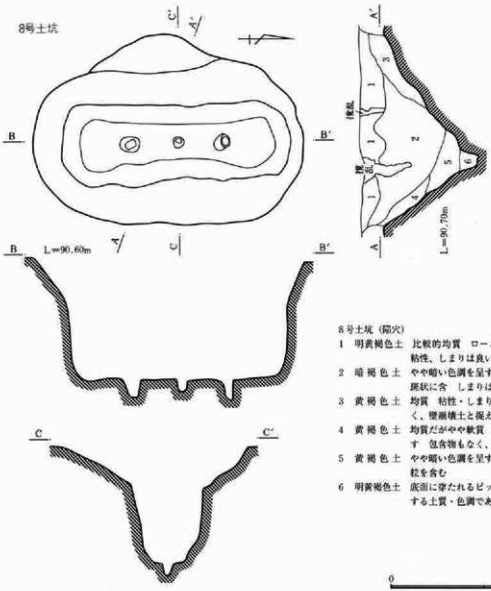
遺物は周辺から諸磯b式土器片が出土しているが、本土坑覆土からは出土を見ない。おそらく、本土坑埋没後にある程度の時間が経過して、諸磯b式の土器片が上面に包含されたのであろう。ゆえに、本土坑の時期的な位置を前期後半以前に求めたい。


25
20
15
U
A
F
K
P
U
A
90.80
90.90
91.10
91.10
90.70
6坑
8坑
90.40
7坑
90.70
7溝
20坑
21坑
90.60
16坑
19坑
10坑
9坑
11坑
1井
12
22
13
90.50
90.40
23
90.40
12
8溝
15
9溝
18
4溝
90.30
90.20
5溝
溝
1坑
90.10
1溝
2溝
サク状
5坑
3溝
0
10m

第29図　遺跡全体図



6号土坑
1　暗褐色土　炭化物・ローム塊を多く含　しまりはよく粘性も強い
2　黄褐色土　やや軟質　小型のローム塊を多く含　しまりはやや乏しいが粘性は強い
3　明黄褐色土　若干硬質のローム塊を主体とする　しまりは乏しいが粘性は強い
4　明黄褐色土　やや暗い色調を呈す　ローム塊を少量含　しまりは良好、粘性も強い



8号土坑（陥穴）
1　明黄褐色土　比較的均質　ローム粒・暗褐色土塊を含　粘性、しまりは良い
2　暗褐色土　やや暗い色調を呈する　均質　ローム粒を斑状に含　しまりは良好
3　黄褐色土　均質　粘性・しまり共に良好　包含物も無く、壁崩壊土と捉えた
4　黄褐色土　均質だがやや軟質　3層より暗い色調を呈す　包含物もなく、壁崩壊土と捉えた
5　黄褐色土　やや暗い色調を呈す　軟質で微量のローム粒を含む
6　明黄褐色土　底面に穿たれるピットの埋土　地山と類似する土質・色調であるが、軟質である

0　2m

第30図　縄文時代の土坑（1）

9号土坑　陥穴である。調査区ほぼ中央やや北よりのⅡ－18・19Grで検出された。南約6.4mに陥穴である10号坑が位置する。また、20号坑も北西に約12mの距離を置いて設けられており、21号坑など共に一群を形成するものと捉えられよう。

本陥穴はほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つ。台地でもほぼ中間に位置し、前述の8号坑とは群を別にするようだ。

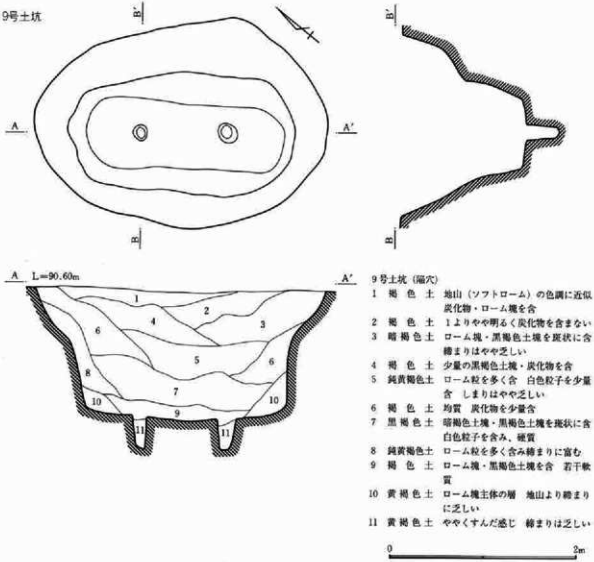
平面形は約3.1×2.1mの不整楕円形を呈し、深さは約0.9mを測る。坑底面平面形は整った隅丸長方形を呈し、上端との平面形との差は壁崩落を物語る。

壁は上位が開き、下位は直立気味に開く。特に北辺の上端は強く開き、屈曲を持つ。

坑底面はほぼ平坦だが、中央部分がやや凹む。掘り込みは暗色帯に達している。小ピットを相対するように2ケ設ける。約75cmの距離を保ち、両者とも深さ約25cmと比較的深い。ピットは坑底面のみに検出され、壁には開けられていない。また、ピット覆土、及び土層下端に柱痕は認められなかった。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積を物語る。壁際には黄褐色～褐色土が認められ、壁崩落によるものであろう。中層には黒褐色土が認められ、上位に黄褐色土が乗ることから、埋没過程に数段階の変遷が追えよう。

遺物は出土していない。



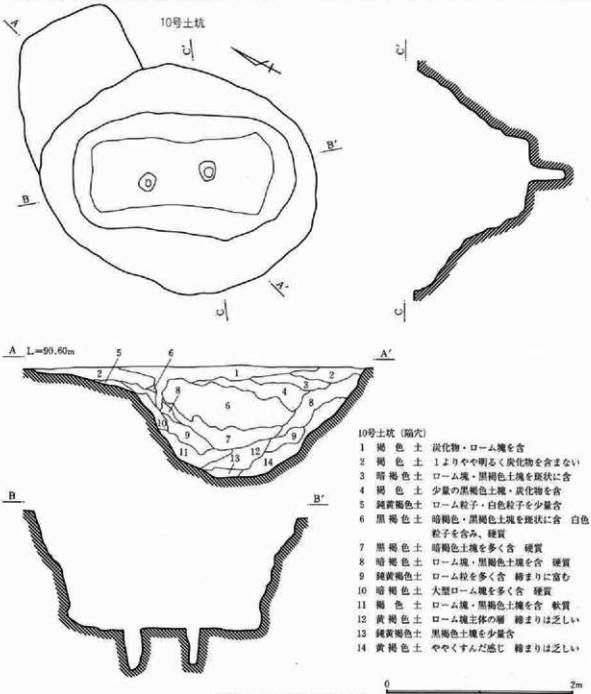
第31図　縄文時代の土坑（2）

10号土坑　陥穴である。調査区ほぼ中央のG・H－20・21Grで検出された。南西約9ｍに陥穴である21号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つが、9号坑に比してやや北に傾く。

平面形は上端約2.9×2.4ｍの不整形を呈し、深さは約1.3ｍを測る。坑底面平面形は比較的整った長方形を呈し、上端との平面形との差は壁崩落によるものであろう。また、本土坑周辺には、浅い落ち込みが群在し、本土坑北側にも不整形の落ち込みが重なる。新旧は不明である。

壁は短軸方向に大きく開く。坑底面はほぼ平坦だが僅かな凹凸はある。掘り込みは暗色帯に達している。小ピットを相対するように2ケ設ける。接近するように設けられ、両者とも深さ約40cmとしっかりしている。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積



第32図　縄文時代の土坑（3）

を物語る。このうち1～4層は下位の土層とは粘性などに違いが見られ、有る程度の時間を隔てた堆積と考えられる。遺物は出土していない。

20号土坑　陥穴である。調査区ほぼ中央北西よりでE・F－15・16Grで検出された。南東約12mに9号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つ。

本土坑は、旧石器試掘時に確認された土坑である。また、2ケの土坑の重複であり、平面形・深さとも他の土坑とは比較材料にはならないが、深さは暗色帯に達しており、その深度を誇る遺構としては本遺跡では陥穴しかなく、覆土の様相も類似していたため本土坑を陥穴として報告する。

平面形は上端約2.6×1.5mの不整形を呈し、深さは約1.2mを測る。坑底面平面形も不整形で全体感は不明である。遺物は出土していない。

21号土坑　陥穴である。調査区中央の南端のE－21・22Grで検出された。北東約9mに10号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し長軸を北に持つ。

平面形は上端約3.0×1.9mの比較的整った隅丸方形を呈し、深さは約1.1mを測る。坑底面平面形は比較的整った長方形を呈し、東辺が僅かに湾曲する。上端との平面形との差は壁崩落によるものだがその差は少ない。

壁は上位が大きく開き、下位は直立気味である。掘り込みは暗色帯に達している。

坑底面はほぼ平坦で小ピットを3ケ連続する。小ピットは直列し、両端のピットが規模・深さとも共通性を持ち、中間の小ピットが比較的小形で掘り込みも浅い。この形態は8号坑の坑底面ピットと類似し、距離を置く両土坑に同時性などの関連を考えることができる。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積状態を呈す。土層は下層に従い漸移的に色調が明るくなるが緩やかな時間をかけた堆積と考えられよう。

遺物は出土していない。

以上のように縄文時代の土坑を述べてきたが、5基が陥穴であり、そのうちの4基は残存状態も良好であった。

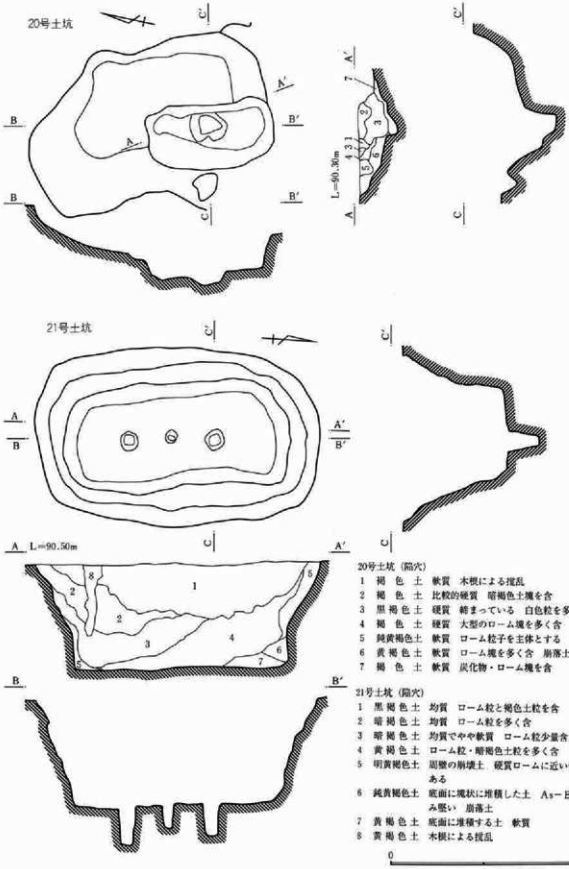
縄文時代の陥穴は、その労働対象物に鹿・猪という獣類が想定され、「けもの道」という、獣類が同じ箇所を活動範囲とする習性を利用して、陥穴を設営するものと考えられる。

本遺跡の場合、台地中央部分に一群の陥穴が検出されているが、上記の習性を意識した設営と捉えたい。また、台地縁辺で検出された8号坑もおそらく調査区域外で一群をなすものと考えられ、一つの台地で複数の陥穴群を設ける方法が用いられたものであろう。

坑底面に開けられる小ピットは、杭が埋め込まれたものとされる。本遺跡の陥穴坑底面には2穴のものと3穴のものが認められた。近接する下触牛伏遺跡では多数の陥穴が検出されているが、2穴のものから多数穴を設けるもので多様性に富む。また、五目牛南組遺跡では単穴のものだけで構成されているようだ。このように、各遺跡・各台地で陥穴はその要素に数種類の傾向が認められる。これは、対象とする獣類の差か、あるいは時期的な差が現れたものか論は確定していない。検討を要する。

通常我々が陥穴を検出するケースは、集落調査の一環で偶然検出される例が多く、調査前からその存在を予測した例はみない。これは、陥穴から出土する遺物が皆無といって良いほど見られないからで、遺跡周知の方法が、分布調査に頼る現状の方法では調査前には把握できない遺構である。本遺跡も、その例に漏れず、縄文時代の遺物包含層調査時や旧石器時代試掘調査時に確認された陥穴である。

この反省点に立って、陥穴などの無遺物遺構に対しても、その周知が予測できるように、当該遺構が占地される環境を吟味し、傾向を探らなければならない。本遺跡の陥穴が、その際の資料となれば幸いである。



第33図　縄文時代の土坑（4）

（近世～現代）

1号土坑　調査区北東のQ－22Grで検出された。1号溝屈曲部南西に位置し、東に2号坑が近接する。径約1.10m程の円形を平面形とし、深さは約40cmを呈し、比較的しっかりした掘り込みを持つ。坑底面は凹凸を持ち不連続である。覆土は砂質の軟質暗褐色土で、As－Aを含む。近代に比定される。

2号土坑　Q・R－22Grに位置し、西に1号坑が近接する。方形の土坑で、約2.3×1.1m、深さ45cmを測る。掘り込みはしっかりしている。坑底面は僅かに凹凸を持つ。覆土は1号坑と同様で、近代に比定される。

3号土坑　S－22・23Grで検出された。1号溝の屈曲部南東に位置し、4号坑と軸を同一にしている。約3.3×1.1m、深さ30cmを測る方形の土坑で、やや浅い。覆土は2号坑と近似し近代の所産とした。

4号土坑　S－23・24Grで検出された。3号坑と軸を同一にし、また1・2号溝とも平行する。方形の土坑で、2.7×1.1m、深さ約50cmを測る。覆土は3号坑と同様で、近世の所産とした。

5号土坑　S－24・0Grで4号坑の南東で検出された。不整方形を呈し、坑底面も凹凸が多い。覆土の様相から近代に比定される。

7号土坑　調査区西側、A－18・19Grで検出された。近接する遺構は無く単独の土坑である。不整楕円形を呈し、坑底面も凹凸を持つ。平面規模に比して、深さは80cmと深い。覆土は比較的均質だが遺物も出土せず、時期不明である。

11号土坑　K－21Grで検出した。12号坑の西約3mに近接する。径約0.9mの円形で、深さは約40cmで断面袋状を呈す。

12号土坑　L－21・22Grで検出した。11号坑と22号坑に挟まれた位置にある。不整円形を呈すが深さは約70cmと深い。南側壁が不連続だが、木根による撹乱である。

13号土坑　M－21・22Grで検出した。22号坑の東に位置する。径約0.8mの円形を呈し、断面形を袋状にする。坑底面は平坦である。

14号土坑　N－22Grで検出した。13号坑の東に位置し8号溝を切る。径約1.0mの円形で深さは約60cmを測る。坑底面は僅かに凹凸を持つ。

15号土坑　O－21・22Grで検出した。8号溝を挟んで14号坑の東に位置する。径約0.95mの円形で深さは約70cmを測る。坑底面は中央部が僅かに盛り上がり、11号坑と同様である。

11～15号土坑は同規模の円形土坑である。特に11～14号坑は、22号坑を挟んで直列し、その配置に何等かの規則性が認められる。調査着手時は掘立柱建物跡を想起したが、貯蔵・廃棄に伴う土坑と考えた。時期は、暗褐色砂質土を覆土とし、近世に比定された8号溝を切ることから近代段階の所産とした。

16号土坑　G－21Grで検出された方形土坑である。北東に縄文時代の10号坑が近接するが、本土坑は近代の所産である。規模は約1.8×1.0mで深さは約50cmを測る。坑底面は凹み、撹乱ともいえる不連続面が認められた。また、覆土にはヌカ状の白色灰が堆積しており、本土坑の用途を窺わせる。

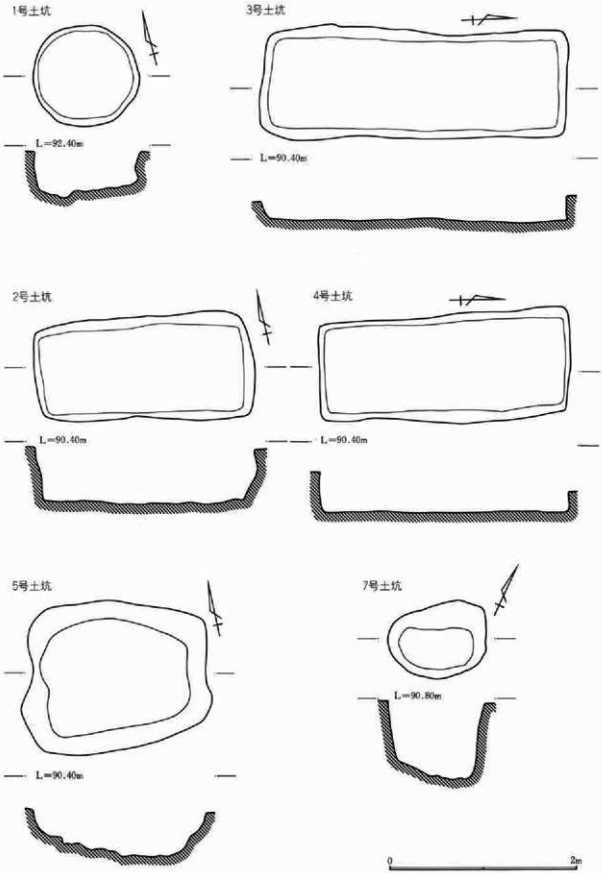
17号土坑　M・N－22Grで9号溝を切って検出された長方形土坑である。規模は2.5×0.5m、深さ25cmを測る。覆土から近代と捉えた。

18号土坑　O－22Grで8号溝に切られて検出された。規模は約1.7×1.0mで深さは約45cmを測る。坑底面は比較的平坦だが、16号坑と同様に覆土に白色灰が堆積し、坑底面にも撹乱が確認された。

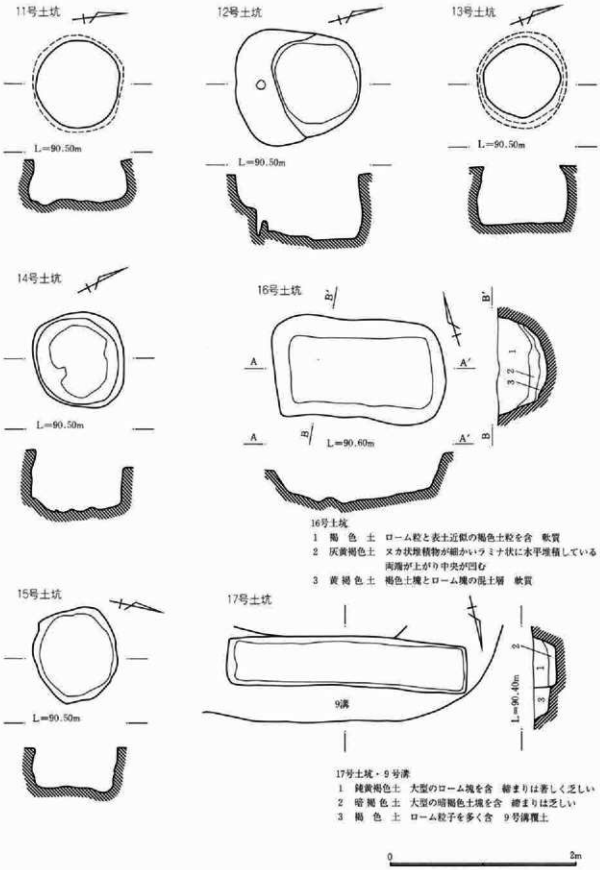
19号土坑　G－16Grで7号溝の東に検出された。張り出しを持つ長方形を平面形とするが、重複ではなく単独の土坑である。深さも約40cmと比較的しっかりした掘り込みである。覆土の様相から近代に比定される。

22号土坑　M－21・22Grで前述の11～14号坑と列をなす。径約95cmの円形で深さは約70cmを測る。

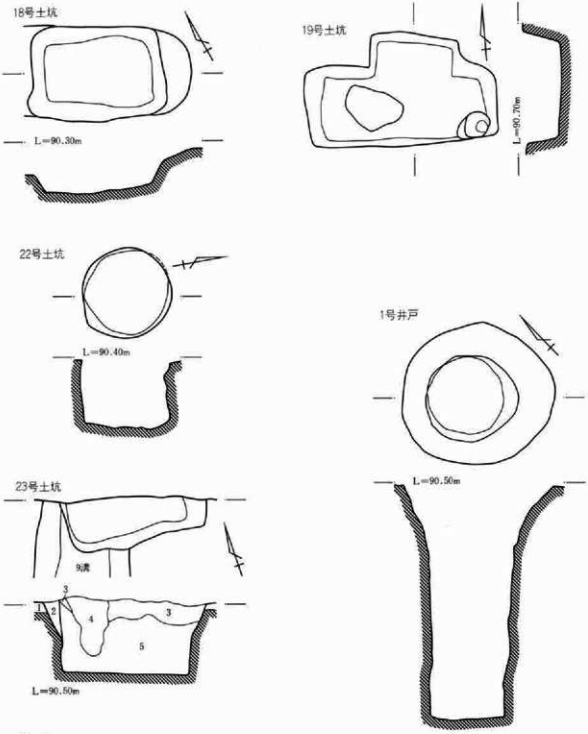
23号土坑　K－1Grの調査区南壁際で検出され、南半を調査区域外に伸ばす。おそらく方形の土坑であろう。深さは74cmを測る。覆土は軟質暗褐色土が主に埋められ、近代の所産とした。



第34図　近世～近代の土坑(1)



第35図　近世～近代の土坑（2）



23号土坑
1　黄褐色土　漸移層に類似　軟質
2　暗褐色土　砂質でやや軟質　ローム粒・褐色土塊を含
　　9号溝堆土を形成する
3　褐　色　土　ローム粒・ローム塊を斑状に堆積する
4　純黄褐色土　3層中に木の根が入り込んだ撹乱層
5　暗褐色土　軟質　大型のローム塊と、小型の黒褐色土塊を斑状に含

0　2m

第36図　近現代の土坑及び井戸

2．井　戸

本遺跡では、1基の井戸が検出された。波志江六反田遺跡で確認されている3基の井戸数に比べると少ないといえるが、これは地形的な要因であろう。

1号井戸　K－19Grで検出した。南西に8号溝の北西端が接しており、両者の関連性は高いものと考える。平面形は径約1.6mの円形で、深さは2.5mを測る。素掘りの井戸で、壁は上半が僅かに開くものの下半は直立し、しっかりした作りといえよう。調査時も下面から湧水した。覆土はローム塊を多量に含む暗褐色土を埋土とし、その様相から近世の所産と考えられる。

3．溝

調査区東半分に集中して検出された。近世～近代の土坑が伴出するといえよう。おそらく、当時の周辺民家の水利・区画がその用途と考えられる。

1号溝　調査区北東で屈曲部を持つ。走行は南北で調査区を横断する。幅狭ながら深くしっかりした掘り込みである。底面に鋤痕が認められ、覆土の様相から近～現代の所産とした。宅地界などの用途が充てられよう。

2号溝　1号溝に平行して検出された。やや幅広で溝底面も平坦である。北端は3号溝と交わり消える。重複関係は3号溝とは不明だが、1号溝に切られており、また覆土が3・4号坑と類似する事から、近世～近代の所産とした。

3号溝　調査区北東を東西に走る。東端は現代の撹乱によって消え、西端は18号土坑東で消える。延長線上に8号溝があるが関連性は断定できない。1・4号溝、3号坑に切られており近世～近代に比定されよう。

4号溝　3号溝の一部を平行して重複する走行の短い溝である。幅狭で深く、3号溝を切るが1号溝の手前で止まることから、1号溝と関連性を持ち、同時期のものであろう。

5号溝　調査区南東部で1号溝と平行して検出された。浅く、走行距離も短い。時期・用途は不明である。

6号溝　調査区北東を3号溝と平行して東西に走る。9号溝と同一のものである。東端を1号溝に接し消える。近世～近代の所産であろう。

7号溝　調査区中央北側で19号坑の西で検出された。方形に巡る溝である。ただし、南辺は切れている。区画中央北よりに円形の小土坑が位置し、覆土も同様なことからも、本溝に伴うものと考えた。東辺の幅はやや幅広ながら全体に幅狭で、浅いことからも、例えば家畜小屋などの平地建物の周溝の可能性もある。時期は近代であろう。

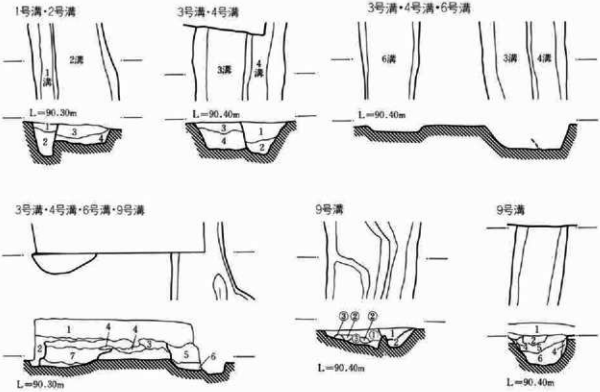
8号溝　1号井戸に端を発し、18号坑で止まる。延長上に3号溝が認められるが、水利を目的とすれば3号溝との間はやや高く水が流れる可能性はない。井戸との関連を考えると、水利をその用途に充てることができよう。重複関係・覆土から近世～近代の所産と考えられる。

9号溝　調査区中央東寄りで東に屈曲する溝である。屈曲部東が6号溝と重なるが同一のものであろう。ただしP－23Gr部分で狭小となる特徴を持つ。屈曲部分には17号土坑が重複し、西辺はほぼ直線的に南に伸び、調査区域外に消える。屈曲をすることから、地境溝としての用途が考えられる。時期は重複関係から近世～近代であろう。

4．サク状遺構

近代の耕作痕である。調査区南東で検出された。4条の溝で構成され、掘り込みも深く、また、断面観察から複数回にわたる耕作が行われていたことが判明した。ただし、大規模なものではなく、小規模な畠をその機能に充てたい。なお、底面には鋤痕が顕著に確認された。覆土はローム塊を含む暗褐色砂質土で埋められており、近代の所産とした。

縄文時代のものを除く土坑・井戸・溝・サク状遺構は殆どが近世～近代・現代にいたる当地域の開発の痕跡である。いわば、当時の民家とその生業を想像させるような資料である。波志江六反田遺跡の同時期の遺構群との関連を考えると、当地域の近代景観が明らかになるものであろう。



1・2号溝
1　褐　色　土　ローム塊と褐色土を含　埋土
2　純黄褐色土　ローム粒を含　砂質
3　純黄褐色土　ローム粒を多く含　砂質
4　黄 褐 色 土　ローム粒を多く含　砂質

3・4号溝
1　黄 褐 色 土　ローム粒を多く含　砂質
2　明黄褐色土　ローム塊主体
3　純黄褐色土　ローム塊と褐色土塊を含
4　黄 褐 色 土　ローム塊を多く含　2より明るい

3・4・6・9号溝
1　褐　色　土　表土　ざらついた耕土
2　純黄褐色土　砂質　溝埋土
3　暗 褐 色 土　砂質・軟質土　Ⅲ層
4　褐　色　土　Ⅳ層　漸移層
5　暗 褐 色 土　軟質・砂質土　溝埋土
6　黄 褐 色 土　軟質　ローム塊多く含　溝埋土
7　暗 褐 色 土　黒褐色土塊・ローム粒を含　溝埋土

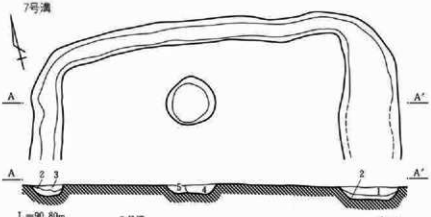
9号溝
1　純 黄 褐 色 土　表土
2　黒褐色砂質土　As－Bと褐色土塊の混入
3　黒 褐 色 土　As－B少量含む
4　褐　色　土　軟質ローム崩壊土
5　褐　色　土　ローム粒・As－B・褐色土を含埋土
6　暗 褐 色 土　軟質　ローム塊・As－B・褐色土塊を含
①　暗褐色土　ローム粒子を多く含　砂質
②　暗褐色土　ローム塊を含　塊状に堆積する
③　褐 色 土　大型のローム塊を主体とする

8号溝
1　暗 褐 色 土　砂質　ローム塊を含　溝覆土
2　黒 褐 色 土　砂質　1より粒子が若干粗い　少量のローム塊を含　溝覆土
3　純黄褐色土　大型のローム塊を含　土坑覆土
4　暗 褐 色 土　大型のローム塊を含　土坑覆土

0　2m

第37図　溝

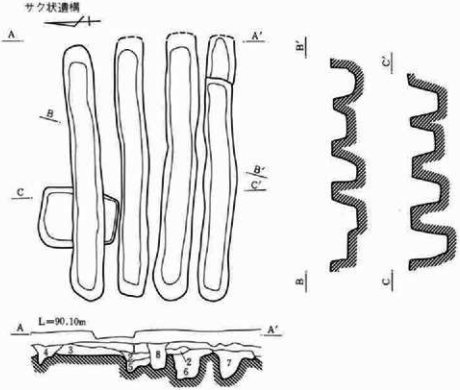
7号溝



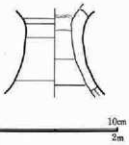
7号溝
1　褐色土　少量の暗褐色土塊と軟質褐色土塊・ローム粒を含
2　黄褐色土　ローム粒主体の層
3　暗褐色土　軟質　As－C・ローム小塊と暗褐色土塊を含

ピット
4　黒褐色土　As－Bを多量に含む砂質土
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む砂質土

サク状遺構



サク状遺構
1　明黄褐色土　横位に水平堆積する　人為的に敷きならされた土層と捉えた　ローム塊主体
2　褐　色　土　横位堆積　ローム塊と黒褐色砂質土塊が主体　人為的埋土
3　黒褐色砂質土　As－Bを主体とし比較的締まった砂質土
4　褐　色　土　ローム塊と3層土塊を含
5　黒褐色土　砂質　少量のローム粒がラミナ状に堆積する
6　黒褐色土　砂質　少量のローム粒を含
7　黒褐色土　砂質　小型のローム塊を含
8　褐　色　土



第38図　溝及びサク状遺構、出土遺物

5．グリッド出土遺物

ここでは調査区西半で集中して出土した縄文時代前期後半の遺物を主に取り扱い説明を加える。遺物の集中は第39・40図にあるようにW－14Grを中心にして濃密な出土を見せる。当初は住居跡の存在を想定し、セクションベルトを設定しその検出に務めたが、検出された遺構は6号坑と8号坑だけであり、両土坑ともその覆土内に主体的に遺物を含まず、よってこの遺物集中分布を包含層出土と判断した。また、調査区南西隅にも遺物集中区を検出したが、構造物と現道の存在のため全容は把握できなかった。

（土器）

1、6号土坑上層で出土したが、土坑に伴うものではない。口縁部は緩やかに外反し、体部上半は丸みを帯び落ちる。口唇部に3条の平行沈線が巡り、同沈線を懸垂することによって、器面を数分割する。空白部は数条の弧状沈線を縦位に施し、区画内を横位沈線が充填される。内外面は横撫でによる整形痕が明瞭である。諸磯b式終末段階と捉えたが類例は少ない。

2、底部端が尖り、僅かに張り出す。内面は平滑。諸磯b式後半段階であろう。

3、無節縄文のRを施す。諸磯b式か。

4～6は同一個体である。単節縄文RLが横位に施される。6は底部。諸磯b式。

7、単節縄文RLを横位に施すが、まばらな施文。

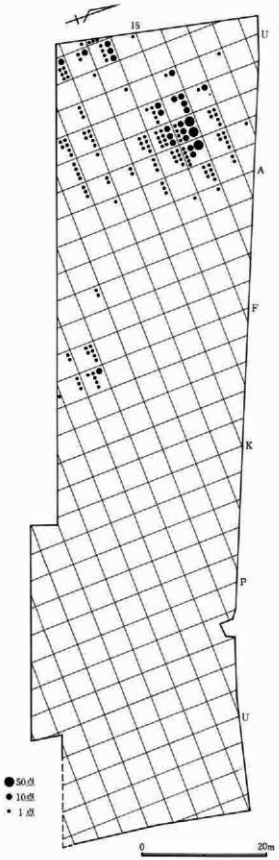
8、小型の爪形文を横位に施し、上下を波状文が平行する。また半截竹管の回転による、円形の刺突文を刻む。諸磯b式。

9、0段多条のLR・RLによる羽状菱形構成。繊維を多量に含む。花積下層式初頭期と捉えたい。試掘時の出土。

10、連続爪形文を施す。斜位短沈線も連続して沿う。諸磯b式。

11・12は単節縄文RLを斜位に施す。諸磯b式か。

13～23は平行沈線を主描線とする土器群。同一個体破片も混じる。主にW・V－14・15周辺からまと



第39図　縄文土器分布図

まって出土したが、口縁部の破片を欠く。14も復元実測である。頸部は屈曲し、体部は緩やかに外反する。頸部の屈曲部や体部中位、下半には平行沈線が巡り分帯する。文様帯内は沈線による懸垂文で区画され、縦位楕円状のモティーフが施される。モティーフ内は平行する横位沈線文によって結ばれるものもある。底部は18・22・23のように、端部は突出せず、横位平行沈線が施される。諸磯ｂ式後半段階。

24は同一の地点から出土している。復元実測。緩やかな双波状口縁を呈し頸部は屈曲する。体部上半に膨らみを持たせ、全体感を甕型に見せる。体部上半は横位平行沈線により分帯しているが、下半は縄文施文である。単節縄文ＲＬ斜位施文であろう。体部上半の文様帯は平行沈線による連続三角を基本としながらも、半楕円状の区画文を構成する。区画内は縦位沈線が充填され、地文の縄文を残す。諸磯ｂ式後半段階。

25は浅鉢片。湾曲部で、無文だが内外面とも丁寧に研磨する。諸磯ｂ式。

26、横位平行沈線を巡らし、１条の沈線が弧を描き内縁を更に横位平行沈線を施す。地文は横位単節縄文ＬＲ。27も横位沈線と弧状沈線の組み合わせ。弧状沈線は横位である。諸磯ｂ式。

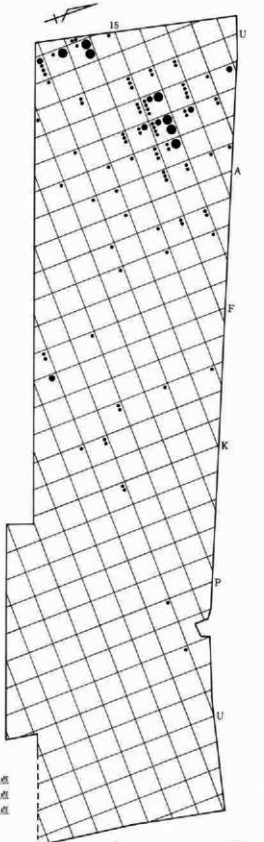
28・29は間隔を持った平行沈線が横位施文される。地文はＬＲ。同一個体。諸磯ｂ式後半段階。

30は平行沈線が集合化するが、地文縄文は僅かだが残る。おそらくＬＲであろう。

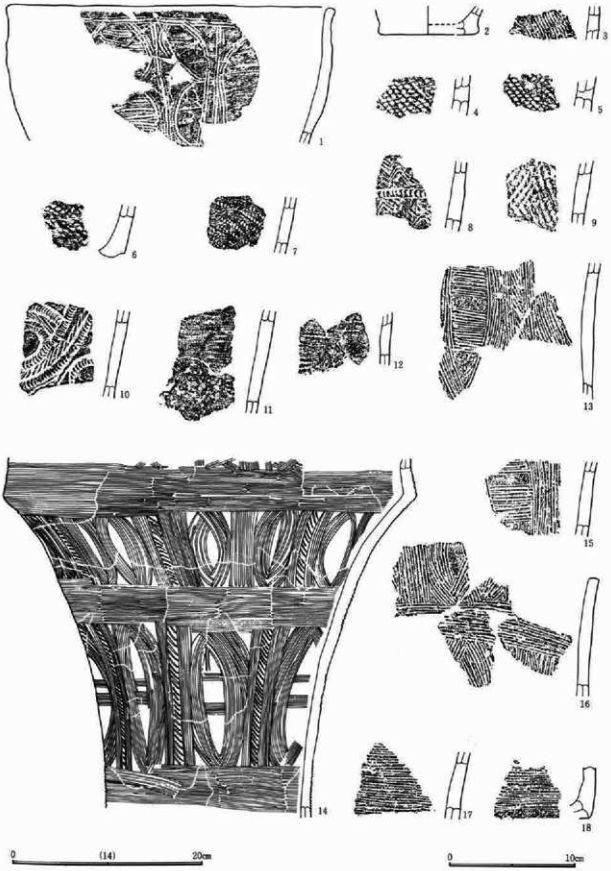
31～33も平行沈線が集合するように密接施文される。31・32は同一個体。諸磯ｂ式後半段階。

34～37は幅広の平行沈線を横位施文する。やや雑な施文で浅い沈線である。同一個体であろう。37は平縁を呈し薄い器厚である。諸磯ｂ式後半段階。

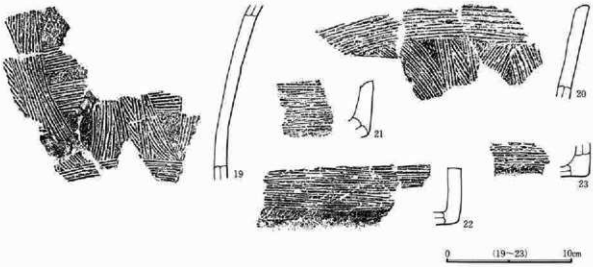
38～43も浅く雑な施文である。39は口縁部。平行沈線の横位施文を基本とするが、斜位施文も認められる。40・41の施文は極端に浅く、40は横位、41は縦位の平行沈線が僅かに施される。42は底部。浅く集合した沈線が横位に施される。底端部僅かに突出。43の底端部の突出は顕著であり尖る。横位平行沈線

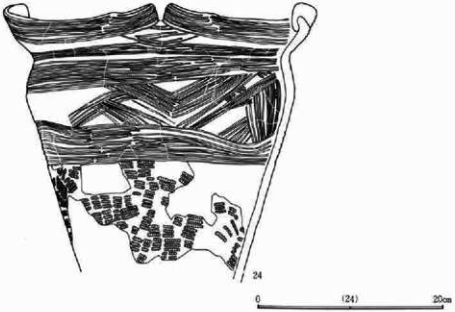


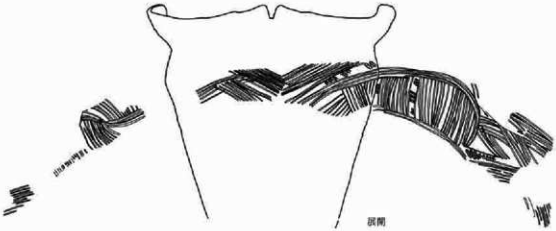
第40図　縄文時代の石器分布図



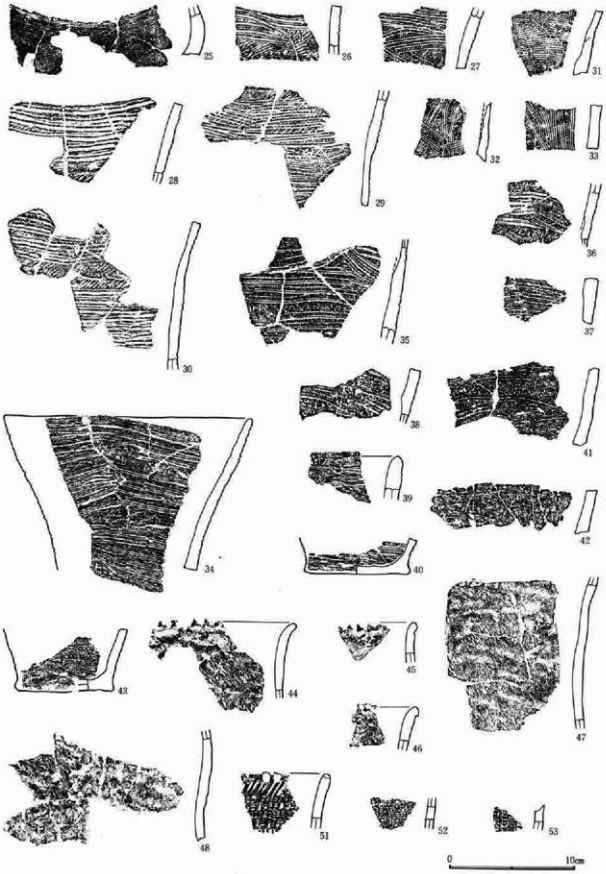
第41図　グリッド出土土器



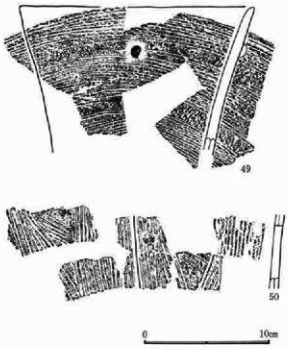




第42図　グリッド出土土器



第43図　グリッド出土土器



第44図　グリッド出土土器

は集合化している。諸磯ｂ式終末段階。

44～46は小波状口縁部を持つ。薄手でＲＬ縄文を施すが、原体繊維が硬く、まばらな施文となる。47も同一個体であろう。48は別個体だが、同様な原体施文である。諸磯ｂ式。

49(44図)は平縁で、間隔を持った横位平行沈線が密接に施され、円形の貼付文を付す。地文の縄文は単節ＬＲ。諸磯ｂ式後半段階。

50(44図)も貼付文を設ける例。縦位平行沈線で分割した空白部を平行沈線で斜位につなぎ、縦位連続山形文を充填する。諸磯ｂ式後半段階。

51～53は貝殻腹縁文の一群。口唇部に凹凸状の刻みを持たせ、口縁部は斜位の短沈線を連続させる。以下は貝殻腹縁を横位に連続させる。同一個体。興津式であろう。

グリッド出土遺物は縄文時代前期後半の諸磯ｂ式土器がその主体を占める。完形の出土は少なく、生活・生産領域としては確証に乏しく、また、土器の廃棄行為が伴ったとしても、特に積極的な所産とは考えられない。本報告では遺物包含層として位置付け、該期の土器廃棄例の類例の増加を待ちたい。

(石　器)

縄文時代の石器も土器と同様な分布を呈し、おそらく前期後半に比定されるものと思われる。しかし、石器はその遺存度が土器よりも高く、時期を限定する事はできない。よって器種分類による説明を行う。

石鏃（第45図１～６）

１～５は凹基鏃。丁寧な調整を全面に施している。１・２は等辺の側縁で尖鋭な先端部を持つ。１は基部に厚みを残す。黒色安山岩製。２は薄手である。チャート製。小型の３は薄手である。あるいは欠損品の再利用か。４の側縁は若干内湾する。玉髄製。５の側縁も内湾するが先端部を欠損する。

６は凸基鏃。裏面右側縁の調整は著しく平坦である。また舌部の作出も丁寧。

尖頭器状石器（第45図７・８）

７は未製品。小型横長剥片を素材とし、側縁先端部に調整が及ぶ。８は大型の黒曜石を素材として、周縁の調整を細かく施す。草創期の所産か。

スクレイパー（第45図９～11）

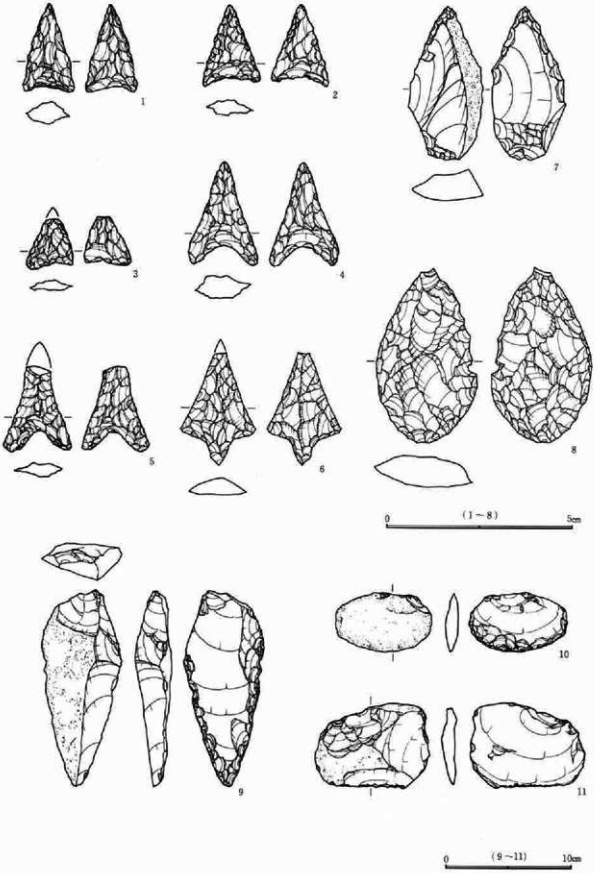
９も尖頭器状石器の未製品か。大型の縦長剥片を素材とし、側縁を丁寧に調整し、剥片端部を先鋭に作出する。礫面を大きく残す。黒色頁岩製。10は横長剥片を素材とし、剥片端部に調整を連続する。11、横長剥片を素材とし、剥片端部と右側縁を鋸歯状に調整する。

打製石斧（第46図１～３）

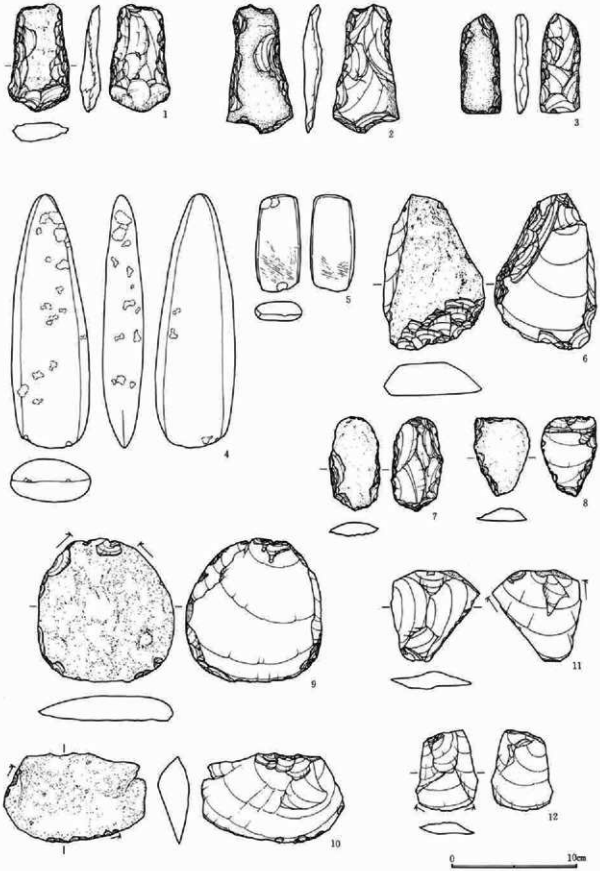
すべて短冊型である。１は剥片端部を両面から加工を施し凸状の刃部を作出する。頭部も剥片形状から比較的薄い。刃部には摩滅痕が認められる。２の側縁は緩やかに湾曲し、刃部左半を欠損する。裏面側縁に摩滅痕が認められる。３は板状の横長剥片を使用する。周縁に加工が及ぶが頭部の節理面は除外される。刃部は裏面の大きな調整により直刃状を呈す。

磨製石斧（第46図４・５）

４は棒状の安山岩質凝灰岩を素材とした完形品で、断面はやや偏平である。刃部に歯こぼれが認められる。５は定角式の磨製石斧。刃部が斜位に設け



第45図　グリッド出土石器



第46図　グリッド出土石器

られ、やや四辺形の形状である。刃部の斜位・横位の線状痕が認められる。

加工痕を持つ剥片石器（第46図6～10）

剥片端部や側縁に加工が施されるが、スクレイパーのように規則性や目的性が認められない不定形石器を一括した。

6、縦長剥片端部に裏面、側縁は表面に比較的入念な加工が施される。波志江六反田遺跡出土。7は右側縁と剥片端部に加工が施され、楕円形状の形態を整えている。8は縦長剥片を素材とし、側縁の加工により突出する刃部を作出するが顕著ではない。9、大型の円礫の平坦面を表面とし、周縁の一部に加工を施す。10、大型の横長剥片を素材として、剥片端部表面に僅かに加工が及ぶ。

使用痕を持つ剥片石器（第46図11～第47図6）

素材剥片の側縁や端部に歯こぼれや線状痕が認められる不定形石器を一括した。

11、台形状の横長剥片を素材とする。側縁は薄く、歯こぼれが認められる。12、縦長剥片を素材とし、剥片端部に著しい歯こぼれが認められる。波志江六反田遺跡出土。第47図1は厚手の縦長剥片を素材として、右側縁に微小の歯こぼれが認められる。波志江六反田遺跡出土。2は厚手の横長剥片が素材。剥片端部は直刃状を呈し、右側縁・端部にかけて微小の歯こぼれがある。3、小型で薄手の横長剥片を素材とし、剥片端部に摩滅痕が付けられる。4は厚手の横長剥片。直刃状の剥片端部には歯こぼれが著しい。5は厚手の縦長剥片端部が欠損し、欠損部分と側縁に微小の歯こぼれが認められる。6は横長剥片が素材。歯こぼれは側縁から直刃状の端部に認められるが、側縁に顕著である。

石核（第47図7）

黒色頁岩製で小型の縦長剥片作出後、不定方向から小剥片を剥ぎ取っている。波志江六反田遺跡出土。

磨石類（第47図8～11）

4点を図示したが、すべて粗粒安山岩製で表裏面に微小の擦痕や摩滅痕が認められる。8・10・11は凹み石。8は波志江六反田遺跡出土。9は球形を呈する。10の側縁も打撃が加わる。

接合資料（第47図・第48図）

波志江天神山遺跡では、6点の接合資料を整理作業によって得た。出土位置は、出土土器と同様に調査区西の2箇所の集中部分である。ただし、本地点の遺物取りあげは、全点の記録化を基本としていながらも、作図・レベル値に誤差が生じている。よって、本報告ではグリッド名を付すのみの記録であるが、今回の反省に立ち、縄文時代石器接合資料を蓄積していかなければならないだろう。反省点である。

接合資料3（第47図）

2点の黒色安山岩製の剥片で構成され、大型で不定形な横長剥片を二分割したものである。狭小な礫面を打面としている。

接合資料6（第47図）

小型の硬質砂岩製の小剥片2点からなる。

接合資料1（第48図）

2点の石核と4点の剥片からなる。大型で厚手の縦長剥片二分割後、不定方向から小型の剥片を作出している。硬質砂岩製で、接合資料6と同一母岩であろう。

接合資料2（第48図）

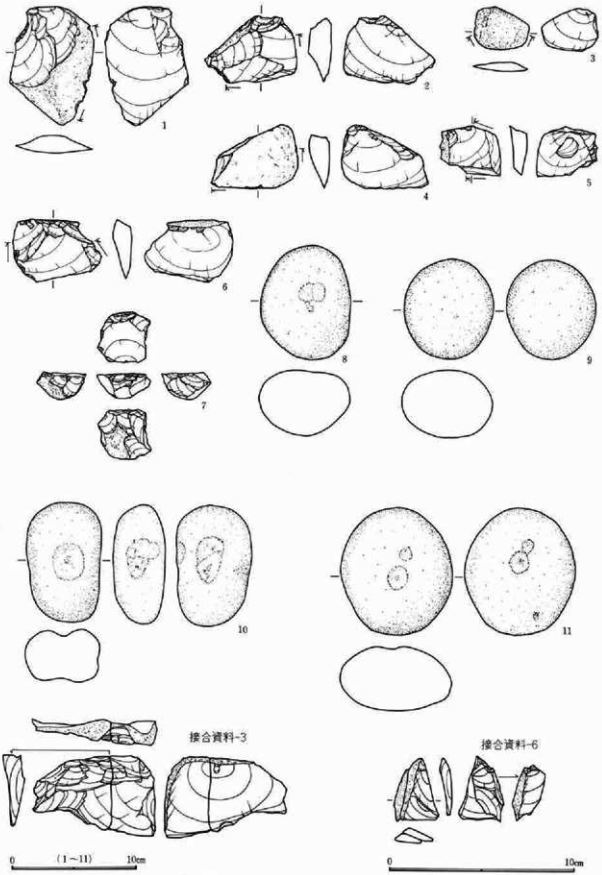
1点の石核と剥片からなる。小型の頁岩製の円礫を素材とし、横長剥片抽出後、剥片端部を作業面として、数回にわたる剥片剥離工程を重ねて刃部を作り出す。

接合資料4（第48図）

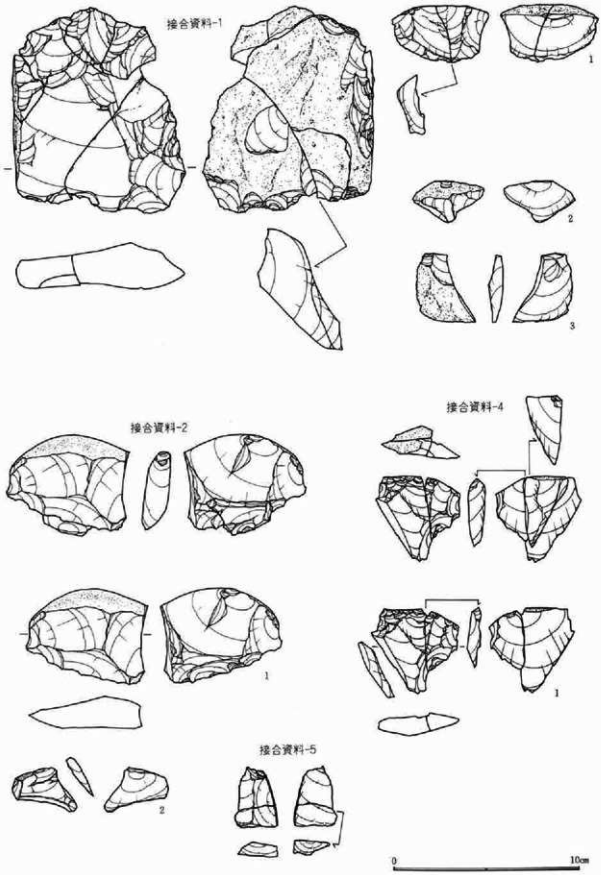
2点の横長剥片を石核とする例。礫面を作業面とし、打面の調整も行う。黒色安山岩製。

接合資料5（第48図）

2点の剥片からなる。小型縦長剥片の横位折断である。黒色安山岩製。



第47図　グリッド出土石器，接合資料－3・6



第48図　接合資料－1・2他

旧石器時代

波志江六反田　器種　（7点）

スクレイパー　2点(28.6%)	使用痕を持つ剥片 2点(28.6%)	剥　片 1点(14.3%)	砕　片　2点(28.6%)

波志江六反田　石材　（7点）

黒曜石　6点(85.7%)	黒色頁岩 1点(14.3%)

縄文時代

波志江六反田　器種　（13点）

①	②	③	剥　片　8点(61.5%)

① 加工痕を持つ剥片　1点(7.7%)
使用痕を持つ剥片　2点(15.4%)
② 磨　石　1点(7.7%)
③ 石　棒　1点(7.7%)

波志江六反田　石材　（13点）

黒色頁岩　11点(84.6%)	黒色安山岩 2点(15.4%)

波志江天神山　器種　（198点）

①	②	③	④	剥　片　93点(47%)	砕　片 25点(12.6%)	⑤

① 石　鏃　6点(3.0%)
石　匙　1点(0.5%)
尖頭器状石器　2点(1.0%)
スクレイパー　3点(1.5%)
加工痕を持つ剥片　10点(5.1%)
使用痕を持つ剥片　19点(9.6%)
② 打製石斧　6点(3.0%)
磨製石斧　2点(1.0%)
③ 磨　石　6点(3.0%)
④ 石　棒　5点(2.5%)
⑤ 礫　20点(10.1%)

波志江天神山　石材　（198点）

黒色頁岩　89点(44.9%)	黒色安山岩 38点(19.2%)	粗粒安山岩 27点(13.6%)	①	②
				③

① 黒曜石　8点(　4.0%)
チャート　6点(　3.0%)
砂　岩　17点(　8.6%)
ホルンフェルス・頁　岩　各3点(各 1.5%)
② 緑色凝灰岩・凝灰岩質頁岩・蛇紋岩・細粒安山岩・玉　髄　各1点(各 0.5%)
③ 石材不明　2点(　1.0%)

第49図　器種と石材構成

石　鏃　（6点）

①	②	チャート　3点(50.0%)	③

① 黒色頁岩　1点(16.7%)
② 黒色安山岩　1点(16.7%)
③ 玉　髓　1点(16.7%)

石　匙　（1点）

黒色頁岩　1点(100%)

尖頭器状石器　（2点）

黒曜石　1点(50%)	頁　岩　1点(50%)

スクレイパー　（3点）

黒色頁岩　3点(100%)

加工痕を持つ剥片　（10点）

黒色頁岩　9点(90%)	①

① 黒色安山岩　1点(10%)

使用痕を持つ剥片　（19点）

黒色頁岩　19点(100%)

打製石斧　（6点）

黒色頁岩　4点(66.7%)	①	②

① 凝灰質頁岩　1点(16.7%)
② 細粒安山岩　1点(16.7%)

磨製石斧　（2点）

緑色凝灰岩　1点(50%)	蛇紋岩　1点(50%)

磨　石　（6点）

粗粒安山岩　6点(100%)

石　核　（5点）

黒色安山岩　2点(40%)	砂　岩　2点(40%)	①

① 頁　岩　1点(20%)

剥　片　（93点）

黒色頁岩　48点(51.6%)	黒色安山岩 27点(29%)	②	①	③	④	⑤

① チャート　2点(2.2%)
② 砂　岩　10点(10.8%)
③ ホルンフェルス　3点(3.2%)
④ 頁　岩　1点(1.1%)
⑤ 石材不明　2点(2.2%)

砕　片　（25点）

①	黒色安山岩 7点(28%)	②	黒曜石 7点(28%)	③	④

① 黒色頁岩　4点(16%)
② 粗粒安山岩　1点(4%)
③ チャート　1点(4%)
④ 砂　岩　5点(20%)

礫　（20点）

粗粒安山岩　20点(100%)

第50図　石器と石材構成

第3表　縄文土器観察一覧表（第41～44図）

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
1	Ⅰ区6号土坑	①砂粒 ②堅緻 ③淡黄	前期後半
2	Ⅰ区6坑・W-14Gr	①細砂 ②良好 ③純橙	〃
3	Ⅰ区8号土坑	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
4	Ⅱ区10号土坑	①細砂 ②軟質 ③純橙	〃
5	Ⅱ区G－21Gr	①細砂 ②軟質 ③純橙	〃
6	Ⅱ区G－21Gr	①細砂 ②軟質 ③橙	〃
7	Ⅰ区X－14Gr	①粗砂粒 ②良好 ③純赤褐	〃
8	Ⅲ区C－2Gr	①粗砂粒 ②良好 ③純黄橙	〃
9	Ⅰ区Y－17Gr	①鱗雲 ②良好 ③純黄橙	前期前半
10	Ⅰ区U－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	前期後半
11	Ⅰ区V－13・W-15Gr	①粗砂 ②軟質 ③純橙	〃
12	Ⅰ区W－14・15Gr	①粗砂 ③軟質 ③純橙	〃
13	Ⅰ区6坑・X-14・W-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
14	Ⅰ区6坑・S-16－18. V・W-14・15.X-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
15	Ⅰ区S－16Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
16	Ⅰ区S・V－14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
17	Ⅰ区S－17Gr	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
18	Ⅰ区S－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③純橙	〃
19	Ⅰ区6坑.S-16.W-14・19.X-15Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
20	Ⅰ区X－14・15Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
21	Ⅰ区S－17Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
22	Ⅰ区S－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
23	Ⅰ区S－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③純黄橙	〃
24	Ⅰ区V－13.W－14・15.X-14Gr	①粗砂 ②良好 ③橙	〃
25	Ⅰ区W－14.X-13・14Gr	①細砂②やや軟質②純黄橙	〃
26	Ⅰ区V－15Gr	①細砂②やや軟質③灰黄褐	〃
27	Ⅰ区V－14Gr	①細砂 ②やや軟質 ③淡黄	〃
28	Ⅰ区S－16・17.W-14Gr	①粗砂 ③軟質 ③灰黄	〃
29	Ⅰ区R－17.S-16.W-14	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
30	Ⅰ区V・W－14Gr	①細砂 ③軟質 ③灰黄	〃
31	Ⅰ区V－18Gr	①細砂②やや軟質②純黄橙	〃
32	Ⅰ区X－17Gr	①細砂②やや軟質③純黄橙	〃
33	Ⅰ区V－18Gr	①細砂 ②良好 ③純黄橙	〃
34	Ⅰ区V・W－14Gr	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
35	Ⅰ区S－16.V-14Gr	①細砂②やや軟質③純黄橙	〃
36	Ⅰ区W・X－14Gr	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
37	Ⅰ区U－14Gr	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
38	Ⅰ区X－14Gr	①細砂 ②軟質 ③純黄橙	〃
39	Ⅰ区Y－14Gr	①細砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
40	Ⅰ区U－14Gr	①砂粒 ②良好 ③淡黄	〃
41	Ⅰ区W－13.X-15Gr	①粗砂 ②やや軟質 ③淡黄	〃
42	Ⅰ区S－18.W-14Gr	①砂粒 ②軟質 ③淡黄	〃
43	Ⅰ区W－14Gr	①砂粒 ②良好 ③純黄橙	〃
44	Ⅱ区E・F－21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③灰黄褐	〃
45	Ⅱ区E・F－21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③淡黄橙	〃
46	Ⅱ区E－21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③純黄橙	〃
47	Ⅱ区E・F-21.F-22Gr	①砂粒 ②堅緻 ③灰黄褐	〃
48	Ⅱ区E・F-21.E-22Gr	①細砂 ②良好 ③純橙	〃
49	Ⅰ区W－14・15Gr	①粗砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
50	Ⅰ区V-18・19.W-19 Y-20Gr	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
51	Ⅰ区W－19Gr	①細砂 ②堅緻 ③純橙	〃
52	Ⅰ区V－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
53	Ⅰ区V－18Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃

第4表　縄文時代の単独石器一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第45図－1	天Ⅱ区C－14	石鏃	2.3	1.4	1.19	黒安
2	天Ⅰ区側溝面	石鏃	2.2	1.5	0.90	チャート
3	天Ⅰ区W－15	石鏃	1.1	1.0	0.35	チャート
4	天Ⅰ区W－13	石鏃	2.3	1.8	1.45	玉髄
5	天Ⅰ区W－14	石鏃	2.2	1.8	0.85	黒頁
6	天Ⅱ区Q－23	石鏃	3.0	2.0	1.79	チャート
7	天Ⅰ区6土坑	尖頭器	4.0	2.0	6.20	頁岩
8	天Ⅱ区B－18	尖頭器	5.7	2.7	10.23	黒曜石
9	天Ⅰ区Y－15	スクレイパー	15.5	6.4	227.30	黒頁
10	天Ⅱ区B－16	スクレイパー	7.7	4.8	45.37	黒頁
11	天Ⅰ区W－15	スクレイパー	6.7	9.3	82.31	黒頁
第46図－1	天Ⅰ区Y－17	打斧	8.4	4.9	70.03	黒頁
2	天Ⅰ区S－18	打斧	10.1	5.3	83.82	黒頁
3	天Ⅰ区U－15	打斧	7.8	3.1	47.81	凝灰
4	天Ⅰ区U－5	磨斧	20.1	6.4	601.40	安山岩
5	天Ⅰ区V－15	磨斧	7.7	3.8	78.76	蛇紋岩
6	六V区4・F-7	加剥	12.2	8.2	314.20	黒頁
7	天Ⅰ区W－12	加剥	7.5	4.2	39.76	黒頁
8	天Ⅰ区6土坑	加剥	6.3	4.4	37.29	黒頁
9	天Ⅰ区W－16	加剥	11.3	10.9	311.20	黒頁
10	天Ⅰ区W－13	加剥	7.1	11.4	189.41	黒頁
11	天Ⅱ区E－20	使剥	7.2	7.2	53.25	黒頁
12	六V区5溝埋土	使剥	6.4	5.0	31.50	黒頁
第47図－1	六V区2溝埋土	使剥	9.3	6.7	100.60	黒頁
2	天Ⅱ区10土坑	使剥	5.3	7.4	66.01	黒頁
3	天Ⅰ区W－13	使剥	3.4	4.4	11.69	黒頁
4	天Ⅰ区V－14	使剥	5.1	6.9	56.76	黒頁
5	天Ⅰ区6土坑	使剥	3.7	4.9	29.05	黒頁
6	天Ⅱ区B－14	使剥	4.9	7.1	48.13	黒頁
7	六V区G－5	石核	2.0	4.2	35.16	黒頁
8	六V区J－8	円石	9.0	7.2	446.20	粗安
9	天Ⅰ区X－14	磨石	7.9	7.2	411.90	粗安
10	天Ⅰ区8土坑	円石	9.5	6.0	298.00	粗安
11	天Ⅰ区M－12	円石	10.0	8.9	556.50	粗安

第5表　縄文時代の接合資料一覧表

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料－3（第47図）						
左	天Ⅰ区S－16	剥片	4.3	6.5	27.70	黒安
右	天Ⅰ区S－14					
接合資料－6（第47図）						
左	天Ⅰ区S－17	剥片	2.8	1.7	1.10	砂岩
右	天Ⅰ区S－17	剥片	3.2	2.1	3.27	砂岩
接合資料－1（第48図）						
左下	天Ⅰ区X－14	石核	9.9	7.0	198.03	砂岩
右下	天Ⅰ区S－16	石槌	7.1	6.4	128.82	砂岩
1－左	天Ⅰ区S－17	剥片	3.0	5.2	21.86	砂岩
右	天Ⅰ区X－14					
2	天Ⅰ区S－18	剥片	2.2	3.7	3.54	砂岩
3	天Ⅰ区Y－14	剥片	3.7	3.2	7.15	砂岩
接合資料－2（第48図）						
1	天Ⅰ区W－14	石槌	6.4	5.1	68.97	頁岩
2	天Ⅰ区W－14	剥片	3.4	2.3	3.40	頁岩
接合資料－4（第48図）						
1－左	天Ⅰ区S－16	石槌	4.5	3.0	13.47	黒安
右	天Ⅰ区S－16	剥片	3.1	1.9	4.34	黒安
表	天Ⅰ区X－15	石槌	3.7	1.9	6.98	黒安
接合資料－5（第48図）						
上	天Ⅰ区W－15	剥片	3.1	2.3	7.15	黒安
下	天Ⅰ区W－16					

Ⅵ章　考　察

1　出土資料よりみた石器の製作構造
――書上本山遺跡の事例――

石器群は広く平坦な台地の西側に出土した。概して分布は台地内部にも及んでおり、ここでも縁辺部分に限定されない石器分布の在り方を示していた。本文で指摘の通り、石器の分布は調査区の北へ広がる可能性も否定できないのであり石器分布の全容も不明で、資料的な制約も著しい。既に述べた通り、石器群はⅥ層～Ⅶ層の３層に亘り（概ねⅦ層をピークに）出土しており、出土状況に大きな差は見られない。一方、各々の石器分布には濃淡の差が見られ、地点間に亘る接合資料や同一母岩の存在が確認できないなど、整理作業からえたデータは石器群の同時性を直接証明しているわけではない。ここでは数量的にも充実している２ケ所の石器集中地点（１号・２号ブロック）を主に取り上げ、石器組成や石材構成、剥片剥離の在り方を整理し、若干の所見を述べていきたい。

母岩的認識と剥離の作業段階

既に述べた通り、石器群は地点間を跨ぐ接合資料も見られないのであり、また、母岩の分類も難しいため、石器群の同時性[注1]は確実とはいえない状況を呈していた。石器の製作構造を知る上でも作業段階の相違は母岩単位に認識されねばならないのであり、ここでは同一母岩を意識して出土資料を一連の作業段階に位置づけ、石器製作構造の一端を記していきたい。

１号ブロック　黒色安山岩は剥片・砕片に限られ、剥離作業の痕跡を明瞭に示している。母岩は２個体以上が想定可能と思える。同様に、黒色頁岩・珪質頁岩も剥片・砕片に限られ、剥離作業の痕跡を明瞭に遺している。共に、２個体以上の母岩が想定されよう。なお、珪質頁岩は全体に白味が強く、第15図３や第16図４の珪質頁岩（女川層に産する可能性が強い）とは大きく異なる。以上の石材は、一部二次加工に伴う砕片を含む可能性も否定できない反面、大部分は剥離作業に伴う不要剥片が主体を占める、と判断されよう。頁岩や粗粒安山岩を除き、その他の石材は破砕状態で出土しており、バルブも不明瞭であり、確実に人為的な所産か概して判断は難しい。

２号ブロック　黒色安山岩は最も使用頻度が高く、接合資料の数も多い。接合資料には分割状態に戻る例（接合資料―１）や、分割以後の剥離の初期状態を示す例（接合資料―３）、また、剥離の痕跡が殆ど見られない資料（接合資料―２）も見られ、斑晶の大小や多少、縞状構造の在り方からみて接合資料―１・２・３は母岩を異に剥離が展開した可能性が強い。残る他の接合資料は折断資料や二次加工を示す例（接合資料―４・８・17）を除き剥離作業に伴い生じる剥片の接合資料が主体を占める。母岩分類は困難だが、出土資料には同様な特徴を持つ資料は見られないことから、より大形の剥片（接合資料―17）は搬入資料と判断されよう。なお、接合資料―４・８～10、接合資料―11～13は同一の母岩に分類可能と思える。黒色頁岩には部分的な剥離作業を示す剥片や砕片も出土しているわけだが、剥離実態は明瞭ではない。このほかには鉄石英に似た赤色珪質岩が出土している。砕片の単独出土でもあり、実態は明瞭ではない。その他の石材の一部には打痕の明瞭な資料も見られ、敲石の存在を暗示している。が、大部分は小円礫や破砕礫であり、人為的遺物とは思われない。

一方、側縁加工を施すナイフや石刃は黒色頁岩や珪質頁岩に限られ、母岩も大きく異なる。遺跡には剥離痕跡が全く見られないことから搬入石器と判断され、ここでも珪質頁岩は完成状態の石刃、及び、二次的に他器種に転用する状況を示していた。

剥片剥離

石器群を支えた剥片剥離技術は、約20の接合資料からある程度の様相が窺える。特に、接合資料―1～3は資料的にも充実しており、剥離構造を良く示している。剥離状況に関する記述は本文中に譲り、ここでは概括的に剥離の特徴を述べていきたい。

接合資料は各例とも作業段階が異なり、接合資料―1は原石の分割以後から剥離作業の最終段階まで、接合資料―2・3は剥離の初期段階、或は剥離途上の段階を示していた。各例とも原石を分割してから剥片剥離を行い、打面転移を伴い剥離が進む点で一致する。が、剥離状態からみて接合資料は「一般的剥離」に従う接合資料―1・3と「磯山技法」に従う接合資料―2に二分して理解されよう。「一般的剥離」に従う剥離にも同一打面から連続的剥離を行う状態も見られ、この中には石刃に近い例（第20図9・10）も見られないわけではない。が、剥片形状は一定せず、概して多様性に富む剥片が生じている。また、より大形の剥片を石核に用い小形剥片を剥離する点も特徴的で、このほかにも2例（接合資料―5・7、第27図）ほど類例を確認している。先に述べた通り、出土資料から想定可能な剥片剥離構造は「一般的剥離」に従う剥離と、「磯山技法」に従う剥離からなる。仮に、「磯山技法」と見る想定が正しいなら、遺跡の所在する赤城南麓にはこれまで同種石核の出土は見られないのであり、石器の製作構造理解とは別に集団の移動形態の解明（田村1990）に係わる重要な鍵を握る、と期待されよう。氏は原産地周辺部と消費地の分析を通じ、原産地に於ける石刃の限定的生産と河川移動を伴う周期的接近、即ち、石材採集を狩猟採集戦略に取り込む水系単位の集団移動形態を想定した。「後田段階」と同時期の石器群の分析よりえた仮説だが、同段階に近い本遺跡に「磯山技法」に従う剥離の存在を示す石核の検出意義は極めて大きい。先の仮説に従えば、遺跡が位置する赤城南麓は日常生活を営む消費遺跡が卓越する地域と言える。実際この地域には石刃を量産する遺跡は見られない。出土資料も決して良好とはいえないものだが、接合資料―3は「磯山技法」に従う剥離を示す可能性が強く、想像を逞しくして言えば、地域単位[注2]で必要に応じ石刃を生産する状態も全く否定できないのである。この段階の石刃生産は極めて限定的である点は疑い得ない。が、その実態は極めて不明瞭であり、現状は未だ資料不足の感も否定できないのであり、今後とも同種石核の存在には注意すべきである。

これまで述べた通り、石器群に主体的な剥離は、「一般的剥離」に従う例である。この中には、より大形の剥片を石核に用い剥片剥離を行う例が何例か含まれ、多様な剥離実態を理解する上で良好な資料を提供している。既に、この種の小形剥片剥離に関する分析（佐藤1987、田村1989、新田1991）も二三ある。そこでは両極技法に従う小形剥片の剥離や、板状剥片・大形石刃よりえる小形剥片の存在が注意され、小形剥片と作出石器の関係を論じている。出土資料に関して言えば、一部の資料（第27図、接合資料―5・7）に小形・縦長剥片を取る傾向が指摘され、先の分析の指摘にもある組み合わせ石器と見る考え方も成り立つ可能性を否定できない。が、今回報告する資料の剥離状態は大形剥片の打面側に作業面を持つ例が4例と主体を占め、側縁側に作業面を持つ例は僅か1例（第22図、接合資料―1・30の剥片）と少ないこと、また、県内遺跡には表裏両面で交互剥離する例も多く、側縁部を作業面に連続剥離する例は見られないのであり、剥離作業は剥片形状に応じ展開するものであり、組織的な剥離にはほど遠い。出土資料も概して打面は鈍角で小形横長剥片を剥離する傾向が強い。概ね、剥片の断面形状は楔状を呈しており、両極技法より生じる剥片の形状とは大きく異なるのであり、同一視は難しい。現状ではこの種の小形剥片と作出石器の関係は明確ではなく、積極的に大形剥片より小形縦長剥片の剥離を行う状態は想定できない。

なお、指摘にもある通り、下総台地では搬入石材（珪質頁岩、女川層に産する可能性が強い）を用い小形の縦長剥片を剥離[注3]するようだが、県内資料の一

部（勝保沢中ノ山A地点の資料）にもより大形の剥片（珪質頁岩）から石器の製作を試みる状態が看取され、ある意味では技術的な類似点が窺える。勝保沢中ノ山の例を除けば、資料的に類例は乏しく、決して明瞭とはいえないわけだが、同一母岩と見た２点（報文の第13図８、第16図29）の資料は恐らく接合関係を有すること、うち１点には両極剥離が著しいことから多分に大形の剥片を両極剥離している状態が想定されよう。下総の例も本県の例も女川層に産する可能性の強い珪質頁岩が完成状態で遺跡に持ち込まれ、二次的に他の石器素材に用いる点では似た様相を呈する一方、現状で県内の出土資料を見た限り下総の小形剥片を取る例は見られない。これまで、小形縦長の剥片の検討は全く分析の視野から外れ、更には両極打法に従い小形剥片を剥離する視点も欠いており、そのため既出の資料の中にも類例が存在する可能性も全く否定できない。今後は意識して類例の抽出に努め、改めて検討を加えるべき重要な資料と位置づけられよう。

以上、出土資料からみた石器製作構造の概要を述べた。出土資料が示す通り、剥片剥離は一般的剥離に従い、石刃など主要石器は搬入する、構造的特徴を呈す。石器群は概ね「二項的」概念の下に理解が可能だが、一部資料には石刃製作を示す例が含まれ、日常生活を営む消費遺跡に於ける石刃製作の在り方を示唆するものでもあり、集団の移動形態や石材の入手形態を問う意味でも重要な資料と思える。

（岩崎）

註１．出土資料を見る限り、石器の集中部・２ケ所は極めて対象的な在り方を示している。豊富な接合資料が示す通り、一方は剥離状態を留め、一方は接合資料も乏しく、部分的な剥離を示す可能性が強い。後者の集中地点には砕片が占める比率が高く、二次加工に比重を置く、場の機能の差とも思えるのであり、両者が補完的に機能していた可能性も全く否定できない。が、両地点には形態の異なるナイフや、女川層に産する可能性の強い珪質頁岩の偏在性が見られ、石刃は搬入状態で組成するなど、器種組成の面では各々の集中地点は独立的色彩が濃い。また、出土資料も形状からみて剥離作業に伴い生じる剥片と考えた方が妥当と思われ、石器群の同時性に関する所見には否定的な点も多い。

註２．勝保沢中ノ山遺跡A地点には石刃作出を行う例と、横長剥片の作出を行う例の接合例（報告書の第45図、接合資料A－２）がある。遺跡は消費遺跡の性格を有するのであり、石刃の作出は原産地現況部の遺跡に限らず、必要に応じ作出する可能性が強い。

註３．より大形の剥片を用いる小形剥片の作出は、両極打法に従う点で両極剥離を駆使する楔形石器の製作に結び付く（新田1991）。指摘の通り、両者は作出剥片の形状や剥離手法に類似性が著しい。大形剥片は搬入資料と見られ、楔形石器は在地石材を利用することから、石材事情に基づく技術的適応の差を示す可能性は否定できない。が、指摘にもある通り、搬入石材（珪質頁岩）は「究極まで消費」する在り方が事実なら、石材の贈与・交換など、見方を変えた場合は別の解釈も成り立つ可能性は残る。

佐藤良二　「横環鏃戸型石刃技法についての覚書」『花園史学』８号　1987
田村　隆　「野見塚遺跡の先土器時代」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　千葉県文化財センター　1990
新田浩三　「佐原市出口遺跡第１文化層出土の楔形石器について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』　千葉県文化財センター　1991
『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
『堀下八幡遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990

2　諸磯ｂ式土器終末期の一側面
――波志江天神山遺跡出土土器から――

波志江天神山遺跡では前期後半の諸磯ｂ式土器が包含層中より出土している。本遺跡の北側には、諸磯ｃ式や興津式を出土した下触牛伏遺跡が位置し、また、同一事業で調査された堀下八幡遺跡でもｂ式後半段階の住居跡が検出されている。さらに、該期の住居跡を７軒検出した荒砥二之堰遺跡も西約0.8㎞に近接する。このように周辺には該期の土器群を出土した遺跡は多い。

本遺跡自体は、該期の所産とされる住居跡や土坑などの遺構を検出しておらず、いわゆる一括資料としての厳密性は薄れる。ゆえに本遺跡が提示する諸磯式土器は、あくまでも個々の土器本来の属性を抽出する資料にとどまり、編年作業や集落構造を解明するような資料ではない。つまり周辺地域における諸磯ｂ式土器の充実を物語る資料なのである。

≪周辺遺跡の該期土器様相≫

ここで、周辺遺跡の諸磯ｂ式やｃ式土器を概観し本遺跡出土土器との類似点や相違点を見いだしてみたい。

堀下八幡遺跡：１図１は５住出土の深鉢である。ｂ式終末期に比定されよう。「く」字状に内折した口縁部や波頂部下の入組み渦巻文、頸部以下の横位平行沈線は多段に設けられｂ式の伝統を保持した文様といえよう。

荒砥二之堰遺跡：２は前述の１と同様に内折した口縁部で横位平行沈線が施されているが、１に見られた波頂下の渦巻文が消失している。体部の横位平行沈線は多段である。一方３は波状口縁が発達し、波頂下の文様はモティーフとして独立しており、ｂ式には珍しい文様構成といえよう。また、体部上半の屈曲した器形も特徴として捉えたい。体部は同様に多段構成。４は小形の台付形土器で、脚部には透孔が脚台があったとされる。体部下半に強い屈曲部を持ち、上半の横位平行沈線で明瞭に分帯された体部文様帯内には横位矢羽根状文と入組状渦巻文が施される。幅広の文様帯であり、１～３の横位平行沈線多段構成とは文様構成の意味がちがうものであろう。なお体部下半の縄文は菱形状の構成をする。５は体部中位に緩やかな膨らみを持ち、平行沈線が多段に施され、下半に入組状渦巻文が施される。

下触牛伏遺跡：６は諸磯ｃ式古段階に比定される。口唇部には凹凸を持たせ貼付文を付加する。ＬＲ縄文を器面全面に施し、内面には貝殻条痕が見られる。７も諸磯ｃ式とされているが、体部下半の横位平行沈線が特徴的である。沈線もまばらな施文であり、ｃ式の施文方法とは若干異質な感が見受けられる。８は興津式。横位方向の波状貝殻文で構成され、体部上半から中位に沈線による区画文が設けられる。

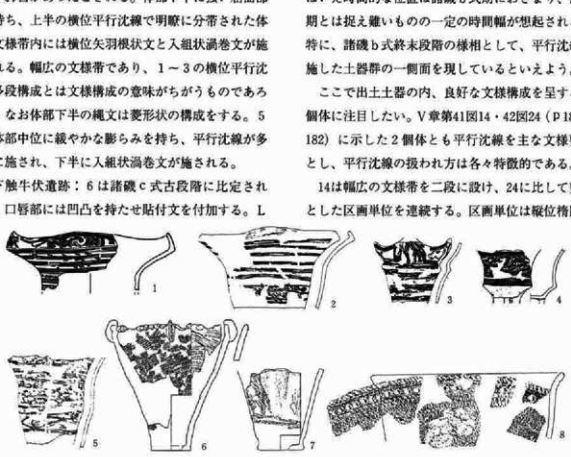
このように、周辺遺跡の諸磯ｂ式～ｃ式土器の中でも、堀下八幡遺跡や荒砥二之堰遺跡出土土器は体部文様の多段構成が目立ち、諸磯ｂ式の伝統的文様構成方法が踏襲されているといえよう。さらに、下触牛伏遺跡のｃ式の文様構成や興津式は特異な存在であり、今後資料増加に伴い明確な土器様相を提示しなければならないだろう。

≪波志江天神山遺跡の諸磯ｂ式の文様構成≫

波志江天神山遺跡出土の前期土器は包含層出土とはいえ時間的な位置は諸磯ｂ式期におさまり、同時期とは捉え難いものの一定の時間幅が想起される。特に、諸磯ｂ式終末段階の様相として、平行沈線を施した土器群の一側面を現しているといえよう。

ここで出土土器の内、良好な文様構成を呈する２個体に注目したい。Ⅴ章第41図14・42図24（Ｐ181・182）に示した２個体とも平行沈線を主な文様要素とし、平行沈線の扱われ方は各々特徴的である。

14は幅広の文様帯を二段に設け、24に比して整然とした区画単位を連続する。区画単位は縦位楕円状



１図　周辺遺跡の該期土器群

の単位であり、空白部に平行沈線を充填する。

周辺遺跡ではこの14の類例は見られない。頸部にかけての屈曲や体部文様帯の多段構成など、ｂ式には見られない手法である。ただ、対弧状のモティーフなどはｃ式に多く設けられるモティーフとして捉えられており、近年の研究ではｃ式直前段階には確実に体部に設けられるモティーフであることが知られている。さらにｃ式の体部文様構成は、この対弧状モティーフを大きく取り、懸垂構成に設ける手法を特徴としているが、14のモティーフは縦位に設けられていながら、横位集合平行沈線で明確に分帯されており、ｃ式の文様構成とは根本的な差が認められる。先にも述べたように平行沈線による横位分帯手法はｂ式期に定着する構成方法である。例えば周辺遺跡では、１図５に見られるように、一定の間隔をもった平行沈線が施され、入組状渦巻文を空白部に充てる構成である。

もちろん、この手法はｂ式終末期に受け継がれるのだがｃ式化へ至り、平行沈線は集合沈線化する変遷が指摘されている。しかし、平行沈線→横位集合沈線という変化は、14に見られるような幅広の文様帯を多段に設ける横位分帯手法には直接的には関与しないものと考えられる。１図４で触れたように、幅広の文様帯を設ける手法は幅狭の文様帯との持つ意味が違うようである。

つまり、ｃ式直前段階の横位平行集合沈線はｂ式の横位分帯手法とは一線を画すべき手法として、14の多段文様帯手法をとらえておくべきであろう。

24は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部は内面に湾曲する双突起を付す（片側は復元）。体部中位で平行する集合沈線によって文様帯が区分され、屈曲部を経て口縁部に至るまで、横方向の集合沈線を基調とした文様帯で構成される。双突起下はおそらく変形菱形の小モティーフが描かれるのであろう。また、体部上半には幅広の文様帯が設けられ、山形の区画が連続するが、半楕円状の区画も認められ（展開図参照）整然とした規則性を持たない。

さて、24の文様構成と１図１～３の類例と比較すると、まず、波状口縁は積極的に設けられる要素として位置付けられよう。次に、波頂下の文様に各種のバリエーションが見受けられるが、ｂ式においては、１図１に見られる入組状渦巻文が比較的多く用いられる文様要素である。この文様要素は１図２のように省略されて消失化する例や、３のように別種のモティーフを充てる例もあり、この波頂下の文様の変化も重要な観察項目である。

ここで、いわゆるＩｂ文様帯の消失として１図２を解釈すると、24はＩｂ文様帯の消失直前の様相として捉えられよう。これは横位平行沈線の集合化により、それまで伝統的に施文されていた波頂下の文様が狭小な施文域に施すことが不可能になり、徐々に省略が意図されていったものと思われる。

さらに24の体部上半の文様帯内を注目すると、明確な縦位分割線もなく、あくまでも横方向の文様構成を意図している。全体のバランスから、幅広に設けられており、文様構成上からも強調された横方向の意識がこの文様帯に集約されているのであろう。体部下半の地文縄文との区分が明確になされている点からも、体部上半から口縁部にかけての横位平行沈線文からも、この土器の横方向への強い傾斜が顕在化したものとされよう。

これは、諸磯ｂ式における横位文様構成の伝統が変質した結果と考えられよう。すなわち、口縁部文様帯においては、それまでの波頂下の文様が省略・消失していく行程、言うなれば伝統性の却下とも言える現象が見られるのだが、体部文様においては横方向の施文伝統を保持しつつ、新たに幅広の文様帯を設け、文様帯内の組成変化への受容を可能なように処理しているのである。

以上のように、波志江天神山遺跡の諸磯ｂ式終末期の土器文様構成方法を考えると、14は対弧状のモティーフをあてながらｃ式の懸垂状構成ではなく、多段の横位文様構成を設ける手法をもって、ｂ～ｃ式の画期においての様相として位置付けられよう。

24はｂ式の横方向への流れを重視する伝統性を保持しつつも、口縁部文様帯などにはモティーフの省

略といったc式への移行期の様相が見られる。

要約すると、14・24は共伴資料ではないのだが、b式～c式への変化の過程において、横位施文方向というb式の文様構成伝統にc式の変容要素を加える母胎を持った、非常に近接した段階の資料と言えよう。おそらく、このような変容過程の一端がc式への変化を生み出したものと考えられよう。

≪まとめ≫

近年の前期資料の増加は著しく、特に県内では県北域の糸井宮前遺跡で該期土器群が豊富な出土を見せている。その内容は、b式～c式への変遷を捉える上で重要な資料を提示しており、近年の該期土器研究の中核をなしているともいえよう。また糸井宮前遺跡の他、勝保沢中ノ山遺跡などで報告が相次いでおりc式への変遷過程が徐々に判明してきている。このような山麓地域との比較研究のためには、本遺跡をはじめとする平野部の該期土器群の分析を充実しなければならない。

これまでの諸磯式土器研究は、諸磯式土器内での文様の変化が大きな論点となり、系譜と変遷が主に語られて来たが、近年は、異系統土器群との受容要素により、その変容過程にそれぞれの特色が求められてきている。その意味で本地域は、群馬県内でも山麓部の糸井宮前遺跡よりも、浮島式や興津式などとの関連が深く考えられ、交差編年を試みる上で無視し得ない地域である。今後は、このような外縁地域の土器様相を加味して、この地域の諸磯式土器の本質と実層を明確にしなければならないだろう。

(山口)

参考文献

1 堀下八幡遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
2 覆瓮二塚遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
3 下触手伏遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
4 糸井宮前遺跡Ⅱ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
5 勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
6 今村啓爾 1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究』第27巻第4号
7 今村啓爾 1982 『諸磯式土器』『縄文文化の研究』3
8 鈴木徳雄 1979 「4 縄文土器について」『白石城』埼玉県遺跡調査会報告第36集
9 鈴木徳雄 1987 「諸磯式土器研究の問題点」『縄文前期の諸問題』第1回縄文セミナー資料
10 鈴木敏明 1988 「諸磯b式からc式への土器変遷」『埼玉県博物館紀要』15
11 鈴木敏明 1992 「土器群の変容—例えば諸磯b式浮線文の場合」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
12 細田 勝 1992 「諸磯c式土器研究への一視点」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会
13 関根慎二・谷藤保彦 1985・1986 「群馬県における浮島式・興津式土器の研究（前・後）」『研究紀要』2・3 群馬県埋蔵文化財調査事業団

≪謝 辞≫

本報告書に扱った三つの遺跡が提示する資料は、おそらく「個」に集約されてしまう規模であり、今、埋蔵文化財に求められている「群」としての歴史像の提示は到底無縁のものかもしれない。

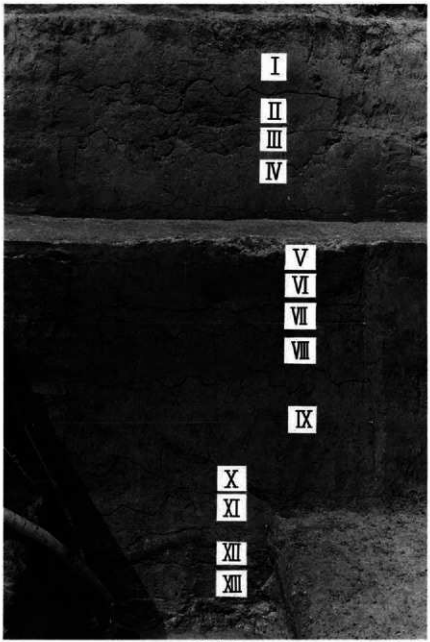
しかしながら、我々の責務はあらゆる出土遺物に公平な視点を当て、あらゆる可能性を示唆するデータを提供しなければならないのである。故に「個」に帰依した、資料提示をあくまでも継続するべきであり、いうなれば、「個」に光を当て「個」の暗影を集めることによって、「群」とし、歴史像を語る方法を模索しなければならない。

しかし力及ばず、Ⅵ章の考察では書上本山遺跡の旧石器資料と波志江天神山遺跡の縄文土器だけを取り上げる結果となった。反省を含めて、残された項目に関しては、今後、本報告書を読まれた方のご助言とご協力を得て取り組んでいきたい。

最後に、本報告書を作成するにあたり、整理嘱託員・整理補助員の皆様には遺物(個)を大事にする姿勢を再認識させられた。1片の土器片や石器剝片から多くのものを学ぶことが可能なのである。彼らの真摯な姿勢がある限り、報告書の中に歴史像(群)が反映されるものと確信し、謝辞としたい。

写 真 図 版

書上本山遺跡



基本土層

遠隔の感覚

1．1号ブロック石器出土状態(1)

2．1号ブロック石器出土状態(2)

3．1号ブロック石器出土状態(3)

4．1号ブロック石器出土状態(4)

5．1号ブロック石器出土状態(5)

1．2号ブロック石器出土状態(1)

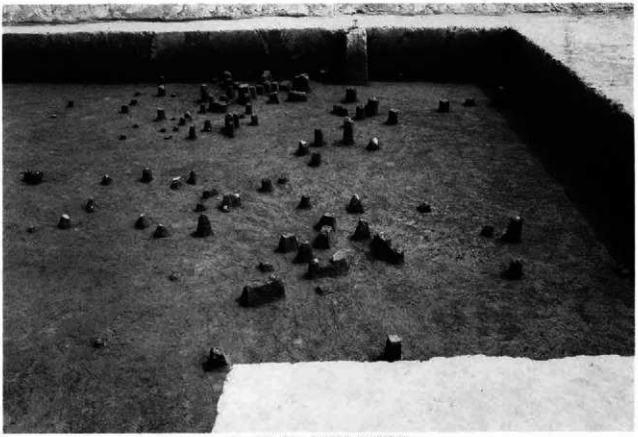
2．2号ブロック石器出土状態(2)

1．2号ブロック石器出土状態(3)

2．2号ブロック石器出土状態(4)

3．2号ブロック石器出土状態(5)

4．2号ブロック石器出土状態(6)



5．2号ブロック石器出土状態(7)

1．V区遺景

2．旧石器調査風景

1．1号住居跡全景

2．1号住居跡遺物出土状態

3．1号住居跡カマド

4．1号住居跡カマド・貯蔵穴

5．1号住居跡柱穴

1．2号住居跡全景

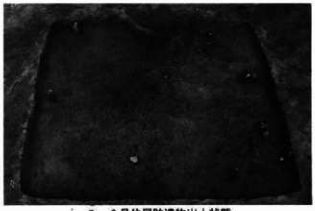
2．2号住居跡掘り方

3．2号住居跡カマド

4．2号住居跡カマドセクション

5．2号住居跡カマド掘り方

1．3号住居跡全景



2．3号住居跡遺物出土状態

3．3号住居跡遺物出土状態

4．3号住居跡カマド

5．3号住居跡カマドセクション

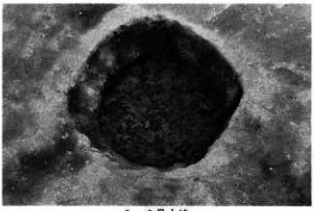
1．4号住居跡全景

2．4号住居跡

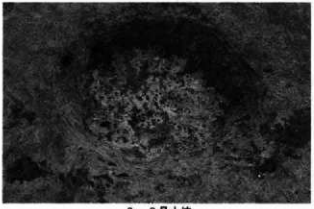
3．4号住居跡掘り方

4．4号住居跡カマドセクション

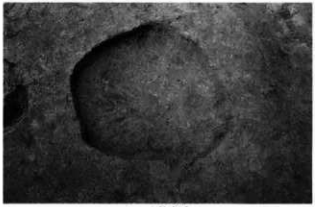
1．1号土坑



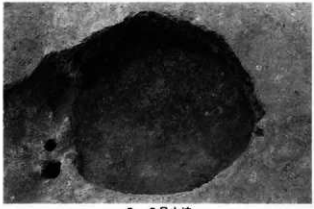
2．2号土坑



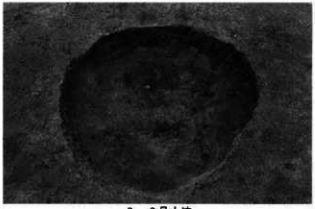
3．3号土坑



4．4号土坑



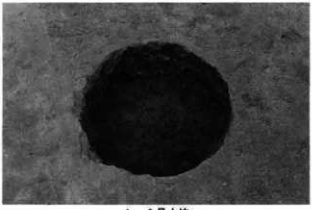
5．5号土坑



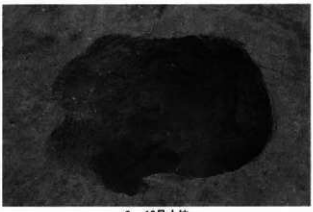
6．6号土坑

7．7号土坑

8．8号土坑



1. 9号土坑



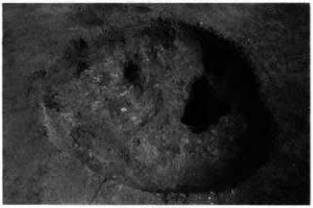
2. 10号土坑

3. 11号土坑

4. 15号土坑

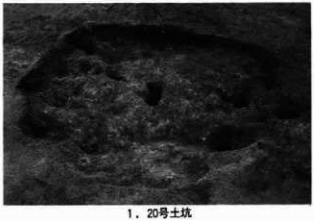
5. 16号土坑

6. 17号土坑



7. 18号土坑

8. 19号土坑



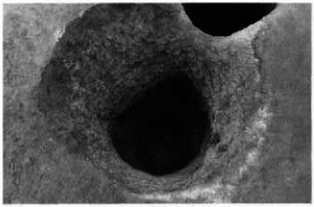
1．20号土坑

2．21号土坑

3．22号土坑

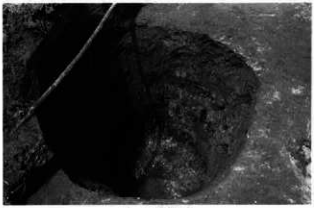
4．23号土坑

5．12号土坑



6．2号井戸

7．2・3号井戸



8．4号井戸

1. 6号井戸

2. 6号井戸遺物出土状態

1．4号溝全景

2．4号溝

3．5号溝全景

4．8号溝

5．9号溝

1. 9号溝全景

2. 9号溝

3. 9号溝

4. 9号溝

5. 9号溝礫流入状態

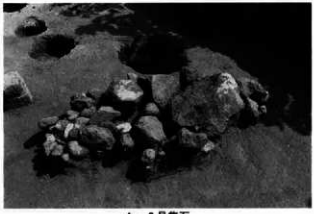
1．1号集石

2．1号集石

1．1号集石

2．1号集石

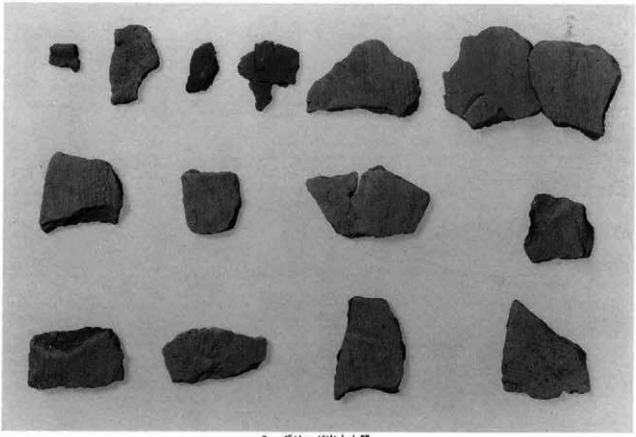
3．2号集石



4．2号集石

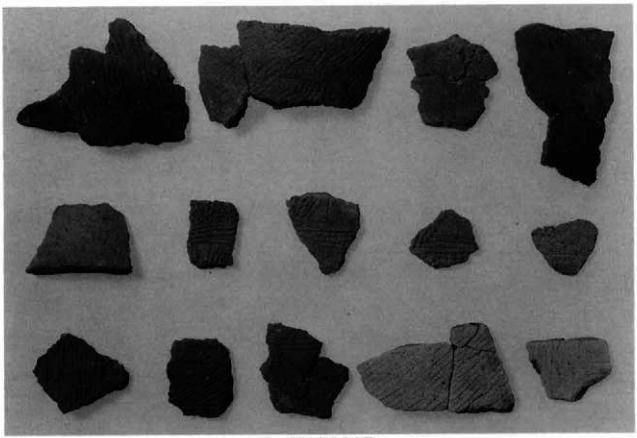
5．調査風景

1．1・2号掘立柱建物跡

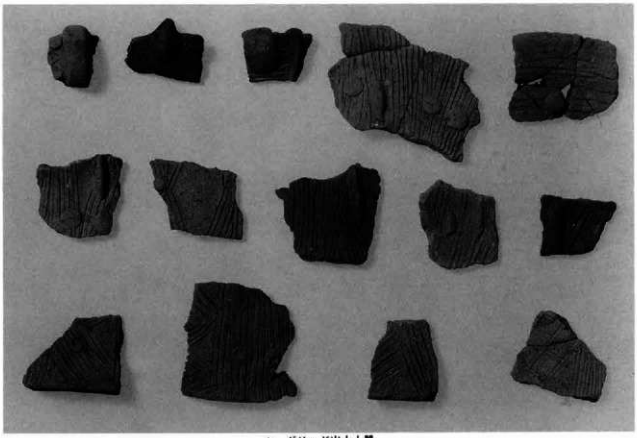


2．グリッド出土土器

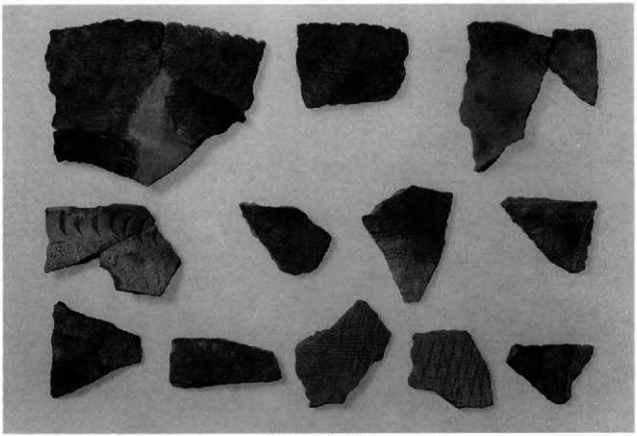
1．グリッド出土土器



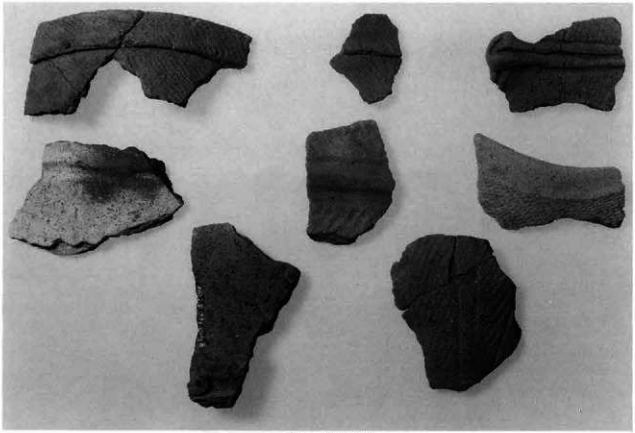
2．グリッド出土土器



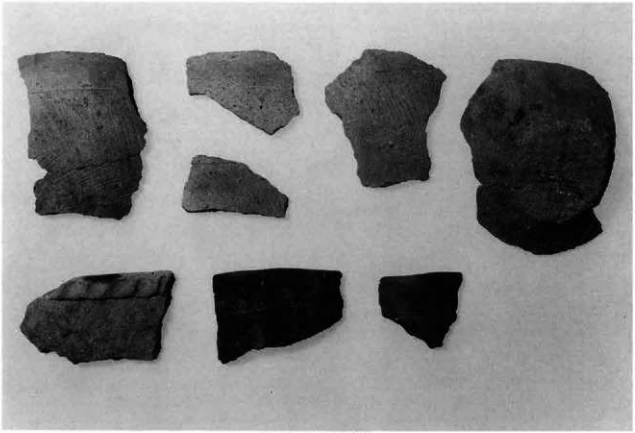
1．グリッド出土土器



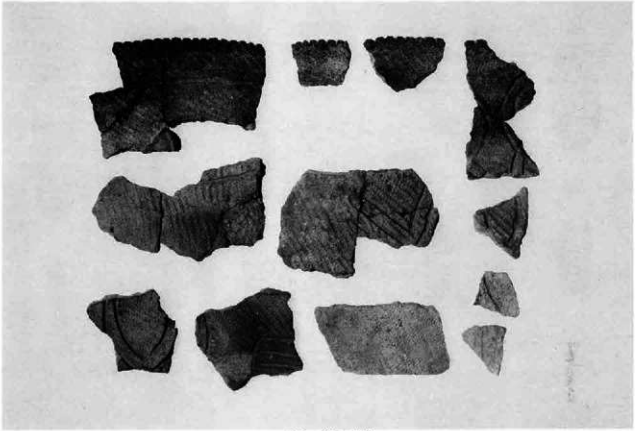
2．グリッド出土土器



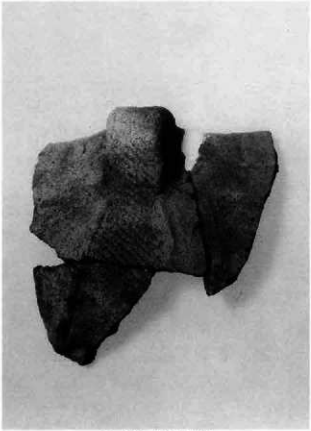
1．グリッド出土土器



2．グリッド出土土器



1. グリッド出土土器



2. グリッド出土土器

3. グリッド出土土器

14図-1

14図-2

14図-5

14図-6

15図-1

14図-3

14図-4

15図-2

15図-3

15図-4

16図-1

16図-2

16図-3

16図-4

17図-4

17図-2

17図-1

17図-3

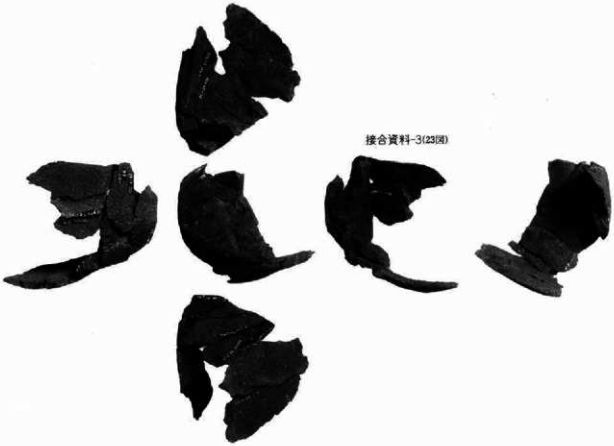
出土石器(旧石器時代)

石核(16図-5)

接合資料-5(27図)

接合資料-1(18図)

出土石器(旧石器時代)



接合資料-3(23図)

接合資料-2(25図)

出土石器(旧石器時代)

接合資料-10(26図)

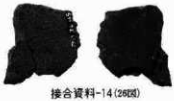
接合資料-12(26図)

接合資料-19(26図)

接合資料-16(26図)

接合資料-13(26図)

接合資料-15(26図)


接合資料-14(26図)

接合資料-11(26図)

接合資料-8(27図)

接合資料-6(26図)

接合資料-9(27図)

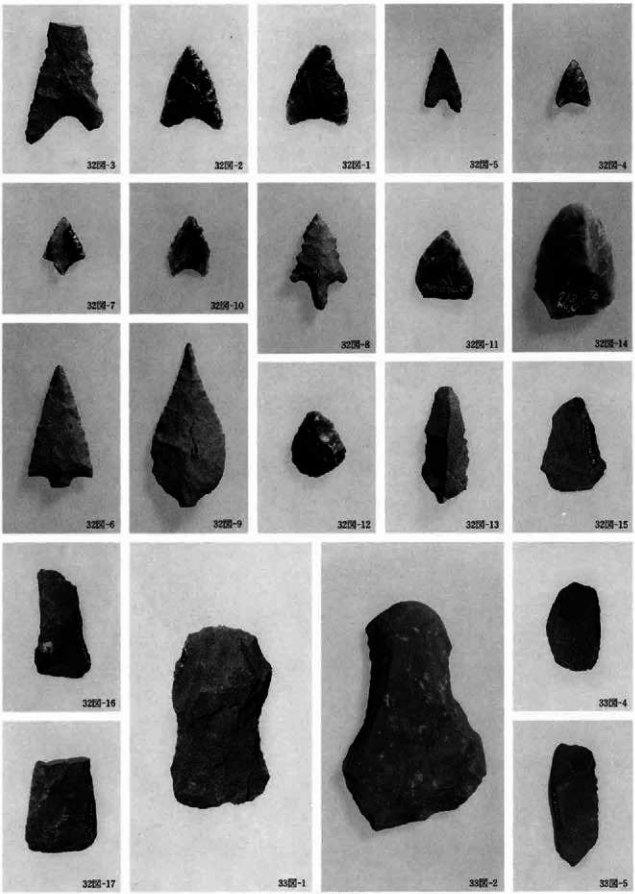
接合資料-4(26図)

接合資料-18(28図)

接合資料-7(27図)

接合資料-17(27図)

出土石器(旧石器時代)


32図-3
32図-2
32図-1
32図-5
32図-4
32図-7
32図-10
32図-8
32図-11
32図-14
32図-6
32図-9
32図-12
32図-13
32図-15
32図-16
33図-4
32図-17
33図-1
33図-2
33図-5

出土石器(縄文時代)

33図-3

33図-6

33図-7

33図-8

33図-9

34図-1

34図-2

34図-3

34図-4

34図-5

34図-6

34図-8

34図-10

34図-7

34図-9

34図-11

34図-12

34図-13

34図-14

34図-15

35図-1

35図-2

出土石器(縄文時代)

35図-3

35図-4

35図-5

35図-6

35図-7

31図-8

35図-9

35図-10

35図-11

35図-12

35図-13

35図-15

35図-16

35図-14

36図-6

37図-1

37図-3

37図-2

出土石器(縄文時代)

出土石器(縄文時代)

37図-4

38図-1

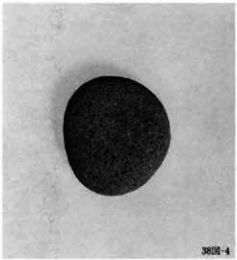
38図-2

38図-6

39図-3

38図-3

38図-7


38図-4

38図-5

39図-1

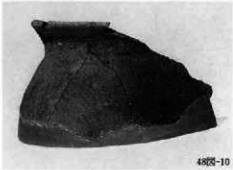
39図-2

出土石器(縄文時代)

48図-1

48図-3

48図-5


48図-10

49図-12

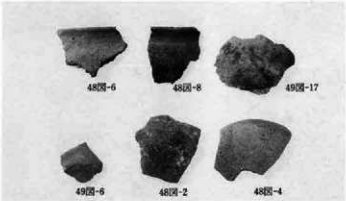
49図-13

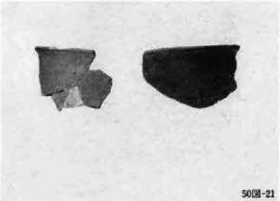
48図-9

49図-14

49図-15

48図-11




50図-21

1号住居跡出土遺物

49図-18

49図-19

48図-7

50図-22

51図-24

50図-20

50図-23

1号住居跡出土遺物

53図-1

53図-2

図-3

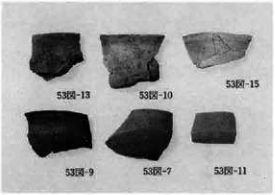
53図-6

図-7

53図-4

53図-5

53図-10



53図-12

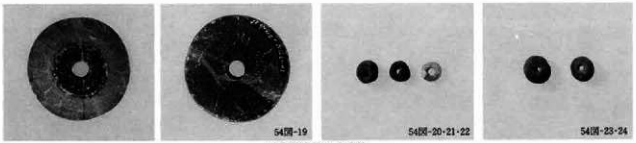
54図-16

54図-18

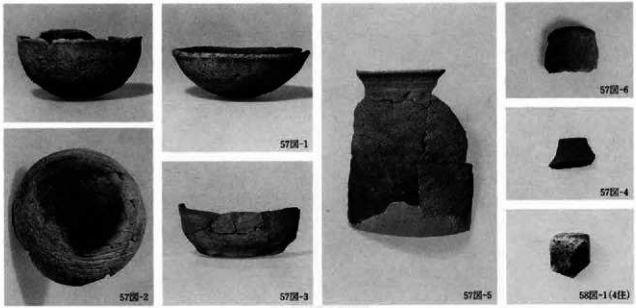
54図-14

54図-17

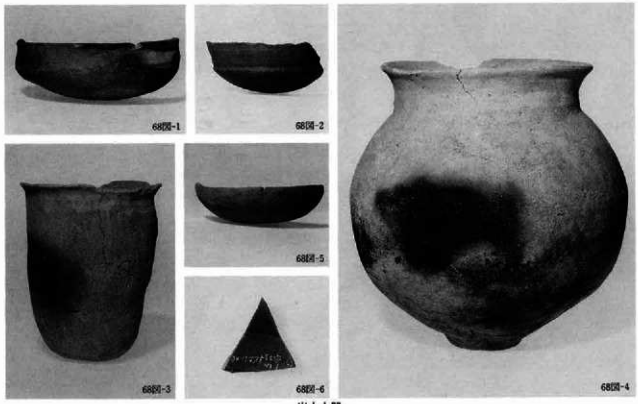
2号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物

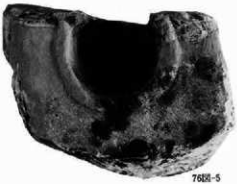


出土土器

76区-4

74区-1

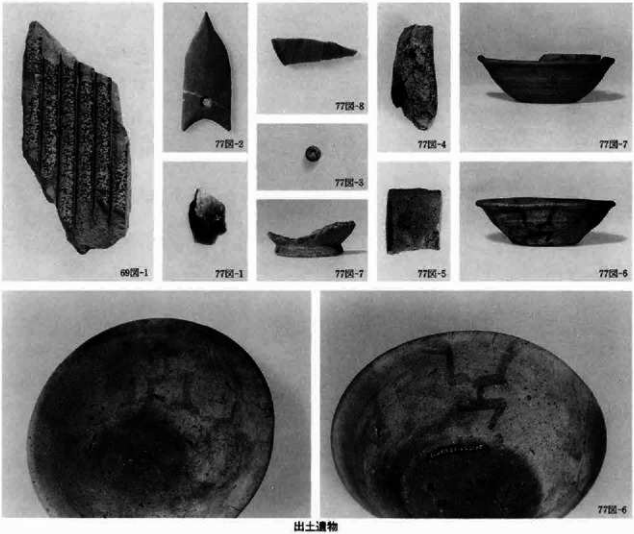
74区-3



76区-5

74区-2

集石遺構出土遺物

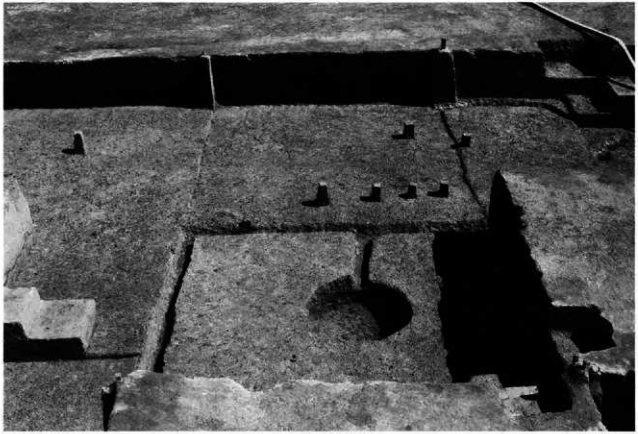


出土遺物

波志江六反田遺跡

ローム層の堆積状態

波志江六反田・波志江天神山遺跡遠景



1．旧石器試掘調査

2．石器出土状態

3．石器出土状態

4．石器出土状態

5．石器出土状態

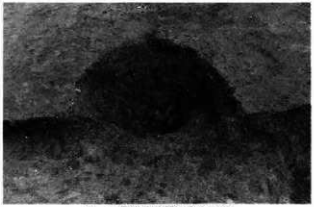
1．波志江六反田遺跡遠景

2．波志江六反田遺跡遠景

1．遺跡全景

2．遺跡全景

1．1号住居跡全景



2．1号住居跡掘り方カマド

3．2号住居跡

4．2号住居跡掘り方全景

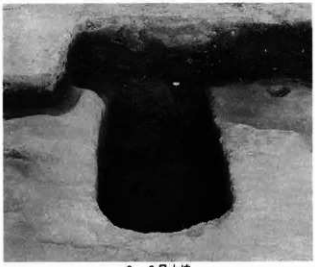
5．2号住居跡遺物出土状態

6．2号住居跡掘り方カマド

7．3号住居跡全景

8．3号住居跡カマド

1．1・2・3号土坑



2．8号土坑

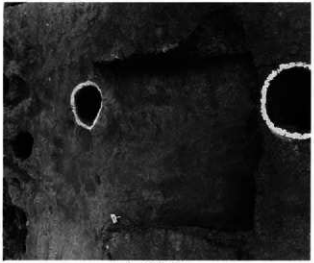
3．12号土坑

4．13号土坑

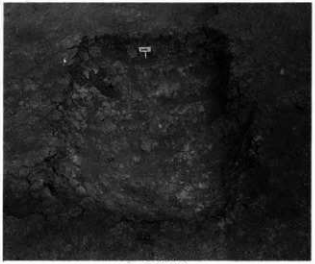
5．14号土坑

6．15号土坑

7．17号土坑



1. 19号土坑



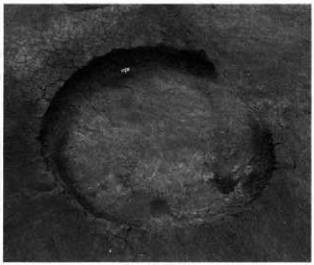
2. 20号土坑

3. 16号土坑

4. 18号土坑

5. 26号土坑

6. 21号土坑



7. 22号土坑

1．23号土坑

2．24号土坑

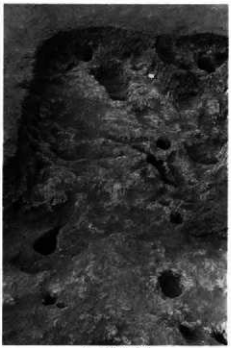
3．5・6・7・29号土坑

4．30号土坑

5．31号土坑

6．28号土坑

7．27号土坑



1．25号土坑

2．32号土坑

3．1号井戸

4．2号井戸

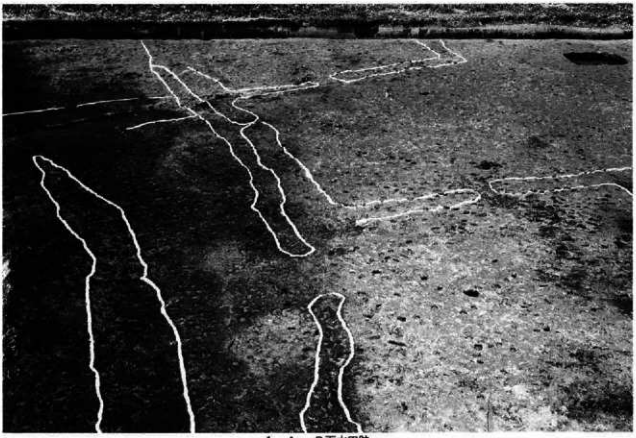
5．3号井戸

6．4号井戸

1．水田跡及び旧河川跡

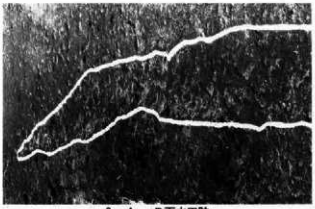
2．As－B下水田跡土層

3．As－B下水田跡土層

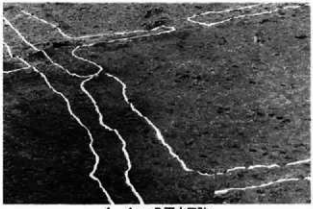


1. As－B下水田跡

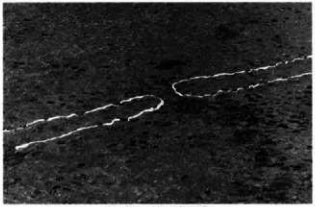
2. As－B下水田跡



3. As－B下水田跡



4. As－B下水田跡



5. As－B下水田跡

1．1号溝

2．2号溝

3．3号溝

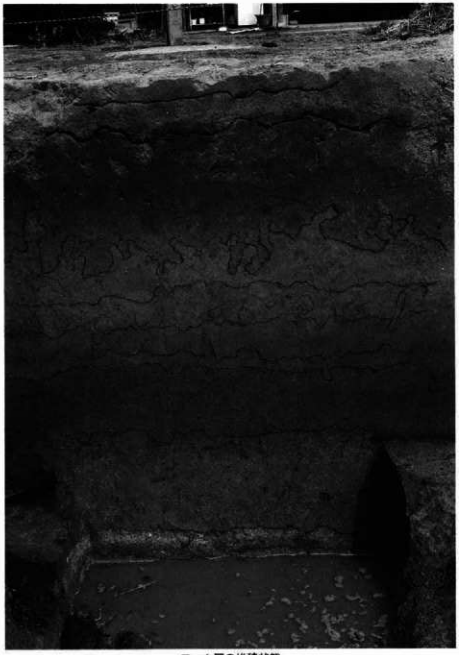
4．4・5号溝

5．掘立柱建物跡

1．旧石器試掘調査

2．As－B下水田調査風景

波志江天神山遺跡



ローム層の堆積状態

波志江天神山遺跡遠景

1. 8号土坑

2. 10号土坑

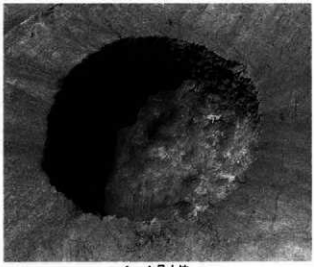
1．21号土坑

2．9号土坑

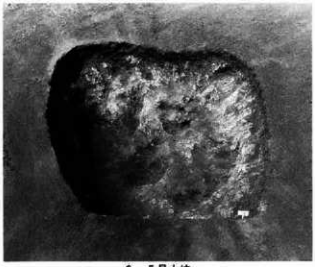
3．20号土坑

4．6号土坑

5．発掘風景



1. 1号土坑

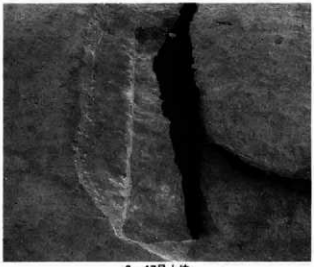


2. 5号土坑

3. 2号土坑

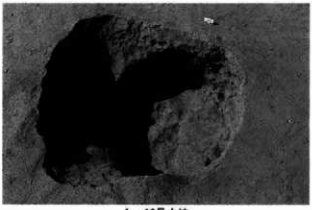
4. 3号土坑

5. 4号土坑

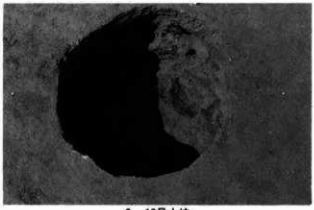


6. 17号土坑

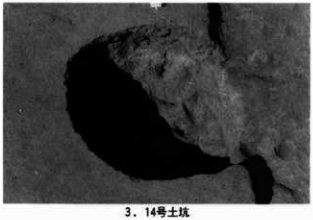
7. 13号土坑



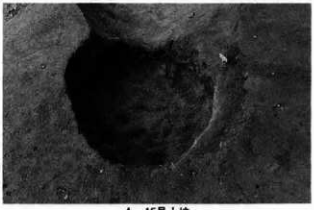
1. 12号土坑



2. 13号土坑

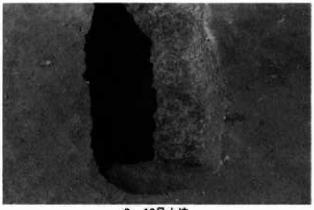


3. 14号土坑



4. 15号土坑

5. 16号土坑



6. 18号土坑

7. 19号土坑

8. 22号土坑

1．9号溝

2．9号溝

3．1号井戸

4．サク状遺構

5．天神山遺跡全景

1. 1号溝屈曲部

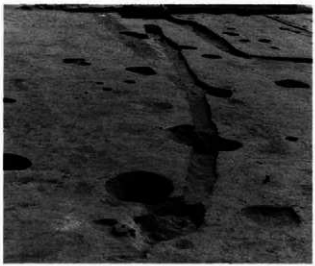
2. 2・6・9号溝

3. 1・2号溝

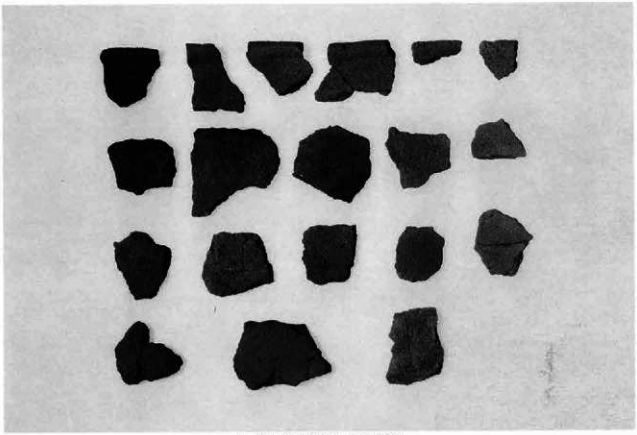
4. 3・4号溝

5. 6号溝

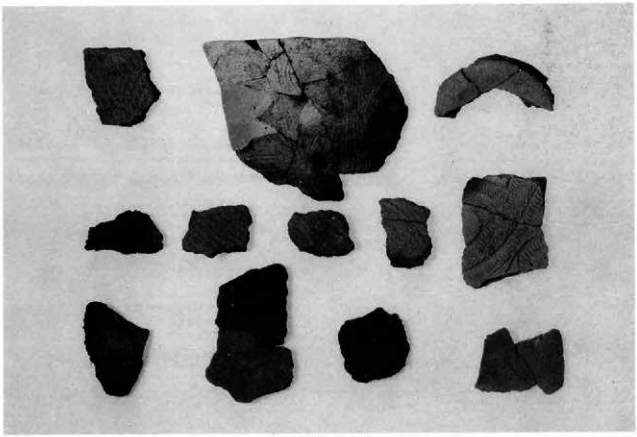
6. 7号溝



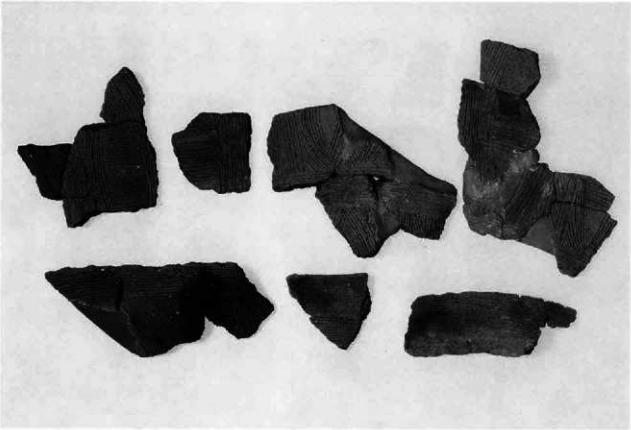
7. 8号溝



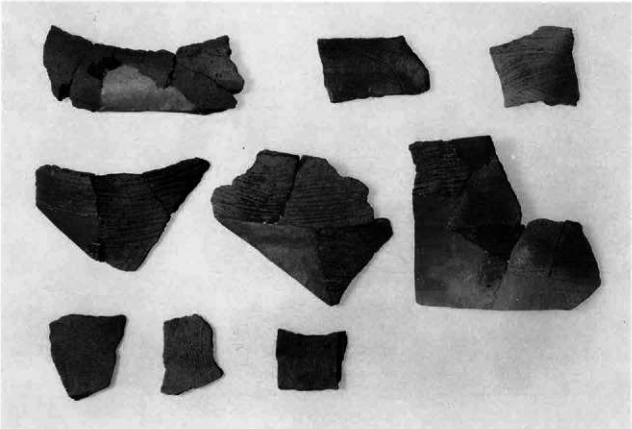
1．出土土器（9図）六反田遺跡



2．出土土器（41図）



1．出土土器（41・42図）



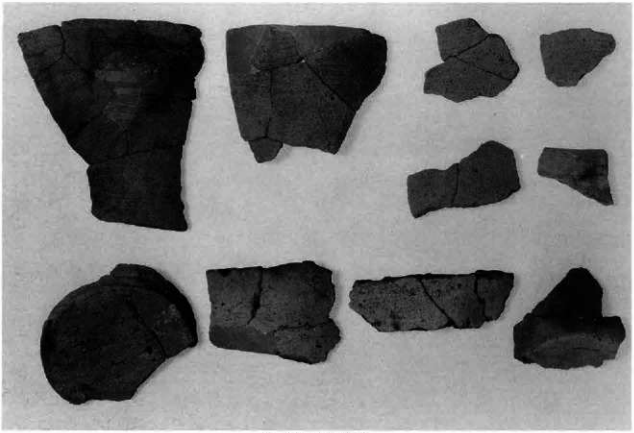
2．出土土器（43図）

41図

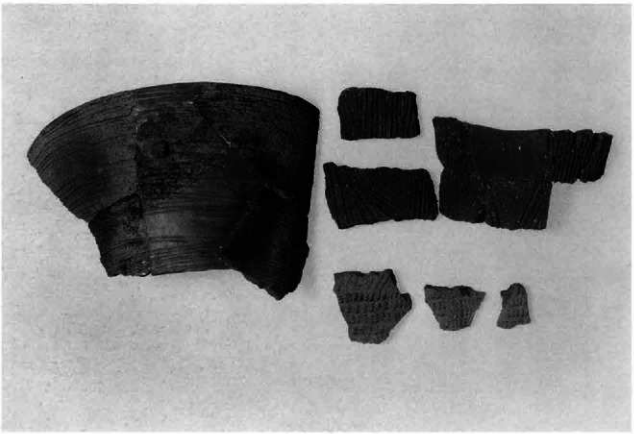
41図

42図

出土土器



1．出土土器（43図）



2．出土土器（43・44図）

4図-1

4図-2

45図-4

45図-5

45図-1

4図-3

4図-4

45図-2

45図-3

45図-6

45図-8

45図-7

45図-10

45図-11

45図-9

46図-1

46図-2

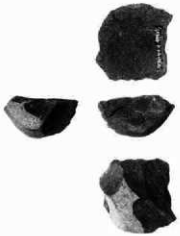
46図-6

46図-5

46図-3

46図-7

出土石器



石核(47図)

接合資料-6(47図)

接合資料-3(47図)

接合資料-5(48図)

接合資料-2(48図)

接合資料-4(48図)

接合資料-1(48図)

出土石器(石核・接合資料)

46区-4

46区-9

46区-11

46区-8

47区-3

46区-10

47区-1

46区-12

47区-2

47区-4

47区-5

47区-6

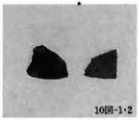
47区-8

47区-9

47区-10

47区-11

出土石器


10図-1・2

12図-2

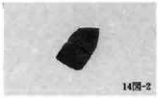
12図-4

12図-5・6

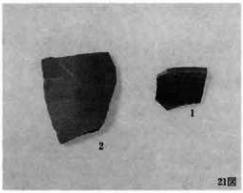
12図-1

12図-3

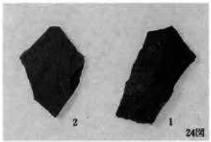
14図-3

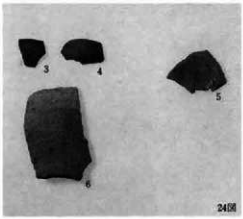

14図-2

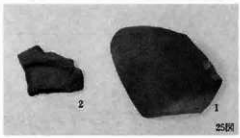
14図-1

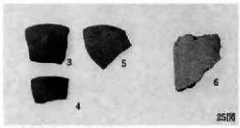

1
2
21図

1
22図


2
1
24図


3
4
5
6
24図


2
1
25図


3
5
6
4
25図

38図

出土遺物　六反田遺跡

書上本山遺跡
波志江六反田遺跡
波志江天神山遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年10月22日　印刷
平成4年10月30日　発行

発行・編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52—2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所